熊本県文化財調査報告　第43集

平原（ひらばる）・野中（のなか）遺跡

——八代市岡町中所在の中・近世遺跡の調査——

1980

熊本県教育委員会

平原（ひらばる）・野中（のなか）遺跡

——八代市岡町中所在の中・近世遺跡の調査——

序　　文

熊本県教育委員会では、九州縦貫自動車道建設に伴ない、日本道路公団の委託により、昭和50年から昭和54年度にかけて松橋～八代間の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本報告書は、この間に実施した八代市の「平原・野中遺跡」に関するものであります。

この遺跡からは、中世・近世の住居址群及び墓地等が検出され、この時期の生活の一端を知る資料を得ることができました。

本書が埋蔵文化財に対する認識と理解、さらに学術・研究上の一助になれば幸せです。

発掘調査の実施に当たりましては、日本道路公団の御理解と御協力をはじめとして、調査指導の先生、地元の方々から御協力を賜りました。

ここに心からお礼を申しあげます。

昭和55年3月31日

熊本県教育長　井　本　則　隆

例　　言

1. 本書は、日本道路公団の九州縦貫自動車道建設に伴う事前調査のうち、熊本県教育委員会が昭和51年度から昭和52年度にかけて実施した八代市岡町中の平原・野中遺跡発掘調査の報告書である。
2. 遺跡名について調査開始時には平原古墳群としていたが、遺跡の性格から平原・野中遺跡と改称した。
3. 発掘調査は主として高木正文があたり、島津義昭と広瀬正照が助けた。
4. 資料の整理および本書の執筆には高木があたったが、第Ⅰ章1について隈昭志、第Ⅱ章2(4)(ハ)について安田宗生が執筆した。
5. 遺跡・遺構の撮影は高木、遺物の撮影は白石巌があたり、焼付は上野辰男があたった。
6. 遺物のうち近世陶磁器鑑定で馬場強氏、木質鑑定で吉田喜久子氏の手をわずらわし、結果は本文中で反映した。
7. 本書の編集は隈の指導のもとに高木があたった。

本 文 目 次

第Ⅰ章　序　説……1

1　調査にいたる経過と調査組織……1

2　遺跡の位置および環境……3

3　調査の経過……5

(1)調査の方法……5

(2)調査の概要……5

第Ⅱ章　Ⅰ地区の調査……13

1　Ⅰ地区の設定と層位……13

(1)Ⅰ地区の設定……13

(2)Ⅰ地区の層位……13

2　中世の遺構と遺物……15

(1)ピット群……15

(2)井　戸……18

(3)土　壙……24

(4)板碑および五輪塔……25

(5)Ⅰ地区その他の中世遺物……29

3　近世の遺構と遺物……37

(1)ピット群……37

(2)墓　壙……57

(3)Ⅰ地区その他の近世・近代遺物……58

第Ⅲ章　Ⅱ地区の調査……64

1　Ⅱ地区の設定と層位……64

(1)Ⅱ地区の設定……64

(2)Ⅱ地区の層位……64

2　中世の遺構と遺物……69

(1)ピット群……69

(2)井　戸……70

(3)F－1区Ⅱ層土器溜……72

(4)貝　塚……90

(5)Ⅳ層の遺物……91

(6)Ⅱ地区その他の中世遺物……93

3　近世の遺構と遺物……98
(1)ピット群……98
(2)近世墓……115
(3)Ⅱ地区その他の近世遺物……116
第Ⅳ章　調査のまとめ……121

図版目次

PL. Ⅰ　1　発掘前のⅠ地区周辺
2　当初、古墳の石材かとみられていた巨石
3　グリッドを設定して発掘調査開始
PL. Ⅱ　1　発掘前のⅡ地区
2　Ⅰ地区の遺構全景
PL. Ⅲ　1　Ⅰ地区の遺構全景
2　Ⅰ地区中世ピット出土遺物
PL. Ⅳ　1　Ⅰ地区井戸内の礫出土状態
2　Ⅰ地区井戸の完掘状態
PL. Ⅴ　Ⅰ地区井戸内出土遺物
PL. Ⅵ　Ⅰ地区井戸内出土遺物
PL. Ⅶ　1　Ⅰ地区1号土壙
2　Ⅰ地区2号土壙
3　Ⅰ地区出土スラグ
PL. Ⅷ　1　板碑（通称ミセンジョサン）
2　五輪塔
3　ミセンジョサンの傍に納められている自然石
PL. Ⅸ　Ⅰ地区その他の遺物
PL. Ⅹ　Ⅰ地区その他の遺物
PL. Ⅺ　Ⅰ地区その他の遺物
PL. Ⅻ　1　Ⅰ—②建物ピット出土陶磁器
2　Ⅰ—④建物ピット出土陶磁器
3　Ⅰ—③建物ピット出土陶磁器
4　Ⅰ—⑤建物ピット出土陶磁器
5　Ⅰ—⑥建物ピット出土陶磁器
6　Ⅰ—⑧建物ピット出土陶磁器
PL. XIII　1　Ⅰ—⑨建物ピット出土磁磁器
2　Ⅰ—⑩、Ⅰ—⑪、Ⅰ—⑬建物ピット出土陶磁器
3　Ⅰ地区その他のピット出土近世・近代陶磁器
PL. XIV　1　地区近世墓壙
2　1号墓壙出土磁器
3　1号墓壙出土鉄釘
4　近世墓地出土蔵骨器
PL. XV　1　発掘前のⅡ地区周辺
2　Ⅱ地区調査の契機となった貝塚の発見
PL. XVI　1　工事に追われるⅡ地区の調査
2　Ⅱ地区の遺構全景
PL. XVII　1　Ⅱ地区井戸の露出状態
2　Ⅱ地区井戸とその掘りかた
PL. XVIII　1　Ⅱ地区井戸内出土桶の底
2　Ⅱ地区井戸枠の石臼発見状態
PL. XIX　Ⅱ地区井戸枠の石臼
PL. XX　1　Ⅱ地区F—1・2区断面
2　Ⅱ地区貝塚
PL. XXI　Ⅱ地区F—1区の土器溜
PL. XXII　Ⅱ地区土器溜出土遺物
PL. XXIII　Ⅱ地区土器溜出土遺物
PL. XXIV　Ⅱ地区土器溜出土遺物
PL. XXV　Ⅱ地区土器溜出土遺物
PL. XXVI　Ⅱ地区土器溜出土遺物
PL. XXVII　1　Ⅱ—①建物ピット出土陶磁器
2　Ⅱ—②建物ピット出土陶磁器
PL. XXVIII　1　Ⅱ—③建物ピット出土陶磁器
2　Ⅱ—④建物ピット出土陶磁器
PL. XXIX　Ⅱ—⑤建物ピット出土陶磁器と瓦
PL. XXX　1　Ⅱ—⑥建物ピット出土陶磁器
2　Ⅱ—⑦建物ピット出土陶磁器
3　開通前の縦貫道

挿　図　目　次

第１図　平原・野中遺跡位置図……2
第２図　平原・野中遺跡周辺図……4
第３図　平原・野中遺跡測量図……9
第４図　Ⅰ地区遺構全景実測図……11
第５図　Ⅰ地区土層断面実測図……14
第６図　Ⅰ地区中世遺構分布図……16
第７図　Ⅰ地区中世ピット出土遺物実測図(1)……17
第８図　Ⅰ地区中世ピット出土遺物実測図(2)……18
第９図　Ⅰ地区井戸実測図……19
第10図　Ⅰ地区井戸内出土遺物実測図(1)……20
第11図　Ⅰ地区井戸内出土遺物実測図(2)……21
第12図　Ⅰ地区井戸内出土遺物実測図(3)……23
第13図　１号土壙実測図……24
第14図　２号土壙実測図……25
第15図　板碑および五輪塔実測図……27
第16図　板碑拓影……28
第17図　Ⅰ地区その他の中世遺物実測図(1)……31
第18図　Ⅰ地区その他の中世遺物実測図(2)……32
第19図　Ⅰ地区その他の中世遺物実測図(3)……33
第20図　Ⅰ地区その他の中世遺物実測図(4)……35
第21図　Ⅰ地区近世遺構分布図……36
第22図　Ⅰ―①建物復原図……37
第23図　Ⅰ―②建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図……38
第24図　Ⅰ―③建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図……39
第25図　Ⅰ―④建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図……41
第26図　Ⅰ―⑤建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図……42
第27図　Ⅰ―⑥建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図……43
第28図　Ⅰ―⑦建物復原図……45
第29図　Ⅰ―⑧建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図……46
第30図　Ⅰ―⑨建物復原図……47
第31図　Ⅰ―⑨建物のピット出土磁陶器実測図…49
第32図　Ⅰ―⑩建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図……51
第33図　Ⅰ―⑪建物復原図とそのピット出土磁陶器実測図……52
第34図　Ⅰ―⑫建物復原図……53
第35図　Ⅰ―⑬建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図……54
第36図　Ⅰ―⑭建物復原図……55
第37図　Ⅰ地区その他のピット出土近世・近代陶磁器実測図……56
第38図　Ⅰ地区１号および２号墓壙実測図……58
第39図　Ⅰ地区１号墓壙出土鉄釘実測図……59
第40図　Ⅰ地区１号墓壙出土磁器実測図……59
第41図　Ⅰ地区その他の近世・近代遺物実測図(1)……60
第42図　Ⅰ地区その他の近世・近代遺物実測図(2)……62
第43図　Ⅱ地区遺構全景実測図……65
第44図　Ⅱ地区土層断面実測図……67
第45図　Ⅱ地区中世遺構分布図……68
第46図　Ⅱ地区中世ピット出土遺物実測図……69
第47図　Ⅱ地区井戸実測図……70
第48図　Ⅱ地区井戸枠の石臼実測図……71
第49図　Ⅱ地区井戸内出土遺物実測図(1)……72
第50図　Ⅱ地区井戸内出土遺物実測図(2)……73
第51図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(1)……74
第52図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(2)……75
第53図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(3)……77
第54図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(4)……78
第55図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(5)……80
第56図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(6)……81
第57図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(7)……82
第58図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(8)……84
第59図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(9)……85
第60図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(10)……86
第61図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(11)……88
第62図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(12)……89
第63図　Ｆ―１区土器溜の遺物実測図(13)……90
第64図　貝塚出土遺物実測図……91
第65図　Ⅱ地区Ⅳ層の遺物実測図(1)……91
第66図　Ⅱ地区Ⅳ層の遺物実測図(2)……92
第67図　Ⅱ地区その他の中世遺物実測図(1)……94
第68図　Ⅱ地区その他の中世遺物実測図(2)……95
第69図　Ⅱ地区その他の中世遺物実測図(3)……96
第70図　Ⅱ地区その他の中世遺物実測図(4)……97
第71図　Ⅱ地区近世遺構分布図……99
第72図　Ⅱ―①建物復原図とそのピット出土陶

磁器実測図…… 100
第73図　Ⅱ―②建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図…… 102
第74図　Ⅱ―③建物復原図…… 103
第75図　Ⅱ―③建物のピット出土陶磁器実測図 104
第76図　Ⅱ―④建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図…… 107
第77図　Ⅱ―⑤建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図…… 108
第78図　Ⅱ―⑤建物のピット出土瓦実測図…… 109
第79図　Ⅱ―⑥建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図…… 111
第80図　Ⅱ―⑦建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図…… 113
第81図　Ⅱ―⑧建物復原図…… 114
第82図　Ⅱ地区その他のピット出土近世陶磁器実測図…… 115
第83図　Ⅱ地区その他の近世陶磁器実測図(1)… 117
第84図　Ⅱ地区その他の近世陶磁器実測図(2)… 119

第Ⅰ章　序　　説

1.　調査に至る経過と調査組織

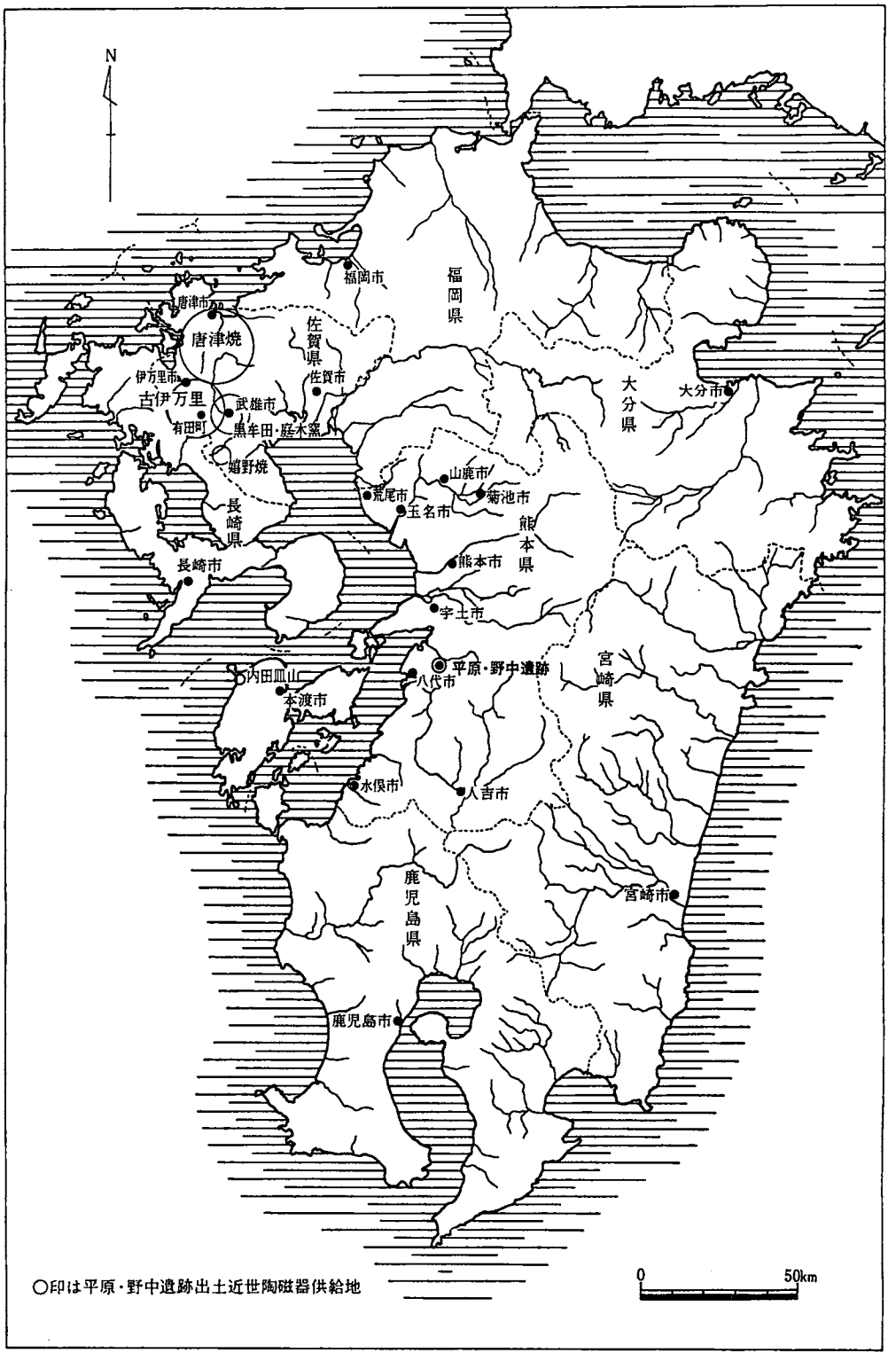
九州縦貫自動車道鹿児島線宮崎線（松橋～八代）建設計画にともない、熊本県教育委員会では昭和46年度に国庫補助を受けて、計画地内の幅200ｍの範囲について文化財分布調査を実施し、松橋～八代間に33ケ所をチェックした。

この平原野中遺跡は分布調査時点では平原古墳群として登録されたものである。

『九州縦貫自動車道鹿児島線宮崎線（松橋～八代）文化財分布調査報告書』（熊本県教育委員会　昭和46年３月）によると、みかん畑内に４基の破壊された古墳が存在していることが記載されている。その後、路線が決定された段階で、昭和49年２月文化課で再度踏査したところ、前記の４基はすべて路線外であることがわかった。しかし、路線内に新たに古墳の残骸とみられる巨岩や、中世の土器片など散布している地点があることから、「平原古墳群」の範囲であると判断して調査することになった。調査を進めていくなかで、巨石は古墳でないことが判明し、さらに別の遺構が新たに検出されたので、字名をとって「平原・野中遺跡」と呼ぶことにした。

発掘調査は熊本県教育庁文化課が実施し、調査組織は下記のとおりである。

調査責任者	岩崎　辰喜	文化課長
	合志　太助	前文化課長
調査総括	隈　　昭志	文化財調査係長
調　査　員	高木　正文	学芸員
	島津　義昭	学芸員
	安田　宗生	学芸員
	佐藤　征子	嘱託
	広瀬　正照	嘱託
整　　理	上野　辰男	主幹
	山城　仁恵	嘱託
調査事務局	田辺　宗弘	課長補佐
	真弓袈裟勝	前課長補佐
	村上　孝司	管理係長
	望野　正雄	前管理係長
陶磁器調査	馬場　　強	長崎県立美術博物館調査員
木器調査	吉田喜久子	尚絅高校教諭



第1図 平原・野中遺跡位置図

2. 遺跡の位置および環境

平原・野中遺跡は熊本県八代市岡町中字平原および字野中にある。

遺跡のある八代平野は球磨川の河口に位置する沖積層からなる広沃な穀倉地帯で、北は宇土半島基部の宇土郡不知火町から南は八代市日奈久まで約30㎞続いている。また平野は東を九州山地に遮られ、西の八代海（不知火海）側に開け、天草と対している。

陸路は南北に延び、熊本と鹿児島・宮崎を結ぶ交通の要所である。

八代の歴史は 東部の山麓ないし 山間地帯にはじまり、 この一帯に古代の遺跡も 集中している。その後政治の中心の移動とともに球磨川の治水、沖積平野の干拓の進捗に伴って発展の中心が平野部に移った。

天正16年、八代城代小西行重は球磨川の河口に自然に陸化した三角洲に麦島城を築造、山麓部の門前町や商工業者を移住させた。

慶長６年小西氏が滅び、加藤清正の領分となり、元和５年大地震により麦島城が崩壊、元和８年加藤正方が新たに松江城を築き今日の基礎をつくった。

寛永９年細川忠利の家老松井興長が松江城主となり明治に至るまで松井家代々の城主で、城下町として繁栄した。

さて平原・野中遺跡は八代市の山麓部北端、旧龍峯村（昭和36年に八代市に合併）にあり、八代郡宮原町と接した位置にある。

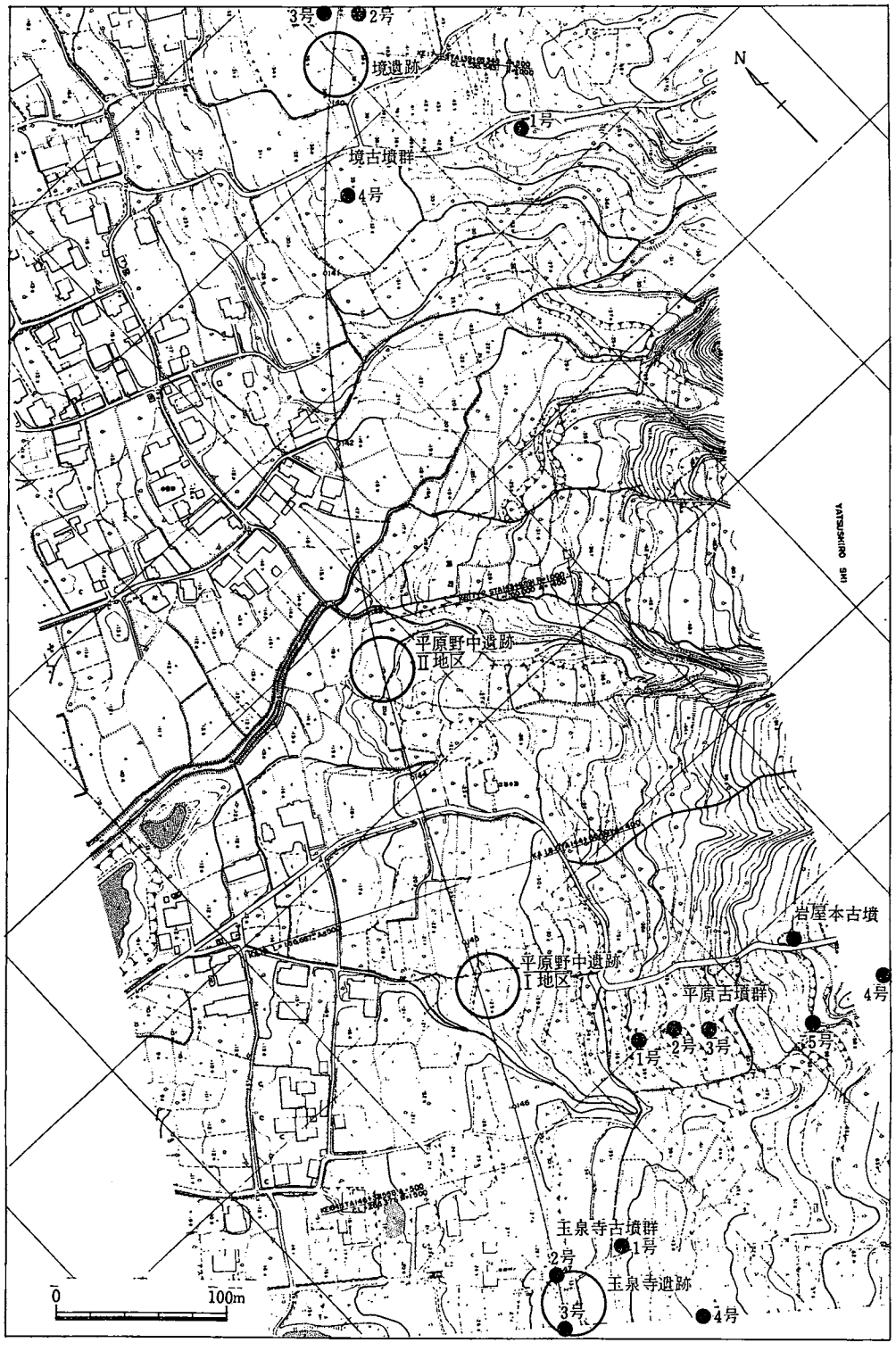
この地域の遺跡の分布については熊本県文化財調査報告第42集「境古墳群・境遺跡」に詳しく示してあるのでここでは微視的に平原・野中遺跡の周辺をみてみたい。

第２図は遺跡周辺の地形図である。

このあたりでは縦貫道路は標高25～30ｍぐらいで山麓部を通ることになった。八代市の北東部は山麓に古墳が群集する。平原・野中遺跡のすぐ上方の標高40～70ｍのところにも平原古墳群５基と岩屋本古墳１基の計６基の古墳があり、ここから小谷を挟んで 南西100ｍ 余りのところにも玉泉寺古墳群４基が発見されており、さらに南西にかけて数百基の古墳が分布する。平原古墳群から北東に谷を挟んで500ｍ程のところにも 境古墳群４基がある。 この地域に横穴式石室の古墳が群集する原因として、小地域に墳墓を集約できる横穴を造る凝灰岩の岩壁にめぐまれないという地質的な事情によるものと考えられる。

平原・野中遺跡も古墳群に接しているため、古墳存在の可能性が強かったが、調査の結果路線内には古墳はないことがわかった。調査地内で遺構の検出された２カ所をそれぞれⅠ地区、Ⅱ地区とした。Ⅰ地区は平原古墳群の直下、標高25ｍあたりにあり、主に室町時代と江戸時代の遺構と遺物が発見された。Ⅱ地区はⅠ地区の北北東200ｍの位置の 水田面に接した 標高20ｍ弱のところにあり、やはり室町時代と江戸時代を主とした遺構・遺物が発見された。

平原・野中遺跡のⅡ地区から北東350ｍのところに 先述した境古墳群のある 境遺跡があり、



第2図 平原・野中遺跡周辺図

ここからも平原・野中遺跡と併存したとみられる室町時代・江戸時代の遺構・遺物も発見されている。

一方、平原・野中遺跡Ⅱ地区の南西200mには先述した玉泉寺古墳のある玉泉寺遺跡があり、玉泉寺に伴った墳墓が調査された。玉泉寺の開基は鎌倉時代とされ、平原・野中遺跡の室町時代の遺構とも何らかの関係をもった可能性もある。

3. 調査の経過

(1) 調査の方法

古墳の石材と推定される巨石のある部分にトレンチを設定したが、はっきりしないので5m×5mに拡張し、これを第1グリッドとした。その後、古墳の可能性のある地点や遺構の可能性のある地点にも5m×5mのグリッドを設定し、発掘順に番号をつけ18グリッドまで設定した。

その結果、遺構の発見された南端の平坦地をⅠ地区とし、新たに路線の中央杭に平行した正確な方眼を組みなおし、5m×5mを1区画とし、東西方向に東からA～G、南北方向に北から1～9とし、それぞれの区画をA－1区などと呼ぶことにした。ただし、A列のみは路線外が崩壊する恐れがあるので発掘しなかった。

また、調査中に北端で貝塚が検出されたので、周辺を調査したところ遺構が検出されたので、ここをⅡ地区とし、Ⅰ地区同様に5m×5mを1区画として、北よりA～F、西より1～6と番号をつけ、A－1区などと呼んで調査及び記録を行なった。

(2) 調査の概要

発掘調査は昭和52年3月から昭和52年10月初めまでの約7カ月間行なった。

3月8日（火） くもり時々雨の中で現場小屋の組立てを行なった。

3月9日（水） 調査資材運搬。

3月10日（木） 現場小屋内外の整理と整備。

3月11日（金） 発掘調査開始。古墳の石材とみられる巨石の部分にトレンチを設定し発掘する。

3月14日（月）～3月16日（水） 巨石の部分のトレンチを拡張し、5m×5mの面積を掘り下げ、これを第1グリッドとした。この調査の結果、巨石は加工の跡もなく、地山に埋め込まれてもいないため単なる転石とみられた。

3月17日（木）～3月24日（木） 第1グリッドから南へ5m離れた所に周溝の有無を確認するため5m×5mの第2グリッドを設定し発掘したが、ここでも古墳に関する遺構遺物は発見されなかった。

路線内に地元民から「ジゾウサンヤシキ」と呼ばれている畑があり、この近くに五輪塔の火輪がある。また近くの路線外に「ミセンジョサン」として祀られている板碑があるため、調べ

てみると胎蔵大日如来像を示す梵字の下に地蔵尊が線刻されていることがわかった。このためこの板碑はもと「ジゾウサンヤシキ」にあったものと推定される。

3月25日（金）～3月31日（木） 第2グリッドの南西に5m離れて第3グリッドを設定、さらにその東に5mずつ離れて第4グリッド、第5グリッドを設定、発掘した。

第3グリッドは近世陶磁器や瓦器の破片が出土したが、かく乱が激しく、礫を多く含んだ層が積っており、1m以上掘り下げたが遺構は発見できなかった。

第4グリッドは表土から近世陶磁器数片が出土したのみで1m近く掘り下げたが遺構・遺物は発見されなかった。

第5グリッドは表土20～30cmの下が地山となっており遺構遺物は発見されなかった。

路線内に近世墓地が数カ所にあったが、この掘り上げの際、貝が出土したことを聞いたので、見に行ったらカキを主とした小貝塚であることが分った。調査地の北端にあたるところで、ここの調査も必要になった。

4月4日（月）～4月5日（火） 巨石のあった第1グリッドよりも北東約20mのところに盛り上がった部分があるため周辺に第6、第7グリッドを設定したが、1mぐらい下から旧地表が発見されたので古墳ではないことが分った。

地形測量も200分の1で始めた。

4月6日（水）～4月12日（火） 第3グリッドの西から南にかけて第8グリッドから第11グリッドまで設定。

第8・第9グリッドの表土から少量の瓦器片が出土したが、その下は礫を多く含んだ層のため発掘困難である。

第10・11グリッド付近はみかん園造成に際して畑の旧状を変化させることなく利用しているので遺構発見の可能性のあるところである。第10、11グリッドから須恵器や瓦器の破片などが出土した。

4月13日（水） 第10グリッドより15m南西に第12グリッドを設定、このグリッドより近世の陶磁器が出土した。

4月14日（木）～4月27日（水） 第10、11グリッドの間を13グリッドとし、これらを接続させた。中世の土師質皿、瓦器、青磁器の破片などが出土、直径20cm程の円形ピット、70cm×100cm程の長方形のピットなどが検出された。

第1グリッドの10m北西に第14グリッド、40m北に15グリッドを設定、発掘したが遺物はほとんど出土せず、50cm程で地山に達した。

測量は等高線を入れるのみになった。

4月28日（木）～5月11日（水） 第10、13、11グリッドに接した北側に16、17、18グリッドを設定、発掘。瓦器、土師質皿、滑石製石鍋片などが出土した。

道路公団、清水建設からの申し入れで、工事用取り付け道路が西側を通ることになった。ま

た貝塚のある所の調査を急いでほしいとのことだったので、一応今掘っている所（Ⅰ地区とする）を打ち切り、貝塚の付近（Ⅱ地区とする）に移ることになった。

5月12日（木）～6月21日（火）　Ⅱ地区に道路中心杭を結んだ線を基軸とし、5ｍ方眼に杭を打ち、発掘を開始した。

表土には近世陶磁器が含まれている。表土の直下が、砂礫を含んだ地山で、地山に掘り込まれたピットが多数検出された。柱穴からは近世の陶磁器片や、瓦片も発見された。

6月22日（水）～6月24日（金）　雨が激しく降り続き、調査できなかった。この頃より雨がちの天気で調査が遅々として進まない。

6月27日（月）　A－4区の西端にトレンチを設定した。深く掘り下げたところ下部から中世の遺物が出土し、中世以後の埋土であることがわかった。

6月29日（水）～7月5日（水）　F－2区で土壙が検出された。ここは墓地となっていたので近世墓とみられる。

F－1区の表土からは中世と近世の遺物が混在して出土するが、下層からは中世の瓦器の破片が多量に出土し、ここが段下がり地形であることと近くに貝塚も形成されているところからごみすて場であった可能性が強い。

7月6日（水）～7月20日（水）　Ⅱ地区の総仕上げをする。

北東端にある井戸の調査も行ない、井戸のまわりからは近世陶磁器が出土し、内部の発掘では水桶の底かとみられる木製品などが出土した。また井戸わくの割石に混じって割れた石臼も使われていることが分った。

柱穴などの実測も仕上げた。

7月21日（木）　中断していたⅠ地区へ移ったら、シートをかぶせていた所以外は夏草が繁っていた。草を除去し、遺構の検出を始めた。道路の中心杭を結んだ線を基軸として5ｍ方眼を組んだ。

7月22日（金）～8月3日（水）　Ⅰ地区の地山は東から西へ傾斜しており、B－2区からC－2区にかけて直径20cm程度のピットが多数検出されたが、D－2区では地山が深いので検出できない。

B－2区の1ｍ×2ｍ程の土壙を発掘、ここらあたりが「ジゾウサンヤシキ」と呼ばれているところである。

Ⅱ地区で残っていた貝塚の調査を行ないⅡ地区の調査を終了した。貝塚の貝層中からは中世の遺物が出土した。

8月4日（木）～8月31日（水）　Ⅰ地区B－2区の発掘の際、南側断面で土壙を2基発見、うち1基の下底部から釘と人骨粉が検出されたので墓壙であることが分った。
B～D－3～5区の表土はぎ、遺構検出と発掘・実測を進めた。B～D－4区には山道が通っていたのでこの部分では消滅している遺構もあるとみられた。

各区から小形の円形プランのピットと大型の方形プランのピットが検出され、ピット内から中世や近世の遺物が出土した。ピット群はさらに南西でも検出されるとみられたので、バックホーを導入して表土はぎを行なった。

9月1日（木)～9月14日（水） Ⅰ地区B～E－6、7の遺構検出・発掘・実測を進める。各区より多数のピットが発見された。ピットのうち方形ピットには近世の陶磁器片を出土するものもあり、また一直線に並んでおり、建造物復原のできるものもあるものと思われる。

E－5区から壁面の焼けた土壙が見つかり、付近からスラッグが発見された。

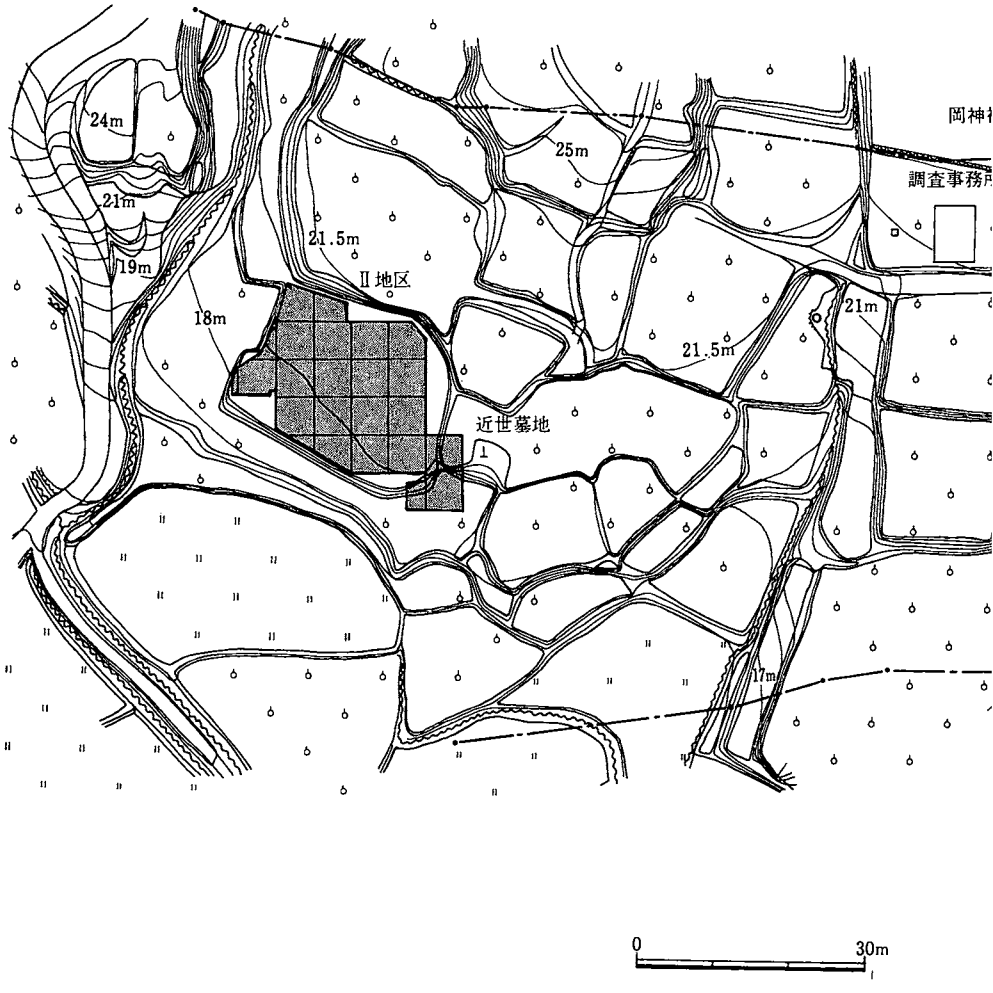
B－4、5区に大きなどんぐりの切り株があったが、これを除去したところ 直径1.5m程もある大きなピットが検出された。内部上方には灰の層があり、礫が落ち込んでいた。埋土中からは中世の遺物が出土し井戸と推定された。

9月15日（木)～9月24日（土） C～G－8～10区の遺構検出と発掘・実測を進めた。8区は多数のピットが検出されたが、崖面近くの9区では少なくなり、10区では全く検出されなかった。

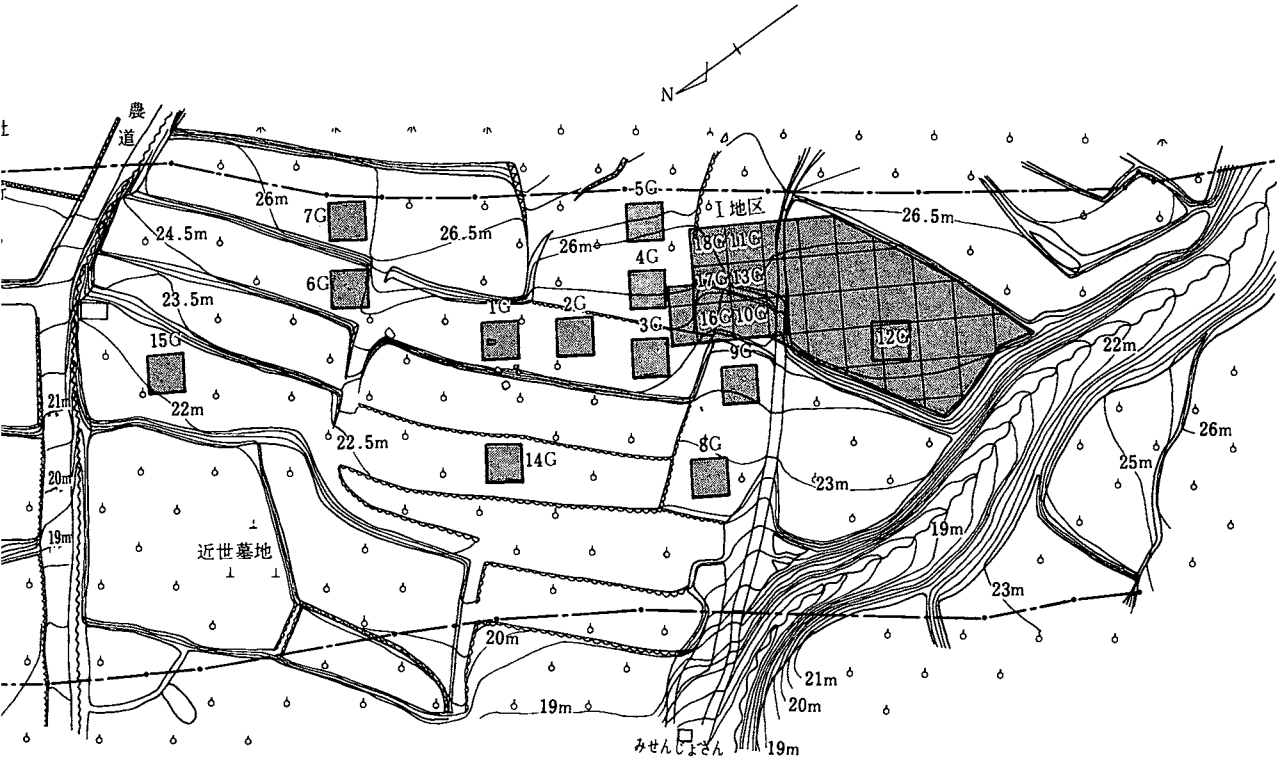
9月26日（月)～9月30日（金） 調査主任の高木が出張のため島津が引き継いだ。発掘を終了、図面も仕上げた。27日は月見のため 作業員こぞって 現場事務所横のススキを取って帰った。「あどけなき夢の終わりにススキ折り」。

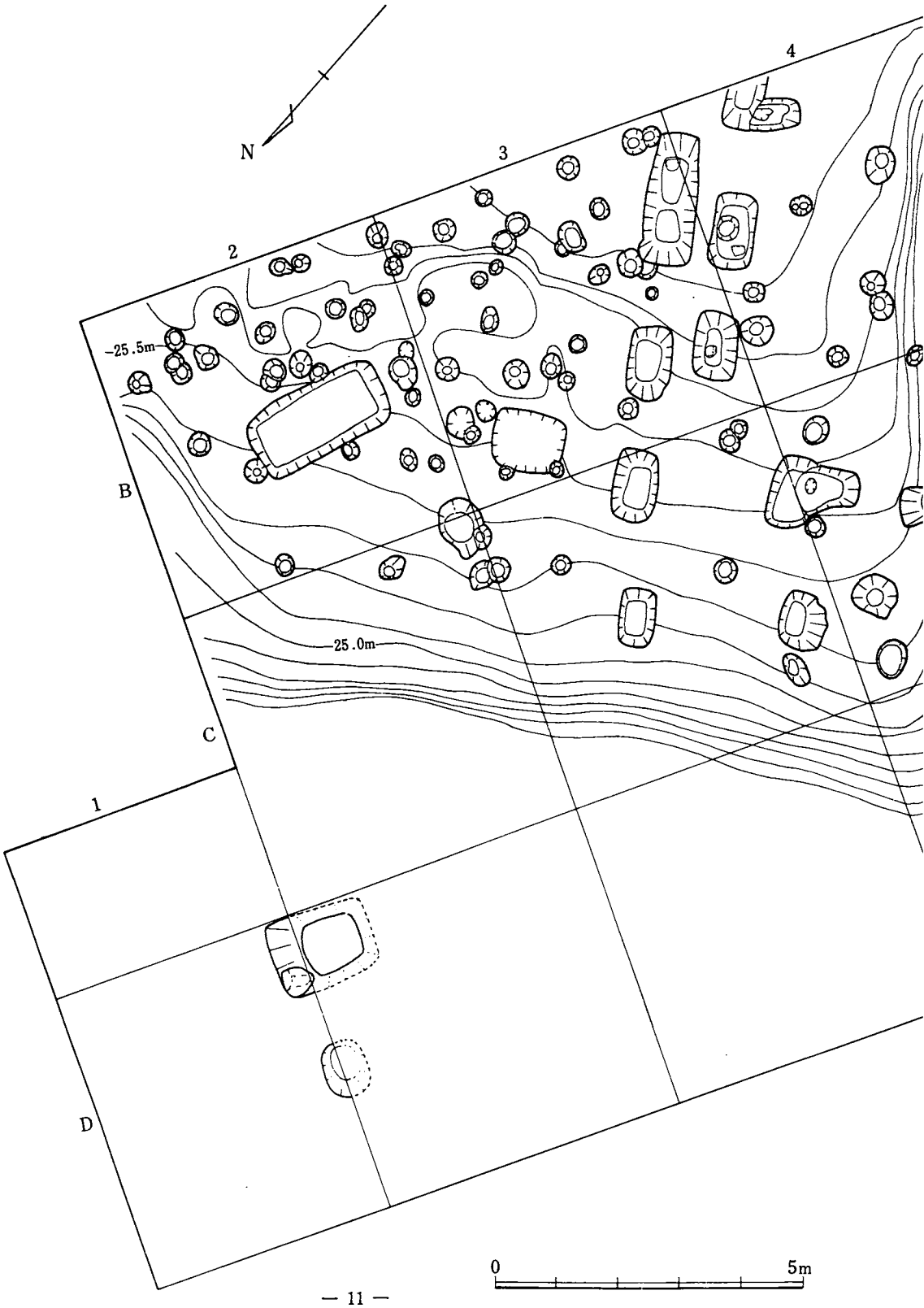
10月4日（火） 高木、島津、現場で図面点検などを行ない、すべて終了した。

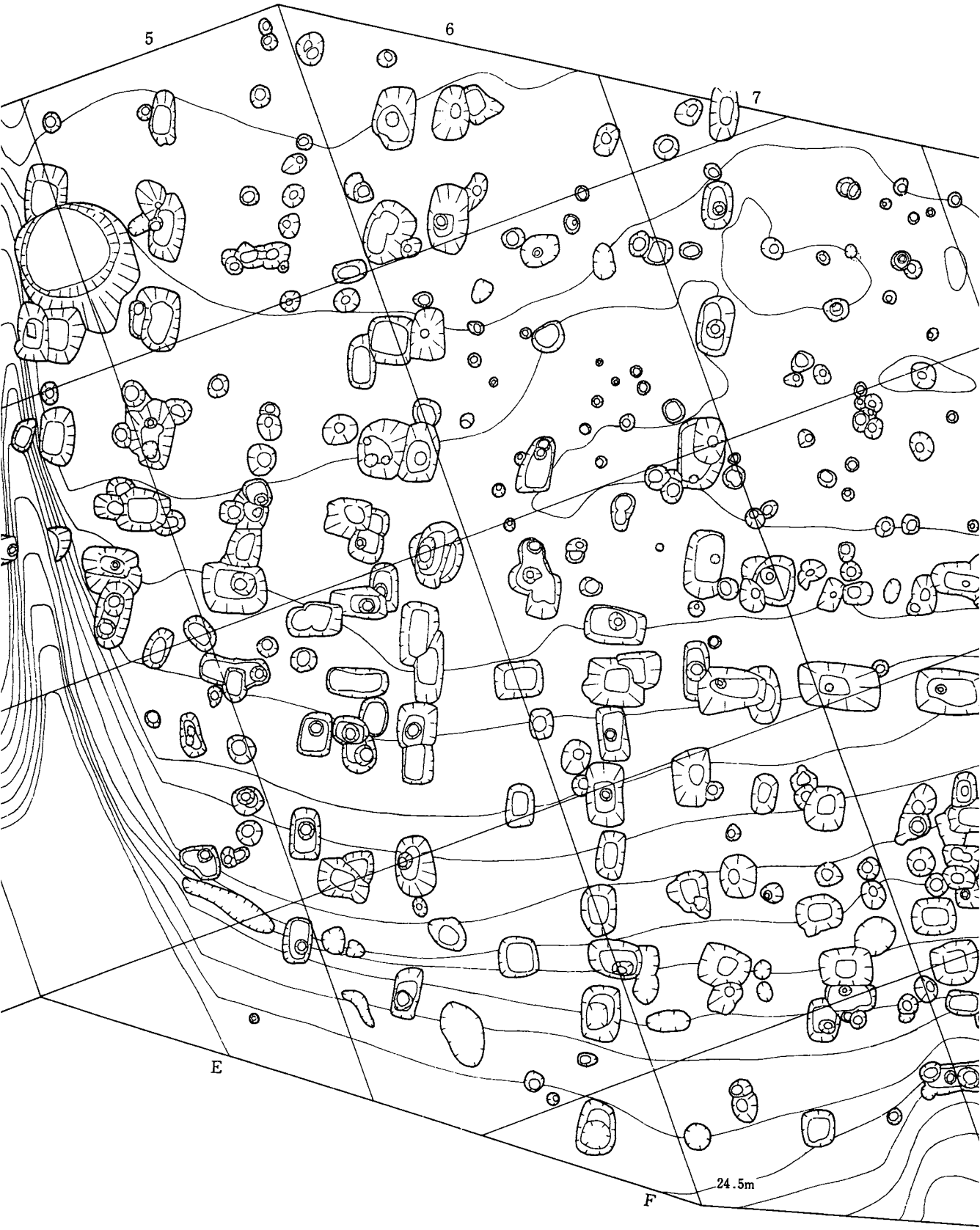
なお、本調査の組織についてはすでに述べたが、このほか、瀬丸敬二、大城康雄、豊崎晃一、吉田好範の各氏に測量等の助力を得、また作業にあたって地元岡中と宮原町の人々に協力を得た。



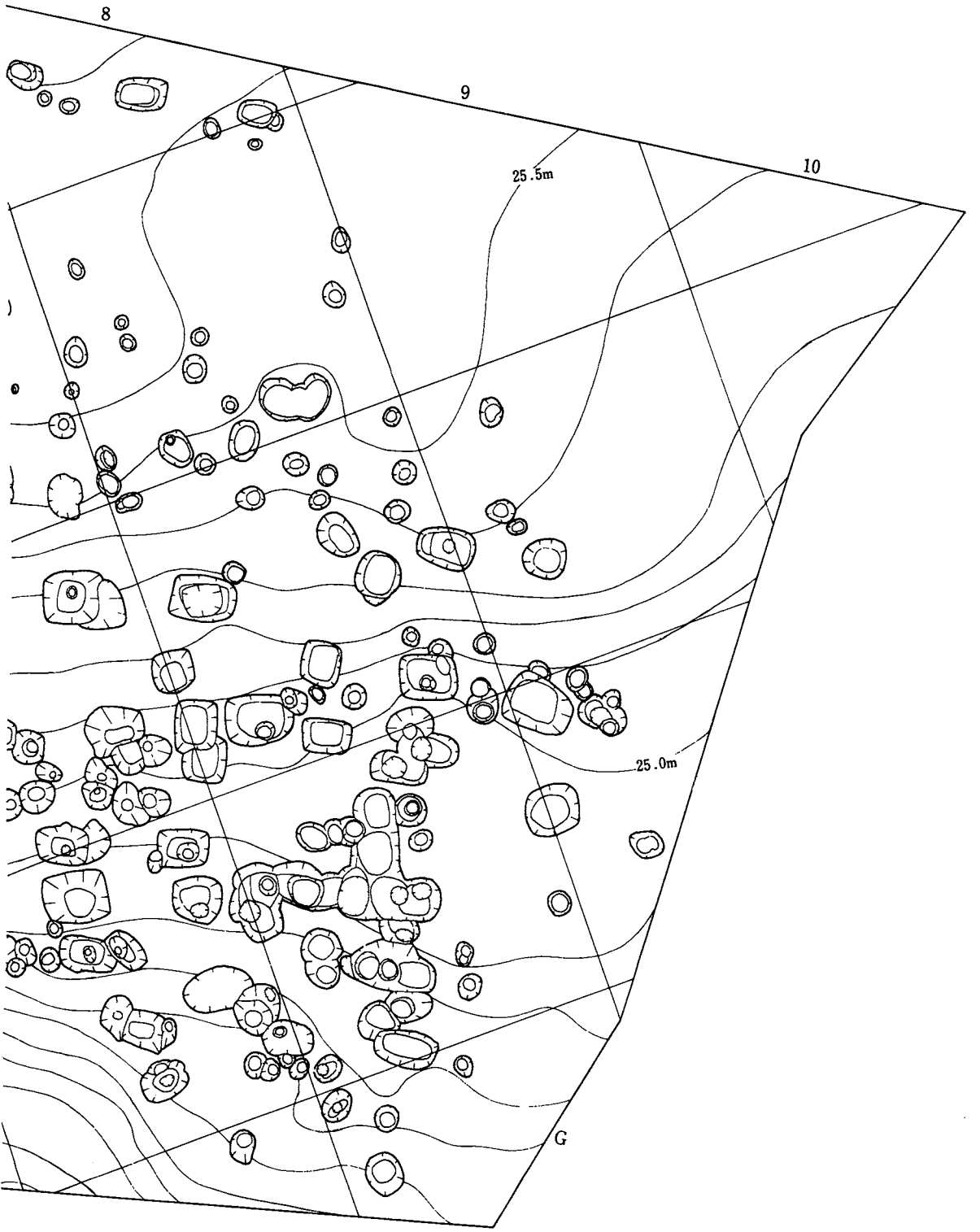
第3図　平原・野中遺跡測量図


N
農道
26m
7G
24.5m
26.5m
26m
5G
I地区
26.5m
18G
11G
4G
17G
13G
6G
23.5m
1G
2G
3G
16G
10G
12G
15G
9G
22m
21m
22m
22.5m
14G
8G
26m
25m
20m
23m
19m
19m
近世墓地
23m
20m
21m
20m
19m
みせんじょさん
19m


N
1
2
3
4
B
C
D
25.5m
25.0m
0
5m



第4図　Ⅰ地区遺構全景実測図


8
9
10
25.5m
25.0m
G

第Ⅱ章　Ⅰ地区の調査

1.　Ⅰ地区の設定と層位

(1)　Ⅰ地区の設定

Ⅰ地区は平原・野中遺跡の南端にあたる。Ⅰ地区内を山と村とを結ぶ小路が通っており、この小路の南側が字「平原」で、北側が字「野中」となっている。

調査区はグリッドのうち遺構の検出された10～13および16～18グリッドを含めた地域に設定した。ここはこの周辺で最も平坦面を広く確保できるところである。縦貫道工事用中心杭を基軸として５ｍ方眼を組み、東から西へＡ～Ｇとし、北から南へ１～10とした。この結果中心杭はＤとＥの境になった。但しＡの部分は道路工事区域外まで崩壊する危険性があるので調査しなかった。

Ⅰ地区の東側は３～５グリッドの調査結果、山津波に襲われているとみられたので調査区から除外し、西側は深さ４ｍ程の谷（俗称ひらくち谷）の崖際までとした。

北側の一段下の畑は８、９グリッドの調査結果と聞き込みでみかん園造成に際して平坦化されたということから遺構残存の可能性が薄いので調査区から除外した。南側の一段上の畑は１ｍ程高く、幅も狭いため、旧地形は急斜面をなし遺構のない可能性が強いと推定されたのでここも調査区から除外した。

以上のようなことから遺構調査対象としたⅠ地区の面積は約800㎡である。

(2)　Ⅰ地区の層位

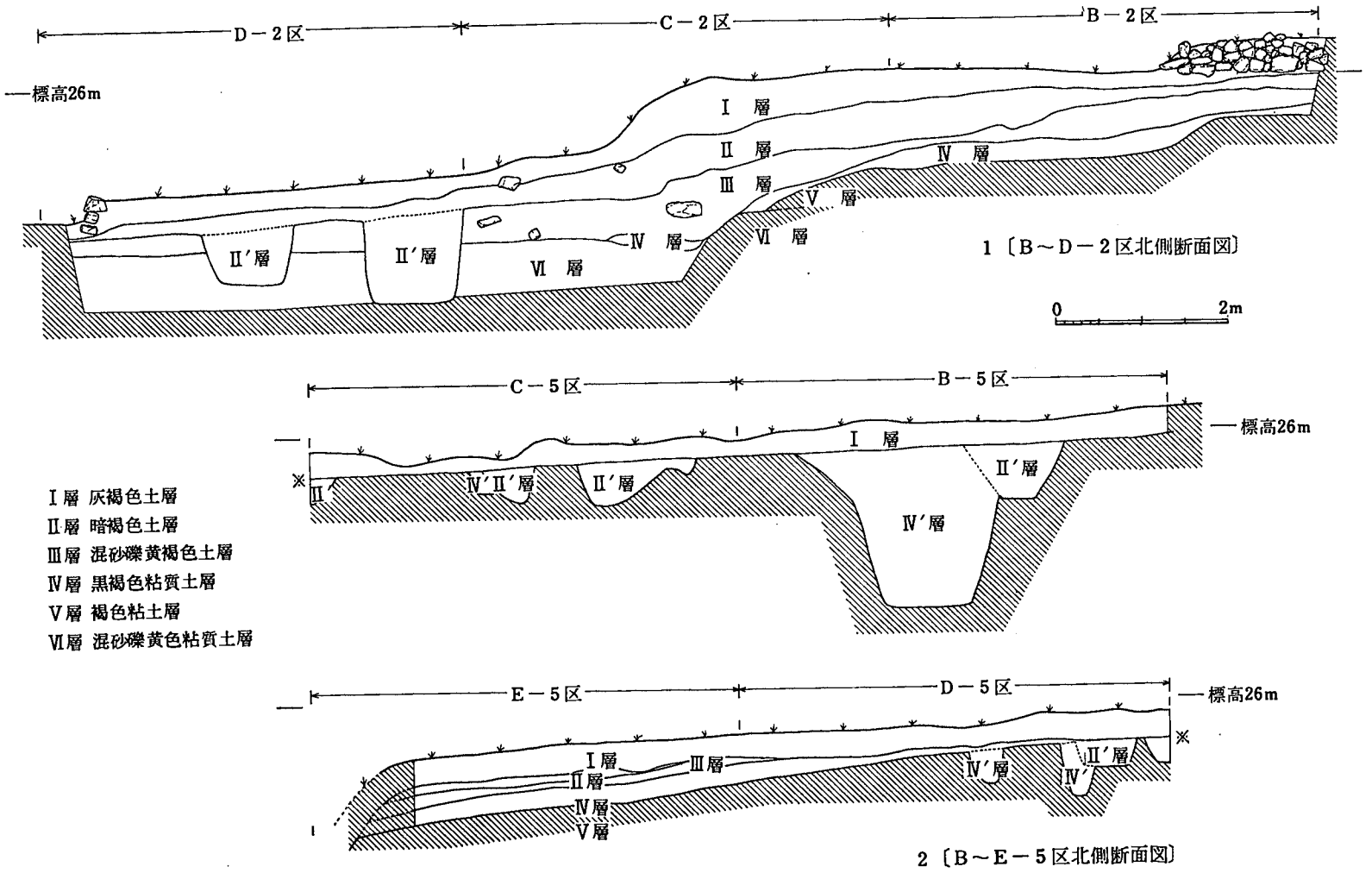
Ⅰ地区は標高24～26ｍのところにある。Ⅰ地区の土層のうち沖積世の層は北側ほど厚く堆積しており、南側は洪積世の層の上に直接表土がのっている。ここでは最もよく土層堆積状態を観察できたＢ～Ｄ－２区の北側断面の層位と、やや中央寄りのＢ～Ｅ－５区の北側断面の層位について述べ、各層の時期を決定したい。

第５図１はＢ～Ｄ－２区北側断面図である。また２はＢ～Ｅ－５区北側断面図である。この両図を対比させて各々対応する層を同一名で呼ぶことにする。層は上層から番号をつけて６層に分けられる。

Ⅰ層―灰褐色土層。表土層で調査区全面にみられる。腐食土層、耕作による撹乱層でもある。厚さ20～40cmあり、礫も含まれているので流土が堆積したものとみられる。

Ⅱ層―暗褐色土層。砂粒をいくぶん含んでいる。この層から近世の墓壙が掘り込まれているのでこの層も近世の 堆積層とみられる。 また近世のピットもこの層から 掘り込まれている。Ⅱ層の厚さは10～50cmある。

Ⅲ層―混砂礫黄褐色土層。無遺物層である。多量の砂礫を含み、短期間に堆積したものと



第5図 Ⅰ地区土層断面図

みられる。Ⅵ層の二次堆積層と推定され、地形からみて、集中豪雨により山側が抉られて山津波となって流れて来たものと推定される。この層は南側では殆んどみられないが北側では厚く堆積しており40〜70cmある。さらに北側の3〜5グリッドでは100cm以上の厚さ堆積していた。

Ⅳ層―黒褐色粘質土層。中世の土器や陶磁器を含む層で、木炭粒もみられる。この層から井戸や円形のピットが掘り込まれている。中世の表土層である。層の厚さは20cm前後である。

Ⅴ層―褐色粘土層。洪積世の層である。粘土の中に礫も含まれている。北東側では薄いが、南側では厚くピットや井戸の底までこの層がみられた。北端ではこの層は流失してⅣ層またはⅢ層の直下がⅥ層であった。

Ⅵ層―混砂礫黄色粘質土層。洪積世の層で砂礫を多量に含んでいる。北端で確認したが他の地区ではⅤ層上面まで掘り下げてそれ以下は遺構以外の発掘はしなかった。

以上のようにⅠ地区では大きくみるとⅣ層の中世の文化層とⅡ層の近世の文化層がみられる。各々の文化層は砂層を含む層で覆われており、この地点における住居の廃絶を物語っている。特に近世の住居を現在の住居域と比較すると現在がより平野部へ下りていることがわかり、この原因の1つが天災にあるとすれば、同様な地形が連なるこの地域の近世史を考える上で重要なことである。

2. 中世の遺構と遺物

(1) ピット群

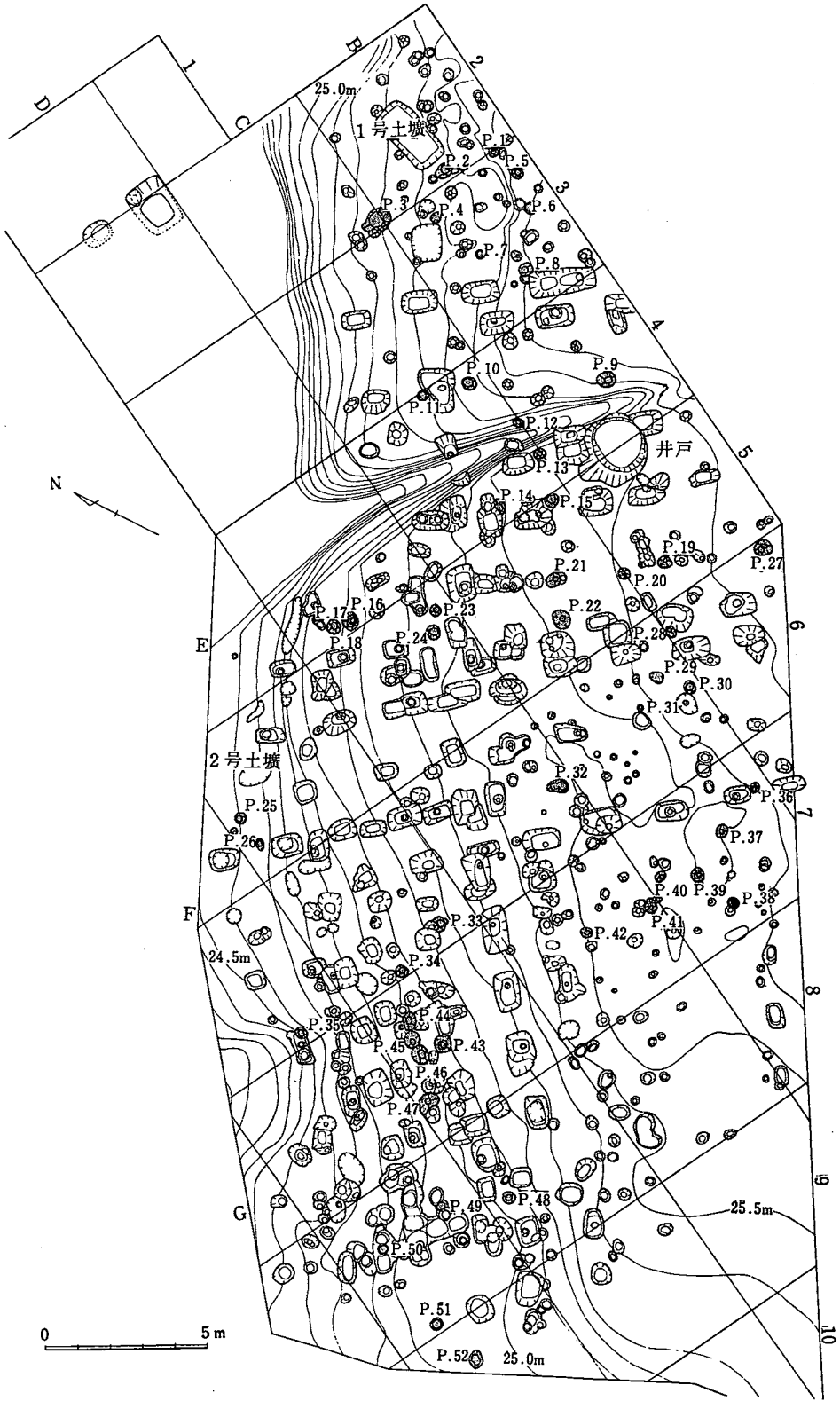
ピットのうち方形プランのものは後述するように近世のものであることがわかったが、円形プランのものは一部近世の遺物を出土するものもあったが、大部分は中世のものと推定された。特に第6図の p. 1 から p. 52 は中世の遺物のみを出土したピットであるので中世のものとほぼ断定することができる。

第7図および第8図1〜10は中世のピットから出土した主な遺物である。

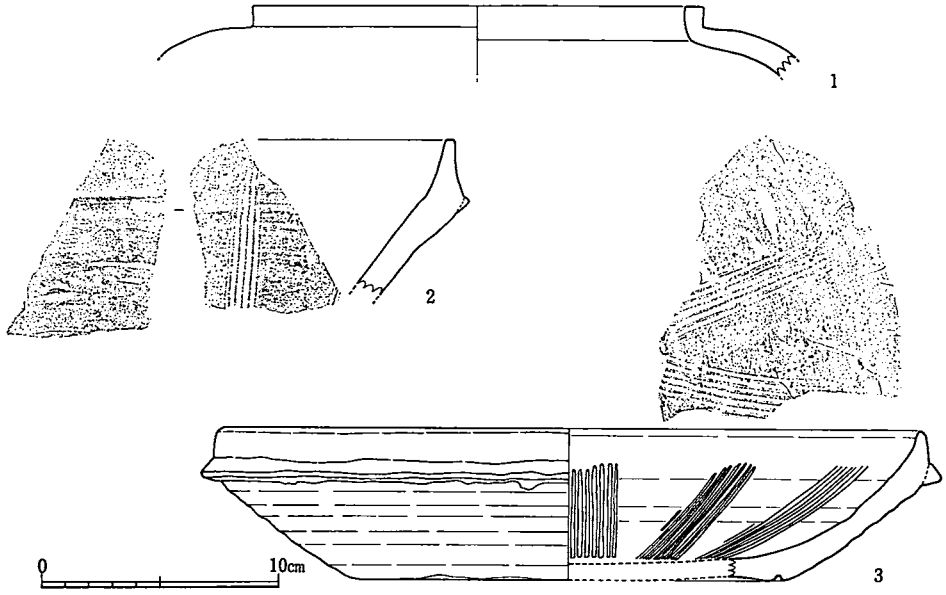
1は土製湯釜の口縁部付近の破片である。口縁部は短く立ち上がり、口径19.2cmを測る。内外面とも横なでされている。胎土には1mm前後の砂粒を含んでおり、一部には4mm程度の小礫も含まれている。色調はにぶい黄橙色を呈する。第6図 p. 13から糸切底土師質皿の小破片とともに出土した。

2は備前焼擂り鉢の口縁部付近の破片である。外面の肥厚したところに凸帯を貼り付け、口縁部は薄くなり、断面は三角形に近い形態をなしている。内外面とも横なでされており、内面は櫛目による5条の線が間隔をあけてつけられている。胎土は1〜4mmの小礫を含んでおり、よく焼きしまり、灰色ないし灰黄褐色を呈する。第6図 p. 41から出土した。

3も備前焼擂り鉢の破片である。口径29.7cm、高さ6.4cmを測る。口縁部近くに凸帯をめぐ



第6図　Ⅰ地区中世遺構分布図



第７図　Ⅰ地区中世ピット出土遺物実測図(1)

らし、内彎ぎみで口唇部は尖っている。内外面とも横なでされ、内面には櫛目が間隔をあけてつけられている。胎土には１～４㎜の小礫を含んでおり灰色を呈し、よく焼きしまっている。底面を除いて内外とも泥釉がつけられておりにぶい赤褐色ないし明褐色を呈する。第６図　p. 27から出土した。

４～７は明代の青磁器碗の破片である。

４は口縁部が玉縁状に肥厚し、口径は16.1㎝を測る。胎土は灰色で、内外面とも暗緑色の釉薬がかけられている。第６図 p. 15から、土師質皿や青磁器の細片とともに出土した。

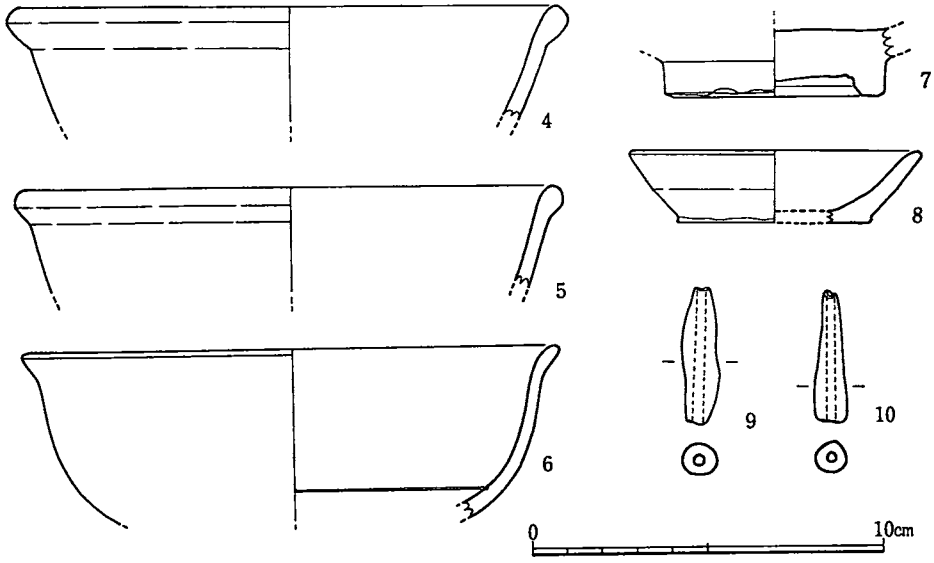
５も４に類似した口縁部をもつ碗で、口径15.7㎝を測る。胎土は灰色で、内外面とも薄緑色の釉薬がかけられている。第６図 p. 26から出土した。

６は口縁部が外反しており、口径15.4㎝を測る。見込み部に一条の沈線がみられる。胎土は灰色で、内外面とも暗緑色の釉薬がかけられている。第６図 p. 44から土師質皿の破片や、後述する９の土錘とともに出土した。

７は高台部の破片である。胎土は灰白色で、釉薬は暗緑色で内外面とも薄くかけられているが、畳付と高台部内側にはかけられていない。第６図 p. 32から土師質皿の破片とともに出土した。

８は糸切底の土師質皿である。口径8.3㎝、高さ2.1㎝を測り、内外とも横なでされている。胎土は緻密で、色調は黄橙色を呈する。第６図 p.50 から出土した。

９と10は土師質の土錘である。



第8図　Ⅰ地区中世ピット内出土遺物実測図(2)

9は最大径1.0cm、長さ3.9cmを測る。胎土は緻密で、色調はにぶい黄橙色を呈する。6の青磁器などとともに第6図 p. 44から出土した。

10は最大径0.9cm、長さ3.8cmを測り、胎土は緻密で、色調は灰黄褐色を呈する。第6図 p. 47から出土した。

その他の中世ピットからも青磁器や糸切底土師質皿の破片が出土している。

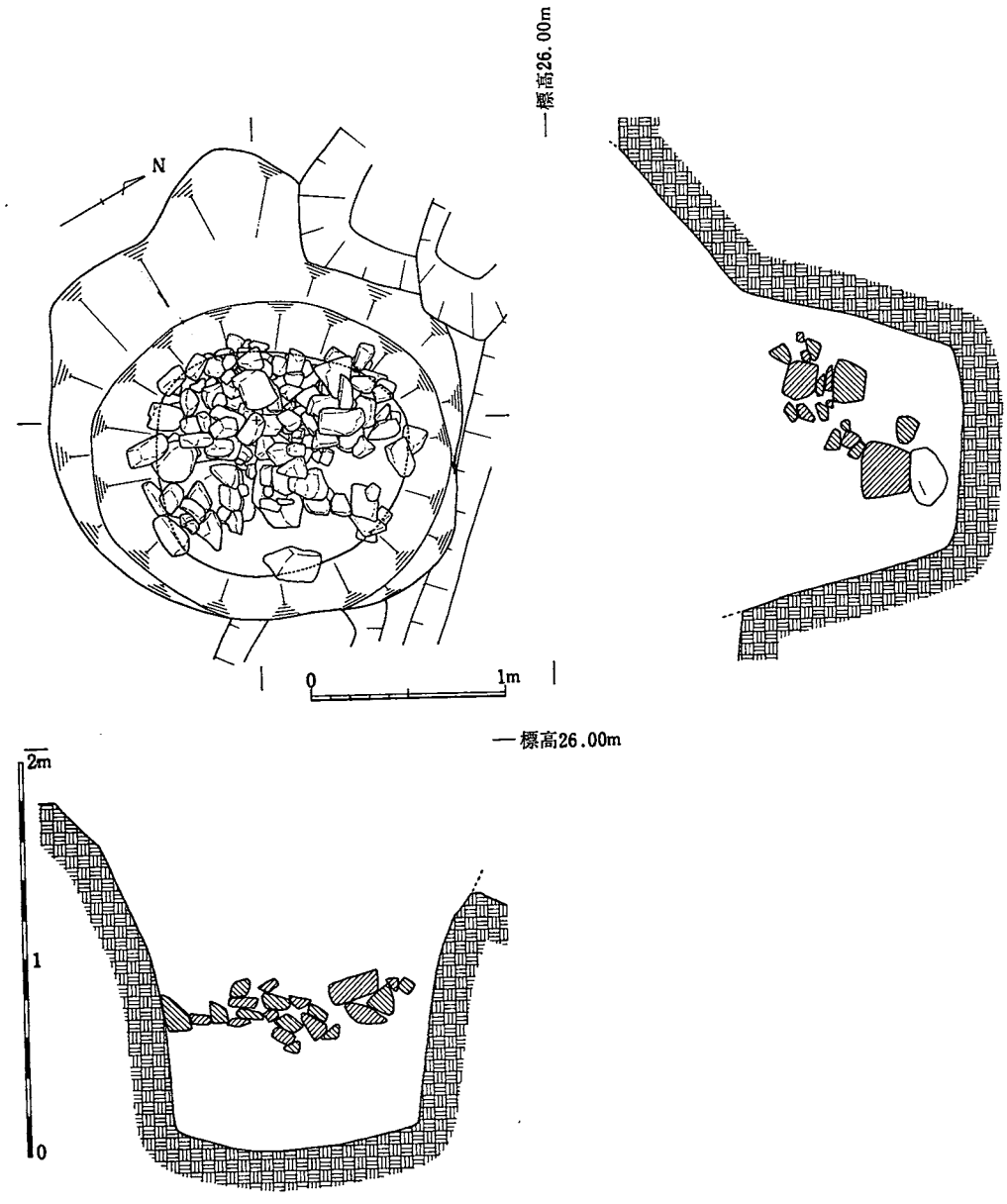
これらの遺物は室町時代のものであり、円形プランのピットの大部分は室町時代のものとみてよい。

なおこれらのピットは数が多いため建物を復原することができなかった。

(2) 井　戸

1地区のやや東寄り、B－4区からB－5区にかけて大きなピットが発見され、形態や内部の状況から井戸とみられた。(第9図)

井戸はⅠ層（表土）を除くとⅤ層に掘り込まれて検出され、埋土はⅣ層（中世層）に相当する土であった。また、北側と南東側の一部は近世のピットで、北東側は山道のため削られた部分があったが、ほぼ旧状を保っていた。円形プランで、残存部の縁は東西2.4m、南北2.1mを測り、下底部は東西1.2m、南北1.3mを測る上方の開いた深さ1.8mの井戸であるが、井戸縁は廃絶後にいくぶん崩れ落ちたものとみられる。井戸はあまり深くはないが、粘土層に掘り込まれているので貯水能力はあり、地形的に湧水の出やすい位置に掘られている。なお、井戸の横にある山道は現在までそうであったが、以前から雨水のたびに流路となり抉れたことが明らかで、発掘によってもその事が確認でき、部分的に流失を防止するための角礫が打ち込まれていた。また調査中において、雨のあと他の遺構の水はひいても、この井戸の水だけはひかない

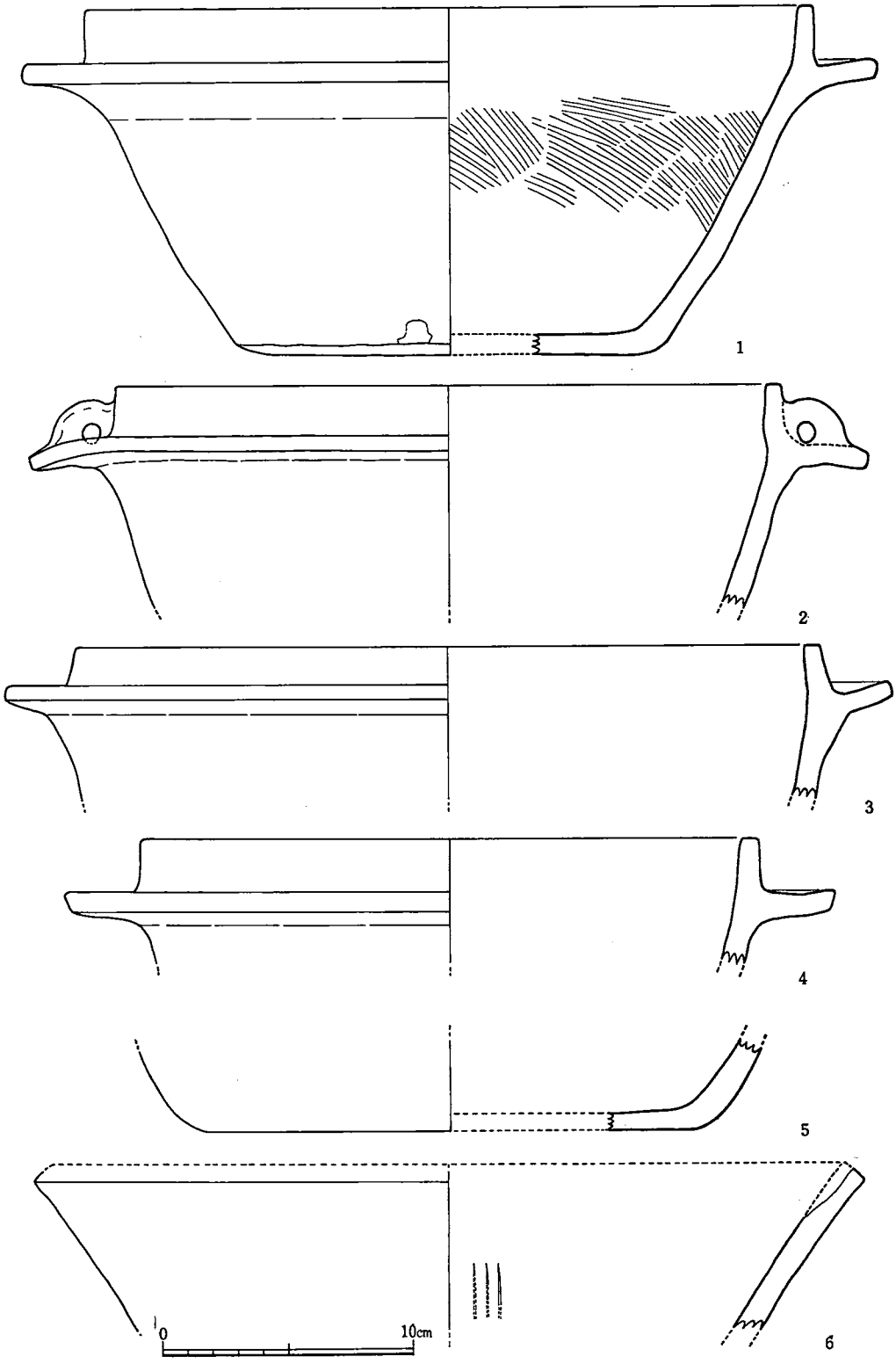


第9図 I 地 区 井 戸 実 測 図

ことがわかった。

井戸内に10～30cm程度の角礫が多数みられ、中程に多く下底部には少ないところから、井戸の縁石が落ち込んだものと推定される。井戸に木枠があった可能性もあるが確認できなかった。

井戸内から角礫のほかに瓦器、土師質皿、青磁器など中世の遺物が出土した。井戸の埋土の上部では木炭まじりの灰がみられ、井戸廃絶後、芥捨場とされたことがわかる。



第10図　Ⅰ地区井戸内出土遺物実測図(1)

おそらく周辺にある柱穴群が示すように中世の建造物に伴った井戸である。

第10図〜第12図の１〜22は井戸から出土した遺物である。

１〜５は土製鍋の破片である。

１は口径29.2cm、高さ約13.8cmを測り、口唇部より約2.5cm下に幅2.5cmの鍔状の突帯をめぐらしている。内面には刷毛目調整がみられ、口縁部から鍔状突帯部にかけては横なでされている。鍔状突帯の下面から底部にかけては煤が付着しており、厚いところは１mm程こびり付いている。胎土には砂粒がみられ、黄橙色を呈する。

２は口径26.8cmを測り、口縁部より2.5cm程下に鍔状の突帯をめぐらし、その上に穴のあいた把手がついている。底部は欠損しているが、平底となり、高さは13cm前後あったものと推定される。口縁部付近は横なで器面調整のあとがみられる。胎土には砂粒も混入しており、色調はにぶい黄橙色を呈している。鍔状突帯の下面から底部にかけては煤が付着している。

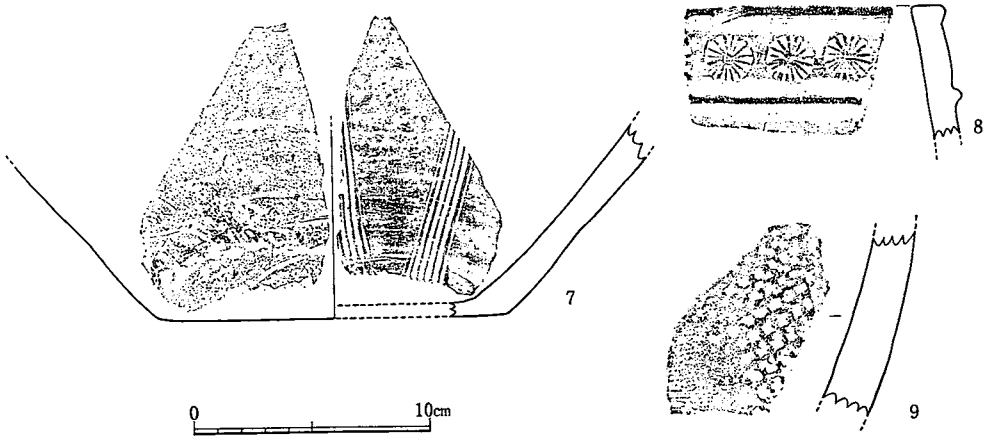
３は口径24.8cmを測る口縁部付近の破片である。２とほぼ同じであるが、鍔状突帯の端部がやや跳ね上がっている。胎土は砂粒を混入しており、色調は褐灰色を呈し、鍔状突帯以下に煤が付着している。

４も口縁部付近の破片で口径29.8cmを測る。鍔状突帯はやや上向きについている。鍔状突帯以下のみでなく、口縁部外面にも煤が付着している。胎土は砂粒を混入し、色調はにぶい褐色を呈する。

５は土製鍋の底部付近の破片で、復原すると底面径は19.6cmを測る。平底で、内外面とも研磨されている。胎土に砂粒を混入しており、色調はにぶい褐色を呈する。

６は擂り鉢の口縁部の破片である。口径33.2cmを測り、胎土は割合に緻密であるが砂粒も混入している。色調はにぶい黄橙色を呈し瓦質である。井戸の下底部から出土した。

７は備前焼擂り鉢の底部付近の破片である。底面径は14.8cm程度あり、胴部に対して底面が



第11図　Ⅰ地区井戸内出土遺物実測図(2)

薄くなっている。胎土には砂粒を含んでおり、焼成は非常に良く、須恵器で、色調は外面は褐灰色、内面は灰白色を呈する。

8は火舎の口縁部の破片とみられる。口縁部はやや内傾し、横なでされており、口縁部上端とその3.5cm下に突帯をめぐらし、その間に菊花文のスタンプを横に等間隔に押している。胎土は緻密で、色調は灰色を呈する。

9は底部近くの破片で、おそらく壷で底部は平底となるものと推定される。外面には格子叩き目と刷毛目がみられる。胎土は緻密で、色調は灰色を呈する。井戸の下底部から出土した。

10〜18は糸切り底の皿である。

10は口径8.7cm、高さ2.0cmを測り薄手で、口縁部はいくぶん外反ぎみである。胎土は緻密で、褐灰色を呈する。

11は口径7.6cm、高さ2.1cmを測る。割合厚手で、口縁部は真っすぐ尖りぎみに開いている。胎土は緻密で、色調は浅黄橙色を呈する。井戸の下底部から出土した。

12は薄手で口径9.8cm、高さ1.7cmを測る。丸みのある皿で、胎土は緻密、色調は灰褐色を呈する。

13は口径8.5cm、高さ2.4cmを測り、口縁部が外反している。胎土は緻密で、にぶい黄橙色を呈する。

14〜16は底部付近の破片である。やや厚手で、胎土は緻密で、色調は黄橙色を呈する。

17、18も底部付近の破片で、やや大型の皿である。いずれも胎土は緻密で、色調は橙色を呈する。

19〜22は明代の青磁器である。

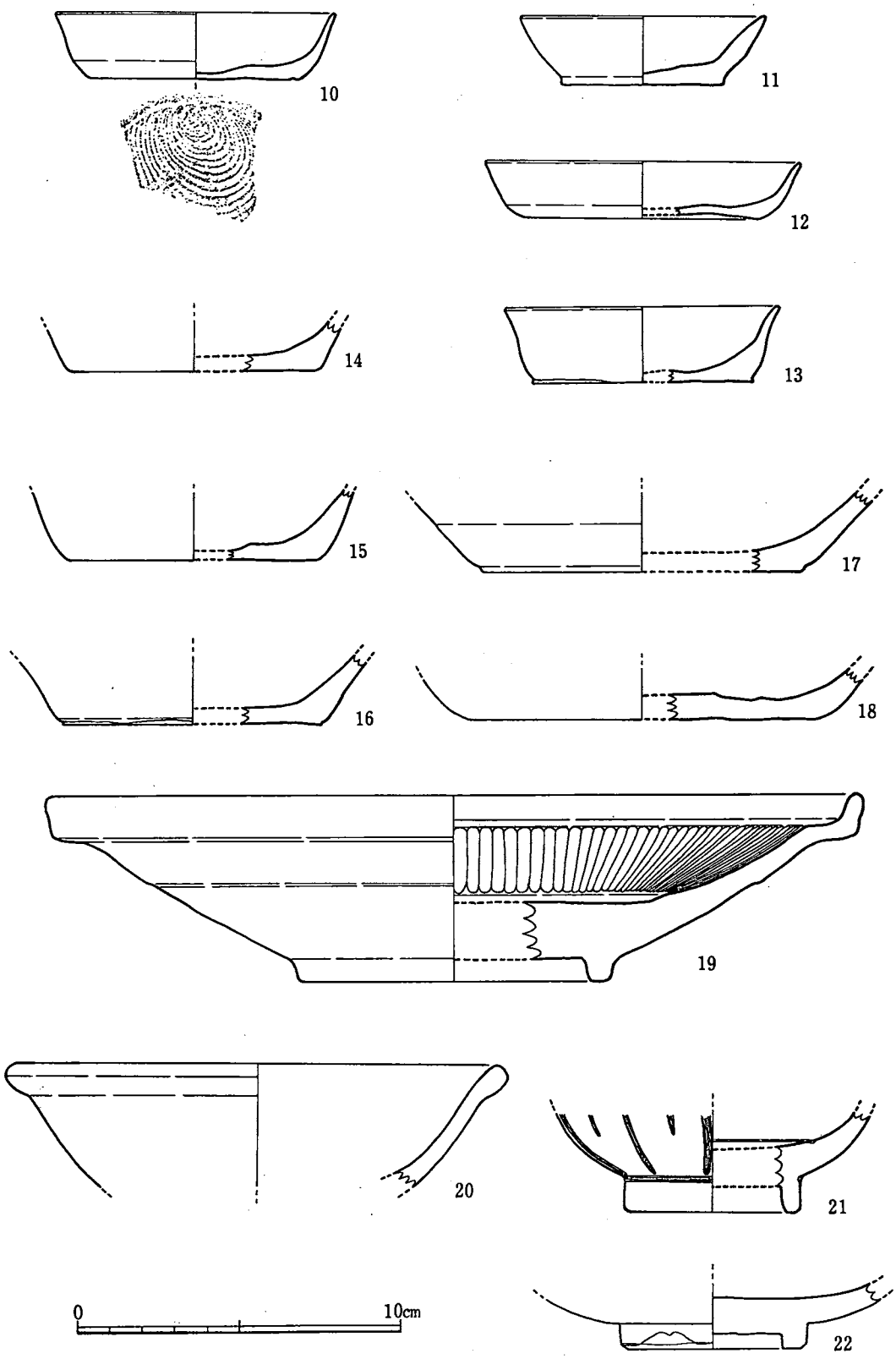
19は口径25.4cm、高さ5.7cmを測る鉢である。底部は厚く、高台が付き、体部の端部で折れて水平にのび、さらに折れて立ち上がって口縁部となっている。体部内面にへら削りによる施文がみられ、胎土は緻密で、灰白色を呈し、ほぼ全面に明緑灰色の釉薬がかけられているが、高台部天井部のみはかけられていない。明代の青磁器である。井戸の下底部から出土した。

20は碗の口縁部付近の破片である。口径は15.6cmを測り、厚く丸くおさまっており、玉縁状である。胎土は緻密で、灰白色を呈する。釉薬は全面にかかっており、明緑灰色を呈する。井戸の下底部から出土した。

21は碗の高台部付近の破片である。見込み部に凹線を施し、外面には簡略化された蓮華文が凹線で描かれ、体部と高台の境にも凹線をめぐらしている。胎土は緻密で、白色を呈し、釉薬は明緑灰色で全面にかけられている。

22は碗または皿の高台部付近の破片である。高台は削り出しており低い。胎土は灰色で、内外とも暗緑色の釉薬がかけられているが、畳付と高台内側は釉薬がみられない。

これらの遺物はすべて室町時代の遺物である。このことから井戸の時期を室町時代とみることができ、前述の中世ピット群、言いかえれば中世建物に伴った井戸とみることができる。



第12図　Ⅰ地区井戸内出土遺物実測図(3)

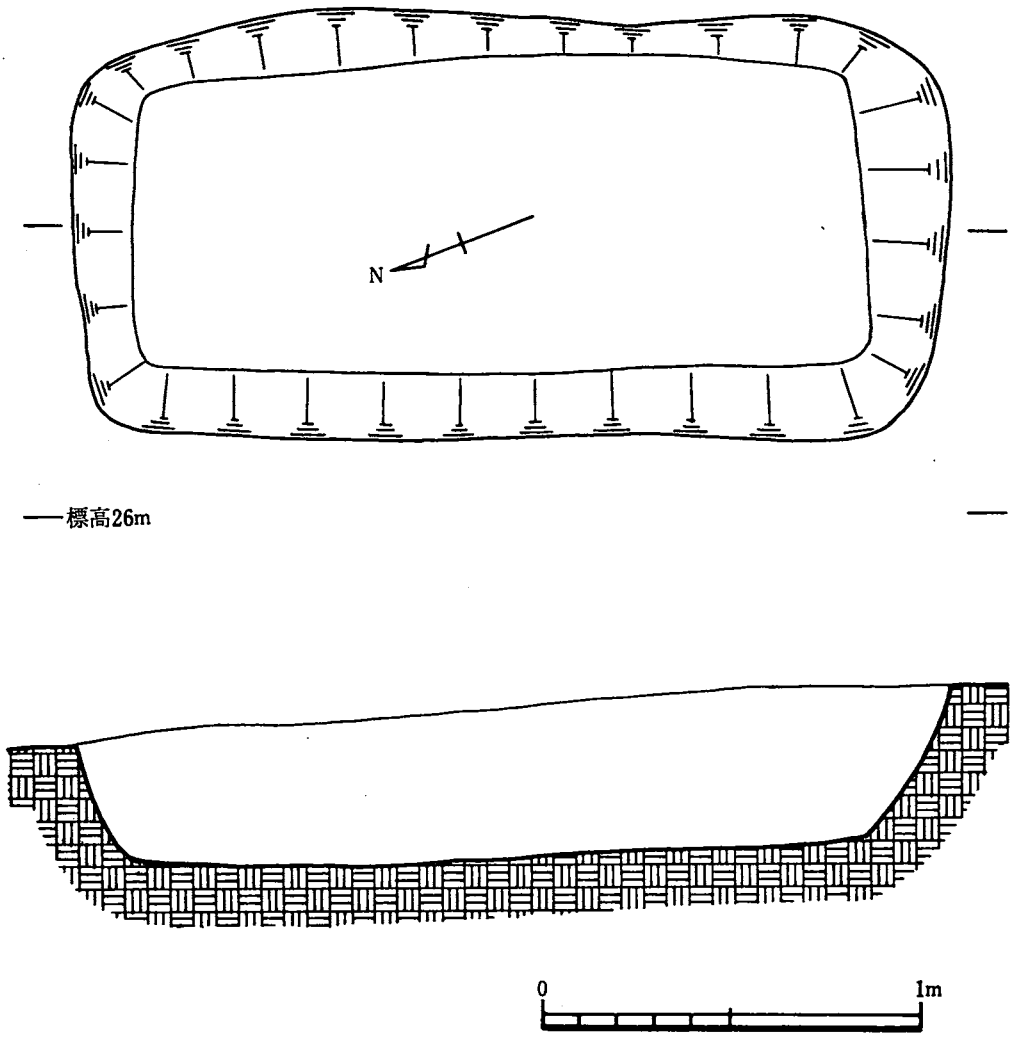
(3) 土　壙

Ⅰ地区のピットの中に柱穴の掘り型とは異なるものがあった。先述の井戸もそうであったがその他２つの遺構があった。これを１号土壙、２号土壙とする。

（イ）　１号土壙（第13図）

Ｂ－２区のほぼ中央部にⅣ層からⅤ層に掘り込まれている土壙で、埋土はⅣ層の中世層に相当するものであった。土壙は幅1.13ｍ、長さ2.32ｍを測る長方形のプランで、深さは約40cmであった。主軸はＮ－21度－Ｅにとっている。

内部からは他の中世遺構と同じく糸切底の細片が埋土に含まれて出土したのみであったが、底土の一部を水洗したところ炭化米２粒を検出できた。しかしこの遺構の性格を決定づける程ではなかった。



第13図　Ⅰ地区１号土壙実測図

墓壙であることも考えられるが浅すぎるようでもある。この地点を含むⅠ地区北東側一帯は地元民に「ジゾウサンヤシキ」と呼ばれているところである。あるいは後述する地蔵尊を刻んだ板碑に関係ある遺構であるかもしれない。

（ロ） 2号土壙（第14図）

E－5区で発見された土壙で、Ⅳ層からⅤ層に掘り込まれていた。幅0.76m、長さ1.28mを測る楕円形のプランで、主軸をほぼN－60度－Wにとっている。壁面は厚さ2cm程が火を受けて強く焼けている。現状では深さ12cm程しかないが、周辺に壁面とみられる焼けた土が散乱していたのでもっとも上まであったものとみられる。

内部には木炭や焼土がつまっており、周辺にも木炭や焼土がみられた。近くからスラグも出土している。

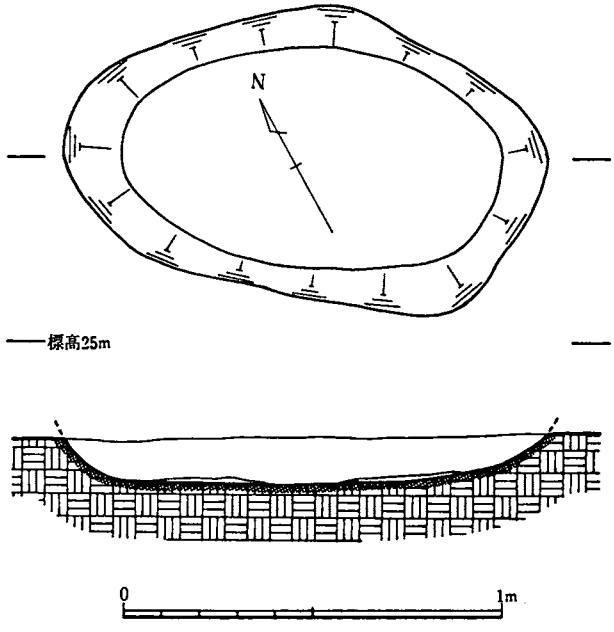
このようなことから2号土壙は製鉄に関係ある遺構ではないかとみられ、中世の建物に伴うものと推定される。

(4) 板碑および五輪塔

Ⅰ地区の北端に五輪塔の火輪一個が転がっており、Ⅰ地区から40m程北にも火輪など数個が畑の境界に置かれていたが、後者は調査を行う前に破壊された。またⅠ地区から50m北西には板碑があり、この付近に水輪1個、前の谷川の中に空風輪一個が転がっていた。ここでは調査できた石造物とそれに関する民間信仰について述べておきたい。

（イ） 板碑（第15図1、第16図）

Ⅰ地区から50m北西の地点の小堂に祀られている板碑で地元の人々は「ミセンジョサン」と



第14図 Ⅰ地区2号土壙実測図

呼んでいる。

砂岩製板石の周辺をわずかに加工した自然石板碑である。厚さ14cm、露出部分の最大幅90cm、高さ104.5cmを測り、下方はセメントで塗り固められている。上方は折れたものをセメントで接合してある。下方も折れて欠損したものを建てているようであり、もとは高さ150cm以上あったものと思われる。

上方に大日如来を表した梵字が線刻され、その左横に20字程の銘文が縦2行にわたって刻まれているが風化のため判読が困難である。中央部には地蔵菩薩坐像が線刻で描かれ、左手に宝珠をとり、右手に錫杖を持っている。

この板碑は欠損しており原位置を移動しているとみなければならない。現在置の上方にあたるI地区の北東側が地元の人々に「ジゾウサンヤシキ（地蔵様屋敷)」と呼ばれており、もとはこの付近にあったものとみることができよう。しかし「ジゾウサンヤシキ」というのが、地蔵菩薩の板碑が建っていた頃から残っている俗称地名なのか、あるいは地蔵菩薩の板碑が発見された時その地点につけられた俗称の地名なのかは不明である。いずれにしろ「ジゾウサンヤシキ」の付近を板碑の原位置とみることができる。

板碑の付近には「奉納、文久三亥六月、河野保之介」や「奉納、□□四年子三月、河野長助」の銘のある石灯籠の破片があるので、江戸後期頃に現在の位置に祀られたものとみられる。

板碑の年代は銘文の解読が困難なため不明であるが、原位置とみられるあたりから出土する遺物（糸切り底土師質皿や青磁器の破片など）から室町時代頃のものではないかとも思われるが、はっきりわからない。もし室町時代のものであるとすれば、中世のピット群などと同時期ともみられ、これらの遺構と直接関係あるものかもしれない。

（ロ） **五輪塔**（第15図2～4）

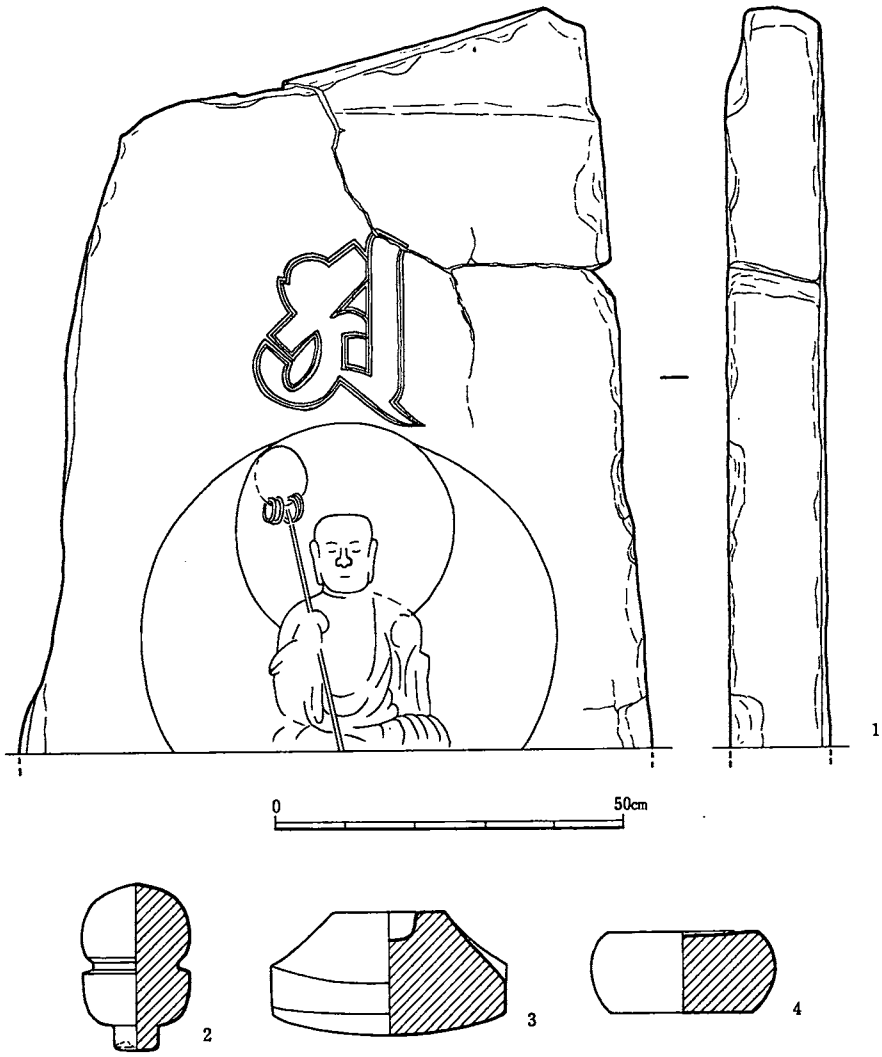
3は「ジゾウサンヤシキ」のところに転がっていたもので、4は「ミセンジョサン」の近く、2は「ミセンジョサン」の前の谷川中に転落していたものである。

2は空風輪で最大幅15cmで、枘を除いた高さは20cmを測り、3.5cmの枘がついている。空輪は球形に近く、風輪は半球形を成す。凝灰岩製である。

3は火輪で風化が激しいので、いくぶん復原も加えて実測したものである。最大幅34cm、高さ17.5cmを測る。枘穴の深さは4cmである。下面はやや反りがあり、軒面は割合狭い。凝灰岩製である。

4は火輪で最大幅26cm、高さ11.5cmを測り、幅の割に高さがない。上面がいくぶんくぼみ、下面は水平である。凝灰岩製である。

空風輪と水輪も火輪のあった付近にあったものが転落したものとみられる。これらが同一個体かどうか不明であるがほぼ同時期のものであろう。この五輪塔のあったとみられるところは板碑があったとみられているところでもあるのでこの二者は同時に建てられていたものとみられる。五輪塔の形態も合わせて考える時、室町時代頃のものと推定される。



第15図　板碑および五輪塔実測図

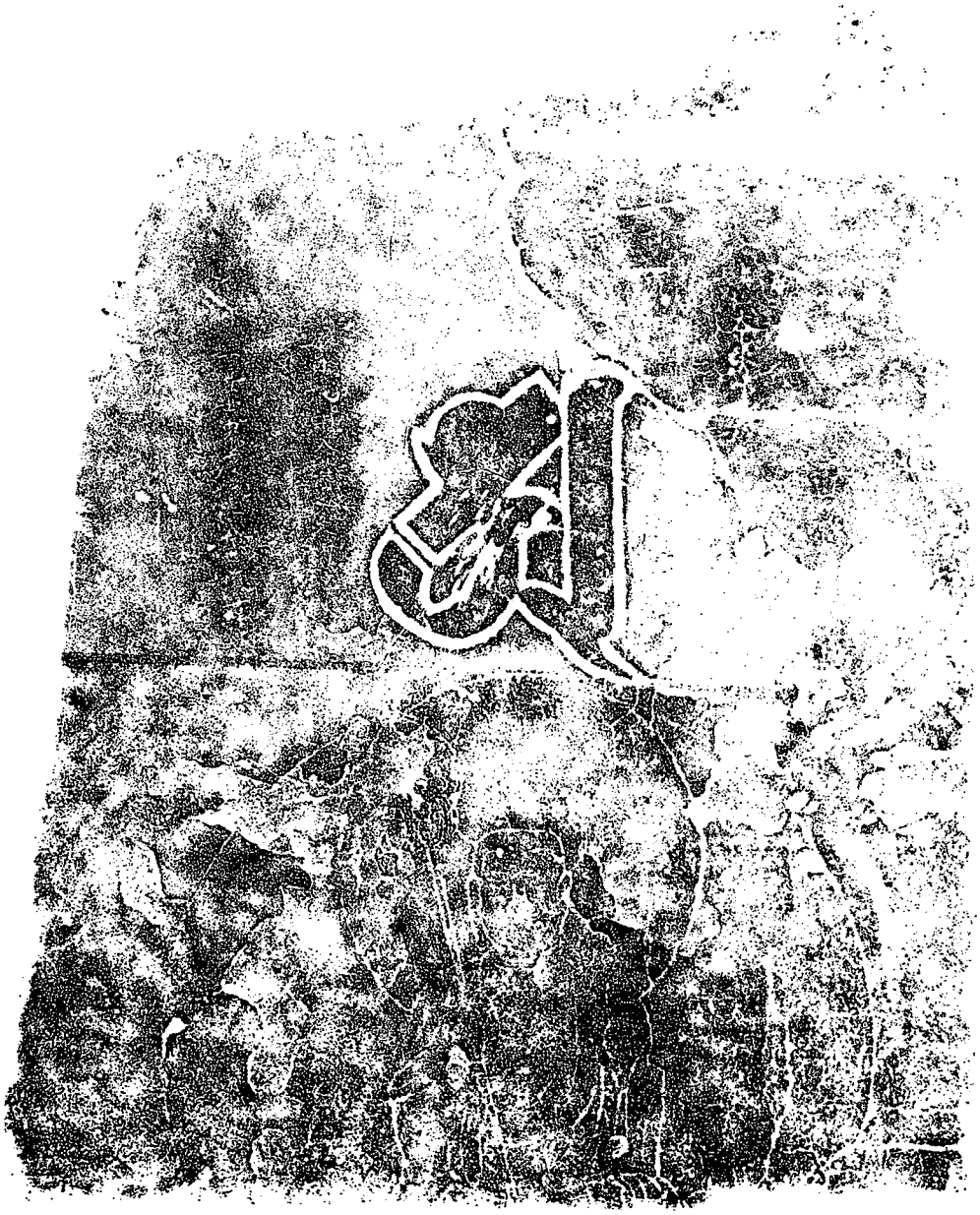
（ハ）　関連調査――ミセンジョサンについて――

八代市岡町野中に板碑を神体とする小堂がある（第３図参照）。これを地元の人々はミセンジョサンと呼んでいる。ミセンジョサンは仏様ではなく神様であるという。ただ、少数ではあるがミセンジョサンのジゾウサン（ミセンジョ谷の地蔵様）といういい方をする者もいる。

板碑には梵字が刻まれ、その下に地蔵が描かれている（第15図参照）。この板碑は昔から現在地に祀られていた訳でなく、何処からか移行してきたものという。その時期は明確にし得ないが幕末頃と伝えられている。元の場所についてははっきりした伝承がなく確認できない。

また、現在の小堂が建築されたのは新らしいとされる。

このミセンジョサンを男と女の神様という。石碑の梵字の縦線を男、その左側の字を女にみ



0 30cm

第16図 板 碑 拓 影

たてて解している。それから、腰下の神様、カサの神様ともいう。あるいは、イボ神、歯の神ともいわれている。そのなかでカサ、イボの神として著名である。カサの神としては遠方にまで知られており多くの参詣人を集めた。村外からの参詣人のほとんどは色街の女性であったといわれている。

ミセンジョサンがカサの神となったのは以前、この堂付近にカサにかかった女性が住みつき信心していたことによるとも伝えられる。このことについて堂の周辺地区で聞書をとったが、その範囲内では上記のような事実、伝承を聞くことはできなかった。

ミセンジョサンは祭日は決まっていない。正月と盆に花を供える程度である。祭りはムラ単位でなされる訳ではなく、付近の3軒が祀っているだけである。ただ、この3軒が講のような仕組みになっていて各戸が交代で祀るということでもないという。多忙な年はお供えもしないこともあったといわれる。

ムラ内の人々が参詣することはほとんどない。稀にはお詣りに行くことはあるが、それも付近の子安観音に行ったついでに立ち寄るという程度である。板碑をよく見ると乳がたれさがった絵が描かれているという。それでお詣りするのだという。但し、乳、あるいは子育てと関係あるとはいっていない。

ミセンジョサンに参詣する人はかならず小型の鉄製鳥居を奉納するならわしになっている。その理由については明らかでない。

以上、きわめて簡単にミセンジョサンの調査報告をしたが、以下いくつかの問題点を述べておきたい。

まず、この神様を地蔵様と呼ぶこともある点については石碑に描かれた地蔵像から発したと考えられる。ただ、現在の堂から南東方向に60メートル程離れた所に「ジゾウサンヤシキ（地蔵様屋敷)」と呼ばれる地がある。ここから五輪塔の破片等が出土している。この地に寺、堂のあったことが推定される。石碑もこの地から移した可能性が強い。地蔵様という呼び名もこの地に由来するものかも知れない。

それからミセンジョという名についてである。地元の人によってミセンジョ谷という表現がなされることはある。けれども、ミセンジョは字名でない。ミセンジョのある谷という意味で使われる。字名はノナカである。そうすると、付近に寺跡などの遺構の存在が推定され、また、この谷あいに小川が流れていることから考えると本来「身を清める」ということを意味する語であったのかもしれない。

(5) Ⅰ地区その他の中世遺物

ここでは中世の遺構以外から出土した中世の遺物を紹介したい。

第17図～第20図の1～36がそれである。

1は土製鍋の口縁部である。口径は20.6cmを測り、口縁部は内弯ぎみに直口し、2cm下に鍔状の凸帯をめぐらしている。把手部は残存していない。内外面とも横なでしている。胎土には

1㎜以下の砂粒を混入しており、色調は褐灰色を呈する。E－5区のⅣ層から出土した。

2～4は瓦質の擂り鉢である。

2は口径31.2㎝、高さ11.5㎝を測る。底部から口縁部へ直線的に開いている。外面は製作時の指の圧痕による凹凸が残っており、内面は刷毛目調整され、その上に5本単位の櫛目を間隔をあけてつけている。口縁部付近は内外面とも横なでしている。胎土は殆んど砂粒を含んでおらず、色調は緑灰色を呈し、須恵器に近い。C～8区の近世ピット中に混入していた。

3は口径33.7㎝を測る。内面と口唇部付近は横なでされており、外面もなでによる調整が行われているようである。内面には間隔をあけて縦方向に櫛目をつけている。胎土はいくぶん砂粒を含んでおり、色調は灰褐色を呈する。B－3区Ⅳ層から出土した。

4は擂り鉢の片口部の破片である。外面は縦方向の刷毛目、内面は横方向の刷毛目調整がみられる。口縁部は横なでされ、内面には櫛目を入れている。胎土には2㎜以下の砂粒が含まれており、色調は暗灰色を呈する。D－3区Ⅱ層から出土した。

5は瓦器の口縁部の破片で、こね鉢と推定される。口縁部はくの字形に折れ、口径24.5㎝を測る。内外面とも横なでされている。胎土は緻密で、微砂を含んでいる。色調は灰～灰白色を呈し、口縁部外面は灰色の釉がかけられているようでもある。B－3区のⅡ層から出土した。

6は甕の口縁部の破片である。口縁部は短く外反し、口径は20.1㎝を測る。肩部には格子目叩きがみられ、口縁部は横なでされている。内面の一部には接合線がみられる。胎土は割合緻密で、1㎜程度の砂粒が少しみられる。色調は淡灰褐色を呈する。D－3区Ⅱ層から出土した。

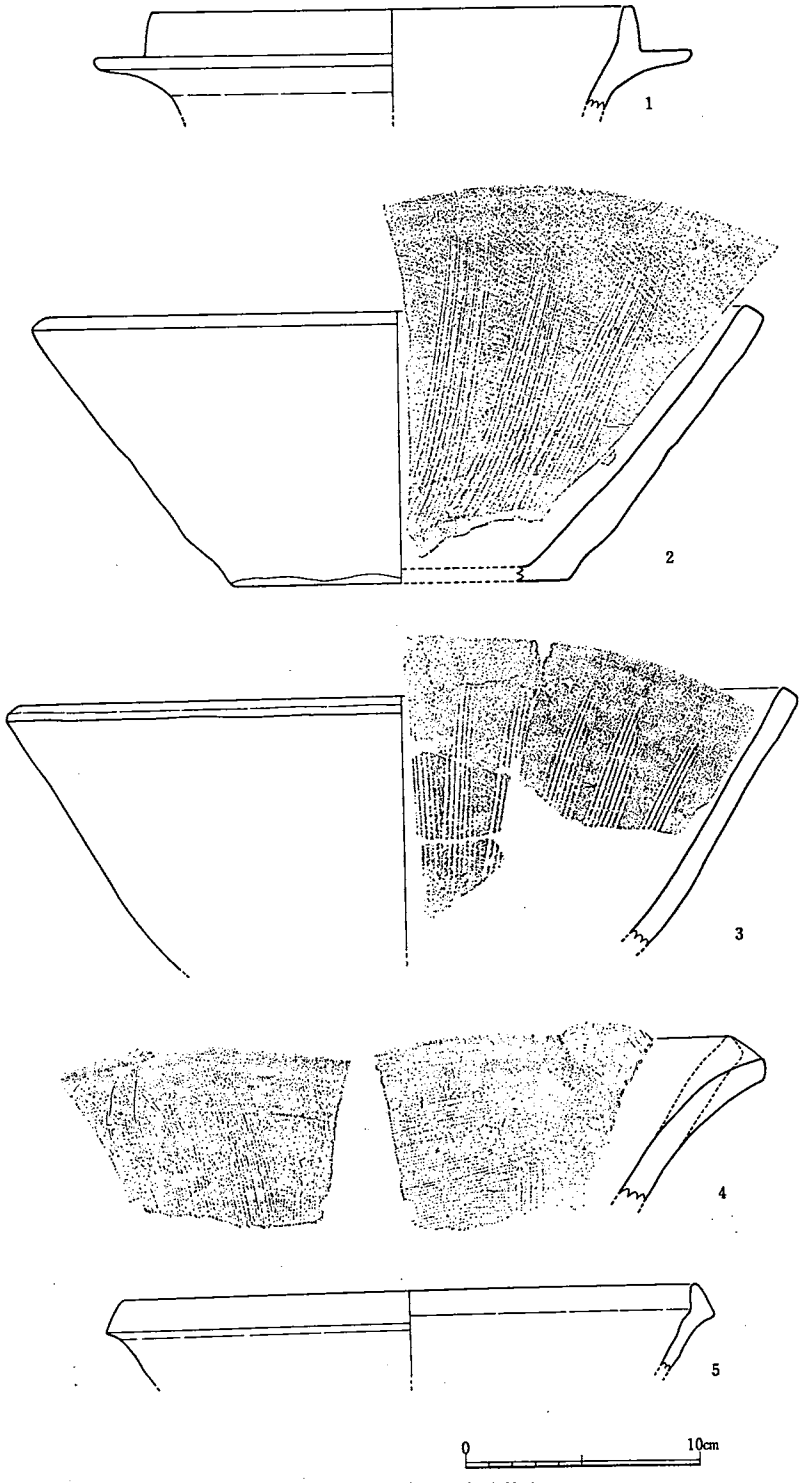
7～9は瓦器火舎の破片である。

7と8は口縁部付近の破片である。ともに口縁部の破片で、直口し、口縁部は肥厚し、その下方に凸帯をめぐらしている。口縁部と凸帯の間には菊花文のスタンプを施している。内外面とも横なでされ、外面はその上を研磨してある。胎土は緻密であるが、7には1㎜以下の砂粒をわずかに含んでいる。7は口径33.1㎝を測り、橙色を呈する。E－9区から出土した。8は口径34.2㎝を測り、色調は明黄褐色を呈する。B－6区の近世ピット中から出土した。

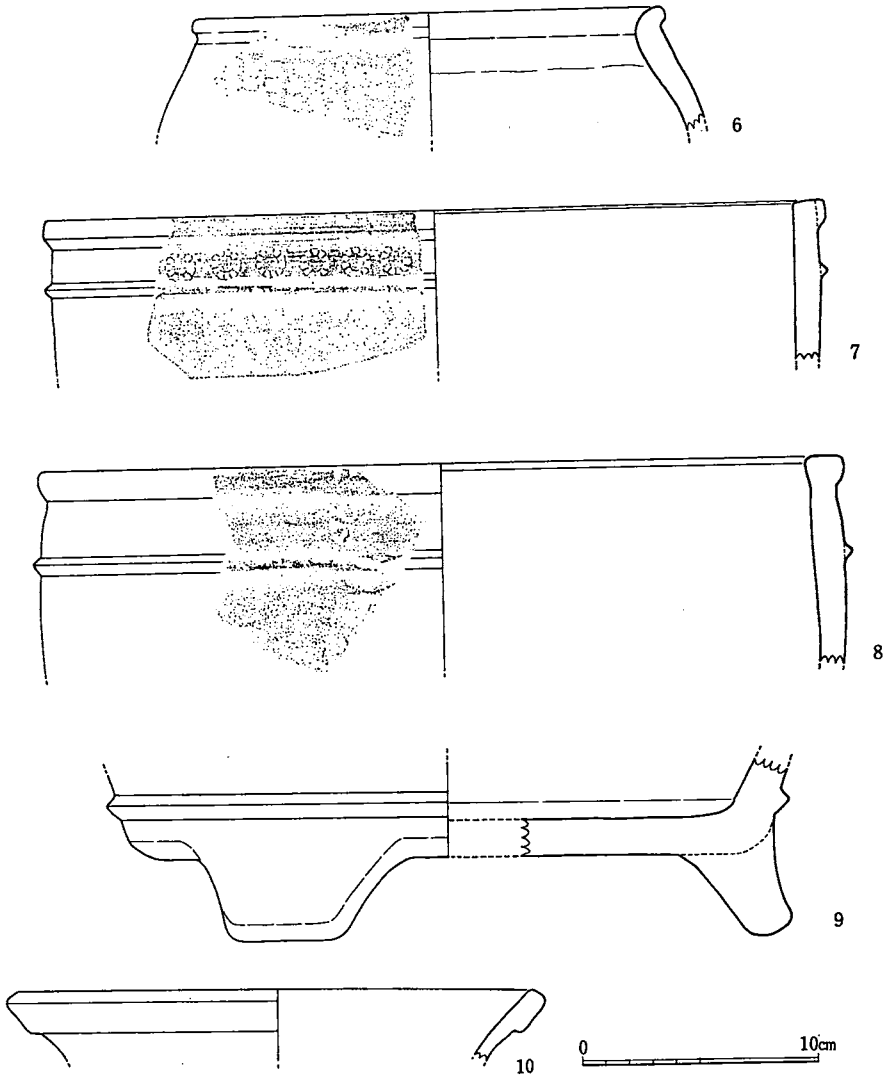
9は火舎の底部の破片で、底面積は約25㎝である。底面から斜め外方に脚がつけられ、脚は3カ所につけられていたものと推定される。胴部下端には凸帯がめぐっている。全面よくなでられている。胎土は割合緻密で、2㎜以下の砂粒をところどころに含んでいる。色調は灰色を呈する。D－2区から出土した。

10は須恵器の壺の口縁部である。古墳時代のものとみられるがここで紹介しておきたい。口縁部は外反し、肥厚している。内外面とも横なで調整されており、口径は22.9㎝を測る。胎土は割合緻密であるが1㎜以下の砂粒を含んでいる。色調は灰色を呈する。B－3区Ⅱ層から出土した。平原古墳に伴うものが流れて来たものであろうか。

11～20は土師質糸切底の皿である。いずれも胎土は緻密で、色調は黄橙色を呈する。内外面



第17図　Ⅰ地区その他の中世遺物実測図(1)



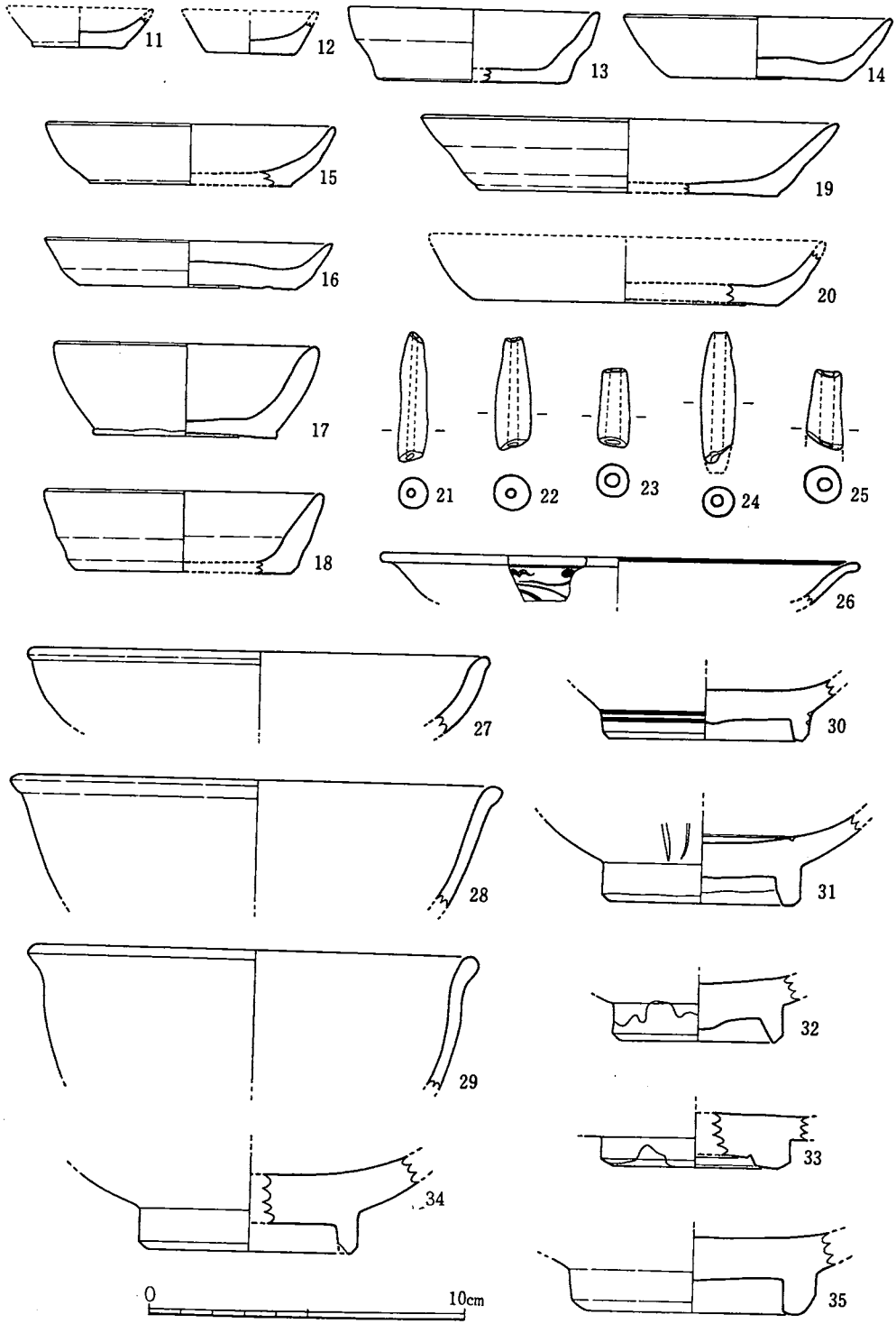
第18図　Ⅰ地区その他の中世遺物実測図(2)

とも横なでされている。

11、12はいずれも小形で、口縁部を欠損しているが、口径4.5cm前後で、高さ1.3cm程度と推定される。11はB－3区Ⅳ層から出土し、12はC－3区から出土した。

13～18は口径8～9cmを測る皿である。高さは最も低い16が1.5cmで、最も高い17が2.9cmを測る。厚手も薄手もみられる。出土地点は13がD－3区Ⅰ層、14、15がB－3区Ⅳ層、16がD－6区近世ピット中に混入、17がD－2区、18がB－5区近世ピット中に混入していた。

19、20はやや大形の皿である。19は口径13.1cm、高さ3.3cmで、20は口縁部を欠損しているが口径12.5cm、高さ2.0cmであると推定される。ともに薄手である。19はB－2区Ⅱ層から、



第19図　Ⅰ地区その他の中世遺物実測図(3)

20はB－3区Ⅳ層から出土した。

21～25は土師質の土錘である。いずれも胎土は緻密で、色調は橙色ないし淡黄色を呈する。21は最大径0.9cm、長さ4.0cmを測り、E－8区の近世ピット中に混入していた。22は最大径1.2cm、長さ3.5cmを測り、F－9区から出土した。23は最大径1.0cm、長さ2,4cmを測り、B－6区の近世ピットの中に混入していた。24は最大径1.1cmで一部欠損しているが長さ4.1cm程あったものと思われる。B－2区Ⅳ層から出土した。25も欠損しており、最大径1.2cm、現存長2.5cmである。E－9区から出土した。

26は明代の染付唐草文皿の破片である。口縁部はゆるやかに外反し、端部は丸く収まっている。口径は15.2cmを測る。胎土は白色で、口縁部の内外に一条の線、外面はその下に唐草文が描かれている。染付は濃紺色で、内外面とも青みを帯びた透明の釉薬がかけられ、細かい嵌入がみられる。B－2区のⅡ層から出土した。なおこの皿と同じ染付の皿が熊本県下益城郡松橋町の竹崎城跡から出土している。（熊本県教育委員会「竹崎城」昭和50年に所収）

27～35は明代の青磁器の破片である。

27は皿の口縁部破片で、やや厚手であり、体部は丸く、口縁部は外反ぎみで丸く収まっている。口径は14.6cmを測る。胎土は灰白色で、内外面とも薄緑色の釉薬がかけられている。E－9区から出土した。

28、29は碗の口縁部の破片である。ともに口縁部は外反ぎみで外側に肥厚する。

28は口径15.6cmを測る。胎土は灰色で、内外面とも薄緑色の釉薬がかけられている。E－9区から出土した。

29は口径14.3cmを測る。胎土は白色で、内外面とも薄緑色の釉薬がかけられている。C－1区から出土した。

30～35は青磁碗又は鉢の底部である。

30は胎土は灰白色で、高台部外面に二条の沈線を施し、見込部に印花を施している。高台部内側を除いて薄緑の彩薬がかけられている。C－1区Ⅰ層から出土した。

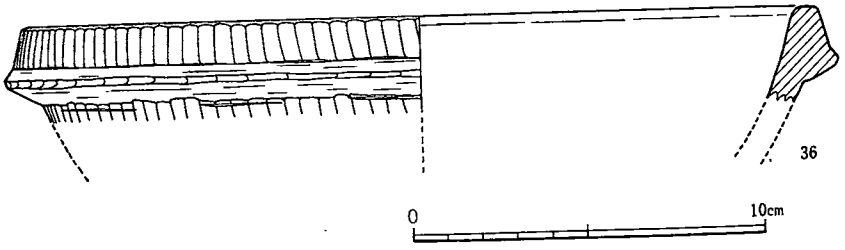
31は胎土は白色で、見込部に一条の沈線とその内に印花がみられる。体部には蓮弁文が刻まれ、高台部内側を除いて薄緑色の彩薬がかけられている。D－4区Ⅰ層から出土した。

32、33は胎土が灰色で、薄緑色の彩薬がかけられているが、高台部畳付とその内側にはかけられていない。ともにB－2区Ⅱ層から出土した。

34は胎土が灰色で、高台部内側中央部の一部を除いて薄緑色の釉薬がかけられている。B－2区Ⅱ層から出土した。

35は大きな高台で、胎土はやや粗く灰色を呈する。釉薬は深緑色で厚くかけられているが、高台部内側に一部かかっていない。B－2区Ⅳ層から出土した。

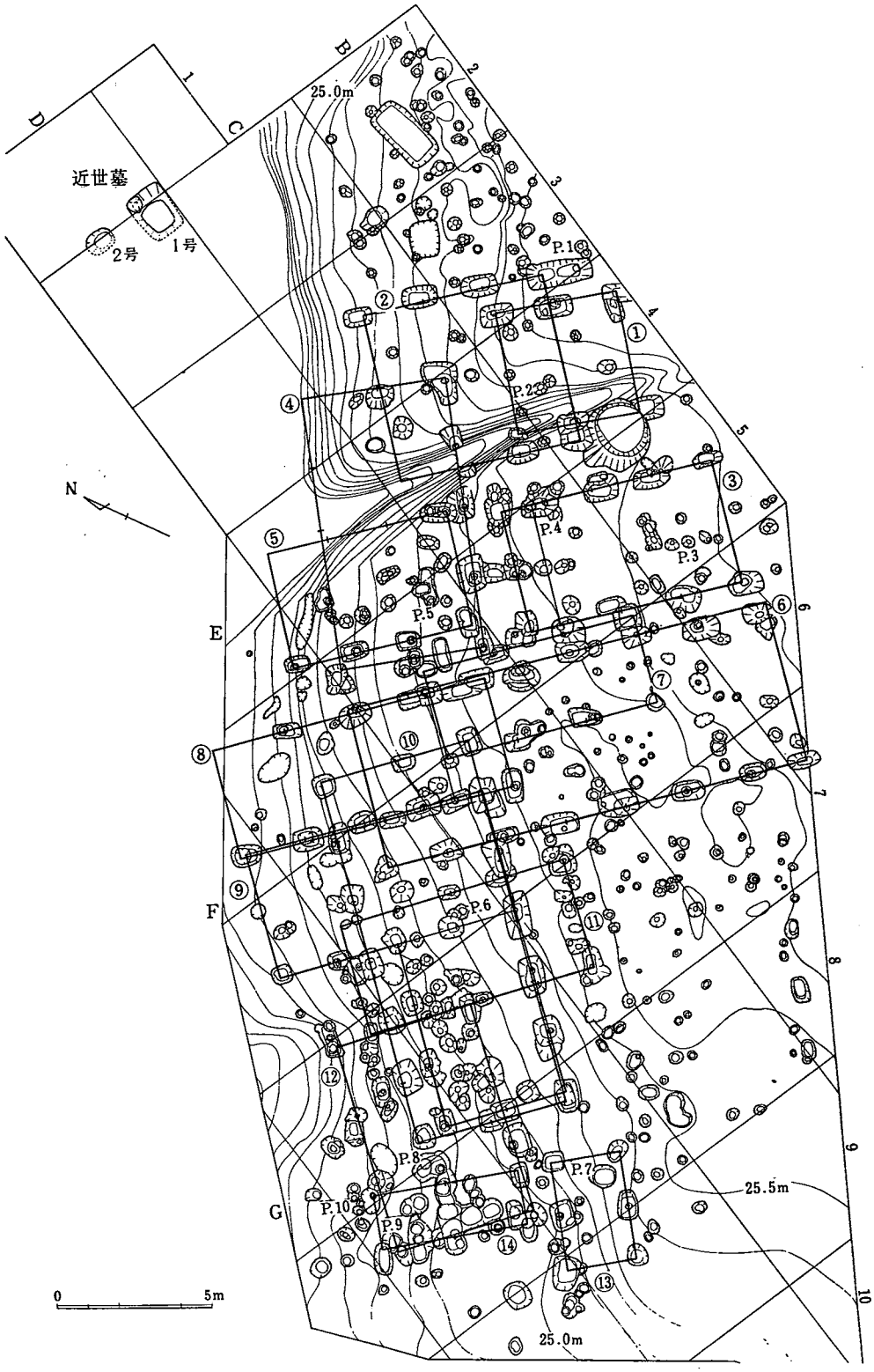
36は滑石製石鍋の口縁部破片である。口径は22.7cmを測り、 1.5cm下方に凸帯を造り出している。凸帯は研磨されているが、その上下には縦方向に整然とした削り痕がみられる。口唇部



第20図　Ⅰ地区その他の中世遺物実測図(4)

から内面にかけてはよく研磨されている。なお外面にはすすが付着している。B－2区Ⅱ層から出土した。

ここで紹介した遺物は第18図10の古墳時代のものとみられる須恵器を除いて、すべて室町時代のものと推定される。そして本来これらは建物など室町時代の遺構にともなっていたものとみることができる。



第21図　Ⅰ地区近世遺構分布図

3. 近世の遺構と遺物

(1) ピット群

ピットのうち、円形のものの殆んどは中世の柱穴とみられたが、長方形のものは出土する遺物の検討から近世の柱穴用掘りかたとみられた。以下Ⅰ地区において14棟の建物を復原できたので、いくぶんの誤りもあるかもしれないが、各々について述べ、時期の決定をするとみられるピット内出土の近世陶磁器を紹介したい。

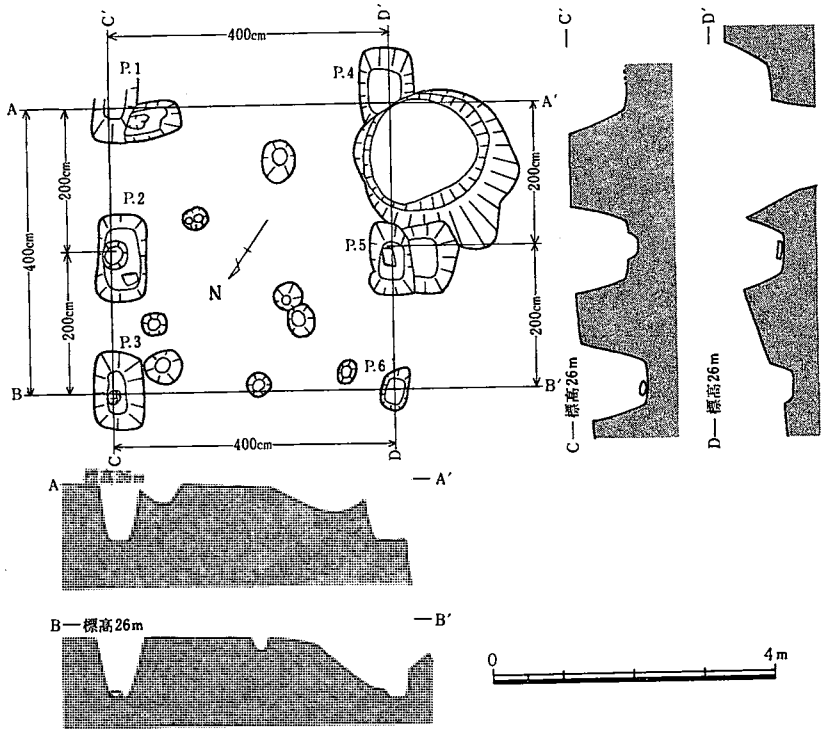
（イ） Ⅰ—①建物（第22図）

Ⅰ地区の東端にあたるB—4区を中心にB—3区、C—4区にかけてある建物である。ピットの大きさはほぼ70cm×150cmを測る。主軸をN—35度—Wにとり、400cm×400cmの正方形の建物で、200cmを1間とし、東側と西側に2間分3本の柱が立つ。北と南の両側は2間分の距離があるが間にはピットはみられない。柱の高さを調節したためであろうか。p. 2は柱痕部を掘り下げており、p. 3とp. 5は逆に敷き石がみられる。

この建物はⅠ—②建物と重複している。ピット内から近世の遺物は出土していないが、他と同じく近世の建物とみられる。

（ロ） Ⅰ—②建物（第23図）

Ⅰ地区の東側、Ⅰ—①建物より少し北にずれた位置のB・C—3・4区にある建物である。



第22図 Ⅰ—①建物復原図

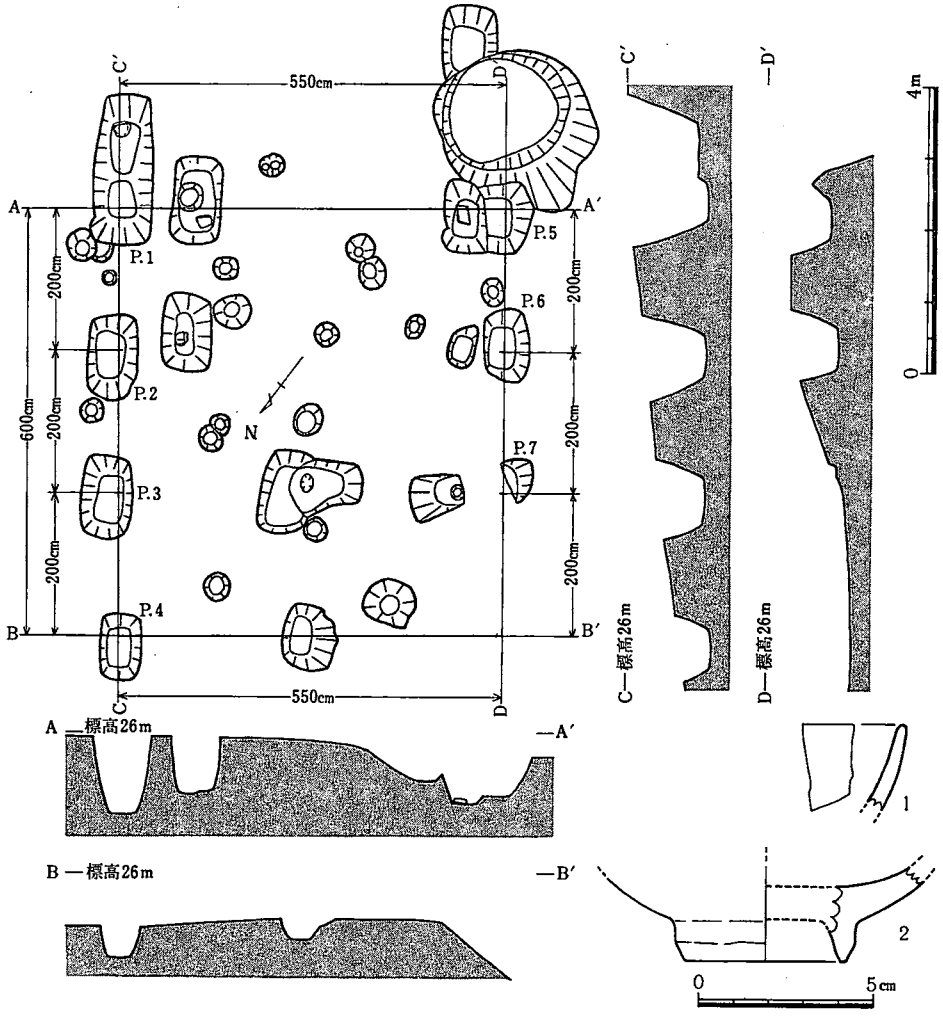
ピットの大きさは70cm×100cm前後である。550cm×600cmの建物で主軸をN—37度—Wにとる。東側のピットは200cmを1間とした3間分のピットが並び、西側は p. 7 の一部とその北のピットは山道のため後世に削られているが、平行して200cm間隔で並んでいる。 北側と南側は3間近くあるが中間にはピットを掘っていない。なお北側の中間にあるピットはⅠ—④建物のものである。

この建物はⅠ—①建物とⅠ—④建物と重複して建てられている。

なお p. 6 と p. 7 から近世の陶磁器が出土した。

第23図1は p. 6 から出土した口縁部の小破片で、口縁部は直口する。胎土は白色で、釉薬は透明で全面にかけられ、美しく光っている。古伊万里白磁片で、江戸中期のものであろうか。

第23図2は p. 7 から出土したもので、鉢の高台部付近の小破片であるが、献上唐津手鉢である。胎土はきめが細かく肌色で、釉薬は透明であるが黄灰色を発し、 全面にかけられてい



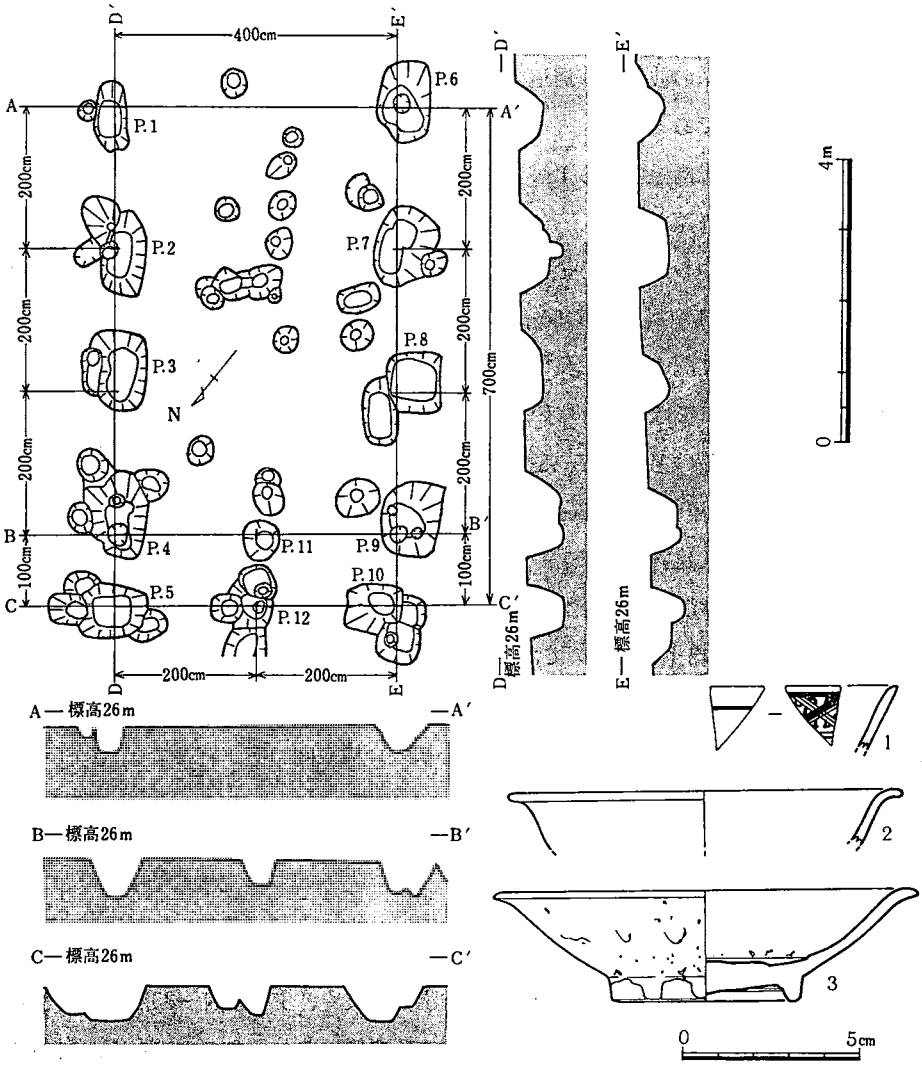
第23図　Ⅰ—②建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

る。器面には小さな嵌入がみられる。江戸前期の作である。

以上の遺物からⅠ—②建物は江戸中期頃のものと推定される。

（ハ）　Ⅰ—③建物（第24図）

Ⅰ地区の中央からやや東寄りのB・C—5区を中心とし、C—4区とB・C—6区にかけた位置にある建物である。ピットは70cm×110cm程度の長方形のものが多いが、80cm×80cm程度の方形に近いものもある。南北に長い長方形の建物で主軸をN—39度—Wにとる。東西は2間分の400cm幅があり、南北には1間200cmとした3間分のピットが並び、さらに半間の100cmのところにピットがあるところから南北は3間半の700cmの建物を復原することができる。北側のp. 4とp. 9およびp. 5とp. 10の中間の位置にピットがあるが、ピットの規模が小さいのでこの建物のものであるかどうかわからない。



第24図　Ⅰ—③建物復原図とそのピット出土遺物実測図

Ⅰ—③建物は他の復原できた近世の建物との重複はみられない。

この建物の p. 3 と p. 7 および p. 10から近世の陶磁器が出土した。

第24図1は p. 3から出土した。小破片であるが直線的に開く口縁部をもつ古伊万里染付皿である。胎土は白色で、外面は一条の直線のみであるが内面には繊細な文様が描かれている。釉薬は全面にかけられており、透明であるが美しい色をしている。江戸中期の作である。

第24図2は p. 7 から出土したものである。口径11.2cmを測る口縁部の破片で、2片出土しているが同一個体である。口縁部は外反し、端部はまるくなって終っている。胎土は白色で、釉薬は透明で全面にかけられており美しく光っている。古伊万里小皿片で、江戸前期の作である。

第24図3は p. 10から出土したもので、口径12.0cm、高さ2.2cmを測る皿である。口縁部は外反ぎみで、高台は削り出している。胎土は肌色で、釉薬は緑乳白色である。釉薬は内外ともかけられているが、高台部にはかけられず、また見込みは蛇目釉がみられる。体部外面には気泡がみられる。古伊万里系の波佐見窯周辺で作られたもので、唐津物から磁器への移行期のものであり、江戸初期の作である。

以上のピット出土近世陶磁器からⅠ—3建物は江戸中期頃のものと推定される。

（ニ） Ⅰ—④建物（第25図）

Ⅰ地区の中央近く、やや北東寄りのC・D—3～5区にかけた位置にある建物である。ピットは90cm×120cmある大形のものから50cm×70cmぐらいのものまである。 主軸をN—57度—Eにとる南北2間、東西4間の東西に長い総長475cm×875cmの建物と推定されるが、北側の柱3本分のピットは削平されて確認できないことと、柱穴の間隔が異なるところがあることが難点である。この復原を正しいとすれば、長辺4間の柱の間隔はおおむね225cmで、 東から2間目のみは200cmとなり、短辺2間は225cmと250cmということになる。

この復原建物はⅠ—②建物およびⅠ—⑤建物と重複している。

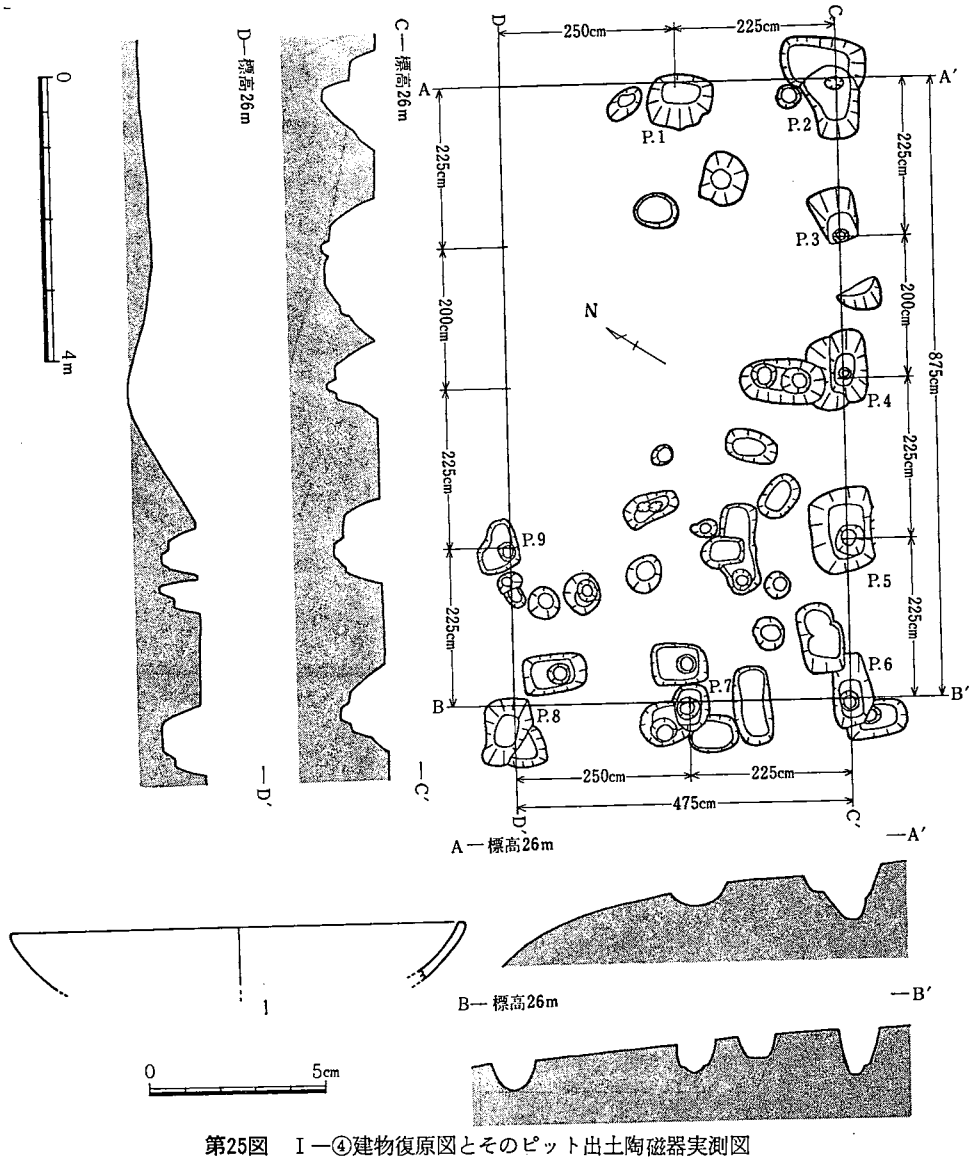
Ⅰ—④建物の p. 8 から近世陶磁器が出土している。

第25図1が p. 8 から出土したものである。口径13.0cmを測る古伊万里の皿の口縁部破片で、口縁部は立ち上がりぎみで、口唇部は平たくなっている。胎土は白色を呈し、釉薬は透明で、内外ともかけられている。外面には器面調整時の細かい横方向の筋が観察できる。江戸前期ないし中期の作である。

このピット出土遺物よりⅠ—④建物の時期は江戸中期頃とみられる。

（ホ） Ⅰ—⑤建物（第26図）

Ⅰ地区の中央部近く、いくぶん北東寄りのC・D・E—4区からC・D—5区にある建物である。ピットの大きさは60cm×90cm前後である。南北に長く、主軸をN—38度—Wにとる。西側はほぼ200cmを1間として3分間600cmあり、対する東側は北から3つのピットが削平されているが、残る1つのピットから復元すれば幅は約2間分380cm程である。



第25図　Ⅰ—④建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

この建物はⅠ—④建物と重複している。

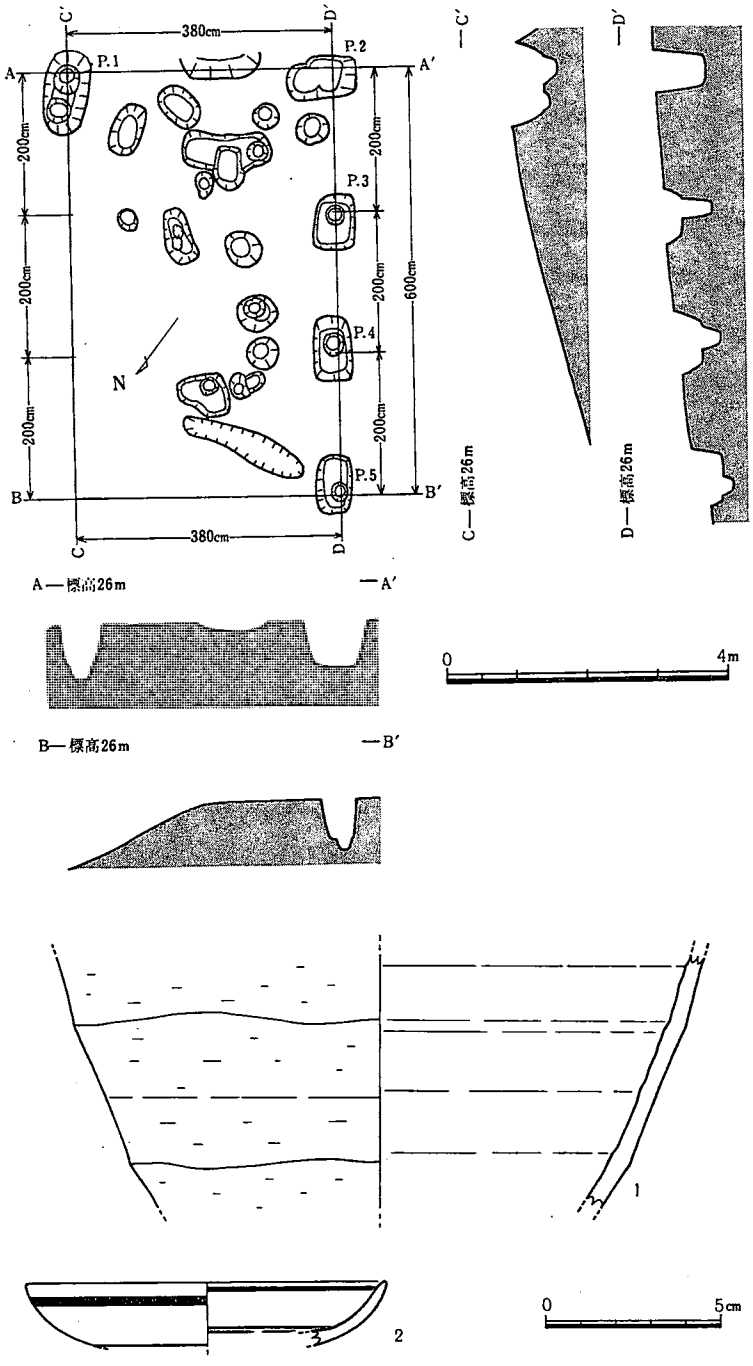
Ⅰ—⑤建物の p. 2 と p. 4 から近世陶磁器が出土した。

第26図1は p. 4 から出土したもので、胎土は赤褐色で、器面の外側はヘラ削りした上に黄灰色の灰釉をかけている。武雄系の黒牟田かと思われる灰釉壷の一部である。

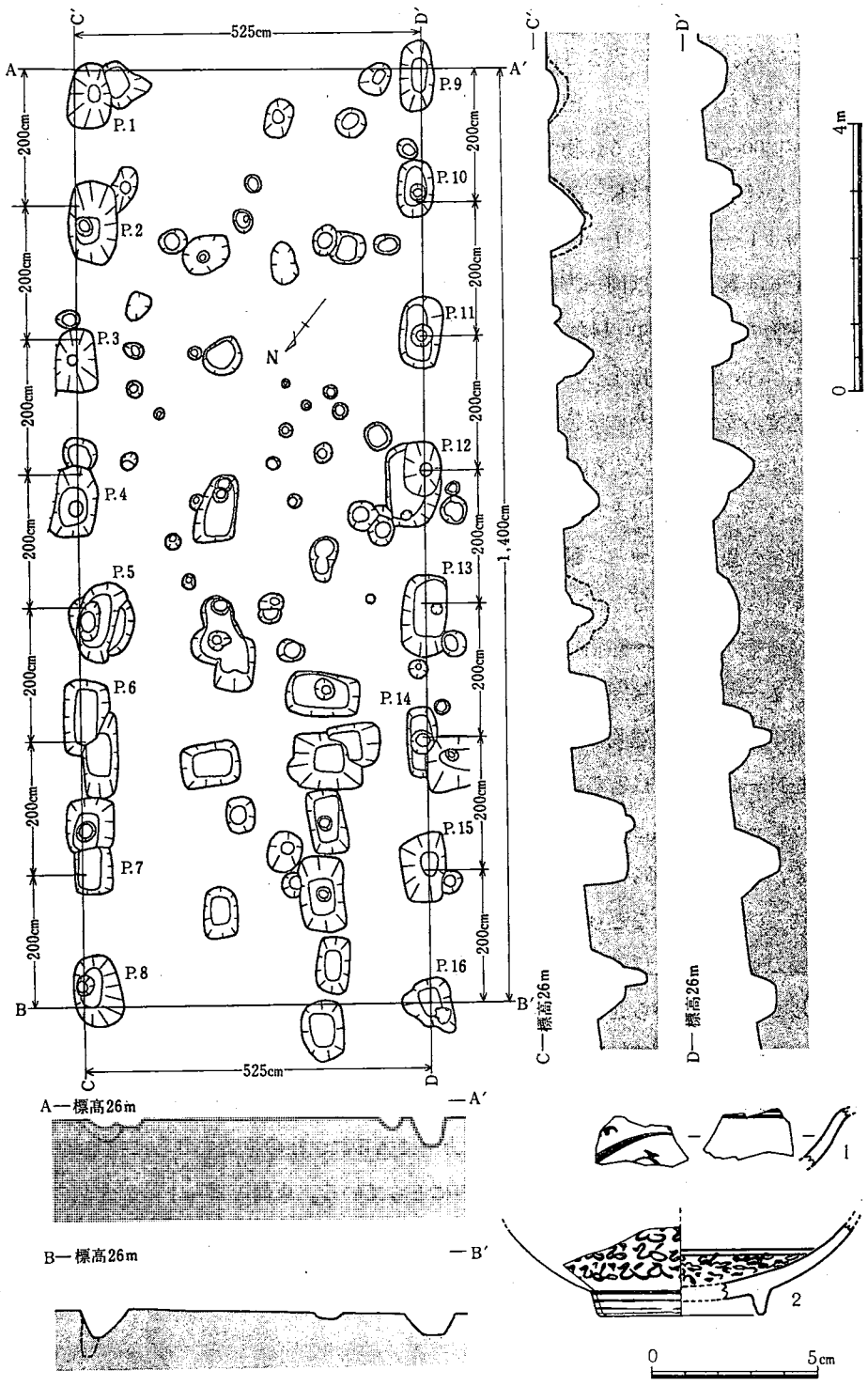
第26図2は p. 2 から出土した古伊万里染付皿の破片で、口径は10.4cmを測る。胎土は白色で、濃紺色の横線が口縁部近くの内外面と見込み部および高台部にみられ、釉薬はわずかに青みを帯びた透明で、器面には細かい嵌入がみられる。江戸中期のものである。

以上の遺物からⅠ—⑤建物の時期は江戸中期頃と推定される。

（へ）　Ⅰ—⑥建物（第27図）



第26図　Ⅰ—⑤建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図



第27図　Ⅰ—⑥建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

Ⅰ地区の中央部から山側にのびており、B－6・7区、C－5・6・7区、D・E－5・6区にわたっている。ピットの大きさは60cm×80cmないし70cm×120cm程度ある。柱の間隔は一定せず若干ずれるものもあるが、割合整然とした西側ピット列により復原すれば、1間を200cmとした7間1400cmの長さある建物が想定され、幅は約2間半の525cmを測ることができる。ほぼ南北に長い建物で主軸はN－39度－Wにとっている。

この建物はⅠ－⑦建物、Ⅰ－⑧建物、Ⅰ－⑨建物と重複しており、先述のⅠ－②建物、Ⅰ－③建物、Ⅰ－⑤建物とほぼ同一方向をとっている。

Ⅰ－⑥建物の p. 9 と p. 14から近世陶磁器が出土した。

第27図1は p. 9 から出土したもので、古伊万里染付草花文碗の口縁部近くの破片である。胎土は白色であるがわずかに灰色を帯びている。口縁部内側に濃紺色の二条の横線、外面に草花文の染付が施されている。釉薬は透明であるが青みを帯びている。江戸中期の作である。

第27図2は p. 14から出土したものである。古伊万里染付唐草文鉢で、胎土は白色で染付は鮮やかな紺色が使われている。釉薬は透明であるがやや青みを帯びており、美しく光っている。高台は割合低く、畳付の部分のみは釉薬がみられない。江戸中期～後期の作とみられる。

これらの遺物からⅠ－⑥建物は江戸中期ないし後期にかかる頃の建物とみられる。

（ト）　Ⅰ－⑦建物（第28図）

Ⅰ地区の中央部にある建物である。C・D－5・6区にわたっている。ほぼ南北に長い建物で、主軸をN－40度－Wにとる。ピットは50cm×80cm前後であるが40cm×60cm程度の小形のものもある。ピットは整然と並び、南北には1間を235cmとして3間分705cmあり、東西は1間より少し広く、290cmを測る。この建物はⅠ－⑥建物、Ⅰ－⑧建物、Ⅰ－⑩建物と重複しており、Ⅰ－③建物とは同一方向をとり接している。

この建物のピットからは近世の遺物が出土しなかったが、ピットの形状や建物の方向が他の建物と同じであることから近世の建物とみることができる。

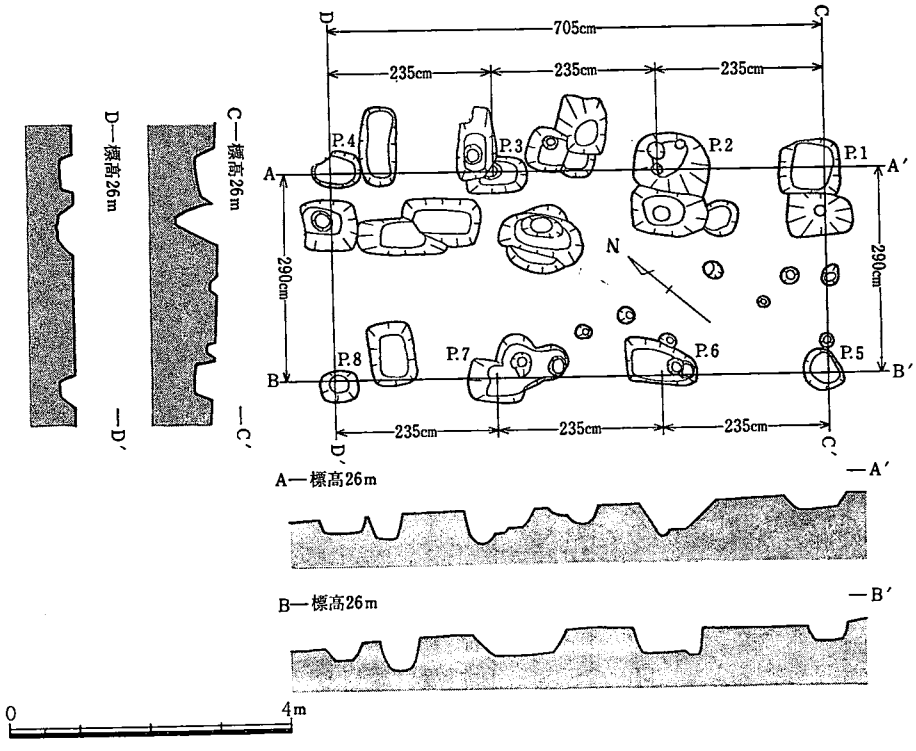
（チ）　Ⅰ－⑧建物（第29図）

Ⅰ地区の中央部にある建物で、いくぶん平野側へのびており、D・E－5・6区およびF－5区にある。ピットは70cm×100cm前後の長方形に掘られ、柱の位置をさらに掘り窪めている。建物はほぼ南北に長く、主軸をN－39度－Wにとっている。東側のピット列の北端の1つは削平されているが、他のピットから1間を240cmとする3間×1間半つまり720cm×360cmの建物が復原でき、また南方に195cm離れた所にあるピットもこの建物のものであるとすれば、全長915cm×360cmであったとみられる。

この建物はⅠ－⑥建物、Ⅰ－⑦建物、Ⅰ－⑩建物と重複しており、Ⅰ－⑨建物とも重複または接して建てられているが、これらの重複した建物とは主軸をほぼ同じにとっている。

このⅠ－⑧建物の p. 1 と p. 4 から近世陶磁器が出土した。

第29図1は p. 4 から出土したものである。口径10.4cmを測る古伊万里白磁小皿の口縁部の



第28図　Ⅰ－⑦ 建 物 復 原 図

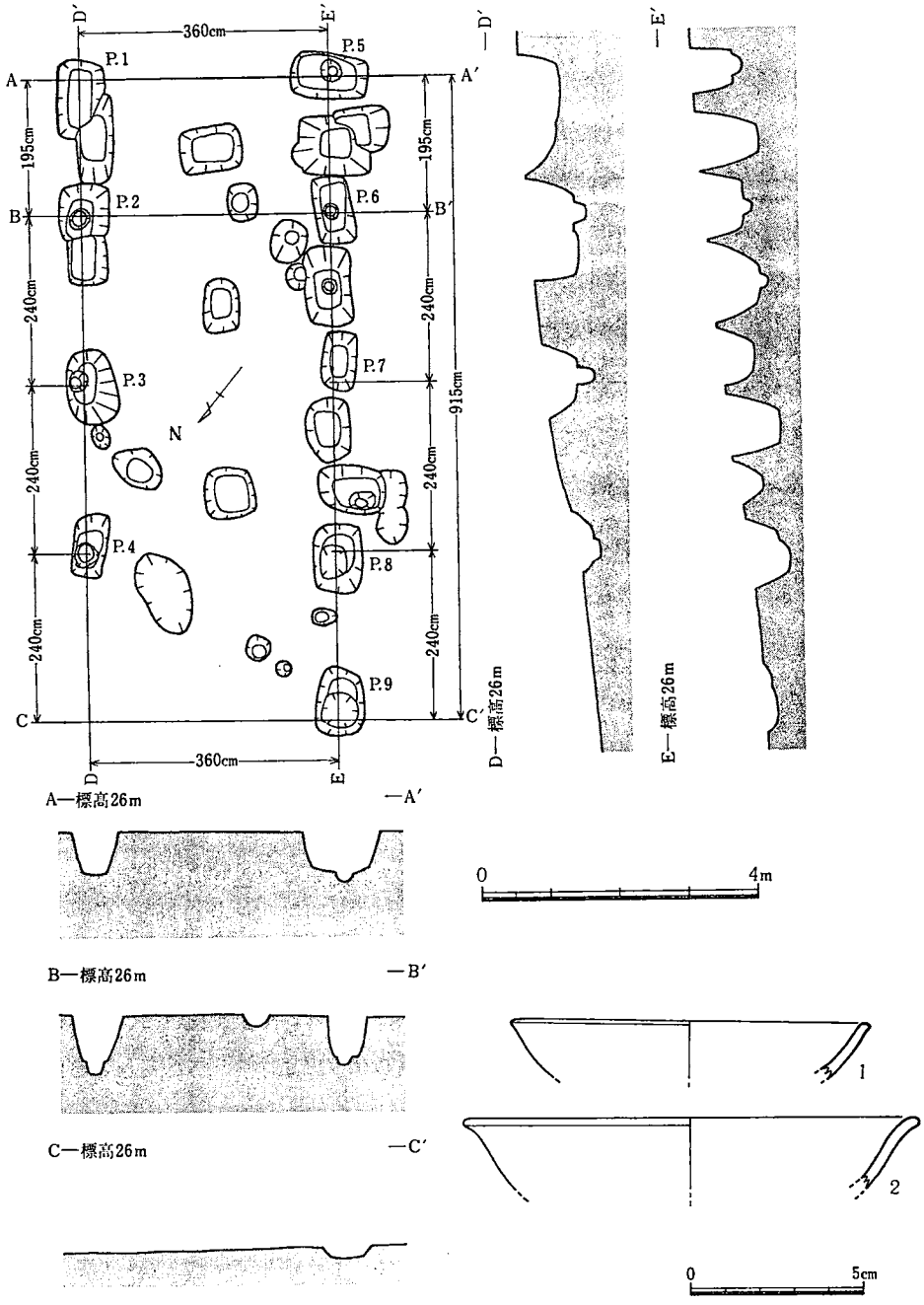
破片である。口縁端部がわずかに外反ぎみになっている。胎土は白色で、内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸時代中期の作とみられる。

第29図2は p. 1 から出土したものである。口径13.2cmを測り、口縁部はやや外反し、端部が丸くおさまった美しい形をした古伊万里白磁皿の破片である。胎土は白色で、釉薬は透明で内外面ともかけられている。江戸前期～中期の作であるが丁寧に作られているところから前期の作である可能性が強い。

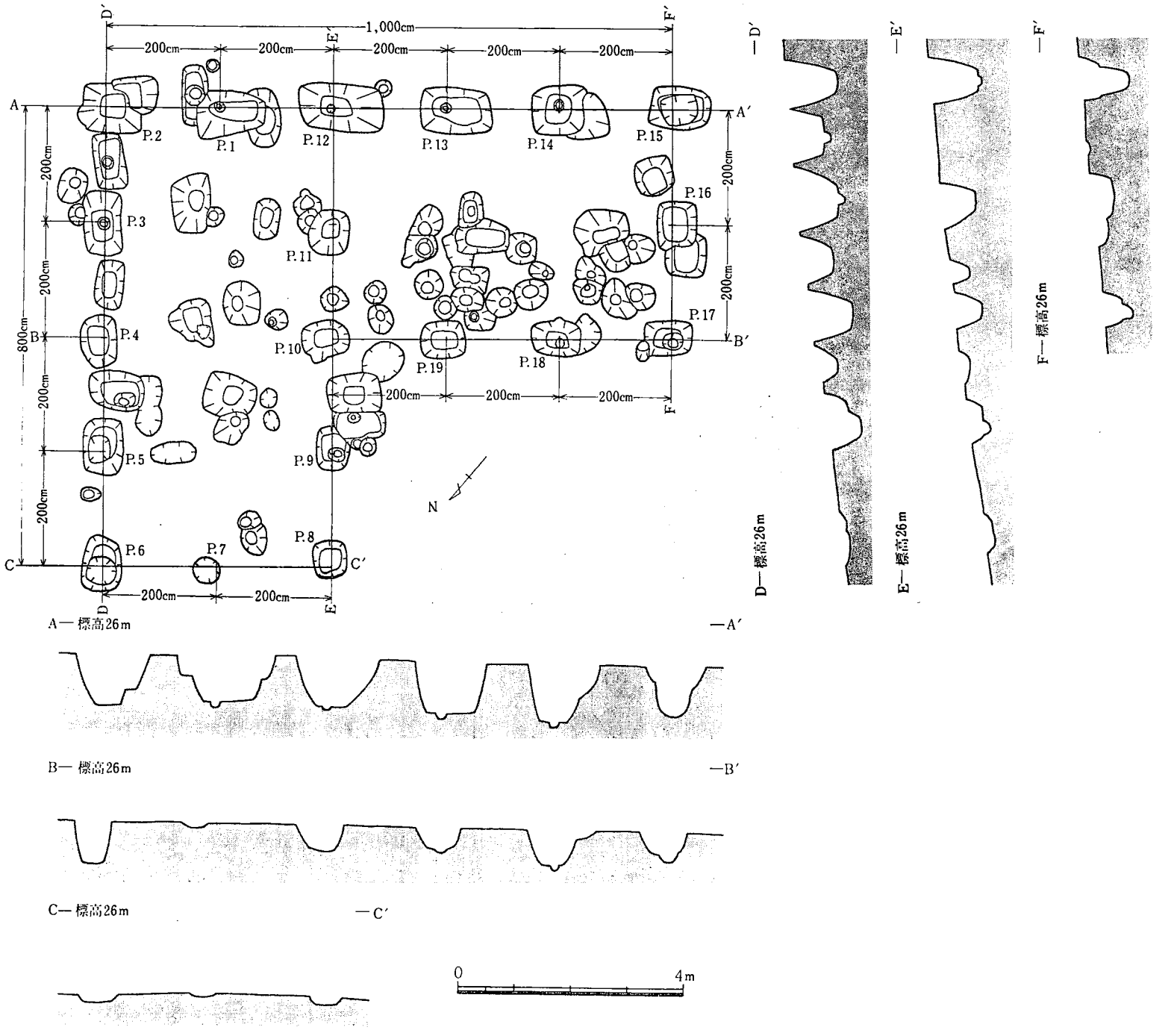
これらの遺物からⅠ—⑧建物は江戸中期頃の建物とみられる。

（リ） **Ⅰ—⑨建物**（第30図）

Ⅰ地区の中央部近くのいくぶん西寄りにあり、D－6・7区、E－5～8区、F－5～7区にわたっている大きな建物である。南北に長い建物に東西に長い建物を接続した。平面プランがL字形になった曲り家とみられる。各ピットの大きさは60cm×90cm前後である。南北に長い部分は主軸をN—41度—Wにとり、1間を200cmとし、東西2間400cm、 南北4間800cmとする建物が復原できる。東西に長い部分は南北に長い部分の南側に接続し、直角方向に幅2間 400cmで3間600cm延びている。従って接続した建物の長さは南北4間800cm、東西5間1000cmを測る曲り家となる。



第29図　Ⅰ—⑧建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図



第30図　Ⅰ－⑨建物復原図

この建物はⅠ—⑧建物、Ⅰ—⑩建物、Ⅰ—⑪建物、Ⅰ—⑫建物と重複している。

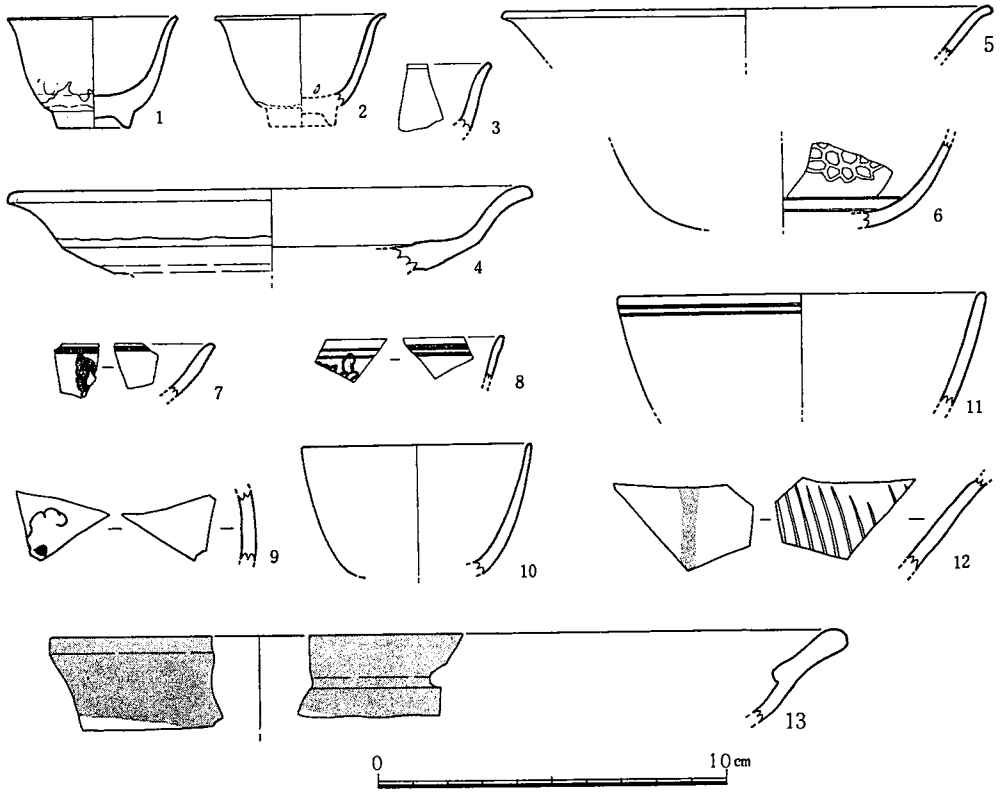
このⅠ—⑨建物の p. 1、p.2、p. 9、p. 12、p. 13、p. 14、p. 18、p. 19から近世陶磁器が出土した。

第31図1は p. 13から出土した古伊万里白磁酒盃である。口径4.8cm、高さ3.1cm測り、口縁部はいくぶん外反し、高台部は削り出している。胎土は白色で、緑乳白色をおびた透明の釉薬がかけられているが、高台部付近のみは、かけられていない。江戸前期の作である。

第31図2は p. 12から出土したもので、1と同じく古伊万里白磁酒盃の破片である。口縁部は外反し、口径4.8cmを測る。胎土は白色で釉薬は灰色をおびた透明でほぼ全面にかけられるが、高台部付近はかけられていない。江戸前期の作とみられる。

第31図3は p. 13から出土したもので、これも古伊万里白磁酒盃の口縁部の破片である。口縁部はわずかに外反する。胎土は白色で、内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸前期〜中期の作とみられる。

第31図4は p. 19から出土した。高台部付近は欠損しているが口径15.0cmを測る古伊万里蛇目刳飴釉皿である。体部の下方は削りがみられ、体部の途中で陵をつけ口縁部は外反している。内面から外面の体部上方にかけて緑をおびた灰色の釉薬がかけられている。波佐見窯で焼かれ



第31図　Ⅰ—⑨建物のピット出土陶磁器実測図

たもので、江戸中期の作である。

第31図５は p. 1 から出土した。古伊万里磁器片で碗かと思われる。薄手で口縁端部は外反ぎみで口径13.9cmを測る。胎土は黄灰色で、内外とも透明の釉薬がかけられている。平戸系の古い方と思われ江戸前期の寛文～元禄年間頃の作とみられる。

第31図６は p. 2 から出土したものである。古伊万里系の皿または碗の破片である。胎土は白色で、内面に花の陰刻を入れ、見込みに青色の線の染付をして、やや青みをおびた透明の釉薬をかけている。外面にも透明の釉薬をかけている。有田の百間窯のものである可能性もある。

第31図７は p. 13から出土したもので、古伊万里染付皿の口縁部の小破片である。口縁端部近くに内外とも横線の染付があり、外面には文様もある。胎土は白色で、染付は鮮やかな藍色を呈しており、やや青みをおびた透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作とみられる。

第31図８は p. 19から出土したもので、古伊万里染付小碗の口縁部破片である。胎土は白色で、内面に二条の線、外面に二条の線と文様の濃紺色の染付がみられる。釉薬は透明で、美しく光っている。作り、染付とも丁寧である。江戸中期の作である。

第31図９は p. 18から出土した。小破片であるが、外面にのみ染付と釉薬がみられる古伊万里染付草花絵瓶である。胎土は灰白色で、染付は黒藍色で、透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。

第31図10は p. 14から出土した。口縁部が直口ぎみの酒盃で、口径は6.6cmを測る。 胎土は白色で天草石を使用しているが古伊万里ではない。器面に整形のろくろ目がみられる。内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。

第31図11は p. 13から出土したものである。口縁部の破片で、口縁部は直口ぎみで口径10.4cmを測る碗である。胎土は白色で、藍色の二条の線の染付があり、やや青みを帯びた透明の釉薬がかけられている。器壁には嵌入がみられる。天草石を使用しており、天草郡苓北町の内田皿山で焼かれたものとみられる。

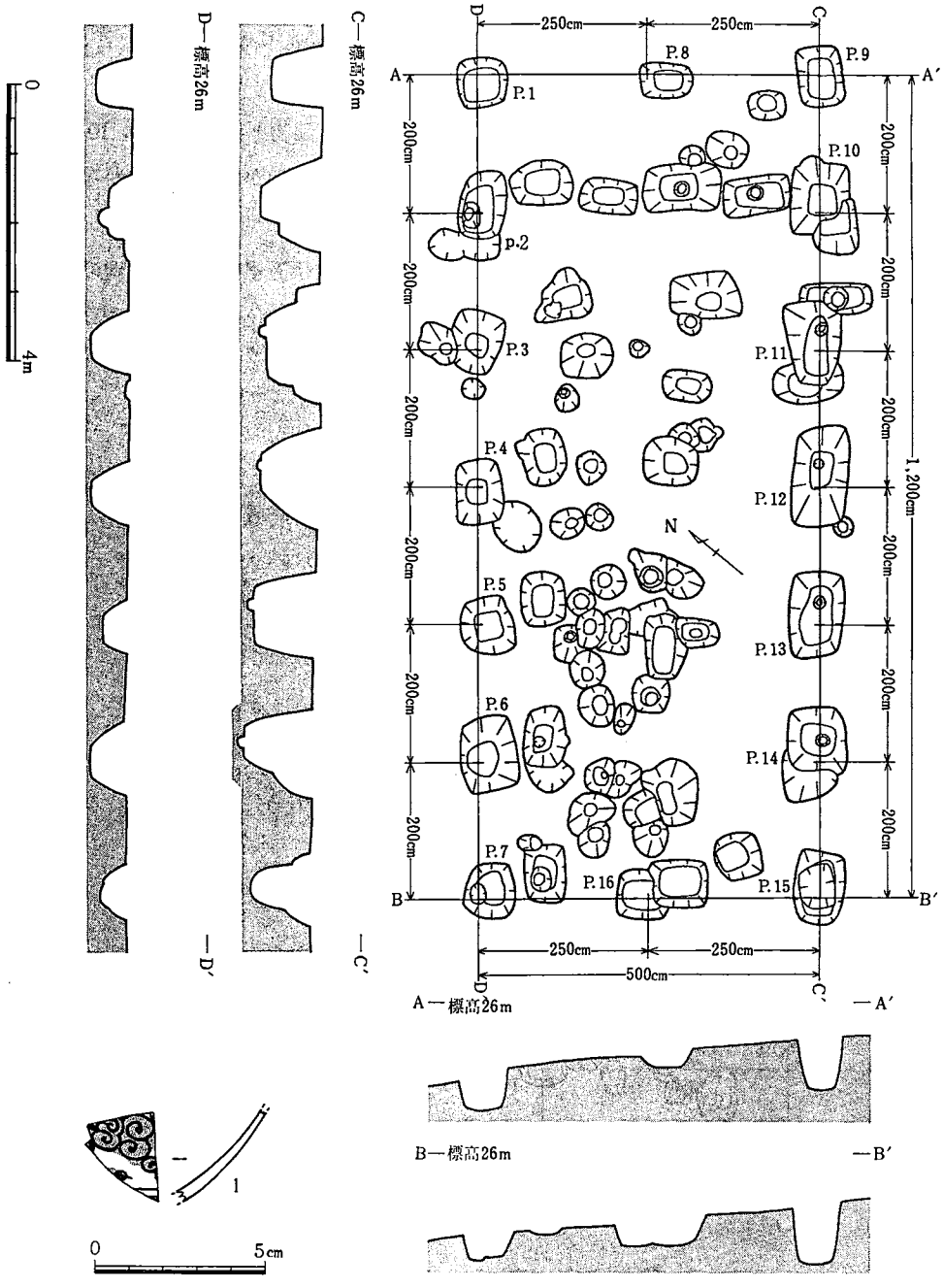
第31図12は p. 1 から出土したもので、黒牟田窯の擂り鉢の破片である。胎土は茶灰色で外面には黒茶色の釉薬が流れている。江戸中期の作である。

第31図13は p. 9 から出土したものである。12と同じく黒牟田窯の擂り鉢の破片で、口縁部である。口縁部は内側に折り返して作られているらしく肥厚している。胎土は紫をおびた灰色で、内外面とも暗茶色の釉薬がかけられているが、下方は、かかっていない。江戸中期の作である。

これらの遺物からＩ―⑨建物の時期は江戸中期頃と推定される。

（ヌ） Ｉ―⑩建物（第32図）

Ｉ地区の中央部から南西に延びており、Ｄ－５～７区、Ｅ－５～８区、Ｆ－７区にある。ピットは70cm×90cm前後で、南側には大きいピットもあるが、これらのピットはＩ―⑨建物のピットと重複しているためである。ピットは整然と並んでおり、主軸をＮ―51度―Ｅにとるほぼ



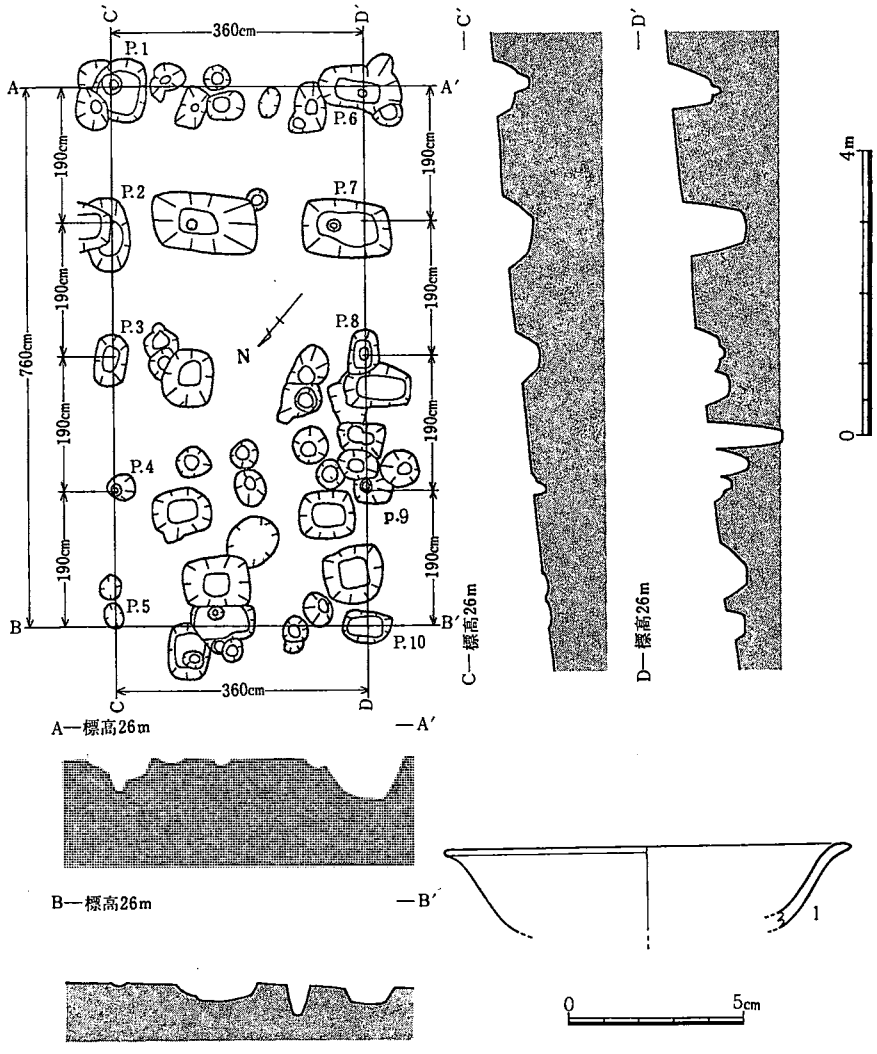
第32図　Ⅰ—⑩建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

東西に長い建物を復原することができる。東西は1間を200cmとして 6間分1600cmあり、南北へは2間半の500cmを2間割りしている。割合大きな建物である。この建物はⅠ—⑥、Ⅰ—⑦、Ⅰ—⑧、Ⅰ—⑨、Ⅰ—⑪、Ⅰ—⑫の建物と重複して建てられている。

この建物の p. 5 から近世の陶磁器が出土した。またⅠ—⑨建物と重複した p. 10、p. 11、p. 12、p. 13、p. 14からも遺物が出土したが、どちらの建物のものか区別できなかったのでⅠ—⑨建物のところで述べた。

第32図1はⅠ—⑩建物の p. 10から出土したものである。古伊万里染付唐草文碗の破片で、胎土は白色で描かれており、釉薬はやや青みをおびた透明で美しい色を呈している。江戸中期頃の作とみられる。

この遺物からⅠ—⑩建物は江戸中期頃のものとみられる。



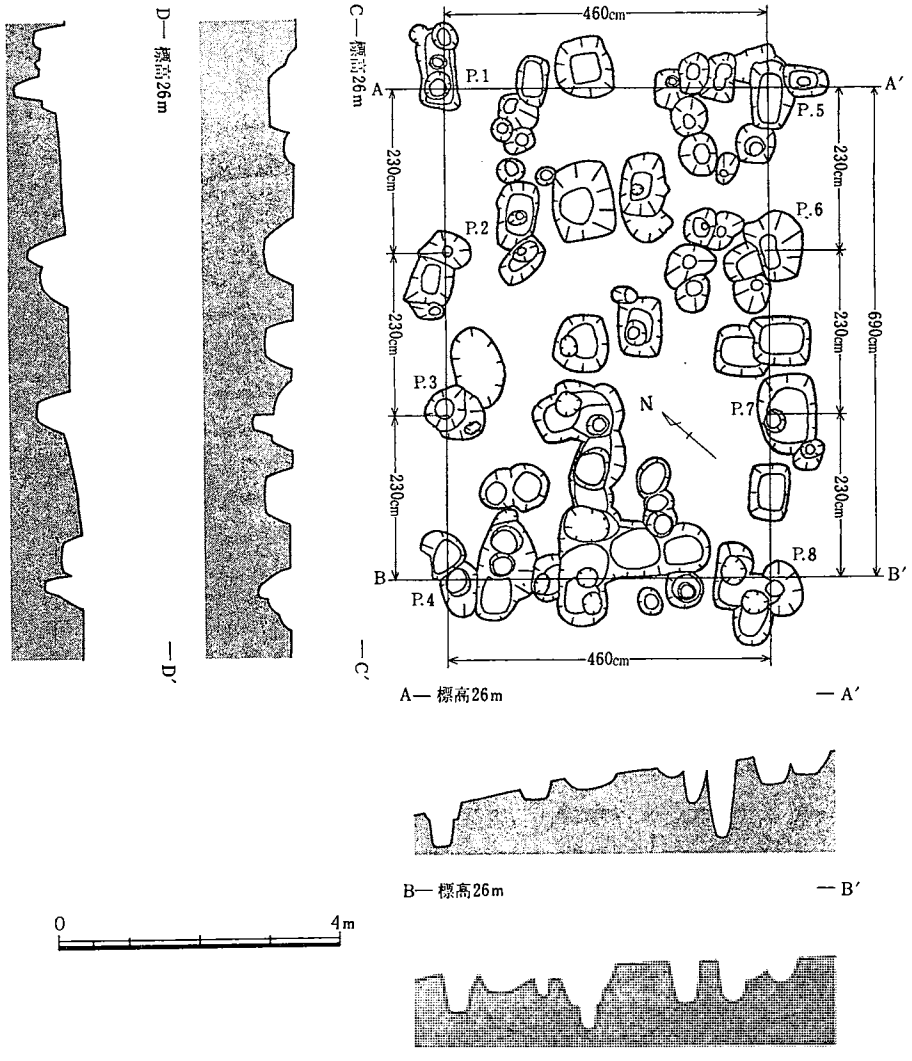
第33図　Ⅰ—⑪建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

（ル）　Ⅰ—⑪建物（第33図）

Ⅰ地区の中央からやや南西寄りにある建物で、D・E・F—6・7区にわたっている。ほぼ南北に長い建物で、主軸をN—40度—Wにとっている。ピットは大小差があるが、60cm× 100cmのものを平均として、北側へ行くほど削平されて小さくなっている。南北へは1間を 190cmとし4間760cmあり、東西は約2間分の360cmある。この建物はⅠ—⑨建物、Ⅰ—⑩建物と重複して建てられており、Ⅰ—⑫建物と接している。

Ⅰ—⑪建物の p. 1 から近世の陶磁器が出土した。

第33図1が p. 1 から出土したものである。体部は丸みをもち口縁部のいくぶん外反した口径11.6cmを測る古伊万里白磁皿の破片である。胎土は白色で、内外面ともやや灰色をおびた透明の釉薬がかけられ美しく光っている。江戸前期〜中期の作である。



第34図　Ⅰ — ⑫ 建 物 復 原 図

この遺物からⅠ～⑪建物は江戸中期頃のものとみられる。

（ヲ）　Ⅰ—⑫建物（第34図）

Ⅰ地区の西端にある建物で、E・F—7・8区にある。ピットの大きさは一定しないが柱根部はよく掘り下げてある。ほぼ東西に長く、主軸はN—49度—Eにとっている。東西方向は1間を230cmとし、3間690cmあり、南北方向は2間分460cmの幅がある。この建物はⅠ—⑨建物、Ⅰ—⑩建物、Ⅰ—⑭建物と重複しており、Ⅰ—⑪建物と接している。

この建物のピットからは近世の遺物が出土しなかったが、ピットの形態や、建物の方向などから他の建物と同じく江戸中期頃のものとみてよい。

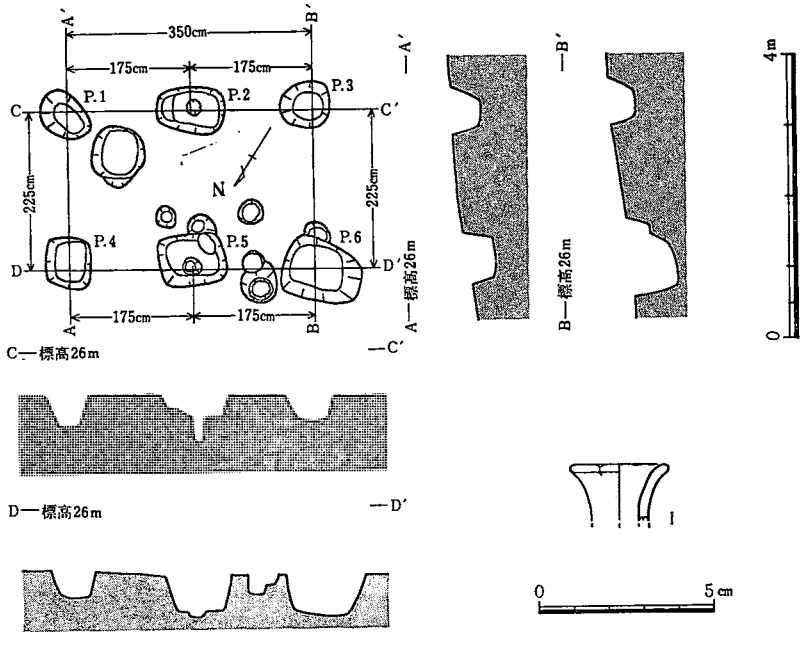
（ワ）　Ⅰ—⑬建物（第35図）

Ⅰ地区の南西端にある建物で、E・F—8・9区にある。ピットの大きさは一定でない。主軸をN—57度—Eにとり、東西方向は1間を175cmとし2間の350cmあり、南北は幅225cm程度である。小型の建物である。この建物は復原できた他の建物とは重複していない。この建物の西は谷になっている。

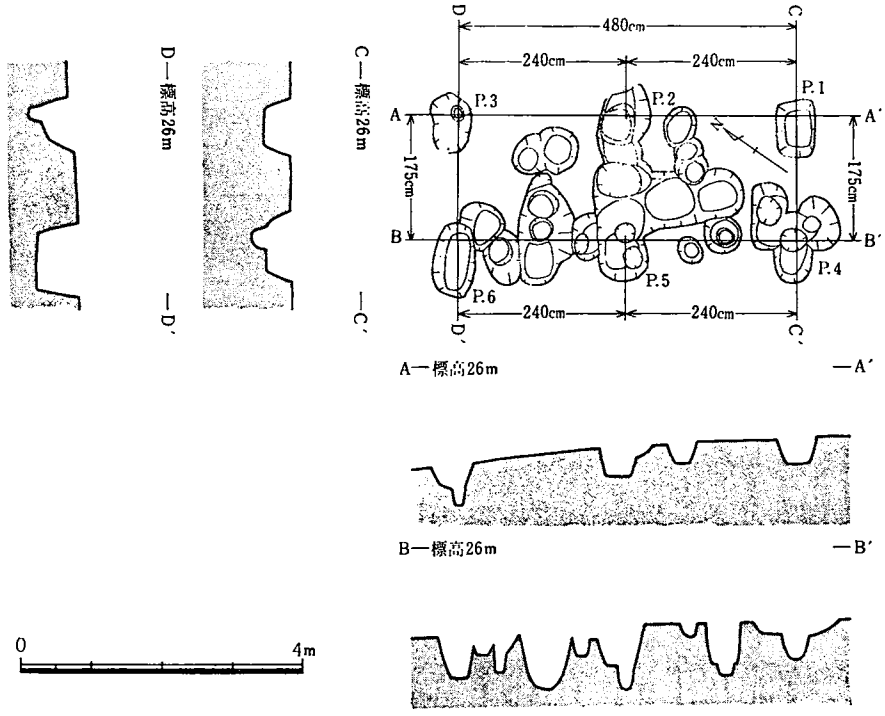
この建物の p. 5 から近世の陶磁器が出土した。

第35図1が p. 5 から出土したものである。古伊万里輪花縁磁器の口縁部の破片で、仏花器の類かとみられる。口径2.8cmを測り、胎土は白色で、透明の釉薬がかけられ美しく光っている。江戸中期の作である。

この遺物からⅠ—⑬建物は江戸中期頃のものとみられる。



第35図　Ⅰ—⑬建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図



第36図　Ⅰ－⑭建物復原図

（カ）　Ⅰ－⑭建物（第36図）

Ⅰ地区の西端にある建物で、E－8区、F－7・8区にある。ピットは60cm×80cm前後の大きさで、ほぼ南北に長い建物で主軸をN－35度－Wにとっている。南北は240cmを1間として2間の480cmあり、東西は幅わずか175cmである。この建物のピットからは近世の遺物が出土しなかったが他と同様近世の建物とみられる。特にⅠ－⑬建物とはほぼ直角に並んでいるため同時期のものである可能性が強い。この建物はⅠ－⑫建物と重複している。

（ヨ）　その他のピットの近世・近代遺物

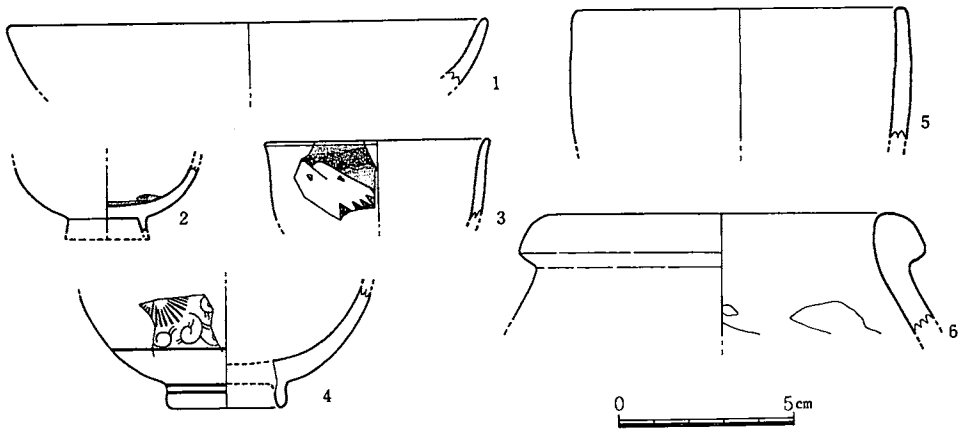
建物の復原ができなかったピットのうち近世および近代の遺物を出土したピットとその遺物についてここで述べておきたい。

第21図 p. 1～p. 10がそのピットで、第37図がその主な遺物である。

第21図の p. 1（B－3区）からは古伊万里白磁皿小片が出土した。江戸時代の作であり、江戸時代のピットとみられる。

第21図の p. 2（B－4区）からは古伊万里染付碗口縁部小片が出土した。江戸時代の作であり、江戸時代のピットとみられる。

第21図の p. 3（B－5区）からは古伊万里磁器細片が出土した。江戸時代の作とみられ、江戸時代のピットとみられる。



第37図　Ⅰ地区その他のピット出土近世・近代陶磁器実測図

第21図の p. 4（C－5区）からも古伊万里磁器細片が出土した。江戸時代の作とみられ、江戸時代のピットとみられる。

第21図の p. 5（D－5区）からは第37図1～4が出土した。

第37図1は口径13.7cmを測る古伊万里白磁碗の破片で、胎土はやや灰色をおびた白色で、釉薬は透明である。江戸中期の作である。

第37図2は古伊万里染付酒盃の破片である。胎土は白色で、見込み部に紺色の染付がみられ、透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。

第37図3は有田焼染付冨嶽図の酒盃の破片で、口縁部は端部近くでやや外反ぎみになっている。口径は6.5cmを測る。胎土は白色で、染付は紺色を呈し、透明の釉薬がかけられている。明治期のものである。

第37図4は有田焼印刷染付茶碗である。体部に比べて小さな高台がついている。胎土は白色で、染付は青色で、透明の釉薬が全面にかけられている。

このほかこのピットから江戸中期の嬉野焼銅釉碗の破片も出土している。

これらの遺物から第21図 p. 5 は明治期に掘られたものとみられる。

第21図の p. 6（E－6区）からは黒牟田焼の擂り鉢の口縁部の破片が出土している。江戸中期のものであり、p. 6 も江戸中期頃のものとみられる。

第21図の p. 7（E－8区）から第37図5が出土した。

5は唐津焼で、椎之峯窯で焼かれたものと思われる。口縁部が直口し、口径 9.6cmを測る碗で、胎土は灰黄色、透明の釉薬がかけられ嵌入がみられる。江戸初期のものである。

この遺物から第21図 p. 7 は江戸初期のピットである可能性もあるが、他のピットと同じく江戸中期頃のものではなかろうか。

第21図の p. 8（F－7区）からは近世陶器片が出土した。江戸時代のものとみられ、江戸時

代のピットと推定される。

第21図の p. 9（E－8区）からは古伊万里染付細片が出土している。江戸時代の作であり、江戸時代のピットとみることができる。

第21図の p. 10（F－7区）からは第37図6が出土した。

6は甕の口縁部の破片である。口径は11.6cmを測り、玉縁となっている。胎土は褐色で、黒褐色の泥釉がかけられている。窯、時期とも不明である。

この遺物から第21図 p. 10は近世のピットとみられる。

ここで紹介したピットには方形プランのものと円形のプランのものがみられる。方形プランのものはすべて江戸時代のものとみられ、円形のものの大部分は中世のものとみられたが、一部には江戸時代および明治時代のものもあることがわかる。しかし円形プランのピットはそのピットの規模からみて、主要な建物のものではなく、それに付属した小規模な建物などのものと推定される。

(2) 墓　　壙

D－1・2区にあり、D－2区の掘り下げの際、断面において2基の墓壙を検出し、調査を行なった。

いずれもⅡ層からⅢ・Ⅳ層に掘り込まれていた。墓壙内の土はⅡ層と同じ暗褐色土であるが多量の礫が入っていた。

（イ）　1号墓壙（第38図）

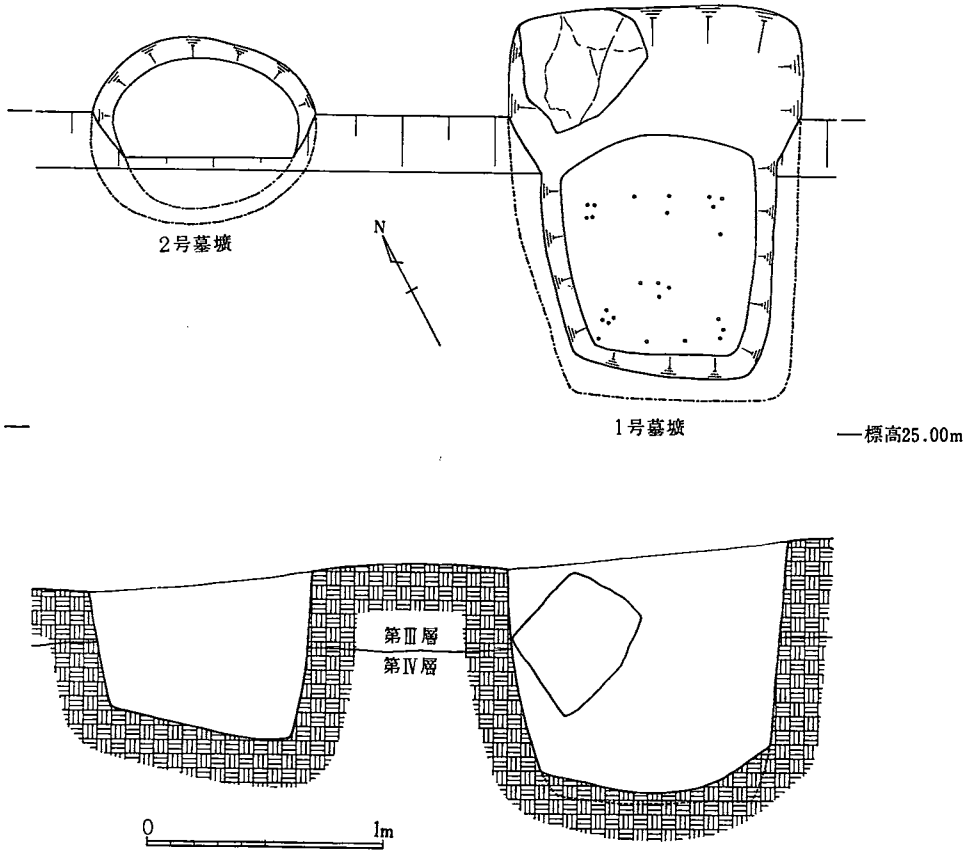
方形に近い墓壙で上部は幅125cmで、長さは165cm あるいは それ以上 あったものと 推定される。深さは107cmで底面は平らで幅82cm、長さ92cmを測る。墓壙を掘る時、ⅢおよびⅣ層にわたって大きな転石にあたったのでいくぶん墓壙を南にずらして掘っているようである。主軸はN－27度－Eにとっている。

墓壙底の中央部付近に骨粉化した人骨があったが、形状は不明であった。人骨の周りには方形の範囲に鉄釘がみられ、鉄釘には木質の一部が錆びついているので木棺であったことがわかる。棺の大きさはほぼ60cm×60cmの方形であったとみることができる。

第39図はすべて墓壙底から出土した鉄釘である。木質が付着しているので釘の正確な形、大きさをつかみにくいが、すべて角釘である。頭部は0.4cm前後とみられ、 長さは3.5～4.0cm程度であるが、20のみは現存部5.2cmで、復元すると6.0cm前後になる。

釘に付着している木質は上下で木目の方向が異っており、板の木目を直交させる形で釘を打ったことがわかる。多くは2枚の板にささっているが、4は3枚目に及んでおり、7も、一枚目と二枚目に隙間をもち先端は三枚目の板におよんでいる。板の厚さは1、6、7、10、15で約1.2cm、2、3、13、14、18（19）で約1.5cm、4、5、9で約2.0cmを測ることができる。

1号墓壙の埋土中から磁器片が1点出土した。第40図がそれである。これは古伊万里染付唐草文碗の口縁部付近の破片で、復原口径は17.6cmを測る。胎土は白色で、 青色の 染付がみら



第38図　Ⅰ地区1号および2号墓壙実測図

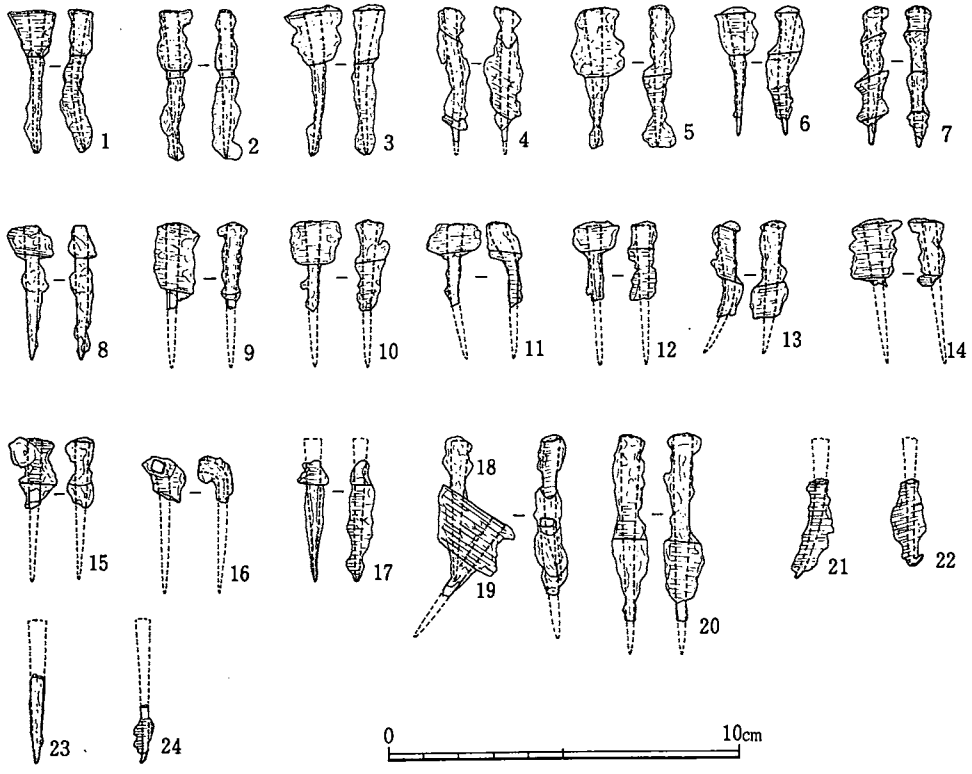
れ、口縁部内面に一条の線、外面に二条の線が薄く引かれ、外面にはその下に簡略化したような唐草文が描かれている。内外面と青っぽい透明の釉薬がかけられ、美しい色をしている。江戸時代中〜後期の作とみられる。

出土した磁器片が直ちに墓壙の年代を示すかどうか不明であるが、遺骨の残存状態や地元の人々に忘れられていたということから考えて、江戸時代中期〜後期の墓壙とみられ、Ⅰ地区の近世建物群と同時期か少し遅れた時期のものとみることができよう。

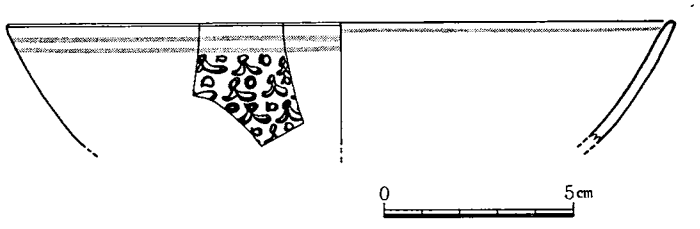
（ロ）　**2号墓壙**（第38図）

1号墓壙から北西わずかに85cmはなれて掘られている墓壙で、直径95cmの円形であったとみられる。深さは70cmを測り、底面の直径は75cmを測る。土壙内から遺物は発見されなかったが、1号墓壙との関連から墓壙とみることができる。鉄釘が出土しなかったし、円形の墓壙であるところから棺は桶が使われていた可能性が強い。2号墓壙は1号墓壙と相前後して掘られたものとみられる。

(3)　Ⅰ地区その他の近世・近代遺物



第39図　Ⅰ地区１号墓壙出土鉄釘実測図



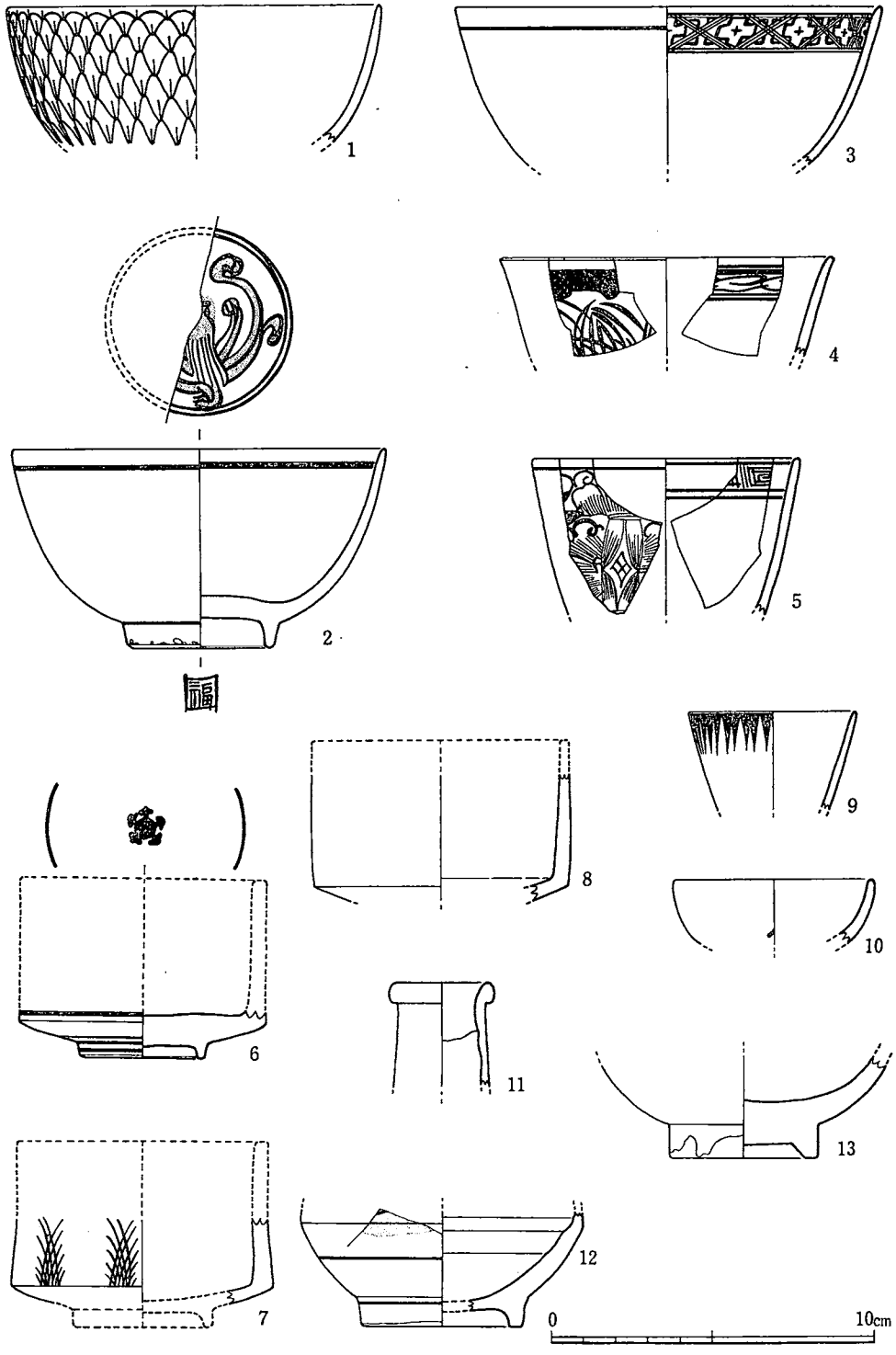
第40図　Ⅰ地区１号墓壙出土磁器実測図

ここでは遺構以外から出土した近世および近代の遺物を紹介したい。

第41図と第42図の１～21がそれである。

１は初期伊万里染付網文碗の破片である。薄手で口縁部は直口し、口径11.6cmを測る。胎土は白色で、濃紺色の染付が施され、内外面とも透明の釉薬をかけている。17世紀初めの作である。D－４区から出土した。

２は古伊万里染付見込竜絵碗である。口縁部は直口ぎみで、口径11.6cm、高さ6.1cmを測る。胎土は白色で、染付は濃紺色を呈しており、見込のほかに口縁部内外と、高台部との境にそれぞれ一条ずつの線の染付がみられる。内外ともやや青みのある透明の釉薬がかけられているが、高台部畳付とその内側は無釉である。高台部内側には墨書きの角福銘がみられる。江戸前



第41図　Ⅰ地区その他の近世・近代遺物実測図(1)

期の作である。B－2区から出土した。

3は古伊万里染付碗の破片である。薄手で、口径13.2cmを測る。胎土は白色である。染付は紺色で、口縁部外面は一条の線だけであるが、口縁部内面は幾何学的な花文がみられる。釉薬は透明で内外面ともかけられている。美しい色を呈している。江戸中期の作である。B－2区Ⅱ層から出土した。

4は古伊万里草花文碗の破片である。口縁部は外反ぎみで口径10.3cmを測る。胎土は白色で、染付は紺色で内外面ともみられ、その上に透明の釉薬がかけられている。江戸後期の作である。D－4区から出土した。

5は古伊万里染付で、器種は碗であろうか。口縁部は直口し口径8.3cmを測り、口径の割に深い器である。胎土は白色で、繊細な紺色の染付で外面に草花文、内面口縁部に雷文が描かれている。釉薬は透明であるがわずかに青みをおびており内外面ともかけられている。江戸中期の作とみられる。B－3区Ⅰ層から出土した。

6はⅠ地区とⅡ地区の中間の現場事務所の付近で表採したものであるがここで紹介しておきたい。古伊万里染付向付の高台部付近の破片である。高台は低く小さい。体部下方で折れて垂直に立ち上がるので、口径は7.6cm程度と推定される。胎土は白色である。内外面とも濃紺の線の染付がみられ、見込中央には五弁花が描かれている。江戸中期の作である。

7は古伊万里染付草花文向付の体部の破片である。口径は7.8cm程度と推定される。胎土は白色で、外面に濃紺色の染付が施され、内外面とも青みをおびた透明な釉薬がかけられている。江戸中期の作である。C－3区Ⅰ層から出土した。

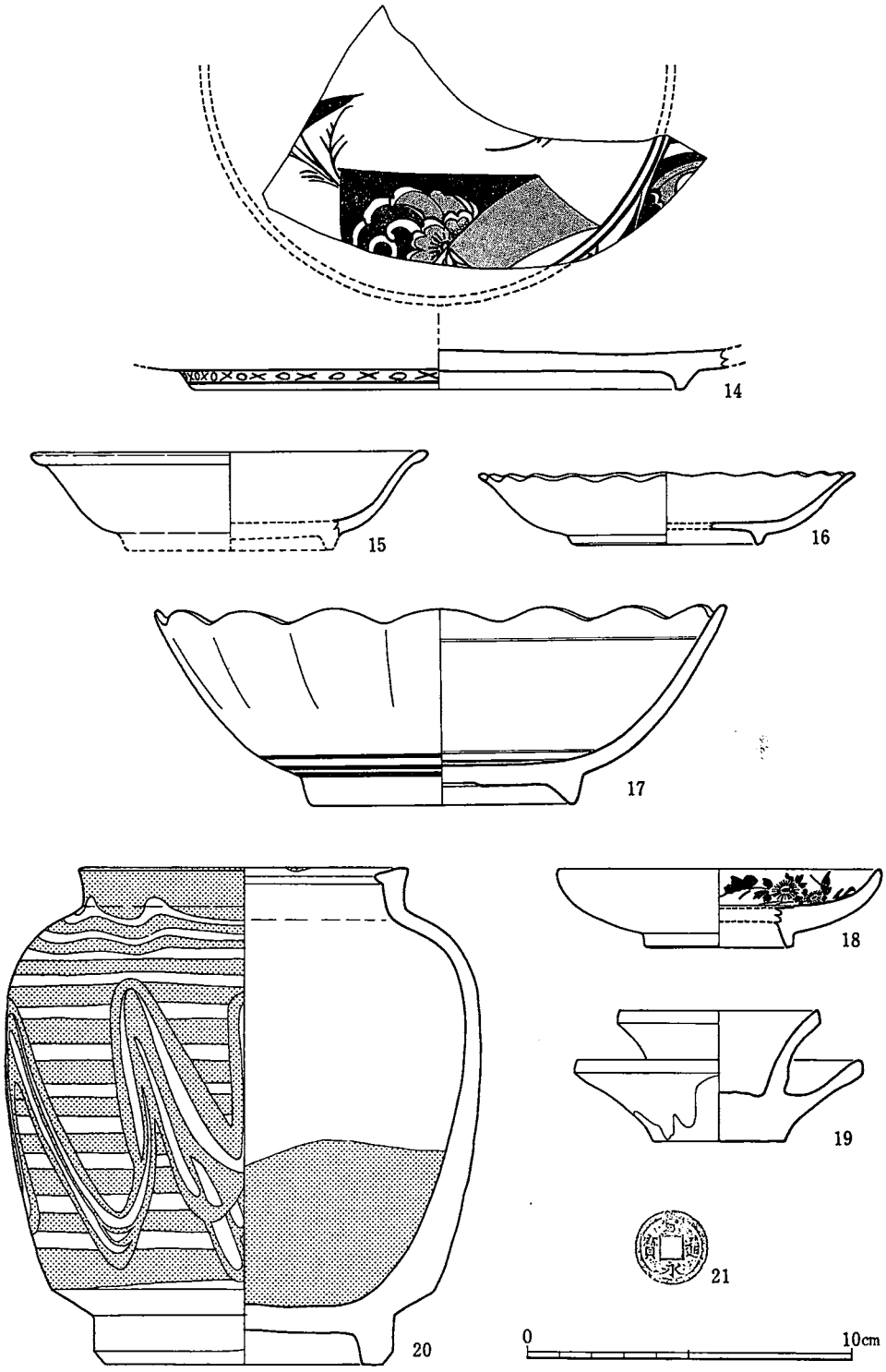
8は古伊万里青磁向付で永尾・波佐見窯のものとみられる。口径は8.1cmと推定される。胎土は緑灰色で内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸中～後期の作である。D－2区Ⅰ層から出土した。

9は古伊万里染付鋸文猪口の破片である。薄手で口縁部は直線的でいくぶん開いている。胎土は白色で、染付は薄紺色で口縁部外面に施されている。内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸後期の作である。D－2区Ⅰ層から出土した。

10は古伊万里染付酒盃の口縁部の破片である。体部は丸く直口し、口径6.2cmを測る。胎土は白色で、外面に紺色の染付の一部がみられる。釉薬は透明で内外面ともかけられ、嵌入がみられる。D－4区Ⅰ層から出土した。

11は古伊万里徳利の口縁部の破片である。口縁部は直口し玉縁となっている。口径は3.4cmを測る。胎土は白色で、外面と内面の上方にかけて乳白色を呈した半透明の釉薬がかけられている。江戸時代中期の作とみられる。B－2区Ⅱ層から出土した。

12は古伊万里染付徳利の高台部付近の破片である。高台は割合低く、体部は屈折している。胎土は白色で、外面に黒紺色の染付がみられる。内面は無釉で、外面はやや灰色をおびた透明の釉薬が高台部内側までかけられているが、畳付のみはみられない。江戸前期の寛文頃の作で



第42図　Ⅰ地区その他の近世・近代遺物実測図(2)

ある。D－4区から出土した。

13は嬉野焼緑釉碗の高台部の破片である。胎土は白色である。内面に淡灰透明の灰釉がかけられ、外面に青緑色の銅釉がかけられているが、高台部畳付とその内側にはかかっていない。内面には嵌入がみられる。江戸中期の作である。C－2区Ⅰ層から出土した。

14は古伊万里染付草花文鉢の破片である。高台は小さく低く、高台径は15.2cmを測る。胎土はやや黄灰色をおびた白色を呈する。染付は黒紺色で、内面には幾何学文と組み合わせた草花文が施され、外面には高台部外側に三条、内側に一条の線が引かれ、高台部外側には「○」と「×」を交互に並べた文様もみられる。また高台部内側中央には渦巻文のような角福銘がみられる。内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。D－4区Ⅰ層出土。

15は古伊万里白磁無文浅碗である。口縁部は外反し肥厚している。口径は12.3cmを測り、高さは3cm前後とみられる。胎土は白色で、内外面とも乳白色をおびた透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。E－5区から出土した。

16は伊万里輪花白磁無文皿である。口径11.6cm、高さ2.2cmを測る。胎土は白色で、内外面とも透明の釉薬がかけられているが、畳付のみはみられない。幕末～明治初期の作である。D－5区から出土した。

17は伊万里輪花染付鉢である。口径17,8cm、高さ6.0cmを測る。胎土は白色で、外面の高台近くに紺色で三条の線の染付がみられ、高台部畳付と中央部を除いて内外面とも透明の釉薬がかけられている。内面はさらにその上に三条の線と絵が金色で描かれているが剝落してはっきりしない。幕末～明治初期の作である。D－4区Ⅰ層から出土した。

18は有田印刷染付皿である。口径10.0cm、高さ2.4cmを測る。胎土は白色で、内面に菊の印刷染付がみられる。釉薬は透明で内外面ともかけられているが、畳付部にはみられず、また内面は蛇目剝されている。D－4区Ⅰ層から出土した。

19は黒牟田窯の灯明具である。上部の径6.2cm、受け部の径8.9cm、高さ4.0cmを測る。底部は糸切りされている。胎土は赤褐色で、底部付近を除いて灰赤色の釉薬がかけられている。江戸後期の作である。C－2区Ⅰ層から出土した。

20はⅠ地区から北方60mの位置にあった近世墓地から出土した蔵骨器で、墓は掘り起こされ、骨は子孫の人々が持って行かれたが、蔵骨器は捨てられていた。内部には火葬骨粉が残っていた。Ⅰ地区出土ではないがここで紹介しておく。これは武雄南部系指描文壷で、小田志窯のものかと思われる。口径は10.1cm、高さ15.2cmを測る。胎土は褐色を呈し、畳付部を除いて内外面とも暗褐色の釉薬がかけられ、さらにその上に高台部を除く外面と内面の下方に茶褐色（部分的に白っぽい）の釉薬を二重がけし、外面に指描文を施している。江戸中期の作である。

21は直径17mm、縁の厚さ0.8mmを測る寛永通宝で、C－2区Ⅰ層から出土した。

第Ⅲ章　Ⅱ地区の調査

1.　Ⅱ地区の設定と層位

(1)　Ⅱ地区の設定

Ⅱ地区は平原・野中遺跡の北端にあたる。字は「野中」である。

この地区から近世墓掘り上げで貝塚が発見されたことが調査の発端である。この貝塚のある地点の東にこの地域で水田を除けば最も広い平坦地（畑）があり，ここに廃絶された井戸があることがわかった。この地域をⅡ地区とした。

Ⅱ地区もⅠ地区と同様縦貫道工事用中心杭を基軸として５ｍ方眼を組んだ。この方眼を北から南へＡ～Ｆとし、西から東へ１～６とした。中心杭は３と４の境にあたる。

Ⅱ地区の北側は地盤が悪いので遺構はないものと判断した。南側の一段高い畑は試掘したが遺構は検出されなかった。

Ⅱ地区の遺構調査を行なった面積は約500㎡である。

(2)　Ⅱ地区の層位

Ⅱ地区は標高19ｍ前後であるが最も低い所は標高17ｍ程度である。Ⅱ地区のうち中心部であるＢ～Ｅ－２～６区はすべて表土層の直下が洪積世の層であったが、貝塚の発見されたⅡ地区の西端部では層の堆積状態を観察することができた。また北東端部でも一部の層の堆積状態を観察できた。これをもとにⅡ地区の各層について述べることにする。

第44図１はＦ－１・２区の中央部北側断面（第43図イ－イ′）図である。また２はＡ－４区西側断面（第43図ロ－ロ′）図である。層の整った前者を基準に後者の層も対応させて同一名で呼ぶことにする。層は上層から番号をつけて６層に分けられる。なお二次堆積の層は層の数には含めなかった。

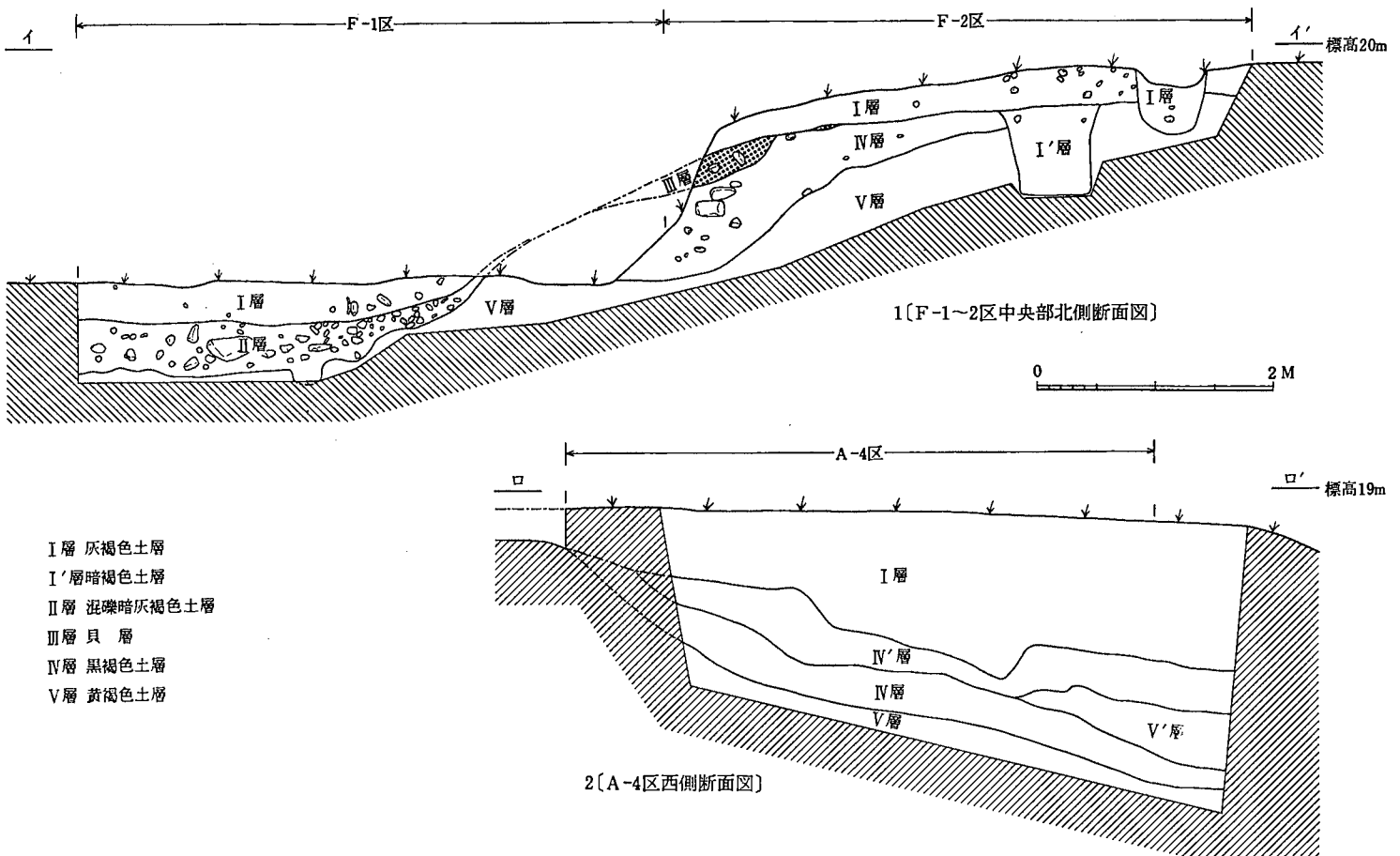
Ⅰ層－灰褐色土層。いくぶん小礫を含んでいる。腐食土を含む撹乱による表土層である。この層には近世および近代の陶磁器片などが含まれている。またⅡ地区のⅠ層除去後検世された方形のピット中の土および近世の墓壙中の土もこの層に類似しているが暗褐色を呈していた。Ａ－４区ではⅠ層が厚くなっているが、これは耕地造成に際して北側を埋めて耕地を拡張したためとみられる。

Ⅱ層－混礫暗灰褐色土層。Ｅ・Ｆ－１区のみで確認された層で礫を多量に含んでおり、低レベルにあるためやや泥炭質になっていた。Ｆ－１区ではこの層中に土製湯釜、土製鍋、擂り鉢等の中世遺物の破片を多量に含んだ土器溜がみられ、中世の層であることがわかった。

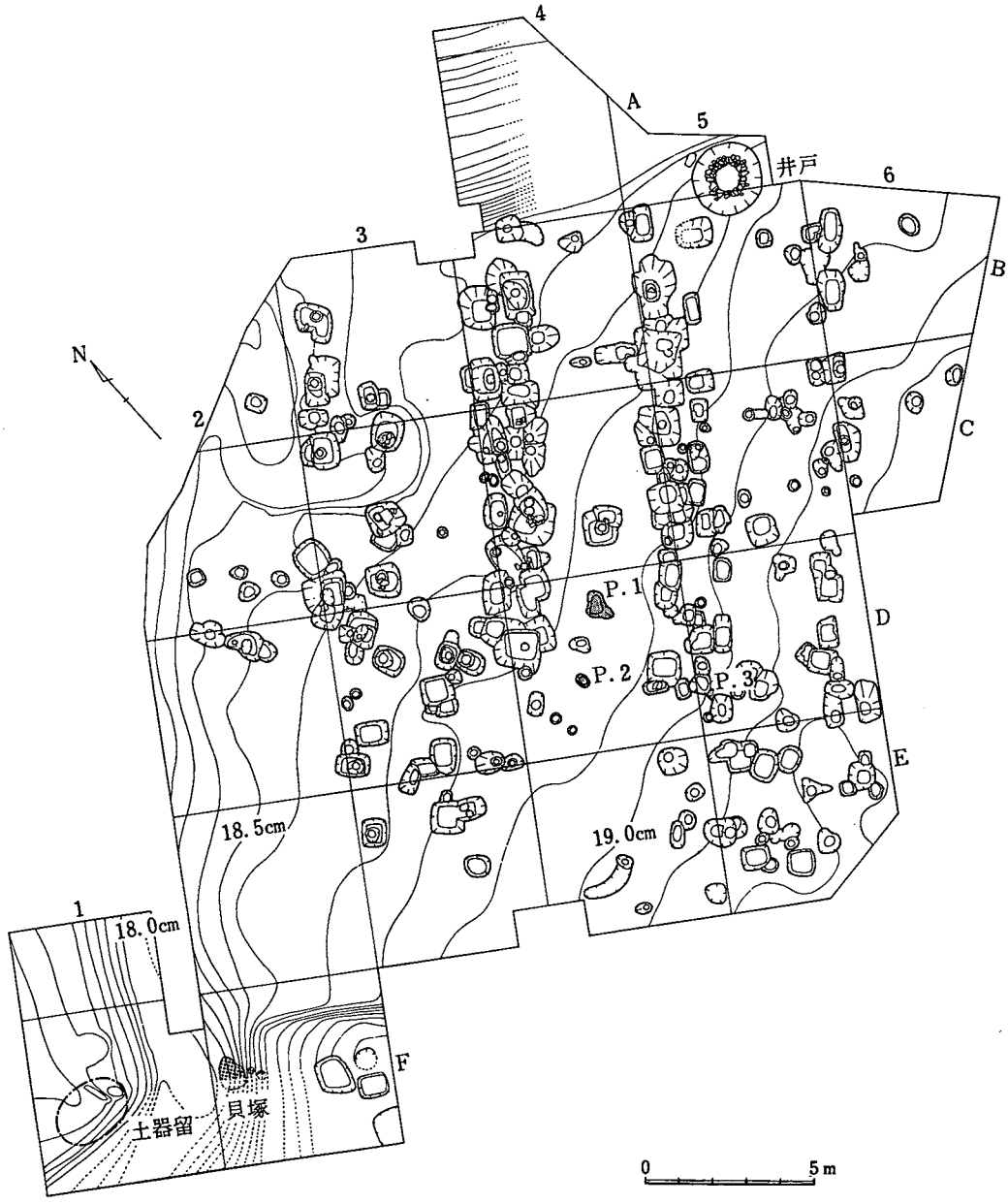
Ⅲ層－貝層。ほぼ純貝層であるが礫とⅣ層の土をいくぶん混じている。カキが大部分を占めている。この層から中世の擂り鉢片が出土したことから中世の貝塚とみることができる。

A
B
C
D
E
6
N
19.0m
18.5m
17.0m
0
5 M

第43図　Ⅱ地区遺構全景実測図



第44図 Ⅱ地区土層断面図



第45図　Ⅱ地区中世遺構分布図

Ⅱ層とは重複したところがないので正確な前後関係はわからない。

Ⅳ層―黒褐色土層。いくぶん礫を含んでおり、やや粘質である。F―2区とA―4区の両方でこの層がみられた。中世の擂り鉢などが出土したので中世の層とみられる。Ⅱ地区で検出されたピットのうち小形で円形のピット中にはⅣ層に相当する土が入っていた。

A―4区ではⅣ層よりも上にこの層と同じ層がみられる。この層をⅣ′層としたが，これは近世の建物を建てる際Ⅳ層を削平して平坦面を造り、Ⅳ層を斜面にあたる位置に落とした

ためとみられ、二次堆積層である。なお、F－1・2区においてⅣ層とⅡ層の重複がなかったので、正確には両者の前後関係はわからない。あるいはⅡ層は低位置にあるためⅣ層が泥炭化して変質した可能性もある。

Ⅴ層―黄褐色土層。洪積世の無遺物層である。部分的に小礫を含んでいる。A－4区ではⅣ層の上に一部Ⅴ層に相当する土がみられた。これをⅤ′層としたが、これもⅣ′層と同じく近世に削平された土が捨てられたものとみられる。

以上のようにⅡ～Ⅳ層が中世の文化層であることがわかった。またⅠ層は近世や近代の遺物をかなり含んでおり、もと文化層だったものが撹乱をうけて形成された層であることがわかった。

2. 中世の遺構と遺物

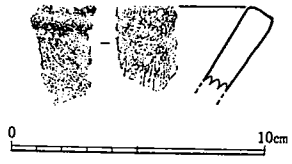
(1) ピット群

Ⅱ地区においても中世の貝塚などの存在から中世の建物があったことはまちがいなく、建物のピットはⅠ地区と同様円形とみられる。しかしⅡ地区の中世の生活面は近世の建物を造る際と畑地造成の際の二度に渡って削平されているため、深く掘られたピットのみがかろうじて残ったものとみられた。ピットの埋土によって時期を判定することが難しいので遺物に頼れば、第45図のP．1～P．3は中世のピットと推定される。

P．1からは瓦器が出土した。第46図がそれで、擂り鉢の口縁部破片である。口唇部はわずかにくぼみ、内外面ともなで調整され、内面に櫛状工具で溝をつけている。胎土にはいくぶん砂粒を含み、色調は灰白色を呈する。室町時代頃の擂り鉢とみられる。

P．2からは土師質糸切底の皿の細片が出土し、P．3からも土師質土器の細片が出土した。

これらのピットは室町時代の建物の柱穴とみられ、その他の円形のピットのいくつかも室町時代のものと推定される。



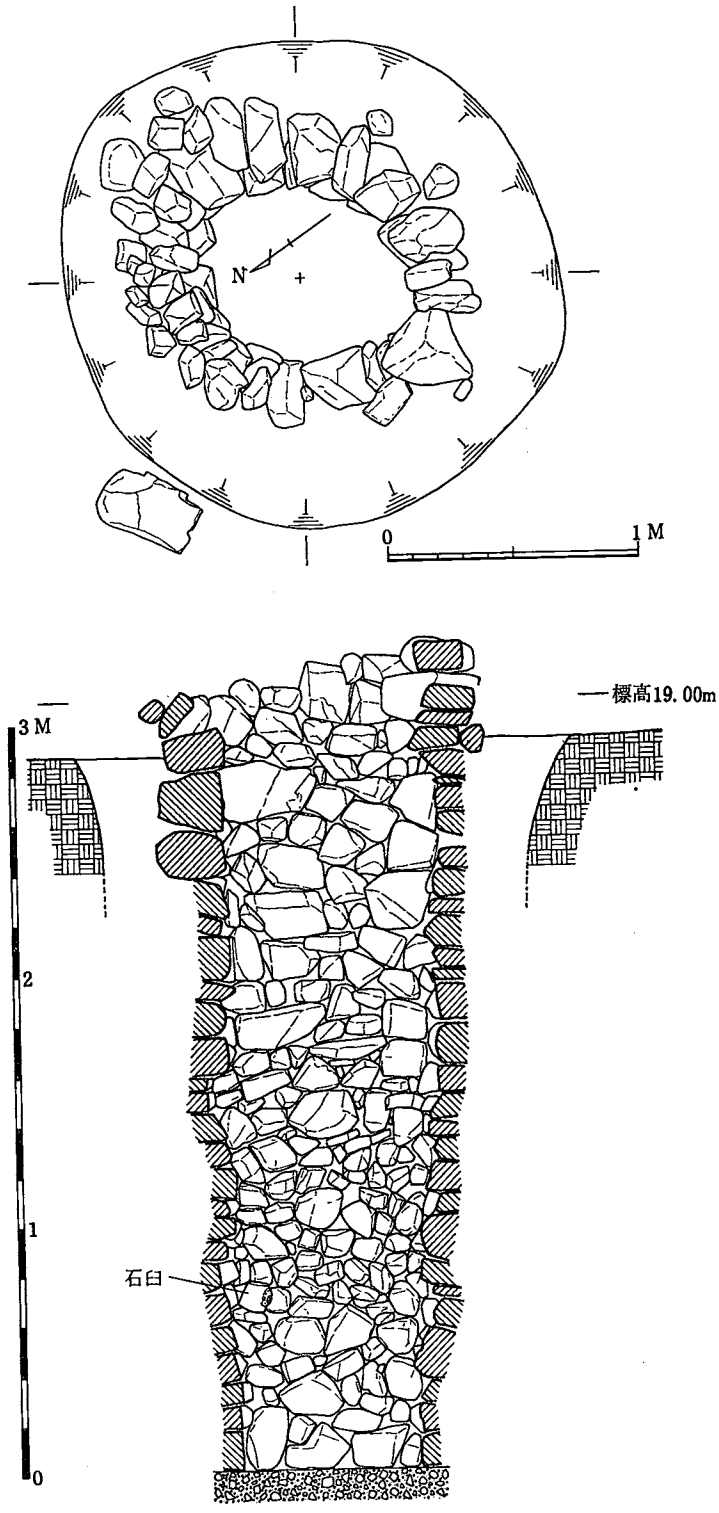
第46図　Ⅱ地区中世ピット出土遺物実測図

(2) 井　戸（第47図）

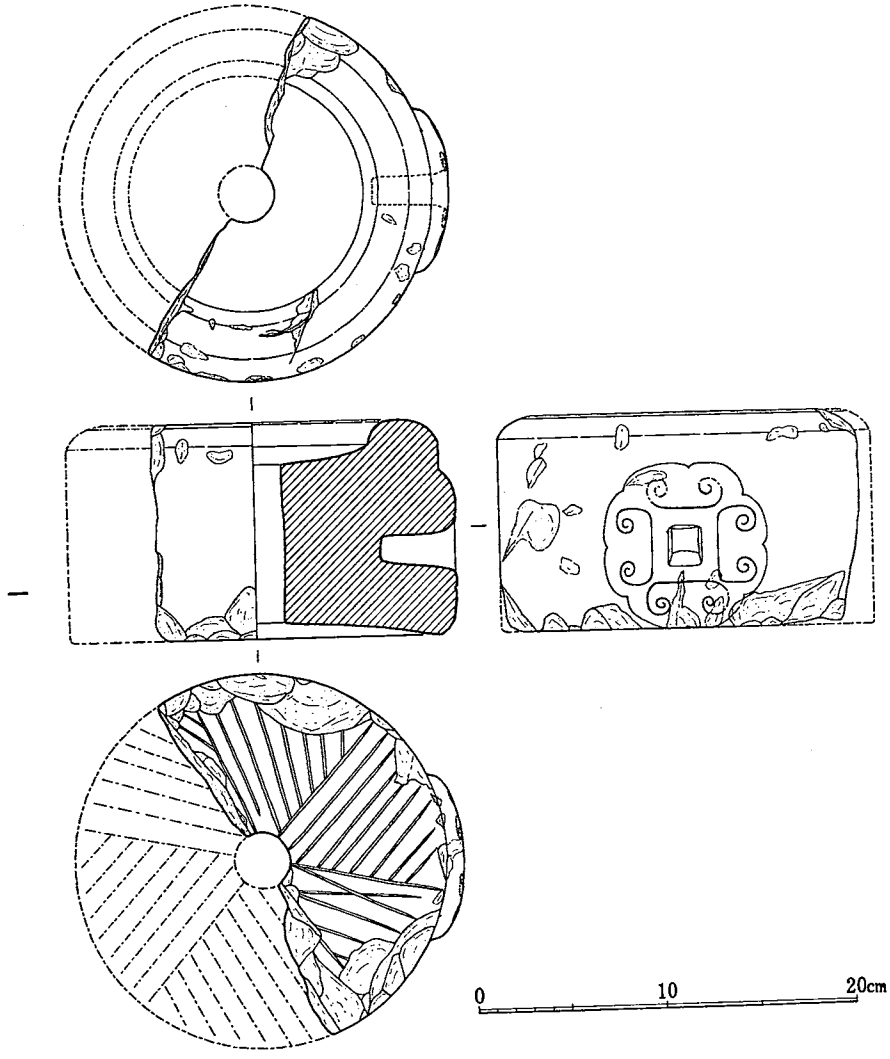
Ⅱ地区の東端、A・B－5区にある井戸である。上部は少し壊れているが、ほぼ旧状を保っていた。井戸の構築に当って、上端で直径2.0m（ただし現存部に限る）の穴が掘られ、その底に砂利を敷き固めている。その上に10～40cmの変成岩（千枚岩？）角礫を円筒形に積み上げて井戸枠としている。井戸の直径は下底部で0.7m、上部で0.8mを測り、深さは3.3mである。井戸枠の変成岩に混じって、底から0.7mのところに砂岩製石臼の割れたものも使われていた。

調査時に井戸は2m近く埋もれており、すでに井戸の機能を失っていた。上面に近世・近代の遺物がみられたが、井戸の廃絶後捨てられたものとみられる。井戸を掘り下げると木の葉などを含んだ泥炭層が下部まで堆積しており、下部から水桶の底とみられる木製品が数点出土し、下底部からは瓦器片2点が出土した。

第48図は井戸枠に使われていた緻密で硬質の砂岩製石臼である。半分に割れて



第47図　Ⅱ地区井戸実測図



第48図　Ⅱ地区井戸枠の石臼実測図

いるが上臼（雌臼）で、直径19.8cm、厚さ11.3cmを測る。上面の縁は丸く、くぼみは1.3～2.2cmあり、中央部に直径3.0cmの供給口が貫通しており、これが芯うけにもなっている。下面のへこみは0.8cmである。へこみ部は復原すると6分画されており、主軸の間は6～8条の副溝が刻まれている。側方には挽手の穴があり、周囲に八弁の花形が浮き彫りされ、その上に線刻文がみられる。小型の石臼で、供給口が中央に貫通しているところから、抹茶挽き用あるいは薬挽き用の手挽き臼とみられる。また目のパターンからみた上臼の回転方向は反時計方向回りである。

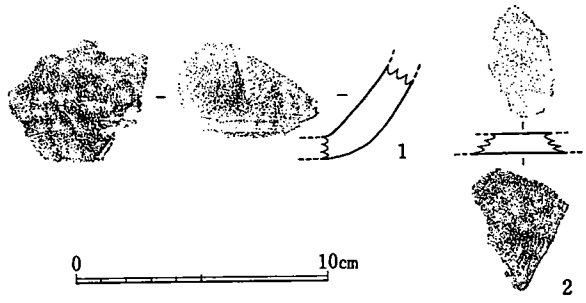
第49図1、2は井戸の底から出土した瓦器片である。

1は土製鍋または土製湯釜の底部付近の破片である。厚さは1.2cmであるが底部に向って薄くなっている。内面は横なでされ、外面はヘラなでされているようである。色調は灰色を呈す

る。胎土には微砂を混入している。

2は底面で、やはり土製鍋または土製湯釜の破片とみられる。1と同一個体である可能性もある。厚さは0.8cmの平底である。胎土には微砂を混入しており、色調は灰色を呈する。

この2点の遺は室物町時代のものとみられる。



第49図　Ⅱ地区井戸内出土遺物実測図(1)

第50図1～3は井戸内から出土した木製品で、いずれも水桶の底とみられる。

1は直径24.2cmを測り、一部足りないが3枚の板を接合していたと推定される。中央部にある接合面には各々6カ所に直径5mmの穴が穿たれ、竹釘が刺されていた。そこから5cmのところには2カ所に穴の穿たれた割れ口があり、接合面ともみられるが、直線的でないため接合面のすぐ近くの割れ口と推定される。この板の厚さは周辺部で1.2cmを測るが、中央部付近は減って厚さ0.8cmになっている。これは柄杓で桶の底を擦ったためとみられる。端部はやや斜めになっており、上方がやや開いた水桶と推定される。なお水桶の木質は杉で板目に使っている。

2は2枚の板からなる水桶の底で、直径19.9cmを測る。中央部で接合されており、各接合面には4カ所ずつの4～5mm程の穴が穿たれているが、両面で対応している穴は2カ所で、竹釘が刺してある。また穴の対応しないものも竹釘でふさいでいる。厚さは1.2cmを測る。端部は斜めになっており、やはり上方がやや開く水桶である。この木質も杉で、板目に使っている。

3は一部分の破片であるが、復原すると直径は24.8cmになる。厚さは1.4cmを測り、端部はやや斜めになっている。木質は杉で、正目に使っている。

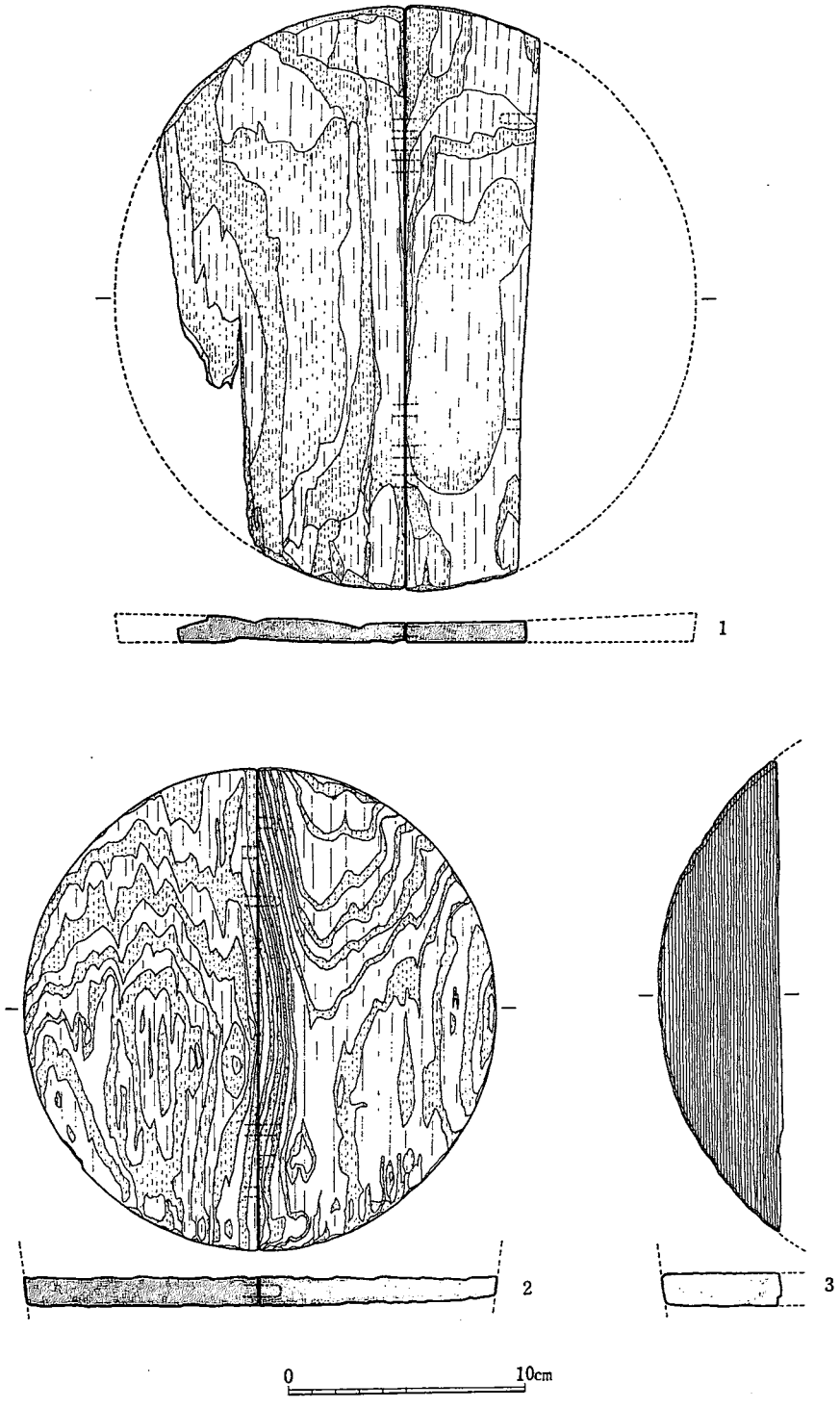
これらの遺物だけで井戸の時期を決めることは難かしいが、底から出土した2点の瓦器片が井戸の造られた時期を示すものとすれば室町時代とみることができよう。また井戸が完全に埋没していないことから、近世においても使われていたものとみられる。

(3) F—1区Ⅱ層土器溜

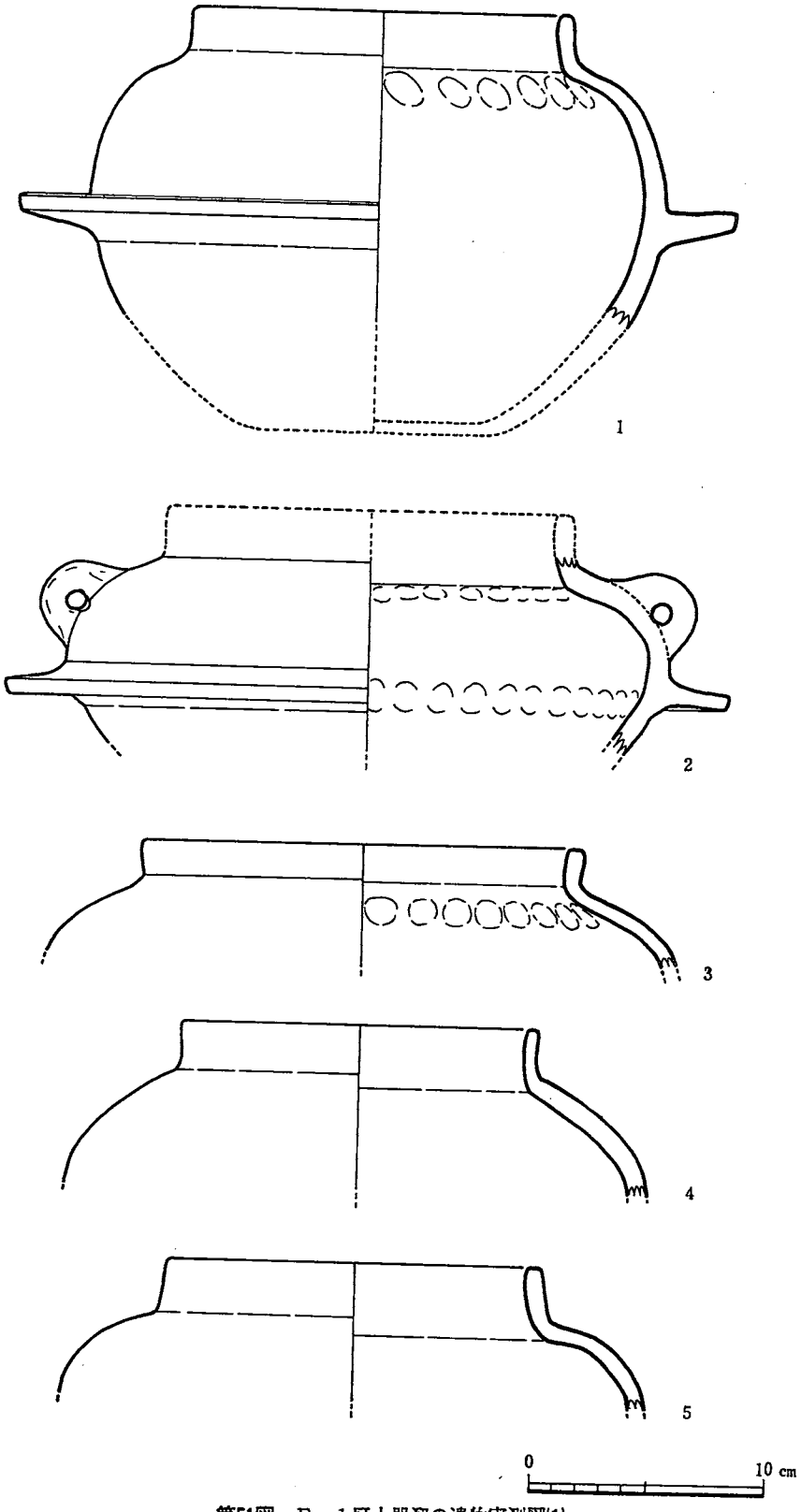
Ⅱ地区の最も西端の一段低い所、F—1区Ⅱ層中に多量の遺物を含んだところがあった（第45図）。遺物は土製湯釜、土製鍋、擂り鉢、捏ね鉢、火舎、盤などの瓦器の他、備前焼擂り鉢も含まれており、焼けた土の魂も混じっていた。また周辺にはかなりの礫も含まれていた。遺構の性格は破損品の捨て場と考えられるが、多量に捨てられているのが不思議である。

第51図～第63図の1～62はこの土器溜から出土した遺物である。

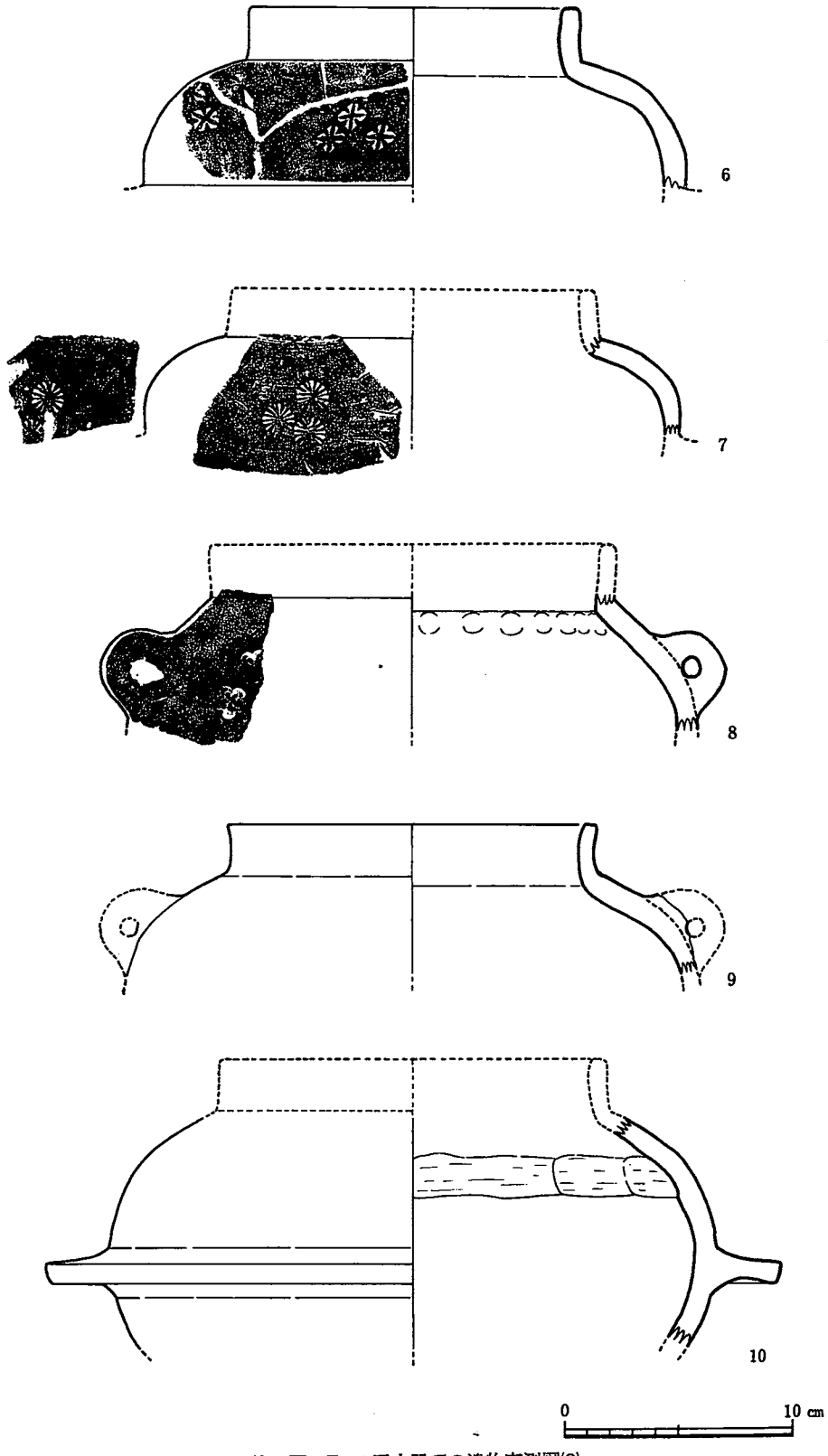
第51図～第53図1～16は土製湯釜である。口縁部は短く直口し、肩部は張って一対の把手がついている。胴部に鍔状凸帯をめぐらし、底部は平底である。胎土には砂粒を混入している。



第50図　Ⅱ地区井戸内出土遺物実測図(2)



第51図　F－1区土器溜の遺物実測図(1)



第52図　F—1 区土器溜の遺物実測図(2)

鍔状凸帯以下には煤が付着しており、実際に湯釜として使用されたことを示している。

1は口径16.4cmを測り、高さは18cm程度と推定される。器面は横なでされており、肩部内面には指圧痕が残っている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

2は口縁部と底部を欠くが口径17.5cm程度と推定され、胴部は横に強く張っている。肩部に高さ2.0cmの把手がつき、横方向に直径0.8cmの穴が穿たれている。内面の肩部と胴部には指圧痕が残っている。色調はにぶい橙色を呈する。

3は口縁部が外傾ぎみに短くつき、口径19.0cmを測る。肩部内面は指圧痕がみられ、内外面とも横なでされている。色調は黒褐色を呈する。

4は口径15.4cmを測る。色調は褐灰色を呈し、器面は荒れている。

5は口径16.1cmを測り、口縁部は内彎ぎみに立っている。内外面とも横なでされており、色調はにぶい橙色を呈する。

6は口縁部が直口し、口径14.7cmを測る。肩部には十字花弁の花のスタンプが3つ単位で押されている。色調は灰黄褐色を呈している。

7は口縁部を欠損しているが、口径16cm程度とみられる。肩部に菊花文のスタンプが3つ単位で押されている。色調はにぶい褐色を呈する。

8は肩部把手付近の破片である。把手は高さ1.8cmで直径0.8cmの穴があいている。また肩部に梅花文のスタンプも押されている。色調は褐灰色を呈するが内面はにぶい褐色を呈する。

9は口径16.3cmを測り，口縁部はやや外反ぎみで、内外面とも横なでされている。肩部の把色は欠損している。色調はにぶい黄橙色を呈する。

10は肩部から胴部にかけての破片である。肩部内面はヘラ削りされており、外面は横なでされている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

11は口縁部が内傾し、口径15.0cmを測る。口縁部と肩部の間には凹線が引かれている。内外面とも横なでされ、色調はにぶい黄褐色を呈する。

12は胴部の破片で、把手の一部も確認できる。胴部には幅2.5cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内外面とも横なでされており、色調は黒色を呈する。

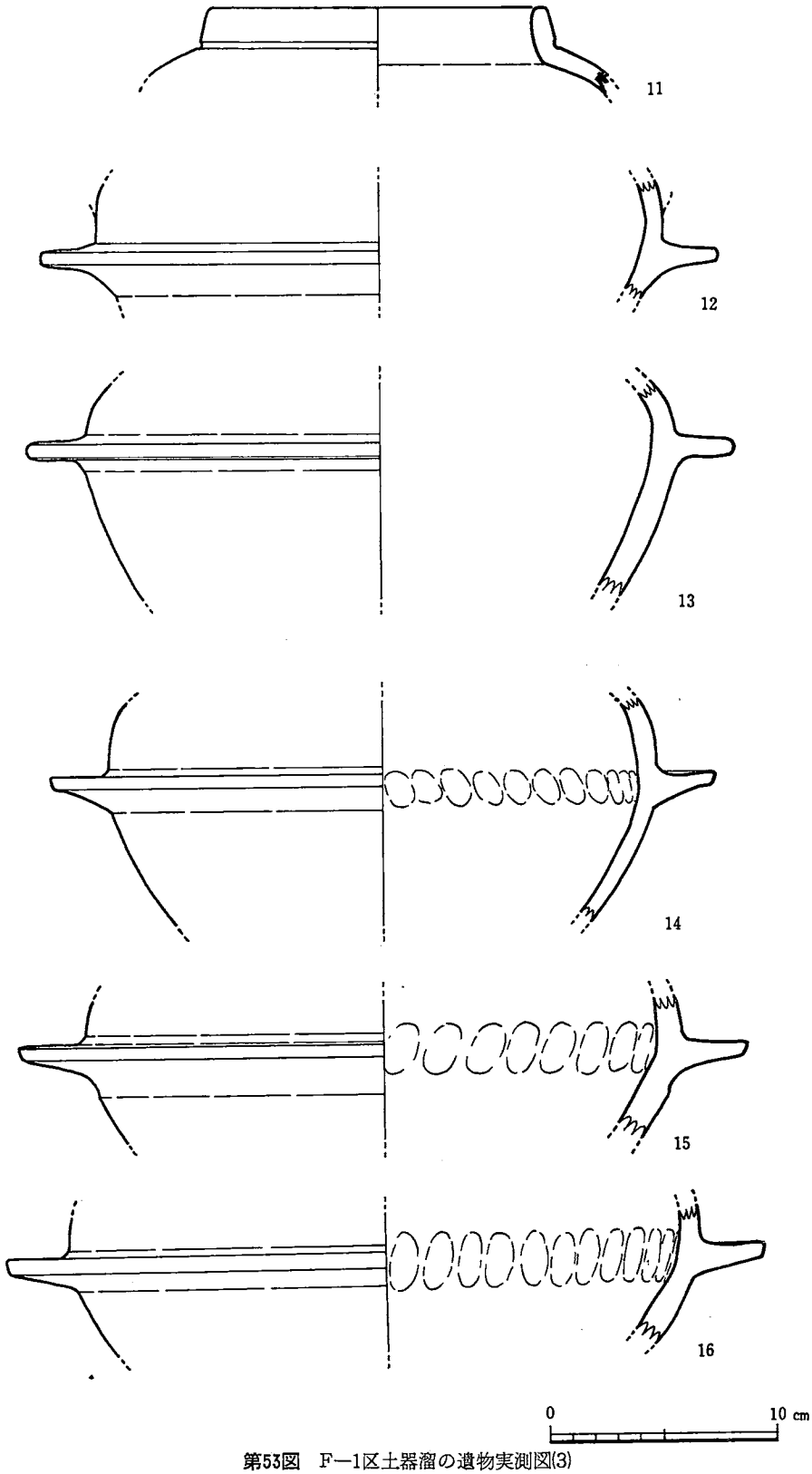
13は胴部に幅2.5cmの鍔状凸帯のついた破片で、器面は荒れている。色調は橙色を呈する。

14は胴部の破片で、やや上向きの幅2.5cmの鍔状凸帯をめぐらしている。胴部内面には指圧痕が残っており、内外面とも横方向に研磨している。色調はにぶい褐色を呈する。

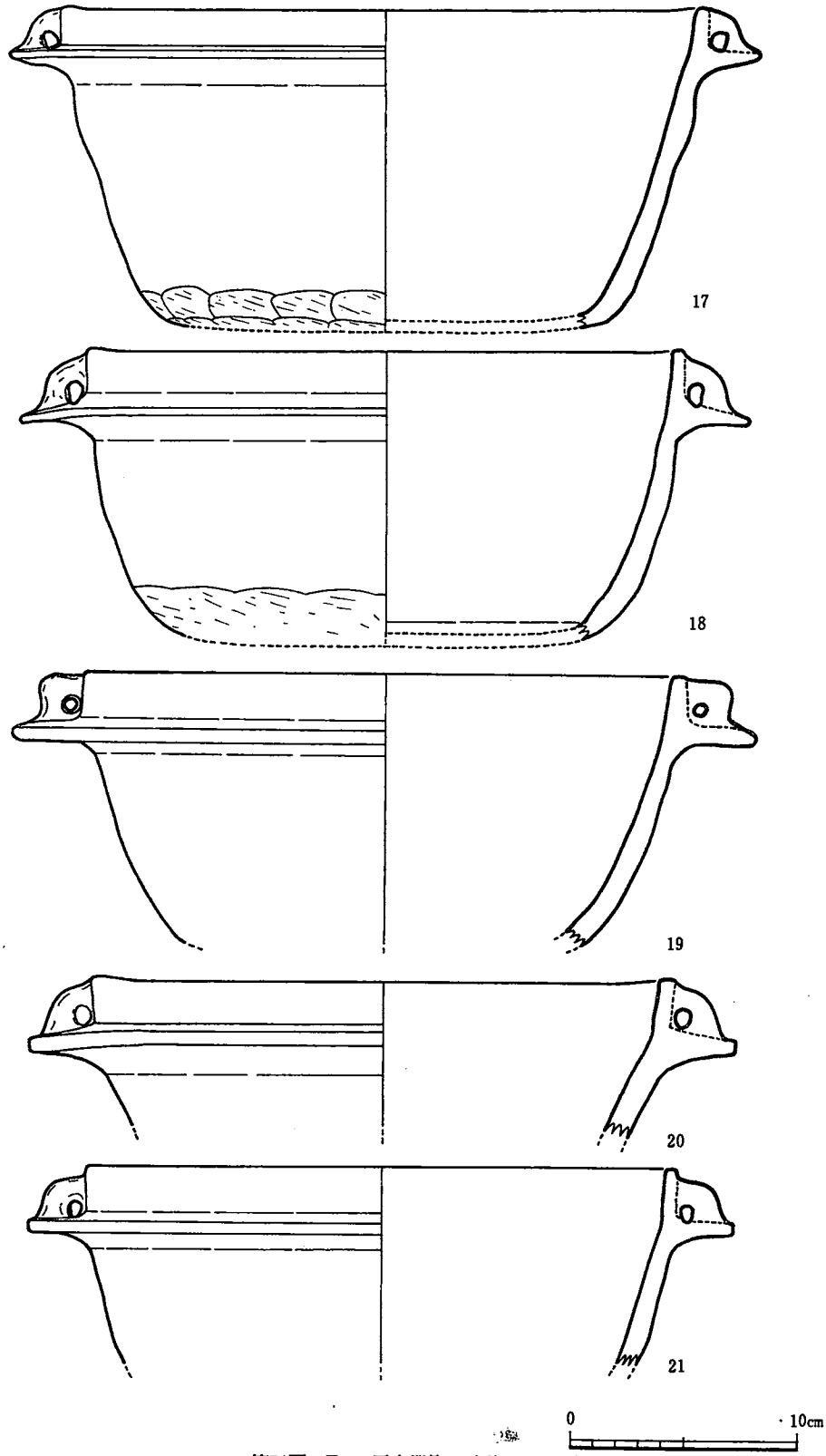
15も胴部の破片で、幅3.0cmの鍔状凸帯がついている。内面には指圧痕が残っている。色調はにぶい橙色を呈するが、胴部下半は煤けている。

16は胴部に2.8cm幅の鍔状凸帯をめぐらした破片である。色調はにぶい黄色を呈するが、器面はひどく荒れている。

第54図〜第56図の17〜32は土製鍋の破片である。口縁部はほぼ直口し、その直下に鍔状凸帯をめぐらし、鍔状凸帯の上面に一対の横に穴のあいた把手がつき、胴部は張ることなく、底部



第53図　F—1区土器溜の遺物実測図(3)



第54図　F—1 区土器溜の遺物実測図(4)

は平底となっている。胎土には砂粒を混入している。鍔状凸帯以下には煤が付着しており、煮沸に使用されたことがわかる。

17は口径28.6cmで、幅2.3cmの鍔状凸帯がつき、高さは14.1cmと推定される。内外面とも研磨しており、底部は薄くヘラ削りしている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

18は口径26.4cmを測り、幅3.0cmの鍔状凸帯がつき、高さは12.9cmと推定される。内外面とも横なでされている。底部は薄くヘラ削りしている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

19は口径26.5cmを測り、幅3.1cmの鍔状凸帯がついている。高さは12.5cm前後と推定される。内外面とも研磨されており、色調は灰黄橙色を呈する。

20は口径25.8cmで、鍔状凸帯は幅3.5cmを測る。内外面とも横なで調整されており、色調は灰色を呈する。

21は口径26.0cmを測り、幅2.6cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内外面とも研磨されているが、内面には細かいハケ目も残っている。色調は灰白色を呈する。

22は口径25.8cmで、幅2.8cmの鍔状凸帯をめぐらし、高さは12.5cmと推定される。内外面とも研磨されており、色調は橙色を呈する。

23は口径24.0cmを測り、幅2.6cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内外面とも研磨されており、色調は橙色を呈する。

24は口径25.2cmで、幅3.0cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内外面とも研磨されており、色調は褐灰色を呈している。

25は口径27.6cmを測り、幅2.7cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内外面とも研磨されている。色調はにぶい黄橙色である。

26は口縁部が非常に薄くなっており、口径27.3cmを測る。鍔状凸帯は幅2.8cmを測る。内外面とも研磨されており、色調はにぶい橙色を呈する。

27は口縁部が外傾しており、口径26.6cmを測り、幅2.4cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内外面とも研磨され、色調はにぶい黄橙色を呈している。

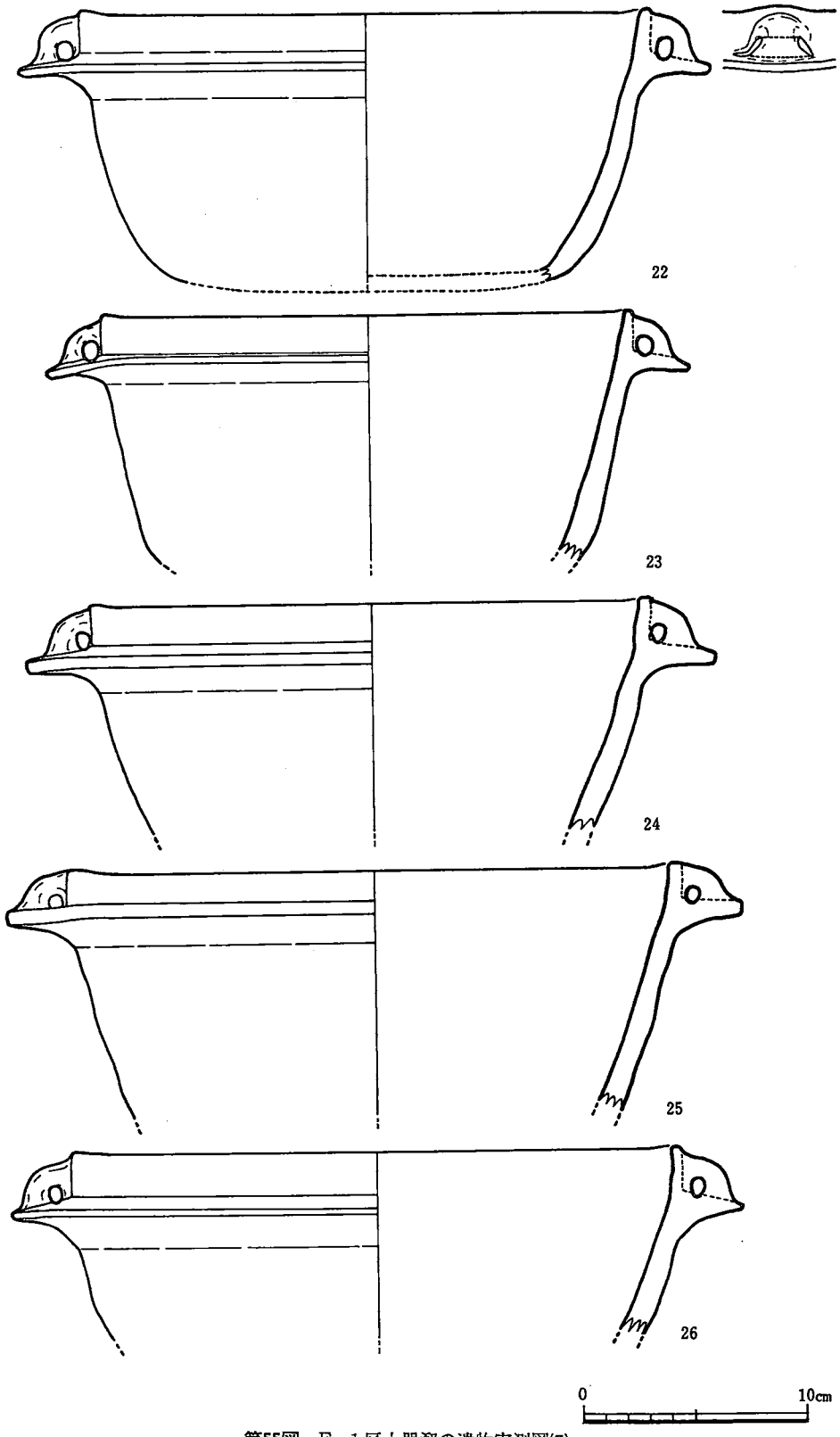
28も口縁部が外傾しており、口径26.0cmを測る。鍔状凸帯の幅は2.6cmを測る。内外面とも研磨されており、色調は橙色を呈する。

29は口径25.3cmを測り、幅2.9cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内外面とも研磨されており、色調は暗灰黄色を呈する。

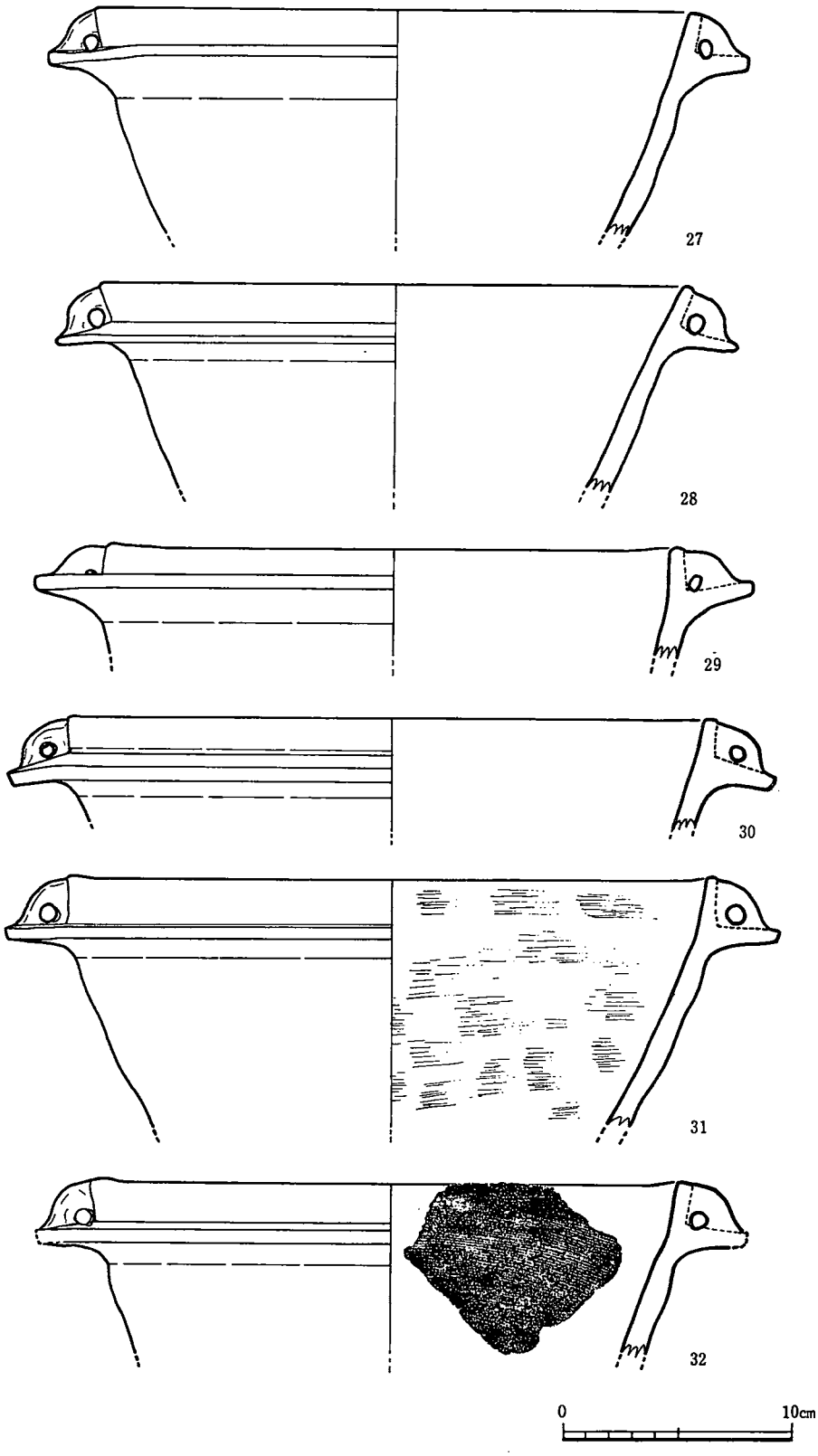
30は口径28.4cmで、幅28.cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内外面とも横方向の研磨がみられ、色調は灰色を呈する。

31は口径28.6cmを測り、幅2.8cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内面は横方向の細かいハケ目がみられ、外面は研磨されている。色調はにぶい黄橙色〜黒色を呈している。

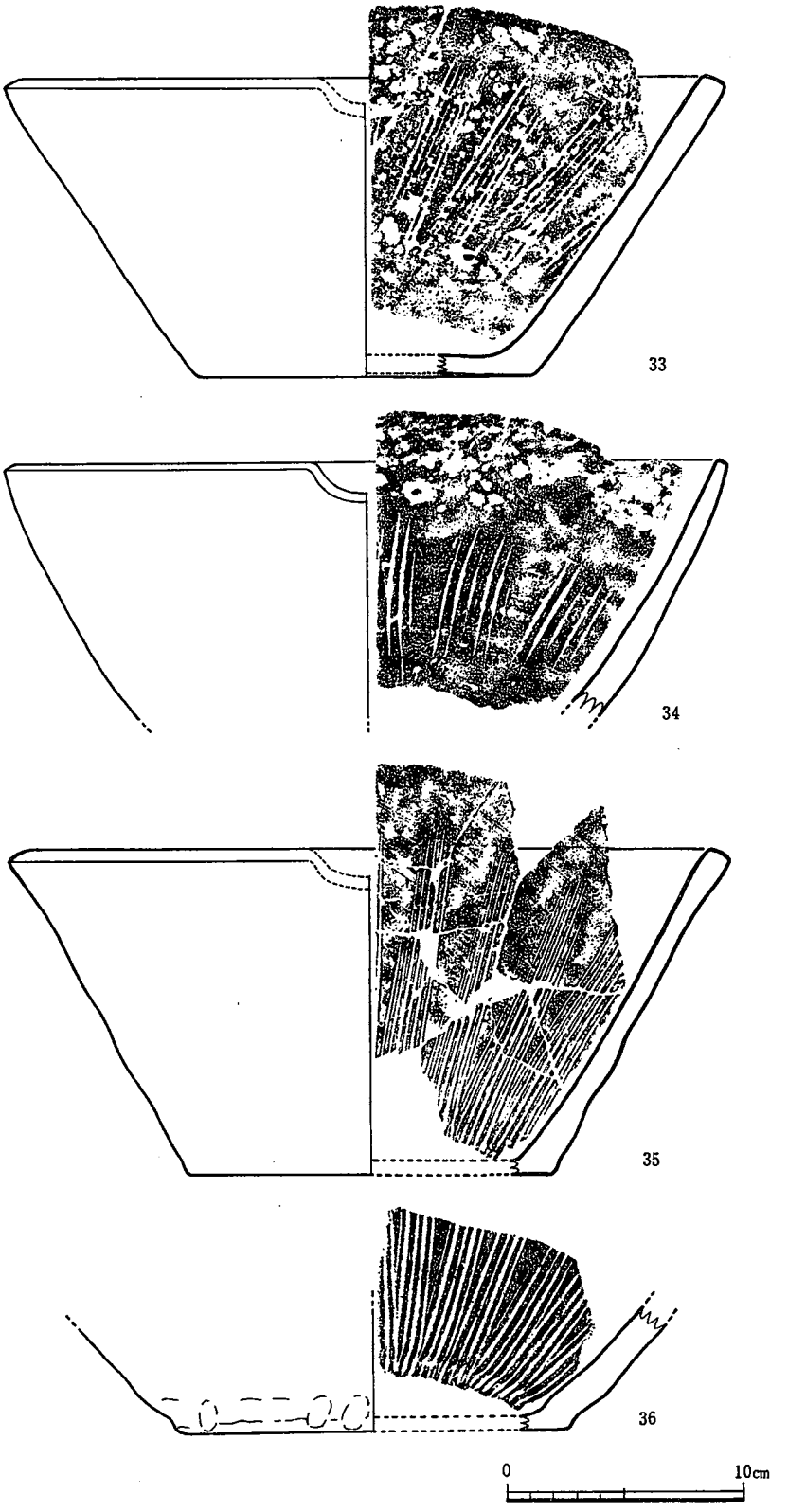
32は口径26.6cmを測り、幅2.7cmの鍔状凸帯をめぐらしている。内面はハケ目調整されており、外面は研磨されている。色調は灰色を呈している。



第55図　F—1 区土器溜の遺物実測図(5)



第56図　F—1区土器溜の遺物実測図(6)



第57図　F—1 区土器溜の遺物実測図(7)

第57図～第59図の33～50は擂り鉢である。底部は平底で、体部は直線的に開いて口縁部に至っている。口縁部は片口である。胎土は砂粒を混入している。内面の特に底付近は使用により磨耗している。

33は口径30.4cmで、高さ12.5cmを測る。内面には5本単位の櫛目が間隔をあけてつけられている。内外ともなで調整されているが、器面が荒れている。色調は浅黄色を呈する。

34は口径30.5cmを測る。内面に目の粗い櫛目がつけられているが、使用により磨耗して消えかかっている。口縁部付近は器面が荒れ、剝落している。色調はにぶい黄橙色を呈する。

35は口径30.5cm、高さ13.7cmを測る。内面に6本単位の割合密な櫛目がつけられている。内外面ともなで調整してあるが、外面はいくぶん凹凸がみられる。色調は灰黄色を呈している。

36は底部付近の破片である。内面に5本単位の櫛目が割合密につけられている。色調はにぶい褐色を呈する。

37は口径33.8cm、高さ12.4cmを測る。内外面ともなで調整され、内面には5本単位の目の粗い櫛目がつけられている。色調は灰黄色を呈する。

38～43は擂り鉢の口縁部の破片である。

38は内面にやや間隔をあけて目の粗い櫛目をつけている。色調はにぶい橙色を呈する。

39も内面に間隔、目ともに荒い櫛目をつけている。色調はにぶい褐色を呈する。

40は内面をハケ目調整したあと目の粗い櫛目をつけている。色調はにぶい褐色を呈する。

41は内外面ともなで調整されており、内面に目の粗い櫛目がつけられている。色調は黄灰色を呈する。

42は内面に6本単位の櫛目を縦方向につけたあと重ねて斜め方向にもつけて格子目状にしている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

43の外面はなで調整であるが、内面はハケ目調整が残っており、その上に櫛目をつけている。色調は橙色を呈する。

44～50は体部から底部にかけての破片である。いずれも器面はなで調整され、底部付近には指圧痕が残っている。

44は内面に5本単位の目の粗い櫛目をつけ、底部内面にも方射状に同じ櫛目をつけている。色調はにぶい黄橙色を呈する。

45、46は内面に5本単位の目の粗い櫛目をつけている。色調は灰色を呈する。

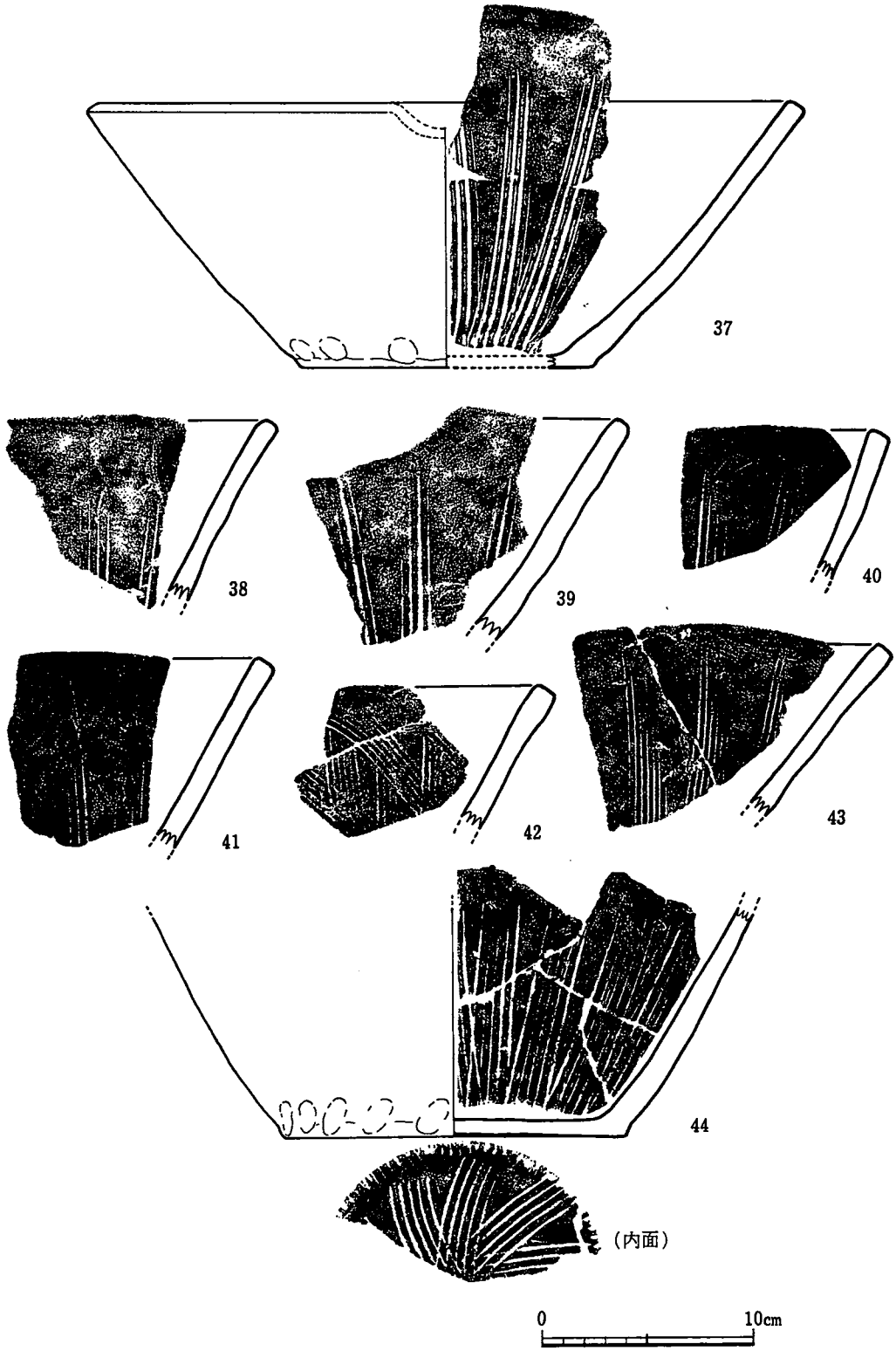
47は内面に5本単位の目の粗い櫛目をつけている。色調はにぶい橙色を呈する。

48は内面に間隔は粗いが、目の割合密な5本単位の櫛目をつけている。色調は浅黄色を呈する。

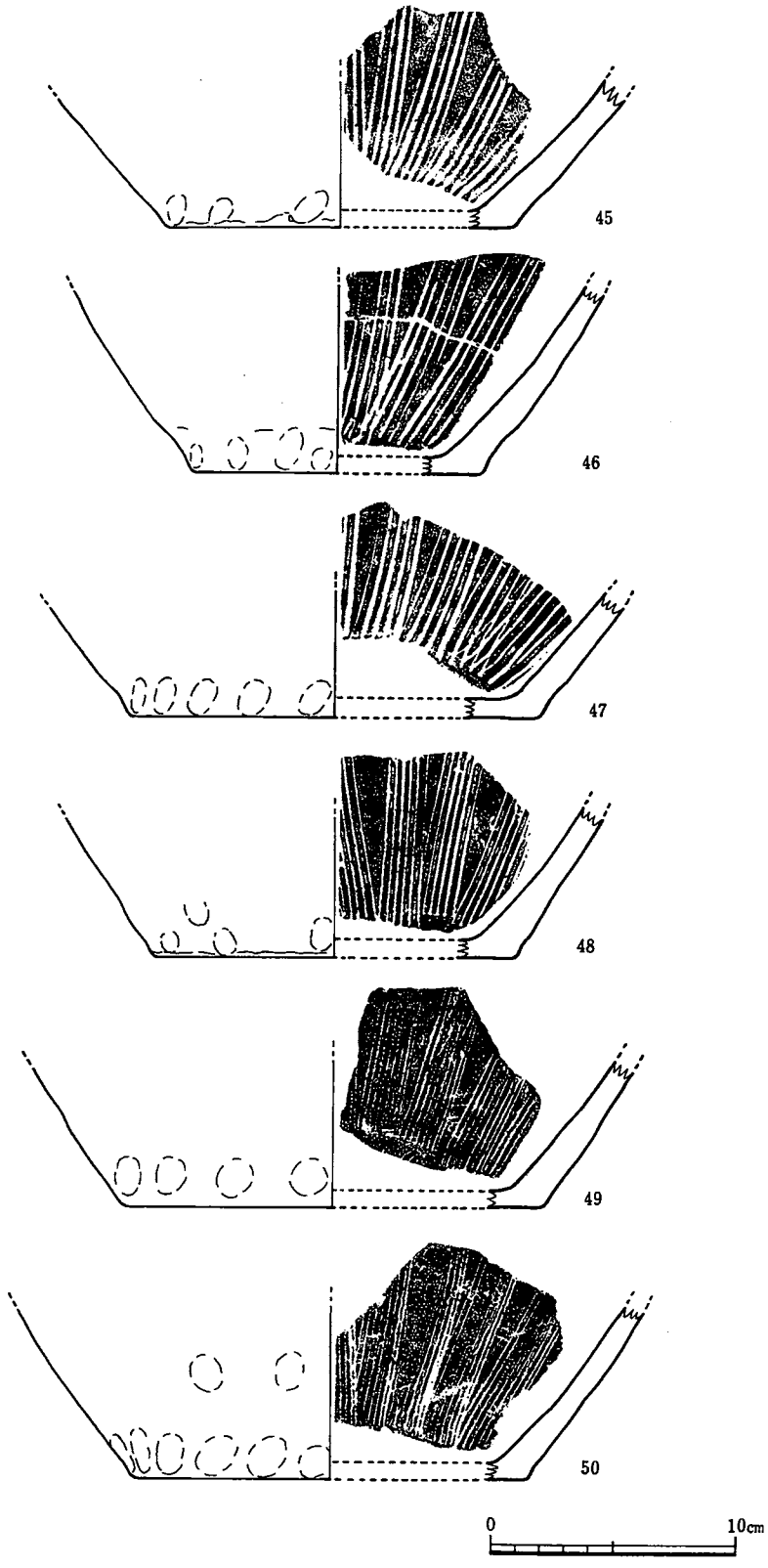
49は内面に8本単位の目の密な櫛目をつけている。色調は橙色を呈する。

50も内面に8本単位の目の密な櫛目をつけている。色調は灰色を呈する。

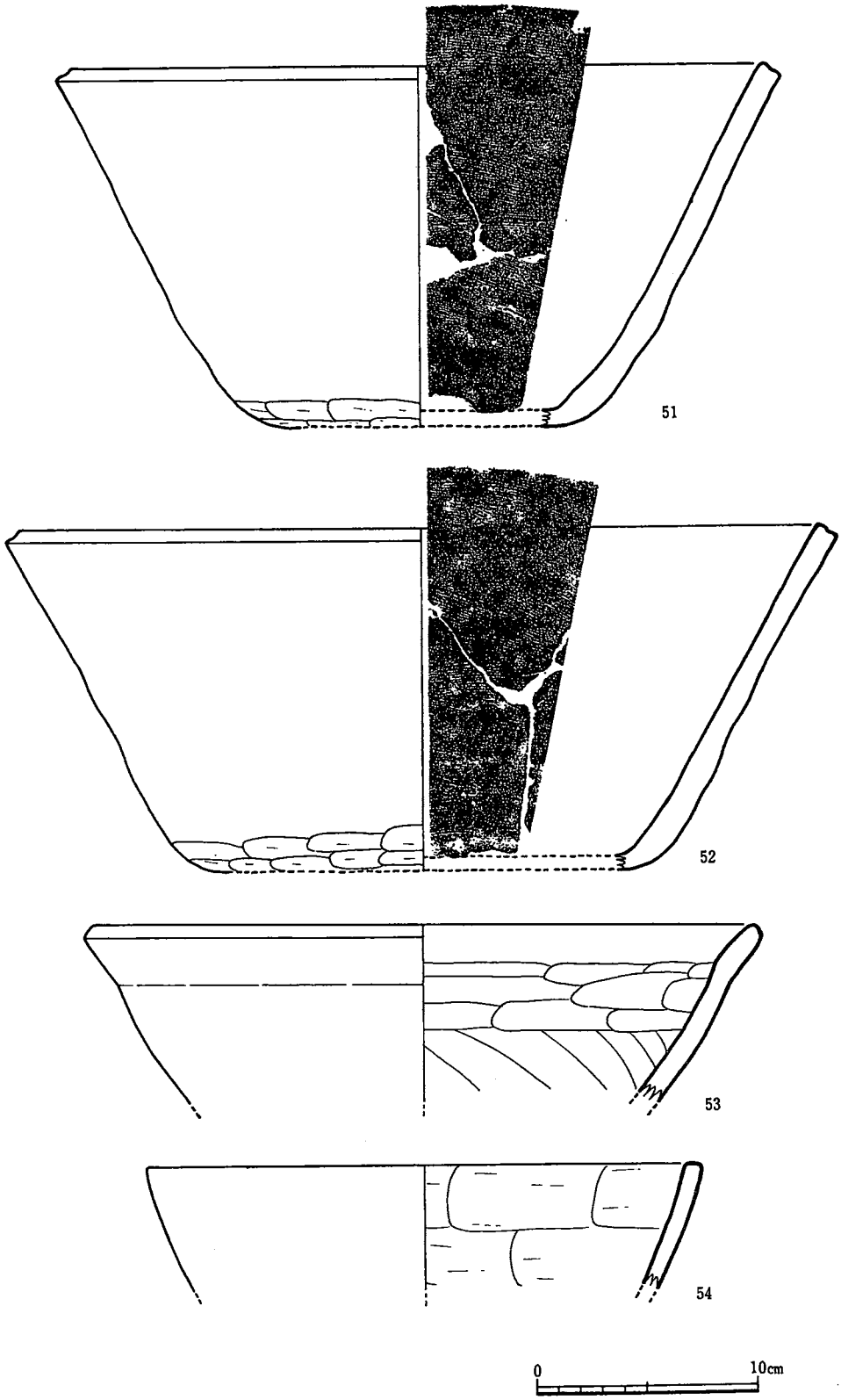
第60図51、52は揑ね鉢である。いずれも底面を欠くが平底とみられ、体部から口縁部へ直線



第58図　F—1 区土器溜の遺物実測図(8)



第59図　F—1 区土器溜の遺物実測図(9)



第60図　F—1 区土器溜の遺物実測図(10)

的に開いており、口縁端部は角ばるが、口唇部は凹んでいる。内面は細かいハケ目調整がみられ、外面はなで調整され、底部付近はヘラ削りされている。胎土はいずれも砂粒を混入している。

51は口径33.2cm、高さ15.1cmを測り、色調は灰黄色を呈する。

52は口径38.0cm、高さ15.2cmを測る。色調は黄灰色を呈する。

第60図53も 捏ね鉢とみられる。 口縁部は体部からさらに 屈折して開き、口径は30.8cmを測る。内面はヘラ削りされており、口縁部は内外面とも横なでされている。胎土には砂粒を混入しており、色調は灰黄色を呈する。

第60図54は器形が不明である。口径25.3cmを測る。内面はヘラ削りされ、外面は横なでされている。胎土には砂粒を混入しており、色調はにぶい黄橙色を呈する。

第61図55、56は火舎である。

55は口径39.3cmを測り、口縁部は短く直口し、その外面に板の端でつけたような文様を連続してつけており、口唇部の4カ所に山形凸起をつけている。胴部は丸く張り、口縁部と肩部の間と肩部の下方に凸帯をめぐらしている。胴部中程には1対の把手穴がみられる。肩部内面はヘラ削りされており、口縁部内外面と胴部外面にかけては横なでされている。胎土には砂粒を混入しており、色調はにぶい褐色を呈する。

56は胴部以下の破片である。胴部は直口し、最大径は27.5cmを測る。胴部下方には一条の凸帯をめぐらし、底部は平底であるが、高さ1.9cmの脚がつき、 この脚は3カ所についていたものとみられる。

第61図57は把手のついた器である。復原すると口径21.5cmを測り、把手は方形で 幅4.0cm、厚さ4.1cm、 長さ7.2cmあり、 内面は空洞で上面に直径0.5cmの穴がある。 全面研磨されている。胎土は砂粒を混入し、色調は灰色〜黒色を呈する。把手には柄がつけられていたものとみられ、上面の穴は目釘穴とみられる。機能は柄杓や炭火を運ぶ道具などが考えられよう。

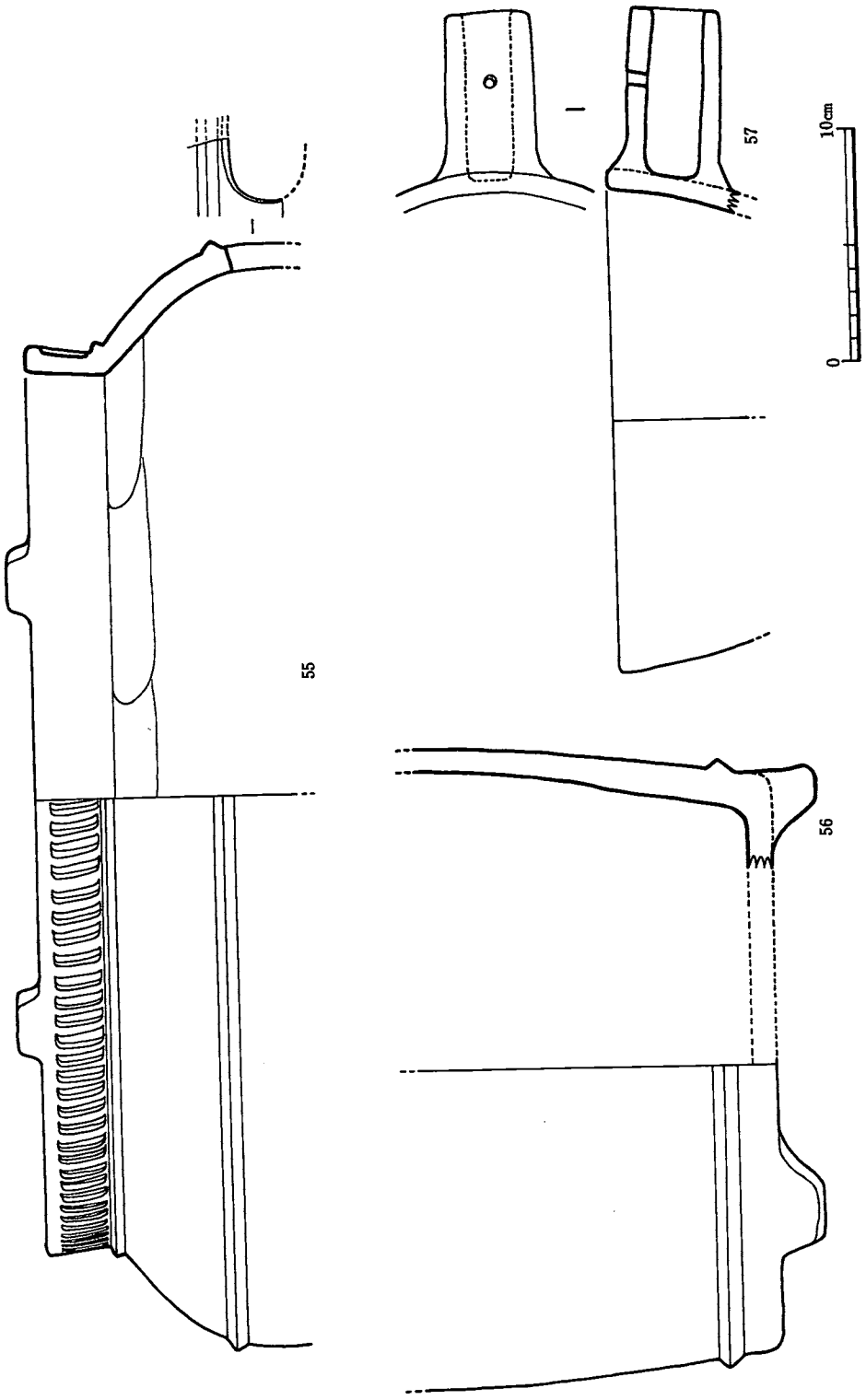
第62図58は火舎である。口径30.4cm、高さ11.9cmを測る。外面の体部上方はくぼんで段がついている。口縁部は内側にいくぶん肥厚している。底面は平らであるが、 高さ1.6cmの脚がついている。脚は3ケ所につくものとみられる。器面はなで調整しているようであるが、焼成が悪いため器面が荒れている。胎土には砂粒を混入しており、色調は灰色を呈している。

第62図59〜61は鉢である。

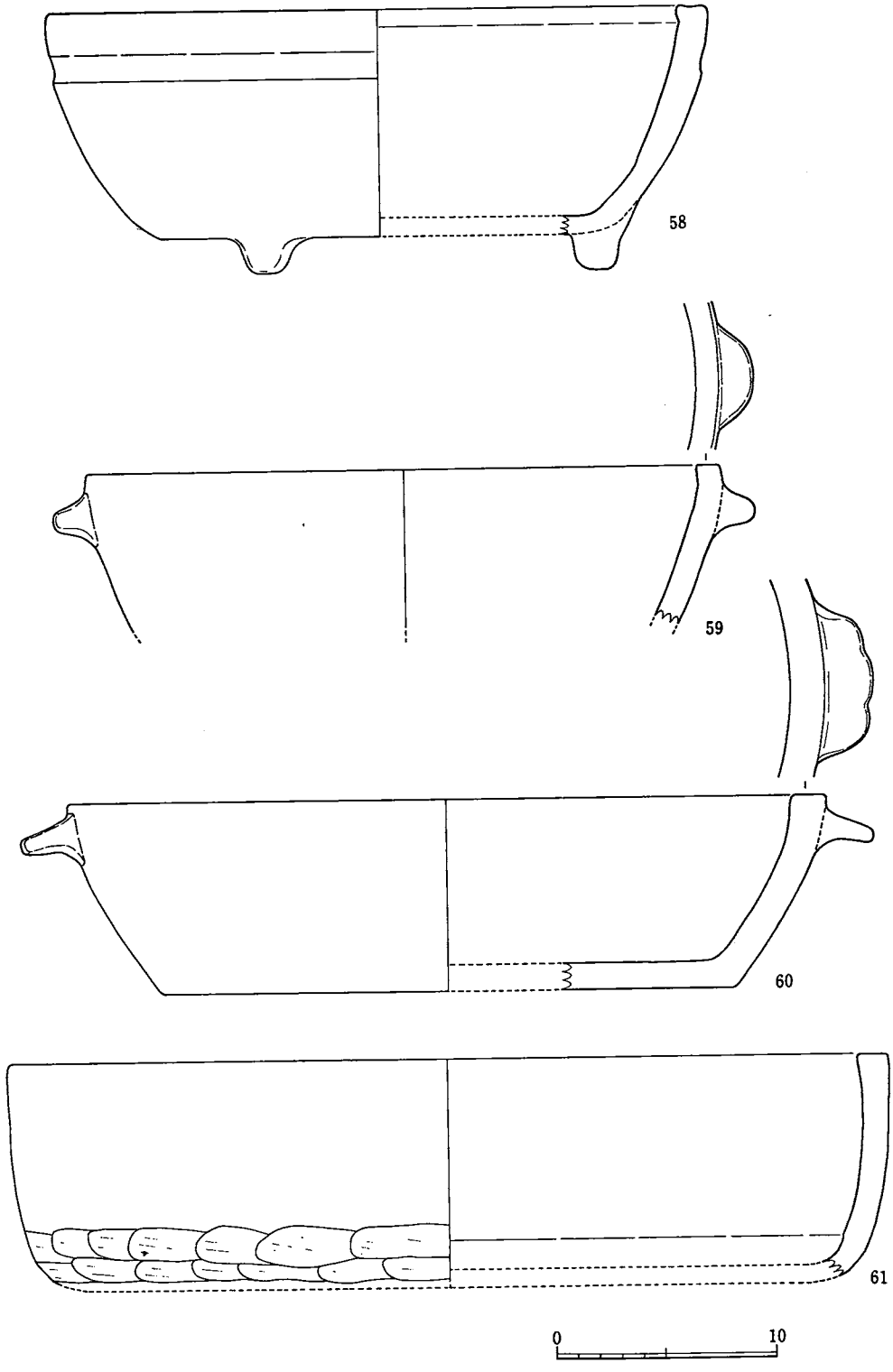
59は口径29.0cmを測り、外面に山形の把手がついている。内外面とも滑らかになで調整されている。胎土には砂粒を混入し、色調はにぶい黄橙色を呈する。

60は口径34.6cm、高さ8.7cmを測る。 底部は平底である。口縁部直下に山形の把手がついている。口縁部付近は横なでされており、その下方もなで調整されているようである。胎土には砂粒を混入しており、色調はにぶい黄橙色を呈する。

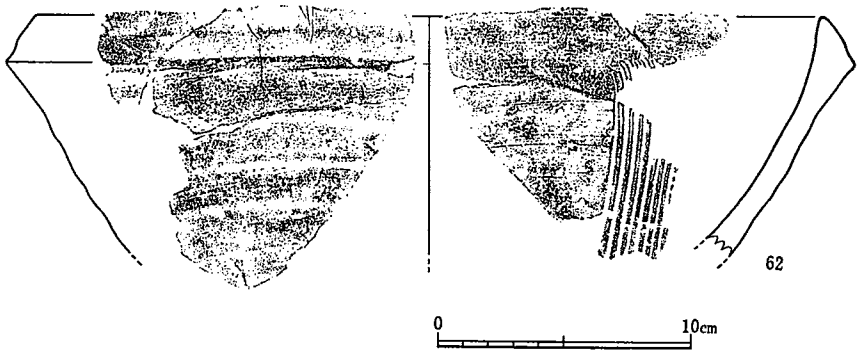
61は口径40.2cmを測り、底部は平底とみられ、高さは10.5cm程度と推定される。口縁部は内



第61図　F—1 区土器溜の遺物実測図(11)



第62図　F—1区土器溜の遺物実測図(12)



第63図　F—1区土器溜の遺物実測図(13)

彎ぎみに直口し、端部は角ばる。内外面とも横なでされており、外面の底部付近はヘラ削りされている。胎土には砂粒を混入している。色調はにぶい黄色を呈している。

第63図62は備前焼の擂り鉢である。口縁部は断面三角形になっている。内外面とも横なでしており、内面には間隔をあけて櫛目をつけている。胎土は砂粒をいくぶん混入しており、焼成は非常に良い。色調は外面が明褐色、内面が灰褐色を呈する。口徑は33.6cmを測る。

これらの遺物は室町時代のものである。従って室町時代の土器溜とみることができる。

(4) 貝　塚

Ⅱ地区の西端の斜面にある貝塚である。調査以前に近世墓地掘り上げのため半分ほど削平されていた。層位ではⅢ層としたが（第43図）、Ⅱ層との前後関係は不明である。3つのブロックに別れているが、2つのブロックは小さい。現状では（半分ほど削られている）最大のブロックは厚さ20cmで広がりは70cm×60cmである。他のブロックは薄く直径20cmぐらいである。

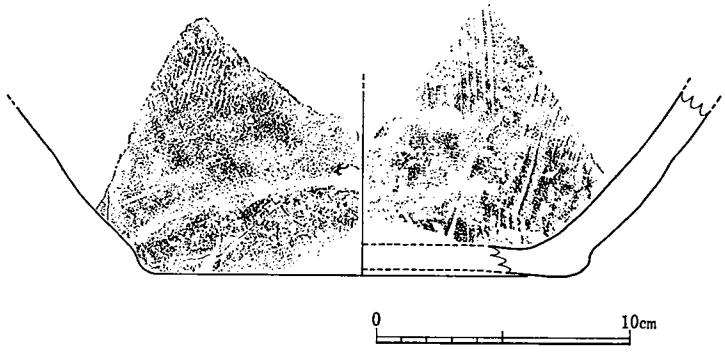
この貝塚の貝の分類と個体数は以下の通りである。

イタボガキ科	マガキ	656
マルスダレガイ科	オキシジミガイ	21
〃	アサリ	7
〃	ハマグリ	1
フネガイ科	ハイガイ	2
タマガイ科	ゴマフダマガイ(？)	8
フナガタガイ科	ウネナシトマヤガイ	3
ミミズガイ科	ミミズガイ	1

このうちウネナシトマヤガイとミミズガイは食用にしたものではなく、たまたまマガキに付着していたものであろう。マガキを主とした貝塚といえる。

この貝層中から瓦器片2点と土師質皿の細片が出土した。

第64図は貝層中から出土した擂り鉢の底部付近の破片である。やや大形で底面径は16.5cmを



第64図　貝塚出土遺物実測図

測る。外面はハケ目調整したあと横なでしており、内面は横なでのあと櫛目をつけている。胎土は砂粒を殆んど含まず、色調は橙色〜黒色を呈している。使用により内面は磨滅している。室町時代頃の遺物とみられる。

他の１点の瓦器片は器形が不明であり、土師質皿は細片のため実測できなかった。

これらの遺物から貝塚は室町時代頃のものと推定され、当時の食生活の一端を示すものである。

(5)　Ⅳ層の遺物

Ⅱ地区のⅣ層はＦ－２区とＡ－４区で残存しており、中世の遺物が出土した。（第43図）

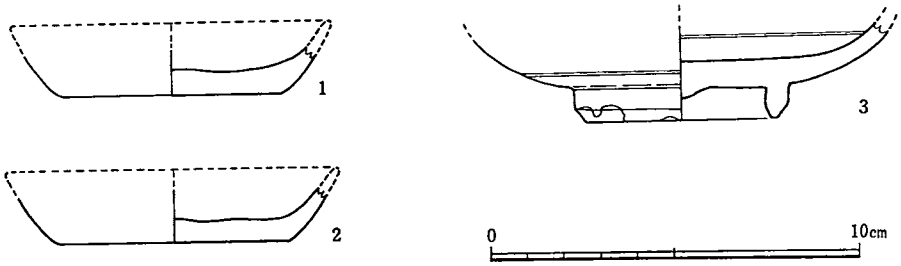
(イ)　Ｆ－２区Ⅳ層の遺物

Ｆ－２区Ⅳ層（黒褐色土層）はⅢ層（貝層）の下の層であるが、Ⅱ層（混礫暗灰褐色土層、土器溜を含む）との前後関係は不明である。

第65図、第66図の１〜６はＦ－２区Ⅳ層から出土した遺物のうち主要なものである。

１、２は土師質糸切底皿である。いずれも口縁部を欠くが、口径９cm、高さ２cm前後と推定される。内外面とも横なでされている。胎土は緻密で、色調は浅黄橙色を呈する。

３は明代の青磁器とみられる。口縁部を欠いているが割合浅いので鉢であろうか。胎土は灰色で、高台は削り出している。体部外面の下方には一条の沈線が引かれている。見込みにも一

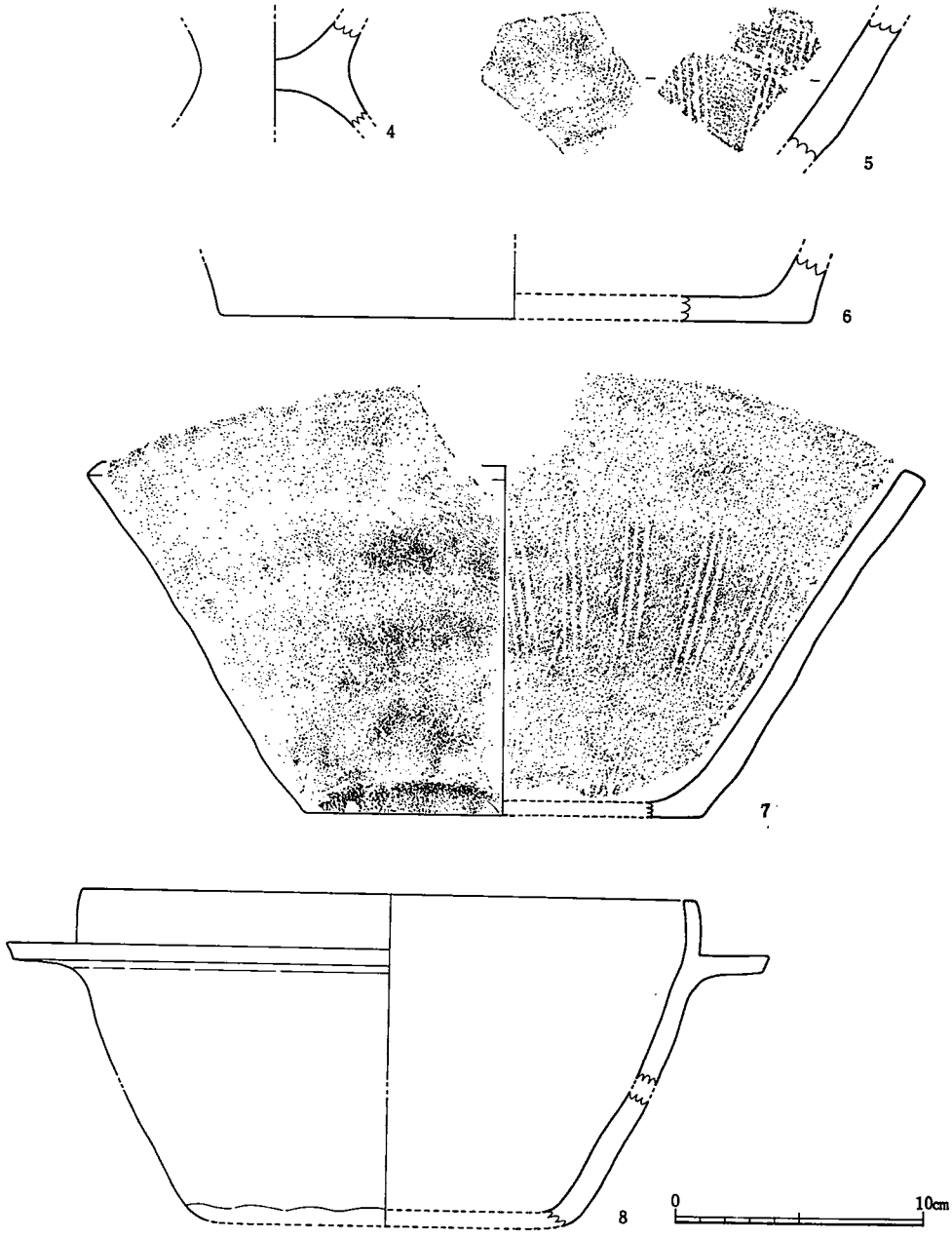


第65図　Ⅱ地区Ⅳ層の遺物(1)

条の沈線が引かれ、中央部に印花文がみられる。釉薬は薄緑をおびた透明で内外面ともかけられているが、高台部の畳付とその内側はかかっていない。器面には嵌入がみられる。

4は弥生時代後期の甕の脚台部付近の破片とみられるが磨滅が激しい。胎土には1～2㎜の砂粒を混入している。色調はにぶい黄橙色を呈している。

5は瓦器擂り鉢の破片である。外面はハケ目の上を横なでしており、内面はハケ目調整のあと櫛目をつけている。胎土にはやや砂粒を混入している。色調は灰色～黒色を呈している。



第66図　Ⅱ地区Ⅳ層の遺物(2)

6は瓦器の底部破片で、器種は鉢であろうか。平底で底面径は復原すると24cmを測る。胎土は砂粒を混入しており、色調は暗灰黄褐色を呈している。

これらの遺物のうち4は弥生時代のものとみられるが、その他は室町時代頃のものとみられる。従ってF－2区Ⅳ層はⅡ層および貝層（Ⅲ層）と同じく室町時代頃に堆積した層と推定される。

(ロ) A－4区Ⅳ層の遺物

第66図7、8はⅡ地区A－4区Ⅳ層から出土した遺物のうち主要なもので共に瓦器である。

7は擂り鉢で、口径34.0cm、高さ14.0cmを測る。外面はなで調整されているがいくぶん凹凸がみられ、底部付近には指圧痕が残っている。内面から口縁部外面にかけては横なでされている。内面に櫛目がつけられているが、使用による磨滅が著しい。胎土には砂粒を混入しており、色調は灰白色を呈する。

8は土製鍋である。口径は25.0cmを測り、高さは13.5cmと推定される。口縁部は内彎ぎみで、2.5cm下に幅2.8cmの鍔状凸帯がめぐっている。内面から口縁部および鍔状凸帯部にかけてはよこなでされており、その下方もなで調整されているようである。胎土は砂粒を混入しており、色調は灰色を呈している。鍔状凸帯から底部にかけては煤が付着している。

これらの遺物は室町時代のものであり、A－4区Ⅳ層もF－2区Ⅳ層と同じ層とみることができる。

(6) Ⅱ地区その他の中世遺物

ここではⅡ地区の中世遺物のうち中世遺構以外から出土した主なものを報告する。第67図～第70図の1～18がそれである。

第67図1は明代の染付皿である。口径12.2cm、高さ2.4cmを測る。口縁部は外反し、端部は丸くなっている。高台は広く低い、胎土は白色、染付は濃紺色で、外面の口縁部近くに一条の線、高台部外側に二条の線が引かれ、その間に唐草文が描かれている。また口縁部内側にも一条の線、見込みには二条の線とその中に染付文がみられる。釉薬は薄いみず色をおびた透明で、内外面ともかけられているが、畳付部のみはみられない。E－5区の近世ピット中に混入していた。

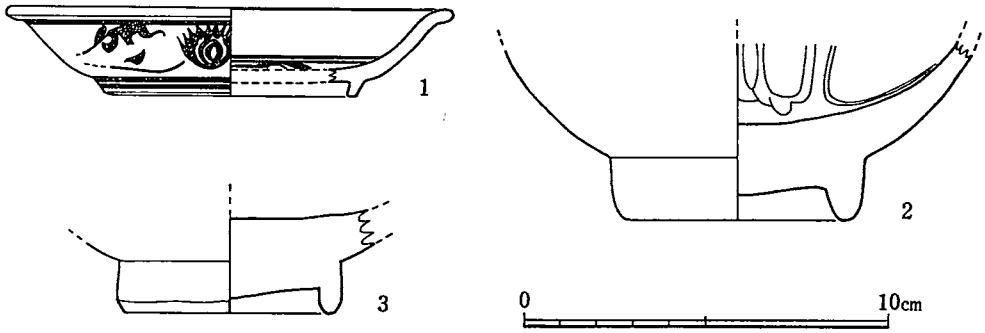
第67図2、3は青磁器の高台部で、いずれも明代のものとみられる。

2は碗で、高台部畳付は丸くなっている。胎土は灰色で、内面に線刻文がある。釉薬は灰緑色で内外面ともかけられており、高台の内側は釉薬を蛇ノ目に剝いでいる。内外面とも細かい嵌入がみられる。F－1区の西方で表面採集した。

3も碗の高台部である。胎土は浅黄橙色で、内外面とも灰緑色の釉薬がかけられているが、高台の内側は蛇ノ目に剝がれている。E－1区から出土した。

第68図4～7は瓦器擂り鉢である。

4は片口部付近の破片で、口径33.4cmを測る。口縁部付近は横なでされ、外面はなで調整、



第67図　Ⅱ地区その他の中世遺物実測図(1)

内面はハケ目調整のあと割合に目のつまった8本単位の櫛目をつけている。胎土は緻密で砂粒を殆んど含んでいない。色調は灰色を呈する。C－4区の近世ピット中に混入していた。

5は口径35.4cmを測る。器面調整は4と同じであるが内面の櫛目は4本単位で目が粗い。胎土はいくぶん砂粒を混入し、色調は灰白色を呈している。C－5区の近世ピット中に混入していた。

6も器面調整は4と同じである。内面には6本単位の櫛目がつけられている。胎土は殆んど砂粒を混入しておらず、須恵質で、色調は灰色を呈する。B－5区Ⅰ層から出土した。

7は擂り鉢の片口部付近の破片である。器面調整は他と同じであるが、外面はハケ目の上をなでている。内面の櫛目は5本を単位としている。胎土は緻密で砂粒を含んでおらず、須恵質で、色調は灰色を呈する。B－4区の近世ピット中に混入していた。

第68図～第69図の8～11は瓦器甕の口縁部である。

8は口径27.6cmを測る。口縁部は肩部から内反したあと外反し、端部は角ばっている。肩部には格子目叩きがみられ、口縁部は横なでされている。胎土はいくぶん砂粒を混入し、色調は黒色を呈する。B－2区表土から出土した。

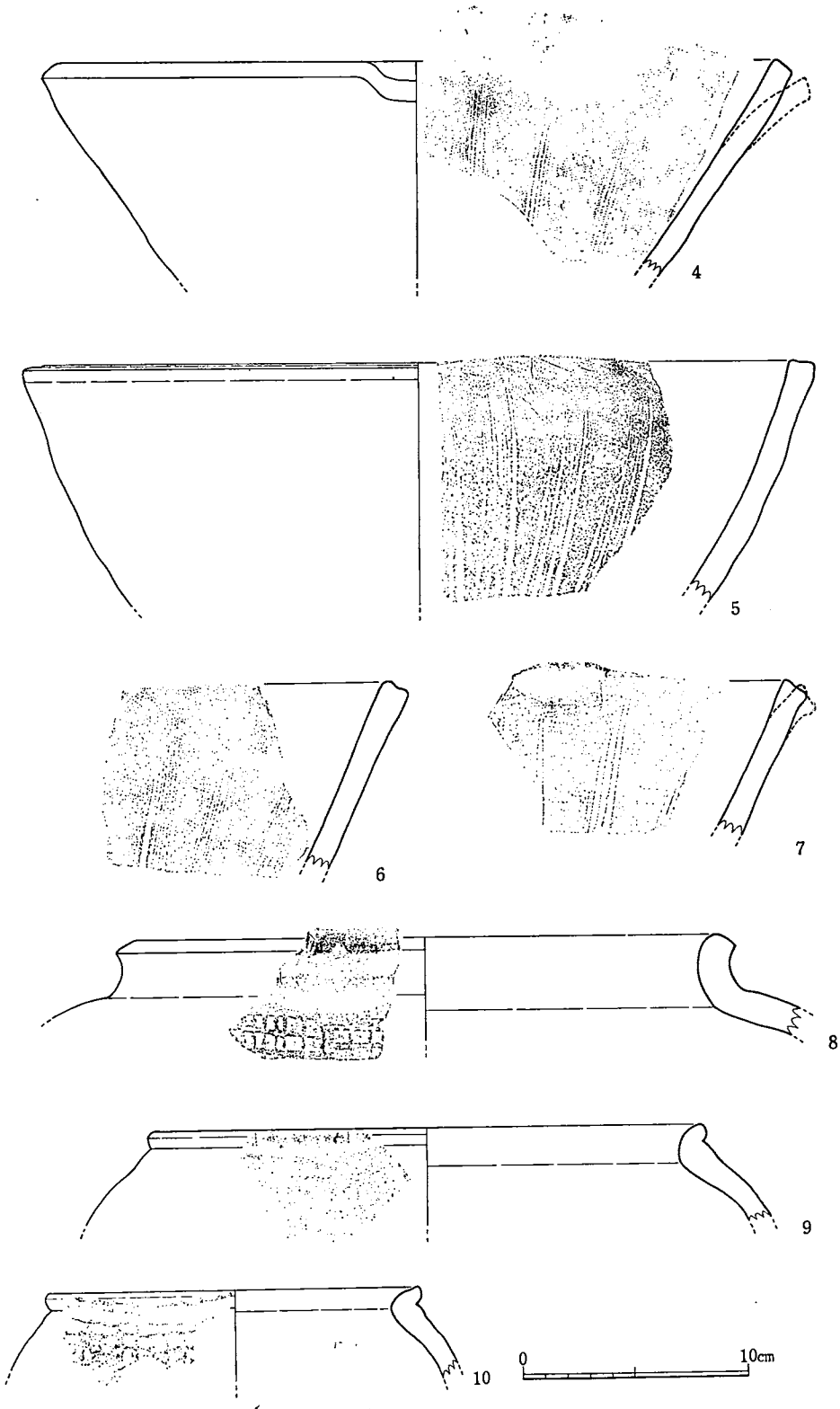
9は口縁部が短く外反し、口径25.0cmを測る。外面には格子目叩きがみられ、口縁部は横なでされている。胎土にはやや砂粒を混入し、色調は灰色を呈する。A－4区Ⅰ層から出土した。

10は口径16.8cmを測る。器形、器面調整とも9と同じであるが、やや小形である。胎土には砂粒を殆んど含まず、色調は灰色～黒色を呈する。E－1区Ⅰ層から出土した。

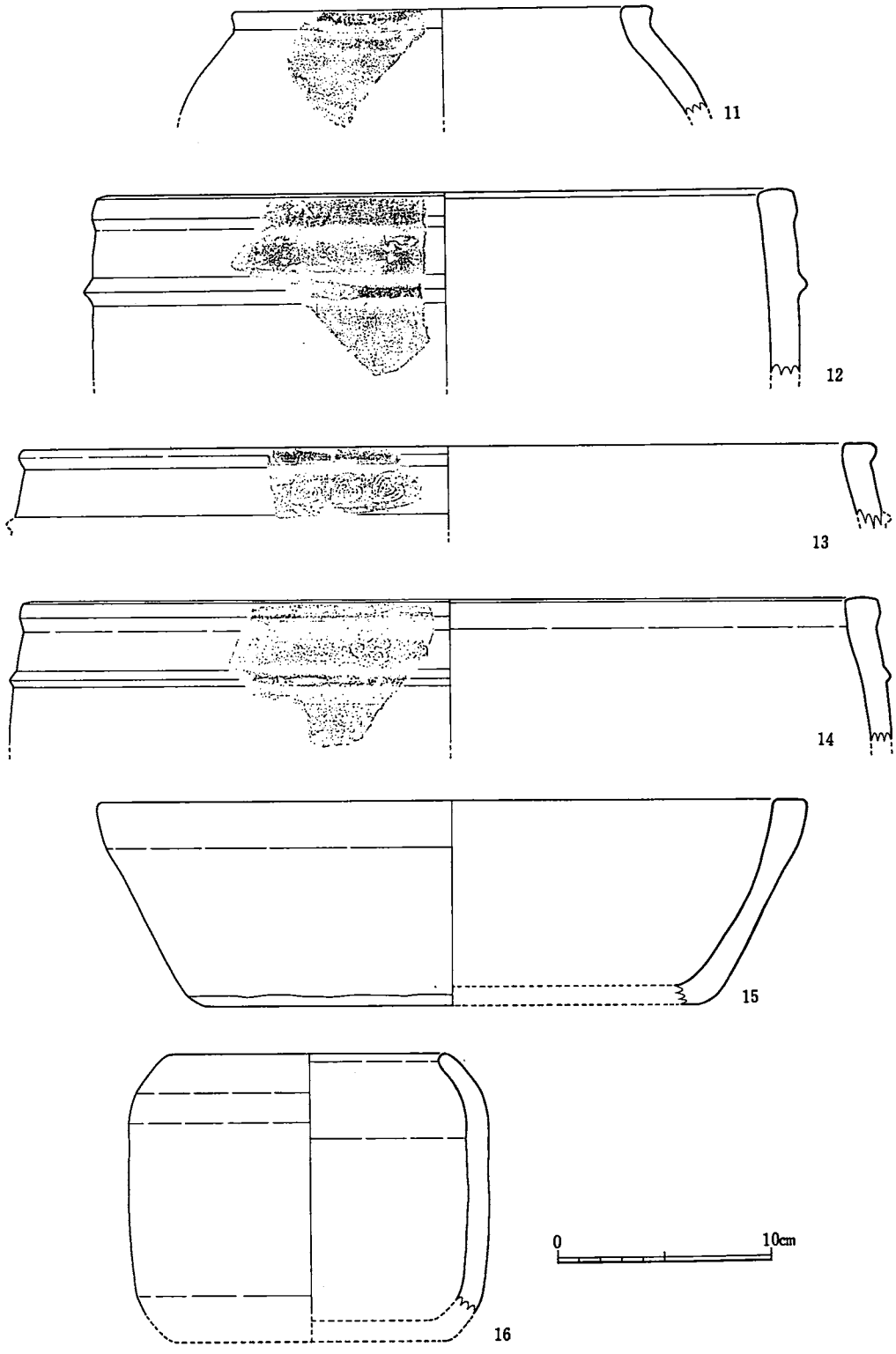
11は口径19.8cmを測り、口縁部は短く立ち上がり、平口縁となっている。内外面とも横なでされている。胎土にはやや砂粒を混入しており、色調は灰色を呈している。

第69図12～14は瓦器火舎とみられる。

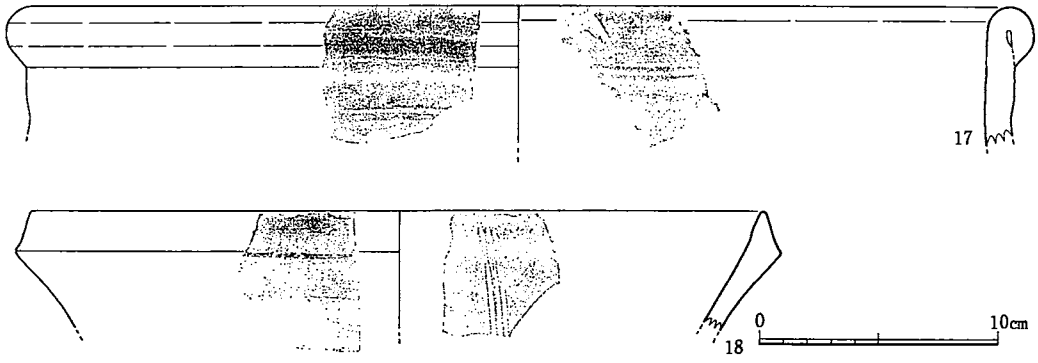
12は口径32.8cmを測る。口縁部は外側に肥厚し、口唇部から4.5cm下に一条の凸帯をめぐらしている。内外面とも横なでされており、口縁部と凸帯の間には菊花文のスタンプが押されている。胎土には砂粒を殆んど含んでおらず、色調は灰色を呈する。F－1区Ⅰ層から出土した。



第68図　Ⅱ地区その他の中世遺物実測図(2)



第69図　Ⅱ地区その他の中世遺物実測図(3)



第70図　Ⅱ地区その他の中世遺物実測図(4)

13は口径40.4cmを測る。口縁部は外方に肥厚し平口縁となっている。口唇部から3.5cm下に凸帯があるが欠損している。内外面とも横なでされており、口縁部と凸帯の間はほうずき形のスタンプで埋められている。胎土には砂粒をわずかに混入している。色調は灰白色である。E—4区Ⅰ層から出土した。

14は口径40.5cmを測る。器形、器面調整とも12に似ている。口唇部から3.5cm下に凸帯がついており、その間に梅花文のスタンプが押されている。胎土には砂粒をわずかに混入しており、色調は灰色を呈する。E—1区Ⅰ層から出土した。

第69図15は瓦器の鉢である。口径33.4cm、高さ9.5cmを測り、口縁部は肥厚し、平口縁で、底部は平底である。内外面とも横なでされているが、外面の底部近くはヘラ削りの上をなでているようである。胎土にはいくぶん砂粒を混入しており、色調は灰色を呈する。E—4区Ⅰ層から出土した。

第69図16は瓦器の火舎であろうか。口径13.0cmを測り、底部を欠くが高さ13.5cm程度と推定される。胴部は円筒形であるが口縁部は内彎し、底部付近も内彎しており、平底になるものとみられる。内外面とも横なでされており、胎土にはわずかに砂粒を混入している。色調は灰色を呈する。E—2区Ⅰ層から出土した。

第70図17は備前焼の甕の口縁部破片である。口縁部は直口し、玉縁となり、口径43.6cmを測る。内外面とも横なでされている。胎土には砂粒もいくぶん混入しており、色調はにぶい赤褐色を呈する。F—1区Ⅰ層から出土した。

第70図18は備前焼擂り鉢の口縁部破片である。口縁部は断面三角形で、口径31.2cmを測る。内外面とも横なでされ、内面に間隔をあけて5本単位の櫛目がつけられている。胎土にはいくぶん砂粒を混入しており、色調は橙色を呈している。

ここで紹介した遺物は室町時代のものとみられ、室町時代の建物に伴っていたものと推定される。

なお、時期は不明であるがⅡ地区からスラグ数点も採集された。

3. 近世の遺構と遺物

(1) ピット群

Ⅰ地区と同様、ピットのうち、長方形のものからは近世陶磁器が出土したので近世の柱穴用掘りかたとみることができた。このピットから建物の復原を試み、8棟の建物を復原できた。いくぶん誤った復原もあるかもしれないが、各々の復原建物について述べ、そのピット内出土遺物のうち、建物と関係する近世の陶磁器を紹介する。

(イ) Ⅱ-①建物（第72図）

Ⅱ地区の東端にある建物で、B・C-5・6区にまたがっている。ピットの大きさはいくぶん大小の差があるが60cm×100cm程を平均とする。建物は南北に長く、主軸はN－40度－Eにとっている。南北には1間を205cmとし3間の615cmあり、東西には2間分410cmの幅がある。この建物のすぐ北側に井戸がある。この建物は復原できた他の建物とは重複していない。

この建物のP.1とP.5およびP.8から近世陶磁器が出土した。

第72図1はP.1から出土したものである。古伊万里染付碗の口縁部付近の破片である。口縁部はいくぶん外反し、口径は13.2cmを測る。胎土は白色で、外面の口縁部に一条の線と体部に文様の青色染付がみられる。釉薬は透明であるが、いくぶん青みをおびている。これと接合する破片がⅡ-⑥建物のP.2から出土している。江戸前期～中期の作とみられる。

このほかP.1からは銅釉のかかった嬉野焼で内野山窯の碗とみられる小破片も出土している。

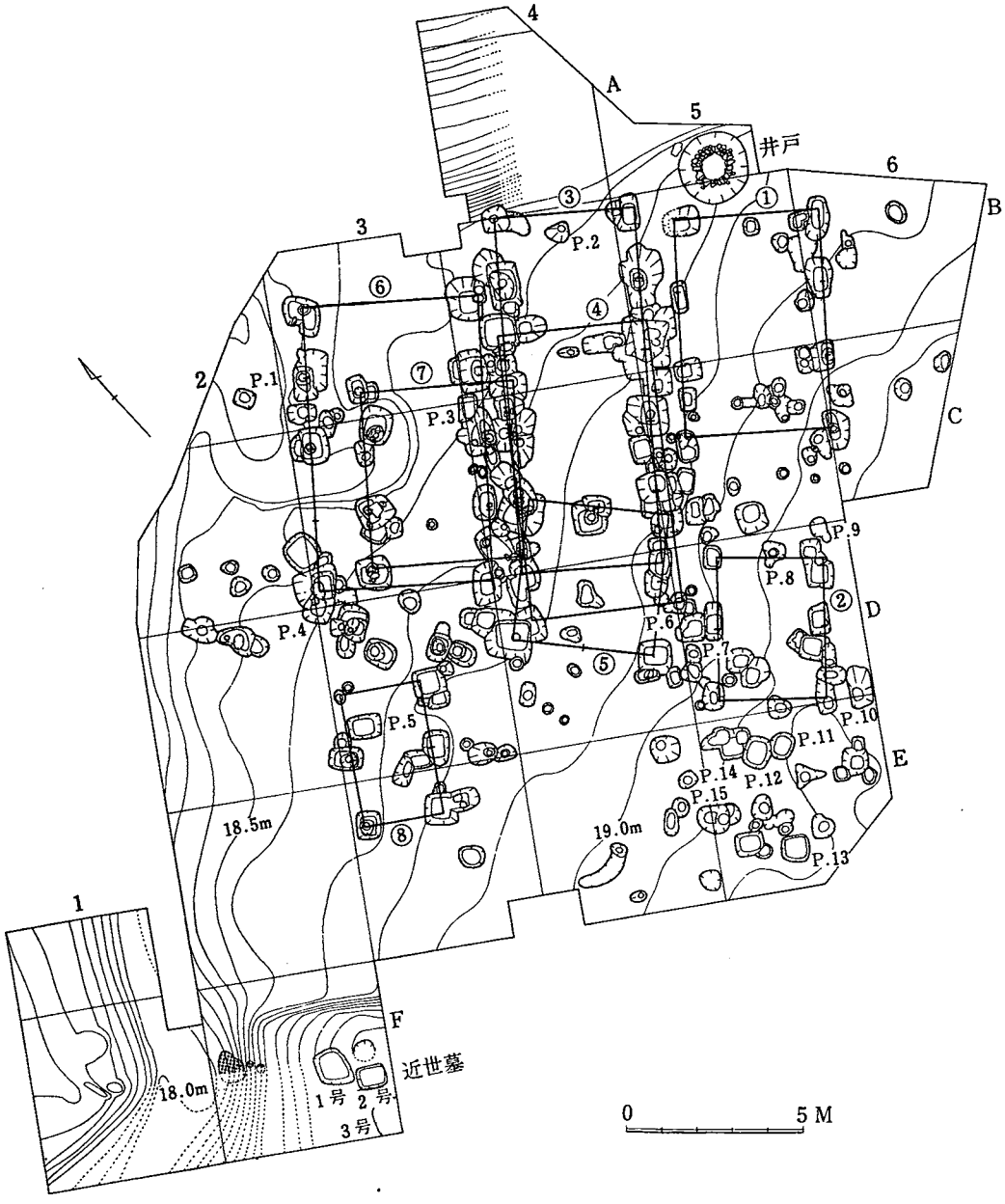
第72図2はP.5から出土した古伊万里染付碗の破片である。胎土は白色で、内面見込み部に横線、外面に鶴の紺色の染付がみられる。釉薬は透明で内外面ともかけられている。江戸時代中期の作とみられる。

第72図3もP.5から出土したものである。口径12.5cmを測る古伊万里染付皿で、口唇部は平たくなっている。胎土は白色で、外面に紺色の網目状の染付があり、内外ともやや青みをおびた透明の釉がかけられている。江戸中期の作とみられる。

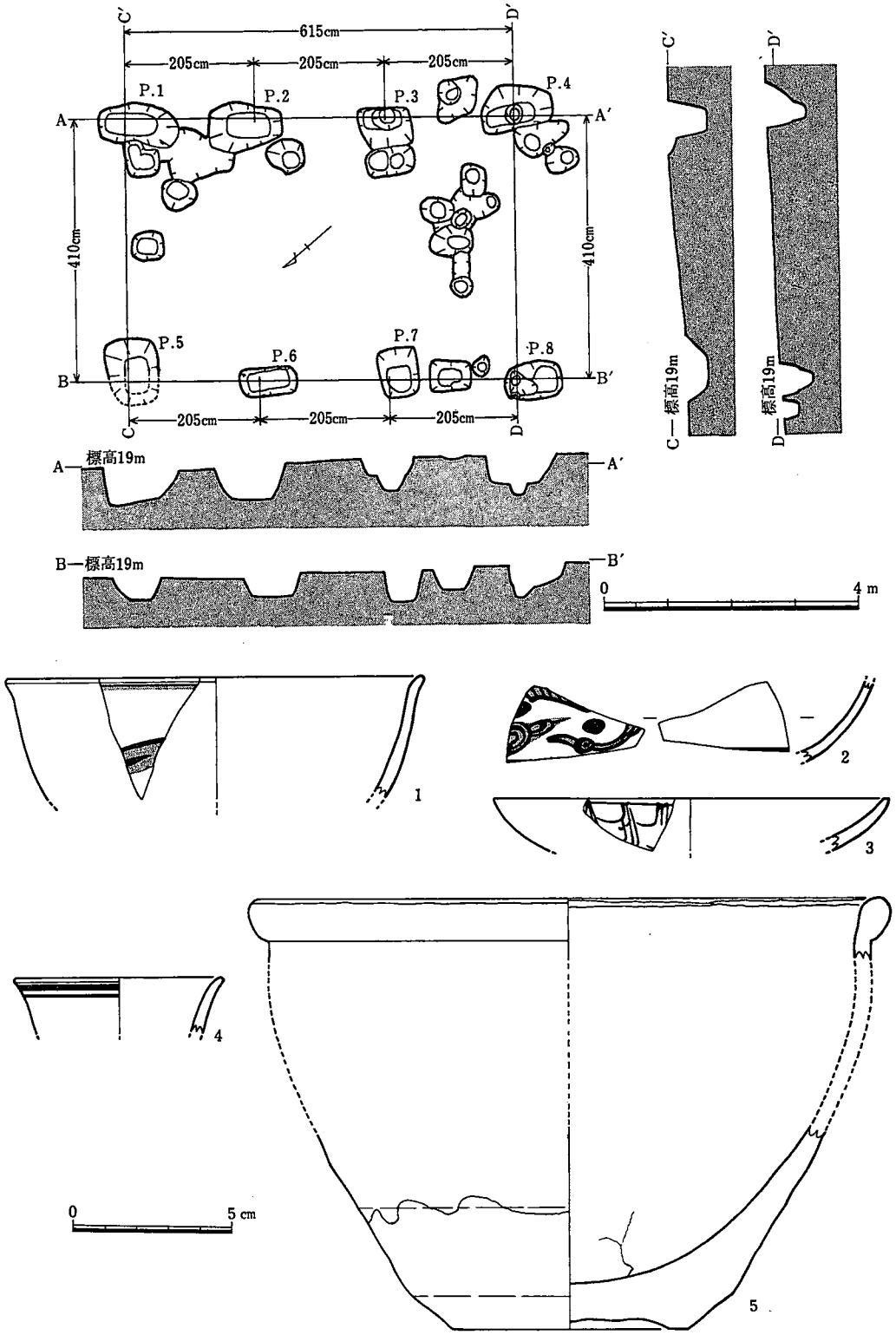
第72図4もP.5から出土した。古伊万里染付酒盃の口縁部の破片である。口縁部は外反し、口径6.6cmを測る。胎土は白色で、外面に青灰色の二条の線の染付がみられる。釉薬は灰色をおびた透明で内外ともかけられている。江戸中期の作とみられる。

P.5からは古伊万里輪花文縁皿（江戸中期）、唐津焼玉縁片口（江戸前期～中期）、黒牟田焼擂り鉢（江戸中期）などの小破片も出土している。

第72図5はP.8から出土したものである。口縁部と底部の破片がみられる。口径は20.4cmを測り、玉縁である。底面は削って上げ底にしている。唐津焼玉縁の片口とみられる。胎土は



第71図　Ⅱ地区近世遺構分布図



第72図　Ⅱ—①建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

灰色で、内外とも緑灰色の釉薬がかけられているが、口唇部と底部付近はかけられていない。江戸前期〜中期の作とみられる。

またP．1とP．5からはスラグも出土した。

以上の遺物からⅡ-①建物は江戸時代中期頃のものとみられる。

(ロ) **Ⅱ-②建物**（第73図）

Ⅱ地区の南東端、D—5区にある建物である。ピットの大きさは50cm×80cm前後である。南北に長く、主軸をN—43度—Eにとっている。南北には一間を200cmとし、2間の400cmあり、東西は一間半分の300cm幅ある。

この建物は復原できた他の建物とは重複していない。

この建物のP．4とP．6から近世陶磁器が出土した。

第73図1はP．4から出土した古伊万里小碗片である。外反した口縁部の破片で、口径7.8cmを測る。胎土は白色で、透明の釉薬を内外面ともかけている。江戸前期の作かとみられる。

第73図2もP．4から出土したものである。嬉野焼で内野山窯で焼かれた皿の高台部付近の破片で、胎土は肌色を呈している。内面と外面の上半に黄灰色の灰釉がかけられ、見込みは蛇の目剝ぎがみられる。高台部は削り出して作られている。江戸中期ないしやや下がった頃の作である。

P．4からはこのほか古伊万里染付の破片などが数点出土している。

第73図3はP．6から出土した嬉野焼内野山窯の碗の高台部付近の破片である。胎土は白色で高台部を削り出している。内面にはやや灰色をおびた透明の灰釉がかけられ、外面には深緑ないし青緑色の銅釉がかけられているが、高台部付近はかけられていない。江戸中期ないしやや下がった頃の作である。

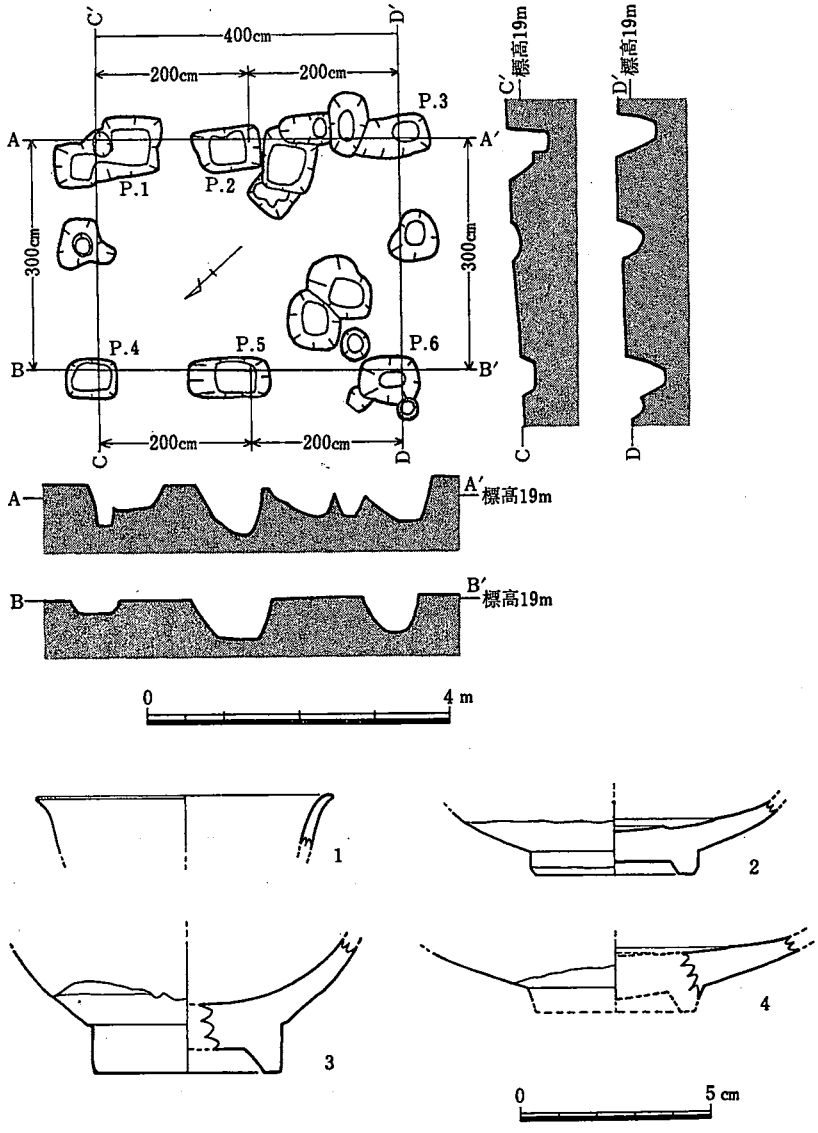
第73図4もP．6から出土したものである。嬉野焼内野山窯の皿の破片である。胎土は白色であるがやや肌色をおびている。内面には緑青色の銅釉がかけられ蛇の目剝ぎされており、外面の体部にはやや緑をおびた透明の灰釉がかけられている。江戸中期ないしやや下がった頃の作である。

P．6からはこのほかにも近世陶磁器の小破片3点が出土している。

以上の遺物からⅡ-②建物は江戸中期あるいは後期にかかった頃のものとみられる。

(ハ) **Ⅱ-③建物**（第74図）

Ⅱ地区の中央部から北東部へのびている建物で、B・C—5・6区、D—6区に位置する。この地区ではピットが複雑に重複しており、ピットの大きさもわかりにくいが、60cm×90cm程度のものから90cm×110cm程度のものまであるようである。ピットの底には柱の高さを調節するため敷石を置いているものもある。建物は南北に長く、主軸をN—38度—Eにとっている。南北方向には1間を200cmとして5間分のピットが並び、総長1000cmある。東西方向は2間分



第73図　Ⅱ—②建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

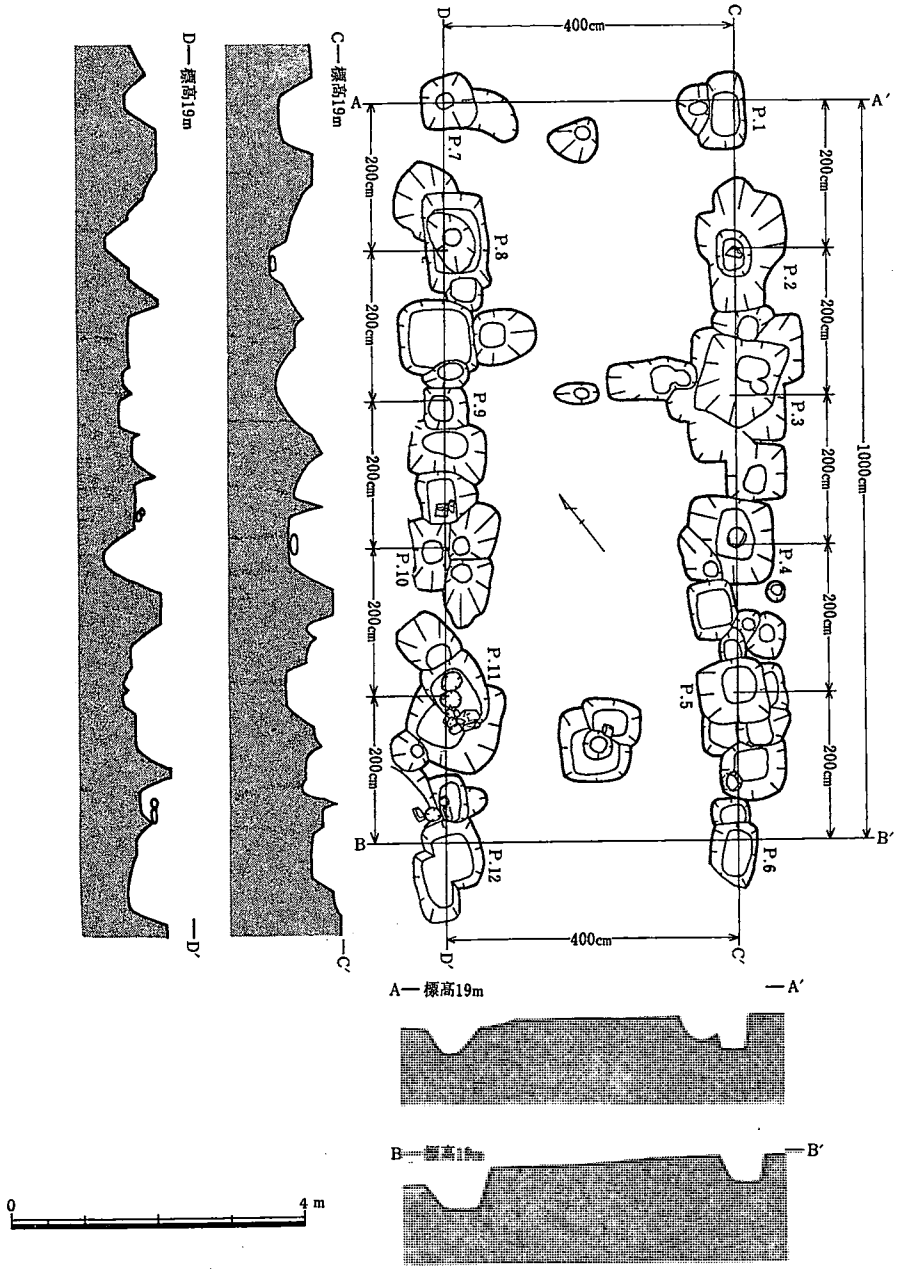
の幅400cmある。

この建物は復原できたⅠ—④建物と1—⑤建物およびⅠ—⑦建物と重複している。

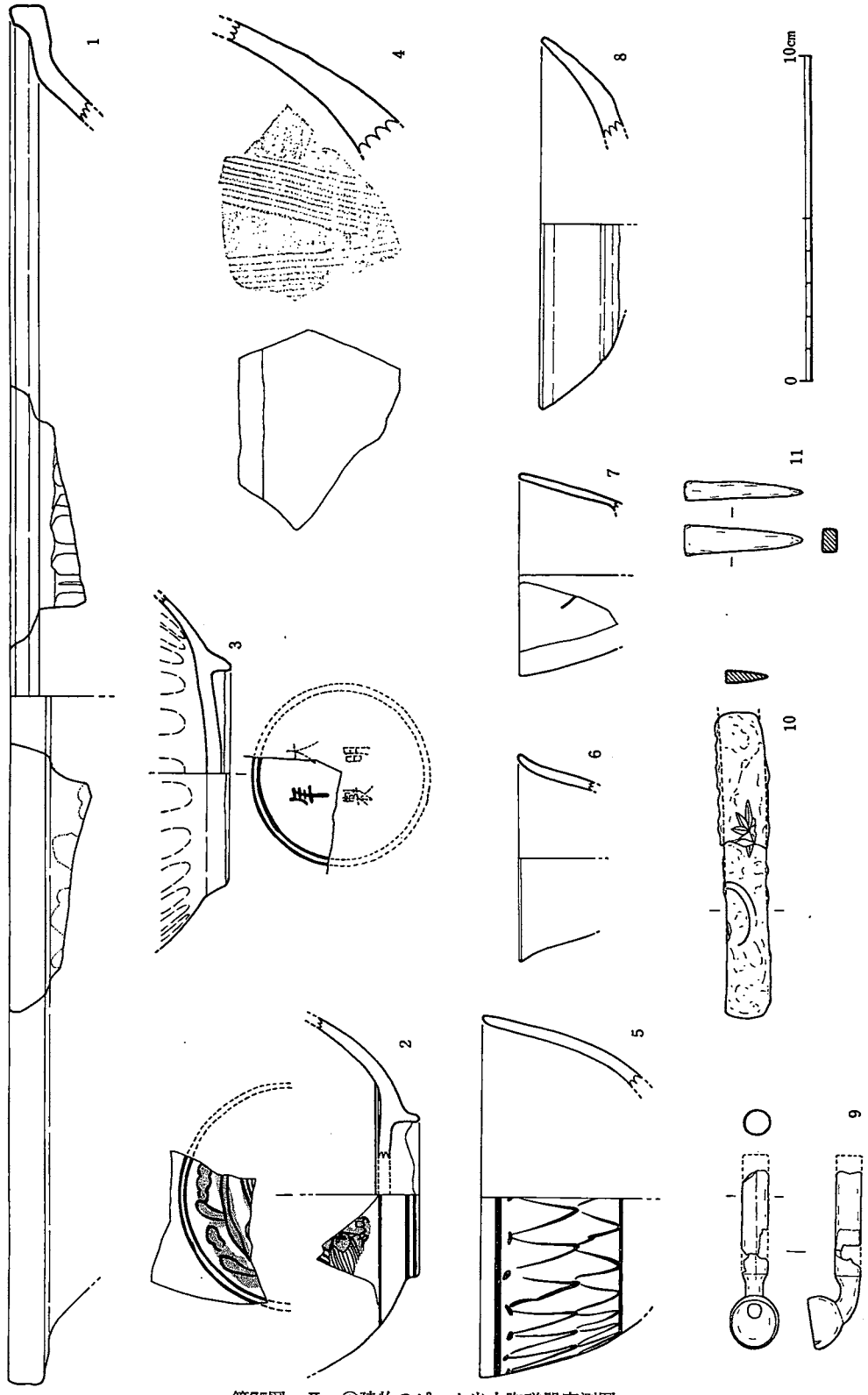
この建物のP.1、P.3、P.4、P.5、P.6から近世の陶磁器が出土し、P.3からは金属製品も出土した。

第75図1はP.3から出土したものである。口径42.8cmを測る大鉢の破片で、窯ははっきりしないが庭木窯で焼かれたものとみられる。口縁部は横に折れて水平にひらきさらに折れて立ち上がっている。胎土は茶褐色で、内面に白色で文様を描き、その上に暗緑色の釉を二重がけしている。

第75図２もＰ．３から出土したものである。古伊万里染付碗または鉢の高台部付近の破片で、体部は丸みがある。胎土は白色で、見込み部と体部外面に紺色の染付がみられる。内外全面にやや青みをおびた透明の釉薬がかけられているが、高台部畳付のみは釉薬がみられない。江戸中期の作とみられる。



第74図　Ⅱ－③ 建 物 復 原 図



第75図　Ⅱ—③建物のピット出土陶磁器実測図

第75図３もＰ．３から出土した古伊万里染付の高台部付近の破片で、鉢かとみられる。体部は波を打っており、口縁部は輪花縁であったものと推定される。高台は低いが畳付は広く安定している。胎土は白色で、高台部内側には紺色の二重の円の染付の中に欠損しているが大明年製と書いてあったものとみられる。釉薬は薄緑色をおびた透明でほぼ全面にかけられるが、高台部畳付のみはかけられていない。江戸中期の作とみられる。

第75図４もＰ．３から出土したものである。窯はおそらく庭木窯とみられ、擂り鉢の破片である。胎土は茶褐色で、外面の上方に緑茶色の釉薬がかけられている。このピットから同じ部位の同一個体が出土しているが接合しなかった。

第75図５はＰ．４から出土した古伊万里染付網文碗の破片である。口径は11.2cmを測る。胎土は灰白色で、染付は濃紺色である。釉薬は透明で内外面ともかけられている。江戸時代前期～中期の作とみられる。

第75図６はＰ．６から出土したもので古伊万里白磁酒盃の口縁部破片である。口縁部はやや外反し口径6.4cmを測る。胎土は白色で、内外面とも透明の釉薬がかけられ、器壁には嵌入がみられる。江戸前期～中期の作とみられる。

第75図７もＰ．６から出土したもので古伊万里染付酒盃である。体部は直線的で、口縁部は直口し、口径は6.2cmを測る。胎土は白色で外面に青い染付がみられる。釉薬は透明で内外ともかけられている。江戸中期の作とみられる。

Ｐ．６からは他にもう１点古伊万里磁器片が出土している。

第75図８はＰ．５から出土したもので唐津または唐津系の焼き物とみられる皿である。口径は11.5cmを測る。胎土は肌色で、内外とも緑灰色ないし茶灰色の釉薬がかけられているが高台部近くはかけられていない。

なお、Ｐ．１からは古伊万里磁器片や擂り鉢片が出土しているが小破片のため実測しなかった。

第75図９～11はＰ．３から出土した金属製品である。

９は銅製の煙管の雁首である。残存長は5.5cmであるが６cm程あったものと推定される。火皿の直径は1.5cmを測る。火皿に続く部分は直径0.8cmの管形で、合わせ目は上面に認められる。

10は鉄製品で、一方が欠損しているようである。残存長9.4cmを測り、厚さ0.4cm、幅1.3cmである。一側に刃部があり、やや反りがある。一面に曲線の線刻と、銅を張った上に花文の線刻を施したものが残っている。

11は鉄釘である。断面は四角形で、頭の大きさは９cm×６cmで、長さは3.7cmである。

以上の遺物からⅡ―③建物は江戸中期頃のものとみられる。

(二) **Ⅱ―④建物**（第76図）

Ⅱ地区の中央部からやや北東寄りのＢ～Ｄ―４・５区にある建物である。南北に長く、主軸

をN—36度—Eにとっている。ピットは重複が激しくはっきりしないが、大小あるようである。ピット底面に敷石のみられるものもある。建物は南北に1間を200cmとし、4間の800cmある。また東西方向は2間余りの430cmの幅ある。

この建物はⅡ—③建物、Ⅱ—⑤建物、Ⅱ—⑦建物と重複している。

この建物のP.4から近世の陶磁器が出土している。

第76図1～3はいずれもP.4から出土したものである。

1は古伊万里染付大皿である。口縁部は立ち上がり口径18.9cm、高さ5.6cmを測る。高台は低いが径が大きく安定している。胎土は白色で、内面に扇文などの染付があり、見込み部中央に五弁花が描かれている。外面には唐草文の染付がみられる。内外面とも染付は紺色をしている。また高台部天井にも円の染付とその中央に窯印が書かれている。釉薬はやや青みをおびた透明で、内外面ともかけられているが、高台部畳付にはみられず、ここには離れ砂が付着している。また口唇部の外面は釉薬がはげている。江戸中期の作とみられる。

2は古伊万里染付草花文向付である。体部は底部から折れて垂直に立ち上がっている。小破片であるが、復原すると口径8.2cm程度になる。体部下方の屈折部のところに内外とも線がひかれ、体部外面に草花文の紺色の染付がみられる。内外面ともやや青みをおびた透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作である。

3は嬉野焼内野山窯のものである。碗の高台部付近の破片で、胎土は肌色をおびた白色を呈している。内面には灰色の灰釉がかけられており、外面には深緑色の銅油がかけられているが、高台部付近にはかけられていない。江戸中期ないしやや下がった頃の作である。

P.4からはこのほか黒牟田焼の擂り鉢片や古伊万里瓶片なども出土している。

これらの遺物からⅡ—④建物は江戸中期ないし後期にかかった頃の時期のものとみられる。

(ホ) **Ⅱ—⑤建物**（第77図）

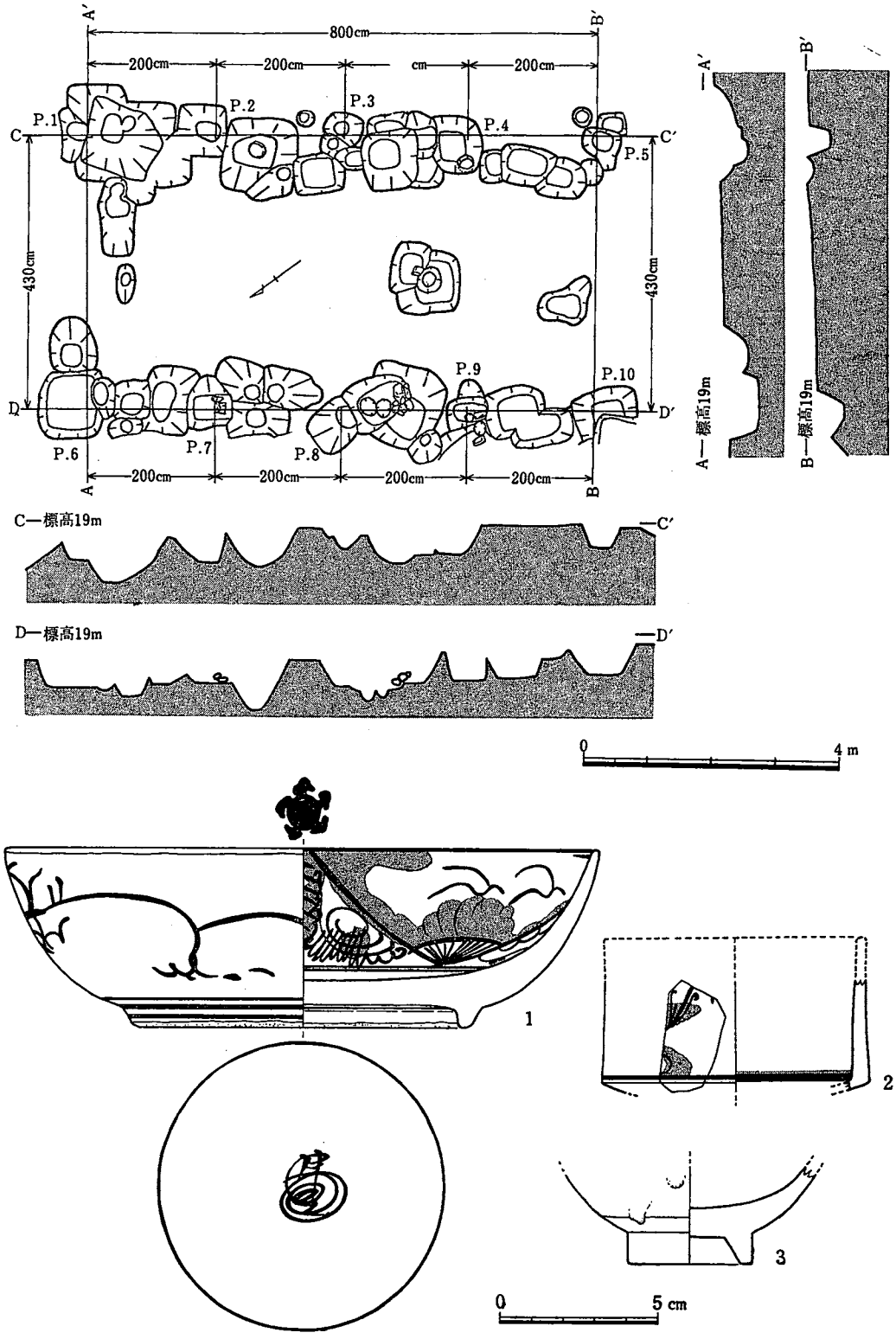
Ⅱ地区の中央部にある建物で、C—4・5区、D—5区にある。ピットの大きさは60cm×80cmから110cm×130cmのものまである。方形の建物で主軸はN—41度—Wにとっている。建物各辺とも200cmを1間とした2間分の400cmあり、各辺はピットで1間ずつ分かれているが、P.3とP.7の間にのみはピットがみられない。最初から掘られていないのかもしれないし、発掘ミスで掘り忘れたのかもしれない。この付近のピット検出は容易ではなかった。いずれにしても方形の建物であることに変わりはない。

この建物はⅡ—③建物、Ⅱ—④建物と重複し、Ⅱ—⑦建物とも重複あるいは接触している。

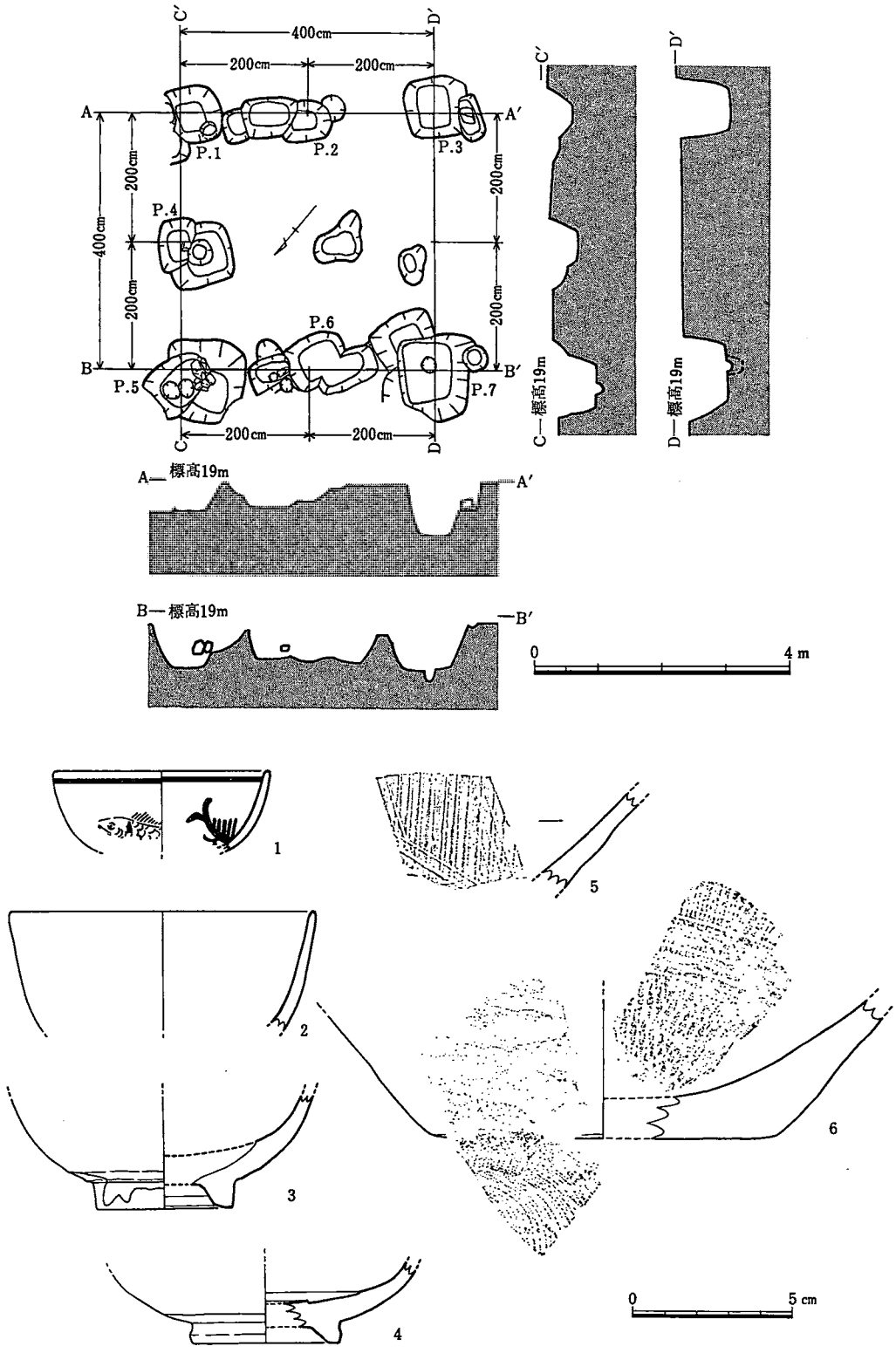
Ⅱ—⑤建物のP.3とP.6から近世陶磁器の破片が出土しており、P.7から瓦の破片が出土した。

第77図1～6はいずれもP.3から出土したものである。

1は古伊万里染付魚文酒盃の破片である。体部は丸く、口縁部は直口ぎみになっており、口径6.8cmを測る。胎土は白色で、口縁部内外に一条の線の染付、見込みに植物図、外面に魚の



第76図　Ⅱ—④建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図



第77図　Ⅱ—⑤建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

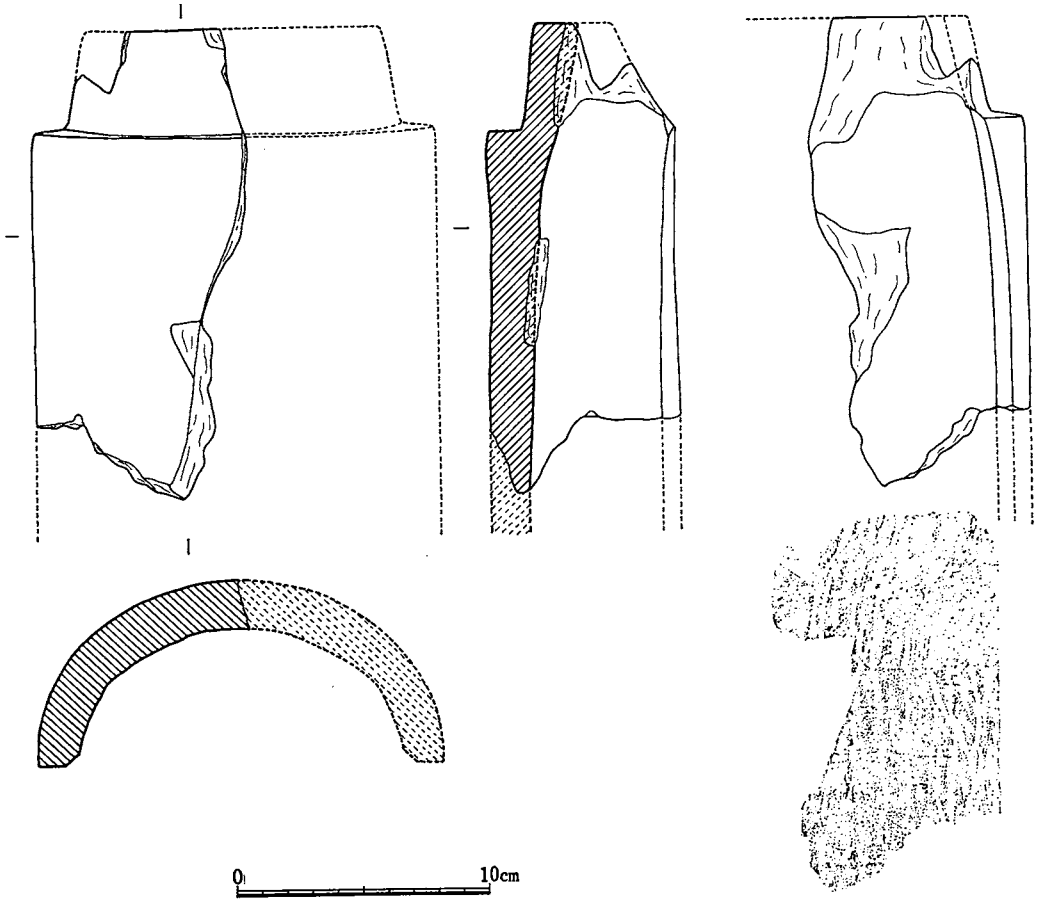
染付がみられる。染付は紺色で、内外面ともその上に透明の釉薬をかけている。江戸中期の作とみられる。

2は碗の口縁部の破片である。口縁部は直口ぎみに立ち上がっており、口径9.6cmを測る。胎土は灰白色で、透明の釉薬がかけてあり、器面には内外とも細かい嵌入がみられる。唐津焼とみられる。

3は碗の高台部付近の破片である。体部は丸く、高台部は削り出している。胎土は灰色で、やや緑をおびた灰透明の釉薬をかけている。高台部には釉薬をかけていない。唐津系の焼物であるが窯は不明である。

4は碗の高台部付近の破片とみられる。胎土は灰色で、高台部を除いて透明の釉薬がかけられており、見込み部は蛇の目剝ぎされている。これも唐津焼あるいは唐津系の焼物とみられる。

5は黒牟田焼擂り鉢の破片である。胎土は黒褐色で、器面は灰紫色の釉がかかっている。江



第78図　Ⅱ—⑤建物のピット出土瓦実測図

戸中期の作とみられる。

6も擂り鉢の底部付近の破片で黒牟田焼とみられる。底面は平底で、内部は割合密な櫛目がついている。胎土は赤褐色で、外面と内面の上端に釉薬がかけられ灰紫色を呈している。江戸中期の作とみられる。

このほかP.3からは古伊万里染付磁器片、唐津焼の瓶片、黒牟田焼玉縁片口片、黒牟田焼甕片なども出土している。

P.6からは黒牟田焼鉢の小破片が出土している。

第78図はP.7から出土した近世瓦の破片である。丸瓦の4分の1程の破片で、復原すると幅は16cmぐらいあったものとみられる。長さ4cmの玉縁がついており、玉縁の下面側は角が斜めに切られている。瓦の内面は細かい布目がついており、玉縁部付近の凸面は横なでのあとが残っており、筒部凸面は縦方向に研磨されている。器面全体は暗灰色を呈している。

以上のピット内出土遺物からⅡ—⑤建物は江戸中期頃のものとみられる。

(ヘ) **Ⅱ—⑥建物**（第79図）

Ⅱ地区の北端のB・C—3・4区にある建物である。ピットの大きさは80cm×110cm前後で、柱の位置にあたるピットの底面はさらに掘り下げていた。南北に長い建物で主軸をN—39度—Eにとっている。南北方向は1間を200cmとした4間の800cmあり、東西方向は2間半分の500cmの幅ある。西側のピットのうちP.8とP.9の間に1つ欠損があるが、最初から掘っていなかったのか、発掘時に掘り忘れたのか不明である（この付近の遺構検出は容易ではなかった)。

この建物はⅡ—⑦建物と重複している。

Ⅱ—⑥建物のP.2とP.9から近世陶磁器が出土している。

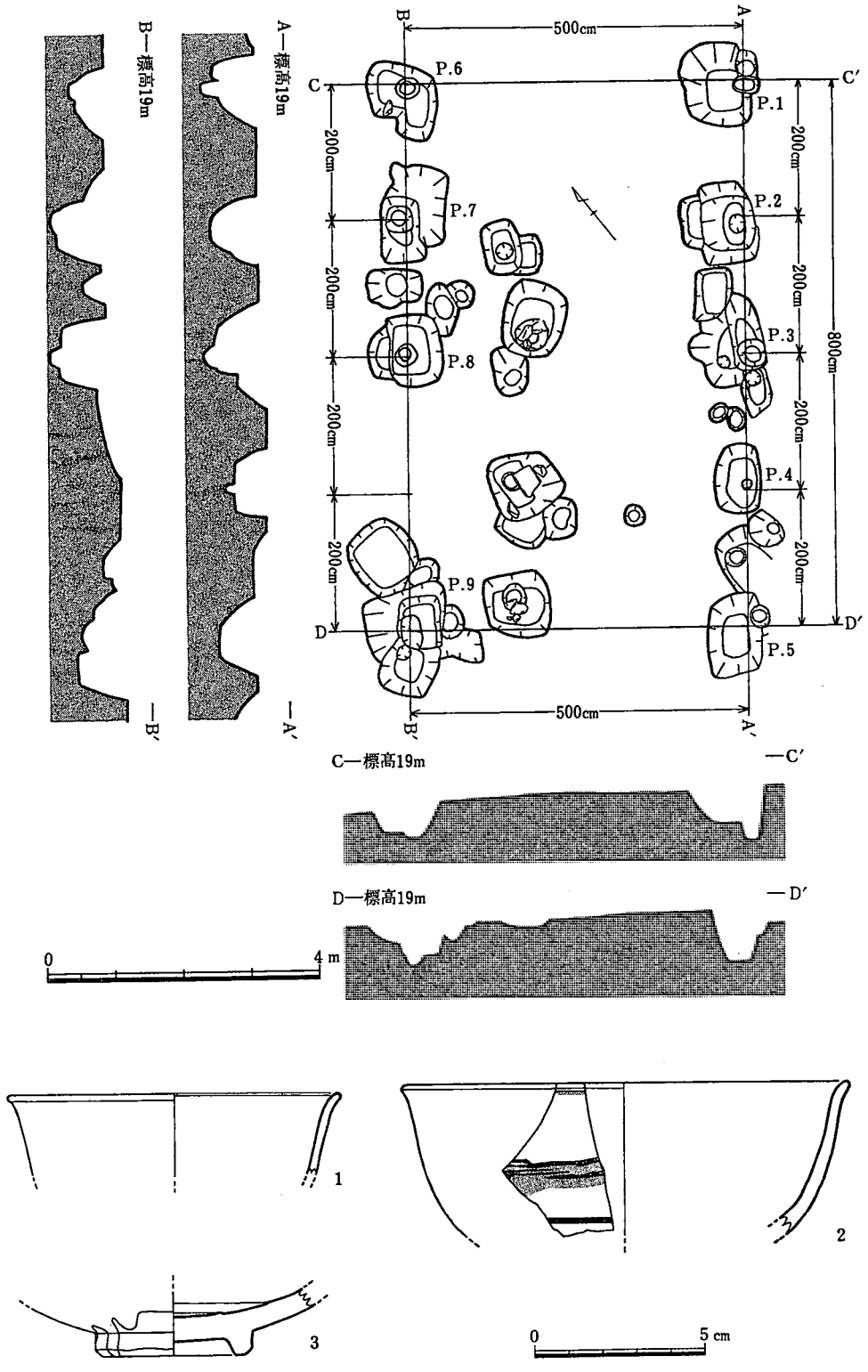
第79図1はP.2から出土したものである。口縁部がやや外反し、口径9.8cmを測る古伊万里碗の口縁部破片である。胎土は灰白色を呈し、内外面とも透明の釉薬がかけられているが、口唇部には釉薬がみられない。江戸中期の作とみられる。

第79図2もP.2から出土したもので、古伊万里染付碗の破片である。体部は丸みがあり、口縁部は短かく外反し、口径13.2cmを測る。胎土は白色で、青色の染付がみられ、透明の釉薬がかけられている。江戸前期〜中期の作とみられる。なおこの破片と接合するものがⅡ—①建物のP.1から出土している。

第79図3はP.9から出土したものである。嬉野焼内野山窯の皿の高台部付近の破片で、高台部は削り出している。胎土は肌色を呈している。内外とも青緑色の銅釉がかけられているが、高台部にはかけられておらず、見込み部は蛇の目剝ぎされている。江戸中期ないしやや下がった頃の作である。なおこの破片はやや磨滅しており、火も受けている。

Ⅱ—⑥建物のP.1からは長さ2.1cm、幅1.6cm、厚さ1.1cmを測る炭化した桃の種子が出土している。

以上の遺物からⅡ—⑥建物の時期は江戸中期あるいは後期にかかった頃のものとみられる。



第79図　Ⅱ—⑥建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

(ト) **Ⅱ—⑦建物**（第80図）

Ⅱ地区の中央部近くにあり、やや東に寄った位置のB・C—3・4区にある。ピットの大きさは50cm×70cmから90cm×100cm程度のものまで大小あり、柱根部はピットの底面をさらに掘り下げ、柱根の横には根固め石を入れているものもある。いくぶん南北に長い建物で、主軸をN—38度—Eにとっている。南北方向は1間を165cmとし3間の495cmある。東西方向は2間半あまりの440cm幅ある。

この建物はⅡ—③、Ⅱ—④、Ⅱ—⑤、Ⅱ—⑥建物と重複している。

このⅡ—⑦建物のP.2、P.7、P.8から近世陶磁器が出土している。

第80図1、2、4～6はP.1から3はP.7から7はP.8から出土したものである。

1は古伊万里白磁酒盃の破片である。体部は直線的に開き口縁部は外反し、口径6.5cmを測る。胎土は白色で、透明の釉薬がかけられている。江戸前期の作とみられる。

2は古伊万里染付草花文酒盃の破片である。体部は丸く口縁部は直口している。口径は6.7cmを測る。胎土は白色で、外面に灰藍色の染付がつけられ、やや緑をおびた透明の釉薬がかけられている。江戸中期の作とみられる。

3は古伊万里染付小碗の破片である。体部は丸く、口縁部は直口し、口径9.4cmを測る。胎土は白色で、外面に胡蝶と思われる紺色の染付を配している。釉薬は透明で内外ともかけられている。江戸中期の作とみられる。

4は古伊万里皿の破片である。口縁部は外反し端部は丸くなって終わっており、口径16.0cmを測る。胎土は白色で、透明の釉薬がかけられている。江戸前期の作とみられる。

5は徳利の破片である。胎土は赤灰色を呈し、肩部に白化粧がみられ、釉薬は透明で外面にのみかけられている。唐津焼であろうか。

6は黒牟田焼とみられる擂り鉢の破片である。内面に粗い櫛目がつけられている。胎土は赤褐色で、内外面とも釉薬がかけられ茶黒色を呈している。

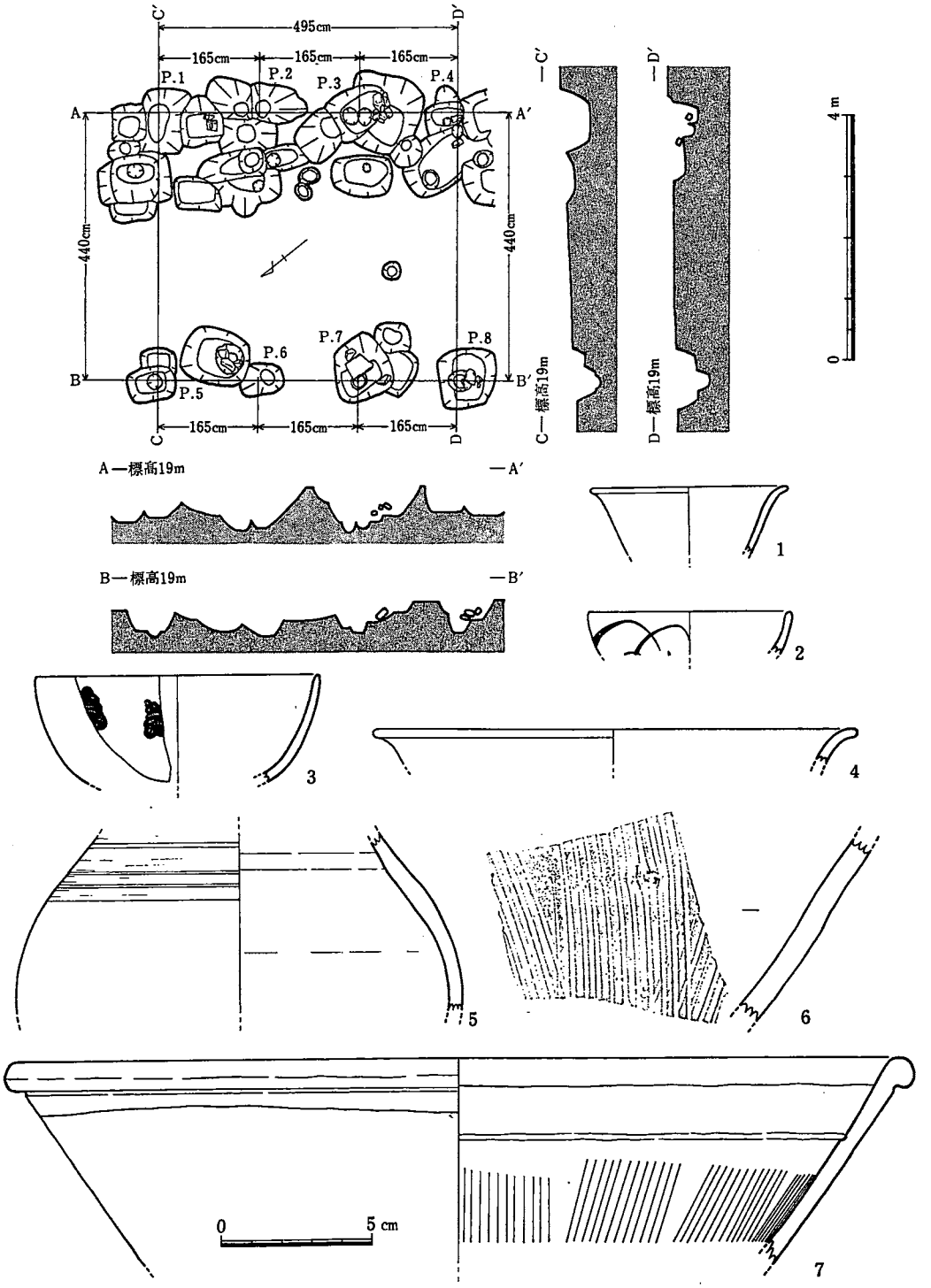
7も黒牟田焼とみられる擂り鉢である。口径30.1cmを測り、口縁部は玉縁状になっている。内面にやや粗く櫛目がつけられている。胎土は黒灰色で、黒紫色の釉薬がかけられ、特に口縁部は二重にかけられている。江戸中期の作とみられる。

P.2からはこのほか古伊万里染付唐草文皿小破片（江戸中期）、嬉野焼内野山窯の銅釉碗の破片なども出土している。

P.7からは古伊万里染付碗口縁部破片、唐津焼鉢口縁部破片、唐津焼とみられる鉄絵皿片も出土している。

P.8からも古伊万里染付磁器片が出土している。

以上の遺物からⅡ—⑦建物は江戸中期ないし後期にかかった頃の時期のものとみられる。



第80図　Ⅱ—⑦建物復原図とそのピット出土陶磁器実測図

(チ) Ⅱ—⑧建物（第81図）

Ⅱ地区の西寄り、D・E—3区にある。ピットの大きさは70cm×80cmないし90cm×100cmで、方形プランであるが、1カ所は直径30cm程の円形プランである。もしかしたらこの円形プランピットの付近は遺構検出が難しかったので、調査の際のミスで柱根の穴のみを掘ってやめてしまった可能性もある。南北に長い建物で、主軸をN—33度—Eにとっている。南北方向は1間を190cmとして2間の380cmある。東西方向は1間余りの230cm前後ある。

この建物は復原できた他の建物との重複はみられない。

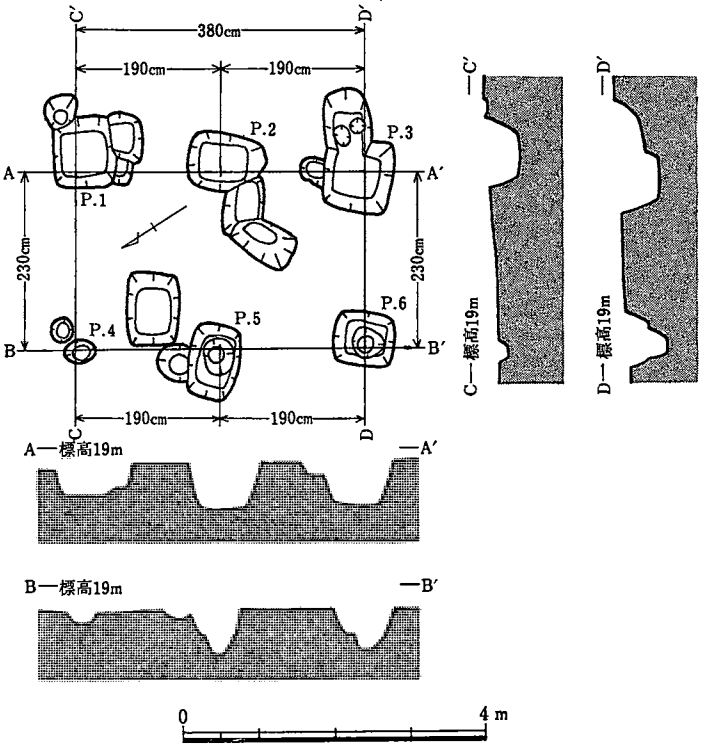
この建物のピット内から遺物は出土しなかったが、Ⅱ—④建物と主軸方向をほぼ同じにとっていることなどから他の建物と同じく江戸中期頃のものとみられる。

(リ) その他のピットの遺物

建物の復原はできなかったが近世の遺物を出土したピットがある。そのピットと遺物をここで紹介しておく。

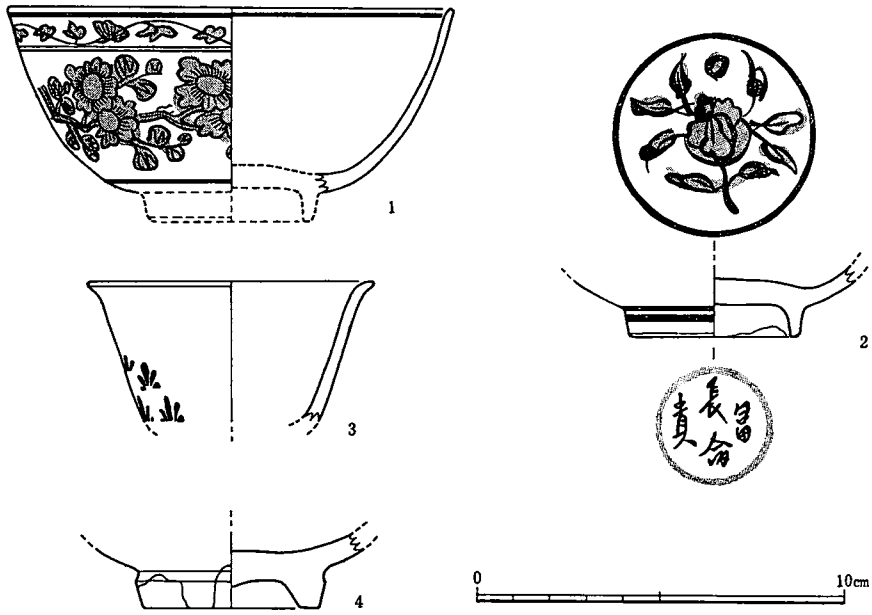
第71図のP.1～P.15が近世の遺物を出土したピットである。遺物は小破片が多いがすべて近世の陶磁器である。このうち実測できたものについて述べたい。

第82図1は古伊万里染付草花文碗である。口径12.2cmを測り、高台部を欠くが高さ5.8cm程度と推定される。外面は二段の文様帯に区切られ、丁寧な染付がみられる。内面は口縁部に一条の線、見込みに二条の線があり、その中にも絵の一部が認められる。胎土は白色で、染付は紺色である。釉薬は透明で内外面ともかけられている。薄手で美しい碗である。江戸前期の作であろうか、第71図P.1から出土した。



第81図 Ⅱ—⑧建物復原図

第82図2は古伊万里染付見込牡丹文碗である。胎土は白色で、染付は紺色である。高台部内側には「富貴長命」銘の染付がある。釉薬



第82図　Ⅱ地区その他のピット出土近世陶磁器実測図

はいくぶん青みをおびた透明で、内外面ともかけられているが、高台部畳付のみはみられない。江戸中期の作とみられる。第71図P．1の横から出土した。

第82図3は古伊万里染付草花文の酒盃または小碗である。口縁部は外反し、口径7.8cmを測る。胎土は白色で、外面に紺色の染付がみられる。釉薬は灰色をおびた透明である。江戸中期～後期の作とみられる。第71図P．2から出土した。

第83図4は唐津焼碗の高台部である。胎土は灰色である。高台部は削り出しており、高台の内側にはちりめんじわがみられる。釉薬は透明で、内外面ともかけられているが、高台部は外側の一部にかかっているだけである。第71図P．10から出土した。

これらのピットは出土遺物から江戸時代の建物の柱穴とみることができる。

(2) 近世墓

Ⅱ地区の近世墓は調査以前に関係者の手でバックホーを使って掘りかえされていたが、はからずもこれがⅡ地区調査の契機である貝塚の発見ともなった。

近世墓はF－2区あたりにあり、消滅したものもあったとみられるが、同区の土層断面調査の際にもたまたま3基の墓壙が発見された。特に丁寧な調査は行わなかったが、その概要を記録しておきたい。

第71図に示したように北側から1号、2号、3号とする。

1号墓壙は幅0.9m、長さ1.2mを測り、やや変形であるがほぼ長方形のプランで、主軸をN－13度－Eにとっている。Ⅰ層から0.75m掘り下げられており、現地表からは1.1mの深さが

ある。墓壙内から鉄釘が出土したので木棺であったことがわかる。

2号墓壙は1号墓壙のわずか10cm南で発見されたもので、幅0.7m、長さ0.8mの長方形プランで、主軸はN—61度—Wにとっており、1号墓壙とは直交する方向である。深さは1号墓壙とほぼ同じであった。内部に中世のものとみられる五輪塔の空風輪一個があったが、埋土は近世のものであるので、埋葬の際に混入したものとみることができる。鉄釘の有無は確認しなかった。

3号墓壙は2号墓壙から40cm離れた南側にある。墓壙の上面を確認したのみで発掘はしなかった。幅は1.0m程度で、長さは1.0m以上ある。主軸は1号墓壙とほぼ同じく、N—17度—Eにとっているようである。埋土からやはり近世の墓壙とみることができる。

以上のようにF—2区付近は近世墓地となっており、無縁墓地に近い状態であった。このことからⅡ地区の江戸期の建物に居住した人々の墓であった可能性が強い。

(3) Ⅱ地区その他の近世遺物

Ⅱ地区において遺構以外から出土した主要な近世陶磁器をここで紹介しておく。

第83図、第84図の1～15がそれである。

1は古伊万里染付草花文くらわんか手茶碗である。口径9.6cm、高さ5.1cmを測り、厚手で口縁部は直口ぎみである。胎土は灰色をおびた白色で、外面に暗い紺色の染付がみられる。釉薬は乳白色をおびた透明で、内外面ともかけられているが、畳付にはみられない。江戸中期の作とみられる。D—3区Ⅰ層から出土した。

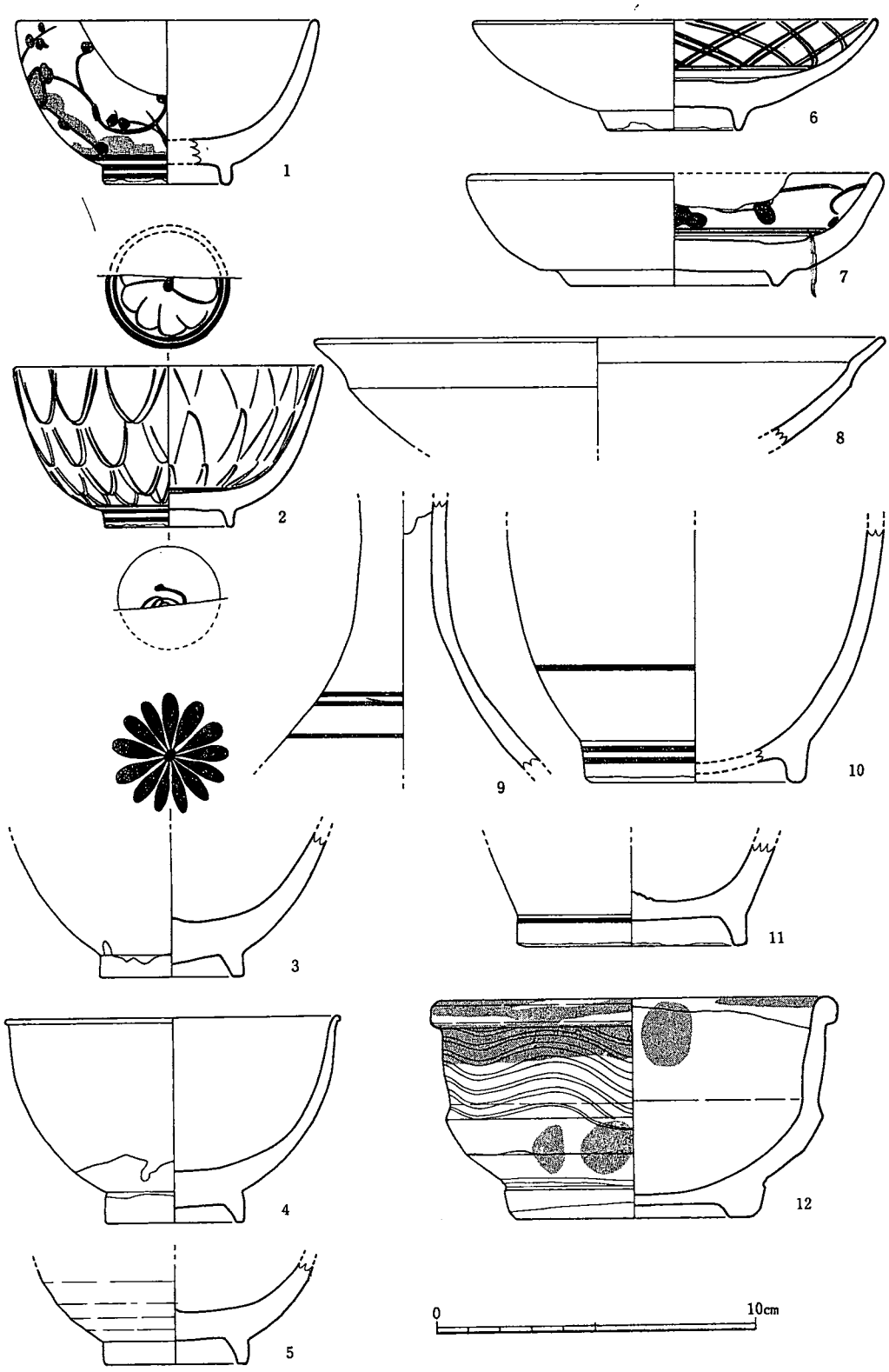
2は古伊万里染付網文碗である。口縁部は直口ぎみで、口径9.7cm、高さ5.0cmを測る。胎土はやや灰色をおびた白色を呈する。染付は紺色で内外面とも網文がつけられ、見込には花文が施されている。高台部内側には渦巻状の窯印がみられる。釉薬は透明で、畳付を除いた全面にかけられている。江戸中期頃の作とみられる。E—2区Ⅰ層から出土した。

3は古伊万里染付碗である。口縁部を欠損しており、やや厚手である。胎土は白色で、見込に濃紺色の花文の染付がみられる。釉薬は薄緑色で、内外面ともかけられているが、高台部にはかけられていない。内外面とも細かい嵌入がみられる。F—3区Ⅰ層から出土した。

4は嬉野焼内野山窯の碗である。口縁端部は薄くなり、小さく外反しており、口径10.5cm、高さ6.4cmを測る。高台部は削り出しである。胎土は灰色で、内面に灰色の灰釉がかけられ、外面に緑青色の銅釉がかけられているが、高台部にはかけられていない。E—1区Ⅰ層から出土した。

5は唐津焼の茶碗とみられ、口縁部を欠損している。胎土は肌色を呈し、外面はヘラ削りされている。釉薬は乳白色をおびた透明で、高台部畳付を除いた全面にかけられている。F—1区Ⅰ層から出土した。

6は古伊万里染付皿である。口径12.7cm、高さ3.5cmを測る。胎土は白色で、内面に格子目の暗い紺色の染付がみられる。釉薬はやや青みをおびた透明で、高台部畳付を除いた部分にか



第83図　Ⅱ地区その他の近世陶磁器実測図(1)

けられているが、見込部は蛇目剝されている。江戸後期の作とみられる。E－1区Ⅰ層から出土した。

7も古伊万里染付皿である。口径13.1cm、高さ3.5cmを測り、やや厚手である。胎土はいくぶん灰色をおびた白色で、内面に焦げ茶色をおびた紺色の染付があり、見込中央部には五弁花が描かれている。釉薬は透明であるが、乳白色をおびている。高台部畳付は無釉で、内面見込は蛇目剝されている。江戸中期の作とみられる。F－1区Ⅰ層から出土した。

8は唐津系の無文鉢とみられる。口縁部は段をつけて開き、口径17.9cmを測る。胎土は灰白色で、内外面とも透明の釉薬がかけられている。江戸中期頃の作とみられる。C－2区Ⅰ層から出土した。

9～11は古伊万里徳利で、江戸中期～後期の作とみられる。

9は徳利の頸部から肩部にかけての破片である。胎土は灰白色で、外面に暗い紺色の線の染付がみられる。釉薬は透明で、外面全体と内面の上端にかけられている。E－1区Ⅰ層から出土した。

10は徳利の胴部から高台部にかけての破片である。胎土は白色で、胴部下方と高台の外側に青色の染付の線がみられる。釉薬は透明で、外面にのみかけられているが、畳付は無釉である。F－2区Ⅰ層から出土した。

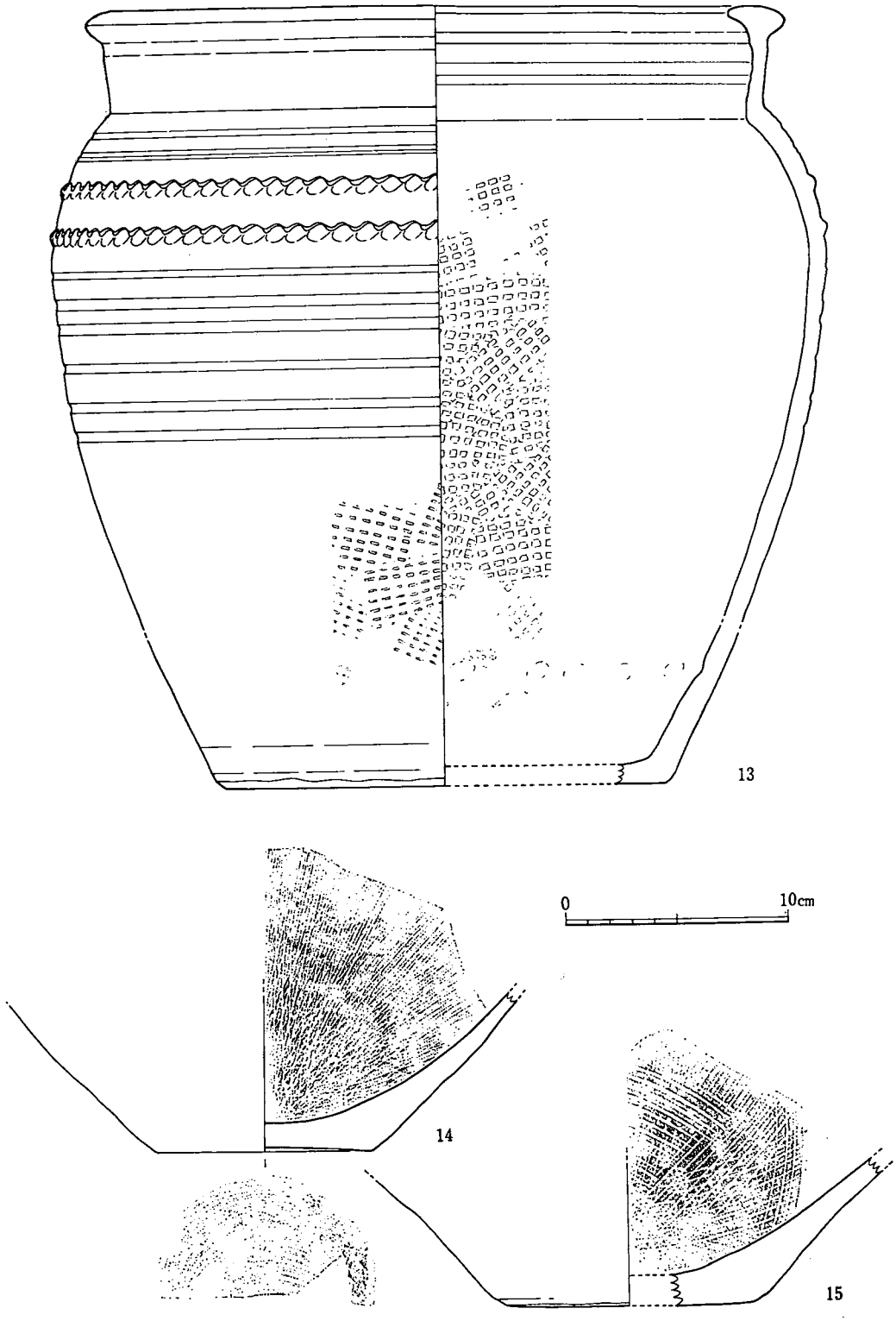
11は徳利の高台部の破片である。胎土は灰白色で、高台外側に暗い紺色の一条の線がひかれ、透明の釉薬がかけられている。内面と畳付は無釉である。E－1区Ⅰ層から出土した。

12は白化粧櫛描鉄釉鉢である。口縁部は直口し、玉縁となり、口径12.8cm、高さ6.9cmを測る。胴部下方で屈折して、底部には高台がついている。胎土は緻密で、赤色になっており、外面の胴部から口縁部内外にかけて白化粧がみられ櫛描されている。口縁部とその他の一部分には鉄釉がかけられている。F－2区Ⅰ層から出土した。

13は備前焼甕である。破片から復原したもので、口径32cm、高さ35cmを測る。頸部は短く立ち上がり、口縁部はT字形に内外に肥厚している。肩部には二条の指で押しつけた凸帯をめぐらし、胴部上半には凹線がひかれている。胴部下方には格子目叩きがかすかに残っており、内面には明瞭にみられる。底部は平底で安定している。胎土には砂粒を含んでおらず、内外面とも泥釉がかけられている。江戸中期頃の作とみられる。この破片はE－1区、F－1区、F－2区のⅠ層から出土した。

14は擂り鉢であるが、窯は不明である。胎土は砂粒を含まず、色調は赤褐色を呈している。底部は糸切りされており、内面に13本単位で幅3.7cmの櫛目を密につけている。釉薬はかけられていない。F－1区Ⅰ層から出土した。

15も擂り鉢で、備前焼とみられる。胎土は緻密で焼き締まっており、灰色を呈する。底部は平底で糸切りされている。内面には15本単位で幅5.6cmの櫛目が密につけられている。内外面



第84図　Ⅱ地区その他の近世陶磁器実測図(2)

とも泥釉がかけられているようである。F－1区Ⅰ層から出土した。

以上の陶磁器は江戸期のものであり、Ⅱ地区の建物で使用された日用雑器とみることができる。

このほかⅠ層および表面から明治期の陶磁器も若干採集されたが、ここでは省略したい。

第Ⅳ章　調査のまとめ

平原・野中遺跡は古墳の跡が発見されるであろうという当初の予想に反して、中世と近世の遺構が発見された。

中世の遺構の時期の詳細な検討は今後の研究に譲ることにして、大まかに捕えれば室町時代とみることができよう。

室町時代の遺構はⅠ地区とⅡ地区において検出され、同時期の遺物も出土した。

Ⅰ地区においてはピット群（建物）に伴って井戸、土壙などが検出された。

ピット群は直径20～30cmの円形プランで、建物の復原はできなかったがかなりの数あり、土製湯釜（瓦器）、土師質皿、土錘、備前焼擂り鉢、明代青磁器などが出土した。

井戸は直径２ｍ余りの円形プランで、深さは1.8ｍあり、内部から多数の角礫とともに瓦器の土製鍋・擂り鉢・火舎のほか土師質皿、明代青磁器鉢や碗などが出土した。

土壙は２カ所で発見され、１号土壙は1.1ｍ×2.3ｍの長方形プランで深さは0.4ｍを測ったが遺構の性格は不明であった。２号土壙は0.8ｍ×1.3ｍの楕円形プランで、残存部の深さは12cmであったが、壁面は厚さ２cm程焼け、その周辺にも焼けた壁の破片がみられ、内部からも木炭や焼土が出土した。はっきりした証拠をつかむことができなかったが、近くからスラグが出土しているので製鉄関係の遺構ではないかと推定された。

このほかⅠ地区の北側の「ジゾウサンヤシキ」と呼ばれるあたりから五輪塔の残欠が見つかり、またこの下方の「ミセンジョサン」として祀られている板碑の近くからも五輪塔の残欠が見つかった。板碑は厚さ14cm、幅90cm、高さ105cm以上あり、大日如来を表わした梵字と20字程の銘文、さらにその下に地蔵菩薩坐像が描かれており、もとは「ジゾウサンヤシキ」にあったものと推定される。「ジゾウサンヤシキ」から北側あたりは山津波で特にひどく埋められ十分調査できなかったので、板碑や五輪塔が墓石であったのか、供養塔であったのかはっきりしないが、室町時代の他の遺構と同時期のものとみられる。

Ⅰ地区の室町時代の遺物はこのほか滑石製石鍋や明代の染付唐草文皿も出土している。

Ⅱ地区では室町時代のピット群（建物）、井戸が検出され、彼らの生活廃棄物の捨て場である土器溜と貝塚も発見された。

Ⅱ地区の室町時代の生活面は後世に削平されたため、ピット群も一部が残存していたのみであった。これらのピットは円形プランで、内部から瓦器の擂り鉢や土師質皿が出土した。

井戸は近世に造られた可能性もあるが、底から室町時代の瓦器片が出土したのでここでは一応室町時代に造られたものとみておく。井戸は直径0.7～0.8ｍで、深さ3.3ｍあり、底を砂利で固め、その上に井戸枠の角礫を積み上げている。出土した瓦器片は土製鍋の破片２点であった。また水くみ桶の底とみられるものが３個体分発見された。このほか井戸枠に砂岩製石臼片

も使われていた。

土器溜と貝塚はⅡ地区西端の斜面から一段下の面にかけてみられた。

土器溜からは多量の瓦器片が出土し、器種は土製湯釜、土製鍋、擂り鉢、捏ね鉢、鉢、火舎などがみられ、いずれも使用された痕（媒の付着や磨耗など）があった。また備前焼擂り鉢片も捨てられていた。

貝塚は半分程破壊されていたが、残りの部分の調査で、室町時代の瓦器擂り鉢片とともにマガキ656個体、オキシジミガイ21個体、その他22個体を得ることができ、室町時代の食生活の一端を知ることができた。

このほか室町時代の遺物として明代青磁器や明代染付唐草文皿、備前焼甕などが出土している。

近世の遺構はすべて江戸時代のもので、特に江戸中期を中心とするものと推定された。

江戸時代の遺構もⅠ地区とⅡ地区の両方から検出された。

Ⅰ地区における江戸時代の遺構はピット群（建物）と墓壙が検出された。

ピットは70cm×100cm程度の長方形プランをなすのが多く、14棟の建物を復原することができた。この14棟の建物はほぼ主軸をN—40度—W（N—50度—E）にとっており、重復しているが、数棟ずつ併存して建ち、すべてが相前後して建っていたものとみられる。ピット内から古伊万里の碗・鉢・皿・瓶・酒盃、唐津焼の鉢、黒牟田焼の灰釉壷や擂り鉢などの破片が出土し、江戸中期の陶磁器が多かった。従って江戸中期頃の建物群とみることができた。建物の柱の間隔と1つ1つの建物の規模についてはここでは再述しないが、専門家による訂正を乞いたい。

墓壙は2基調査した。いずれもⅠ地区の北端から検出された。1号墓壙は長方形プランで底面は82×92cmあり、深さは107cmで、底面から出土した鉄釘の状態から60cm×60cmの木管に入れられていたと推定され、骨粉も出土した。また埋土中から江戸中期頃のものとみられる古伊万里染付唐草文碗片も検出された。2号墓壙は円形プランで底面の直径75cmで、深さは70cmであった。鉄釘が出土しなかったので桶に入れて葬られていたものと推定された。

Ⅱ地区における江戸時代の遺構もピット群（建物）と墓壙が検出され、井戸も使用されたものとみられた。

ピット群はやはり70cm×100cm程度の長方形プランをなすものが多く、8棟の建物を復原できた。これらは主軸をほぼN—40度—E（N—50度—W）にとっているものが多く、数棟ずつ相前後して建っていたものとみられる。ピット内から古伊万里の碗・鉢・皿・向付・瓶・酒盃、唐津焼の碗・皿・徳利・片口、嬉野焼内野山窯の碗、黒牟田焼の擂り鉢、庭木窯の擂り鉢・大鉢など江戸時代中期を主とした遺物が出土しており、このほか煙管、瓦、桃の種子なども出土した。これらの遺物から江戸中期前後の建物群とみることができるであろう。

墓壙はⅡ地区西端にあり、大部分は破壊されていたとみられるが、3基検出されいずれも長

方形の墓壙であり、江戸時代のものと推定された。

井戸は先述した室町時代に造られたと推定したもので、埋没状況から江戸時代まで使われていたとみることができる。

このほかⅡ地区からは江戸時代の遺物として備前焼の甕と擂り鉢も出土した。

以上のように本遺跡においては室町時代の遺構として、Ⅰ地区Ⅱ地区とも建物と井戸の関係、さらにⅠ地区では製鉄遺構かとみられるものの存在、Ⅱ地区では捨て場の位置も確認できた。墓地の位置は確認はできなかったが、山津波に襲われているⅠ地区北東部（「ジゾウサンヤシキ」から北東方向あたり）一帯に可能性が考えられた。またⅠ地区における土錘の発見やⅡ地区の貝塚の存在は海とのかかわりある生活の一端をうかがわせるものであった。

江戸時代の遺構は両地区において建物と墓地の関係を見ることができ、Ⅱ地区においては井戸との関係も知ることができた。近世井戸のないⅠ地区における生活用水はすぐ下のミセンジョ谷の湧水を利用したものと推定される。

本遺跡の遺物の中で注目すべきものがいくつかみられた。室町時代のものでは滑石製石鍋（長崎県に生産地あり）、備前焼の擂り鉢や甕、明代染付唐草文皿（松橋町竹崎城跡から同じ図柄のものが出土している）、明代青磁器などがみられた。また江戸時代のものでは古伊万里、唐津焼など佐賀県周辺の陶磁器類とともに備前焼の擂り鉢や甕がみられた。本遺跡のある八代市は海に面しており、これらの遺物は海上交通を利用して流入して来たものとみられる。また時代の流れとともに輸入陶磁器から国内産陶磁器への依存の推移もみることができる。

本遺跡からははからずも室町時代と江戸時代の遺構・遺物が発見された。そして二時期の遺構とも山津波に襲われていた。このようなことも含めて、不十分ながらも中世・近世の生活の一端を記録できたことは幸いであった。

図　　版

1．発掘前のⅠ地区周辺(北から)

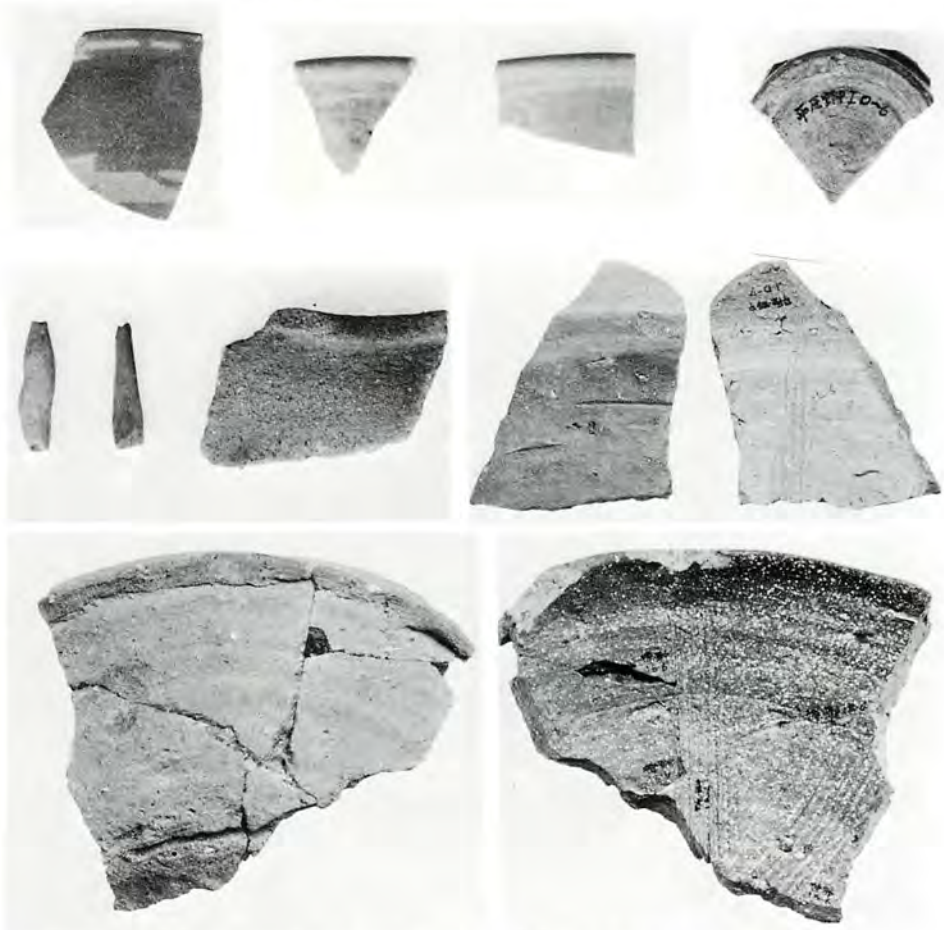
2．当初古墳の石材かとみられていた巨石

3．グリッドを設定して発掘調査開始

1．発掘前のⅠ地区(北から)

2．Ⅰ地区の遺構全景(西から)

1．Ⅰ地区の遺構全景(北から)



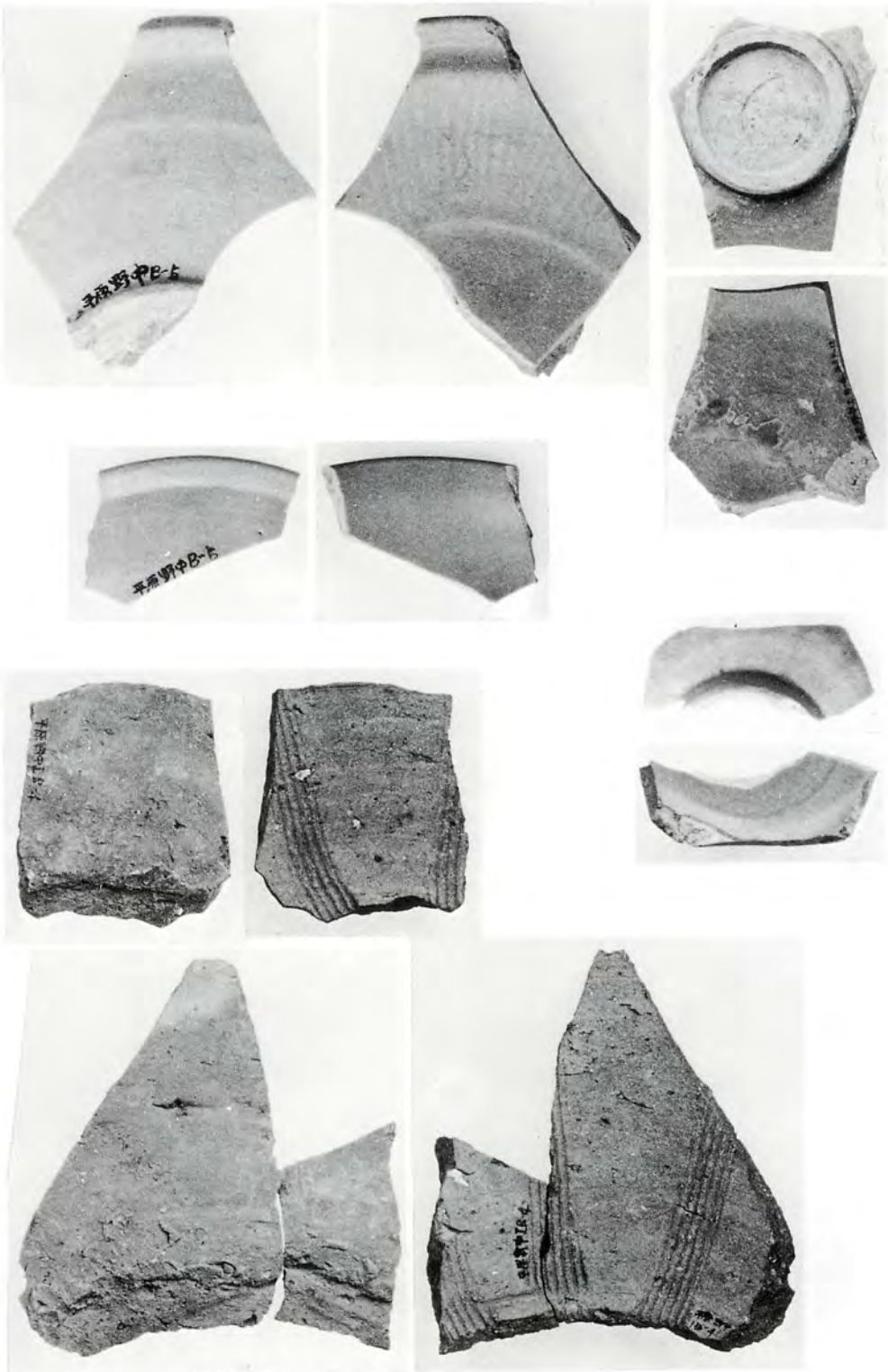
2．Ⅰ地区中世ピット出土遺物(青磁器、土錘、土製湯釜、備前焼擂り鉢)

PL. Ⅳ

1．Ⅰ地区井戸内の礫出土状態

2．Ⅰ地区井戸の完掘状態

Ⅰ地区井戸内出土遺物(土製鍋、擂り鉢、火舎、甕、皿)



Ⅰ地区井戸内出土遺物(青磁器、備前焼擂り鉢)

1．Ⅰ地区１号土壙

2．Ⅰ地区２号土壙

3．Ⅰ地区出土スラグ

PL. Ⅷ

1．板碑(通称ミセンジョサン)

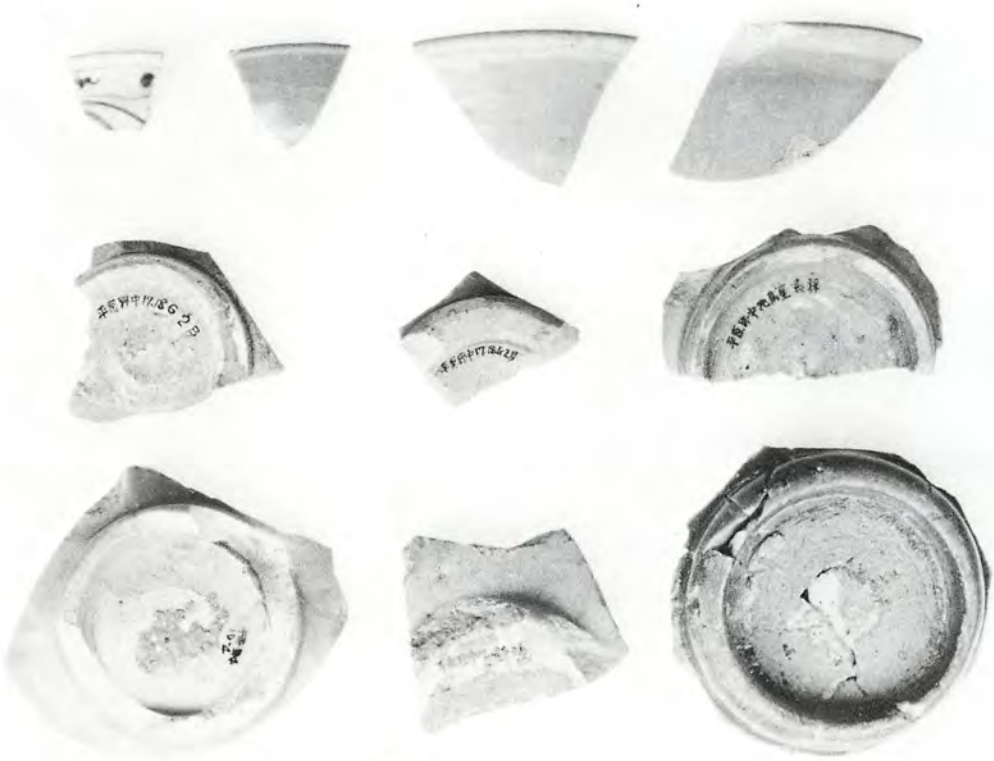
2．五輪塔

3．ミセンジョサンの傍に納められている自然石

Ⅰ地区その他の遺物(瓦器：火舎・甕・土製鍋・擂り鉢)

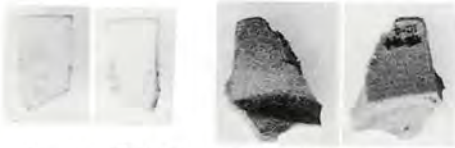
PL. X

Ⅰ地区その他の遺物(備前焼甕および擂り鉢、石鍋)

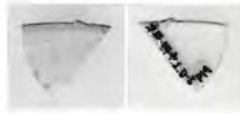


1．Ⅰ地区その他の遺物(明代染付皿、青磁器)

2．Ⅰ地区その他の遺物(土錘、皿など)



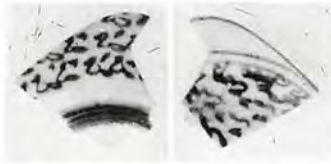
1．Ⅰ－②建物ピット出土陶磁器



2．Ⅰ－④建物ピット出土陶磁器

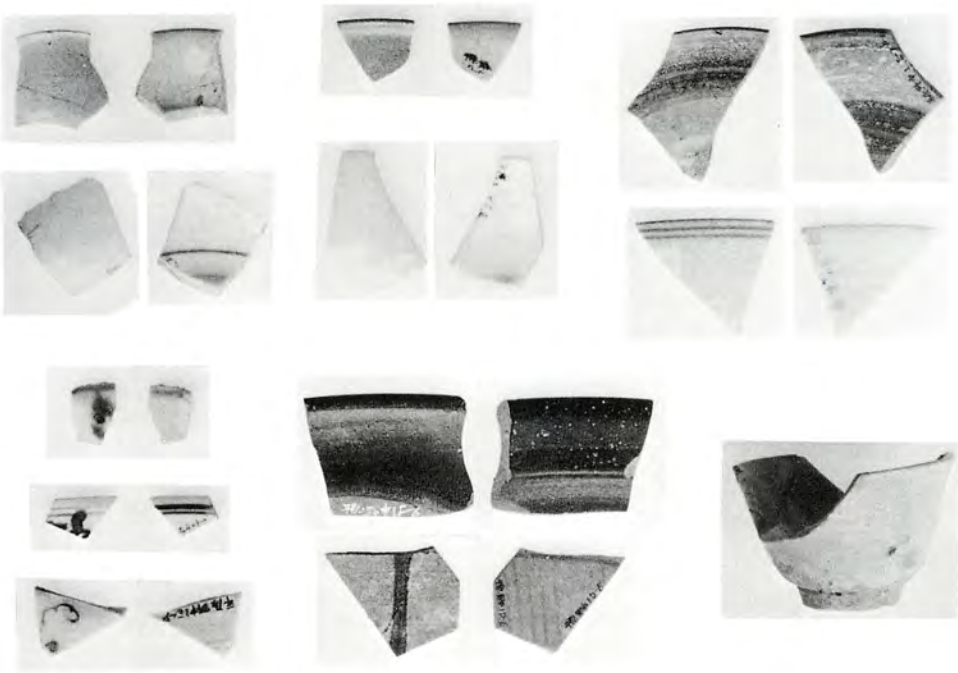
3．Ⅰ－③建物ピット出土陶磁器

4．Ⅰ－⑤建物ピット出土陶磁器

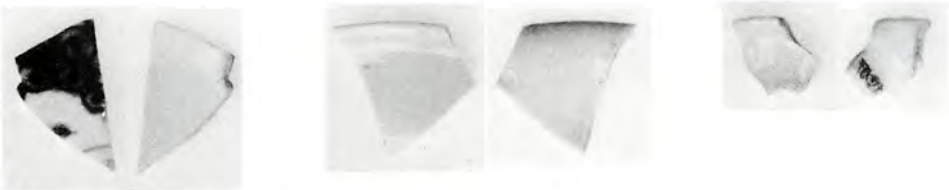


5．Ⅰ－⑥建物ピット出土陶磁器

6．Ⅰ－⑧建物ピット出土陶磁器



1．Ⅰ－⑨建物ピット出土陶磁器



2．Ⅰ－⑩、Ⅰ－⑪、Ⅰ－⑬建物ピット出土陶磁器(左から)

3．Ⅰ地区その他のピット出土近世・近代陶磁器

1．Ⅰ地区近世墓壙(左２号、右１号)

3．１号墓壙出土鉄釘

2．１号墓壙出土磁器

4．近世墓地出土蔵骨器

1．発掘前のⅡ地区周辺(南から)

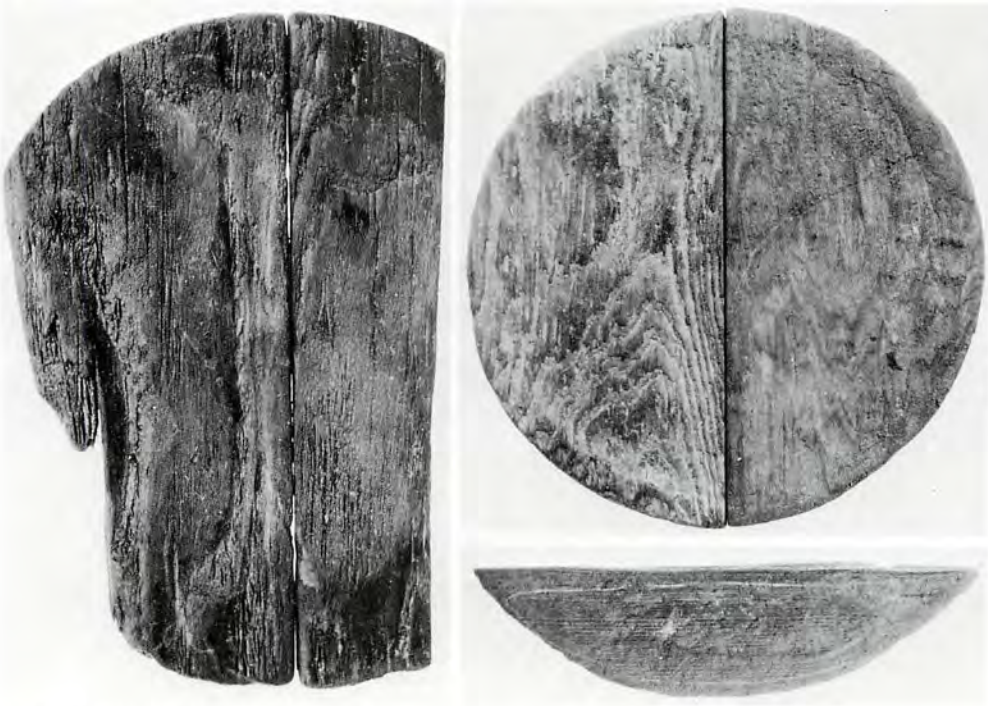
2．Ⅱ地区調査の契機となった貝塚の発見

1．工事に追われるⅡ地区の調査(東から)

2．Ⅱ地区の遺構全景(東から)

1．Ⅱ地区井戸の露出状態

2．Ⅱ地区井戸とその掘りかた



1．Ⅱ地区井戸内出土桶の底

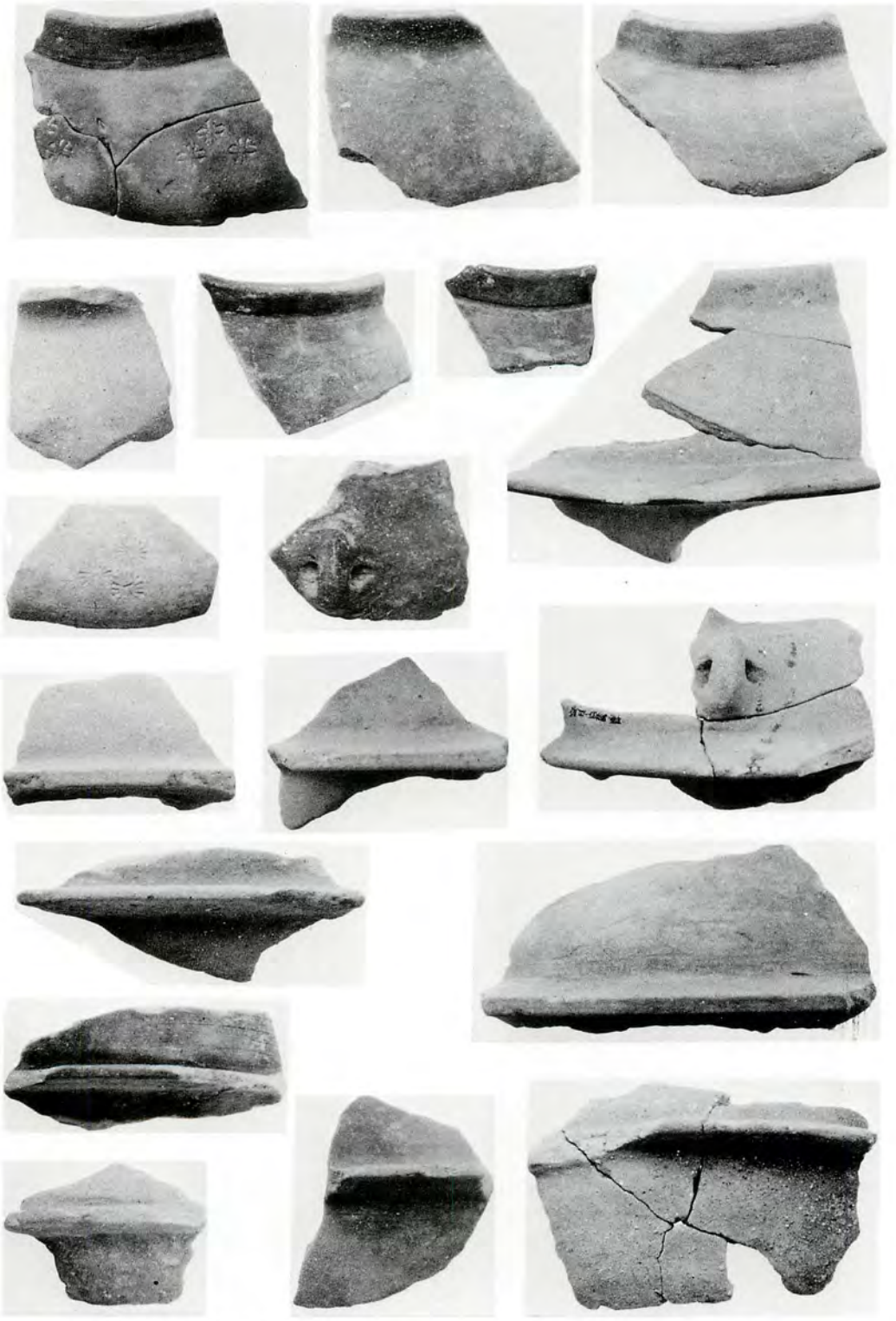
2．Ⅱ地区井戸枠の石臼発見状態

Ⅱ地区井戸枠の石臼

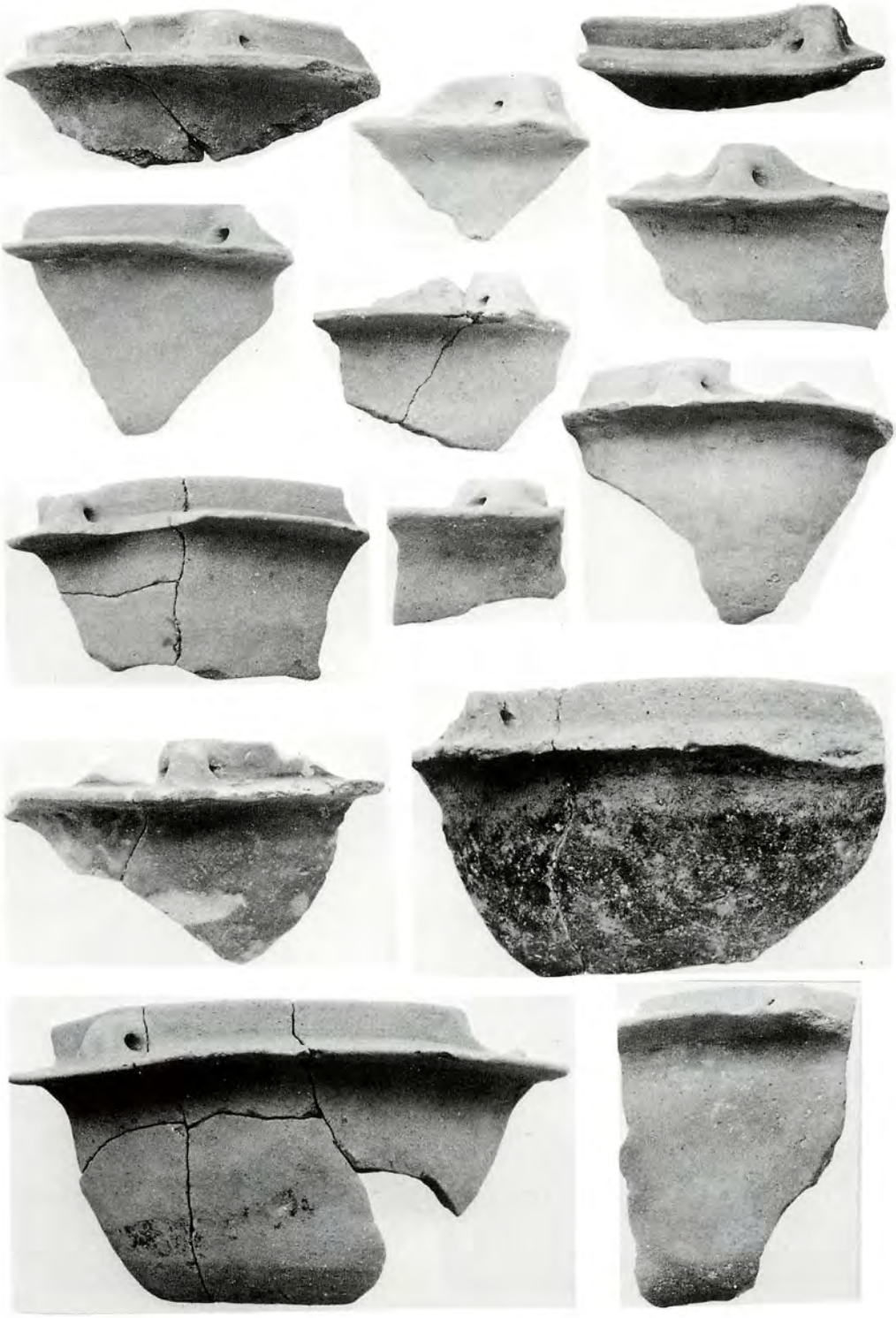
1．Ⅱ地区F－1・2区断面

2．Ⅱ地区貝塚

Ⅱ地区Ｆ－１区土器溜



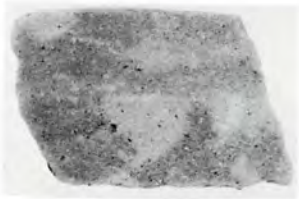
Ⅱ地区土器溜出土遺物(瓦器：土製湯釜)

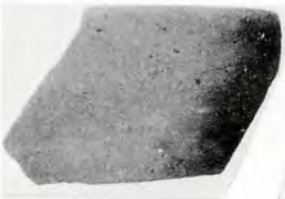


Ⅱ地区土器溜出土遺物(瓦器：土製鍋)

Ⅱ地区土器溜出土遺物(瓦器：擂り鉢)

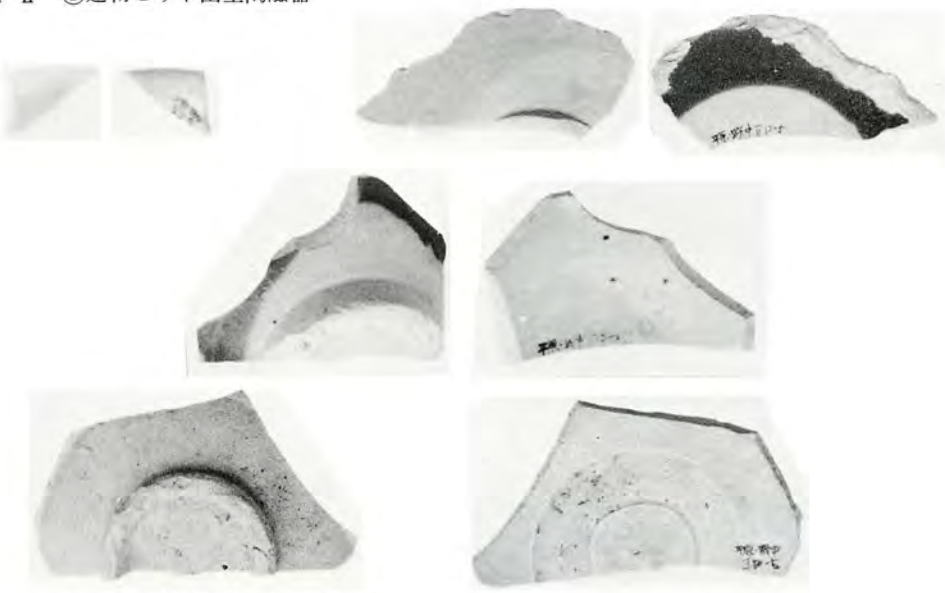
Ⅱ地区土器溜出土遺物(瓦器：擂り鉢・捏ね鉢)



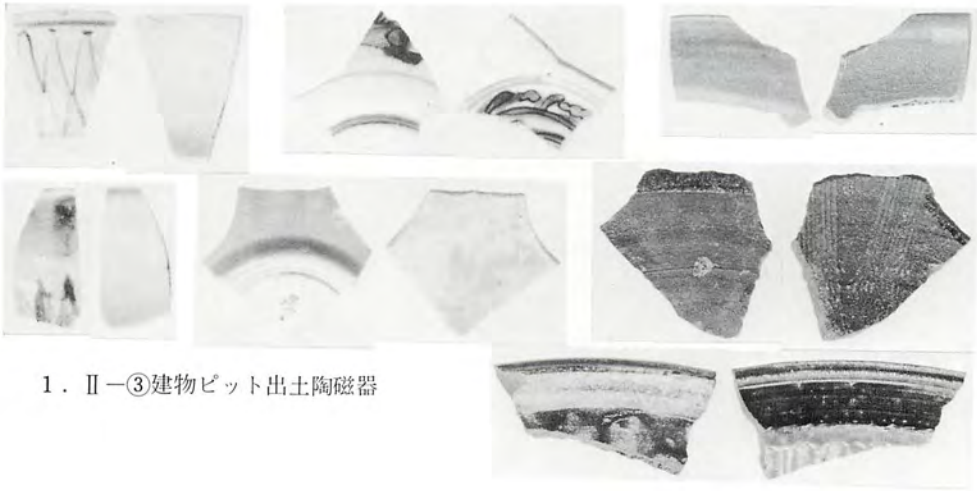


Ⅱ地区土器溜出土遺物(瓦器：火舎・鉢など)

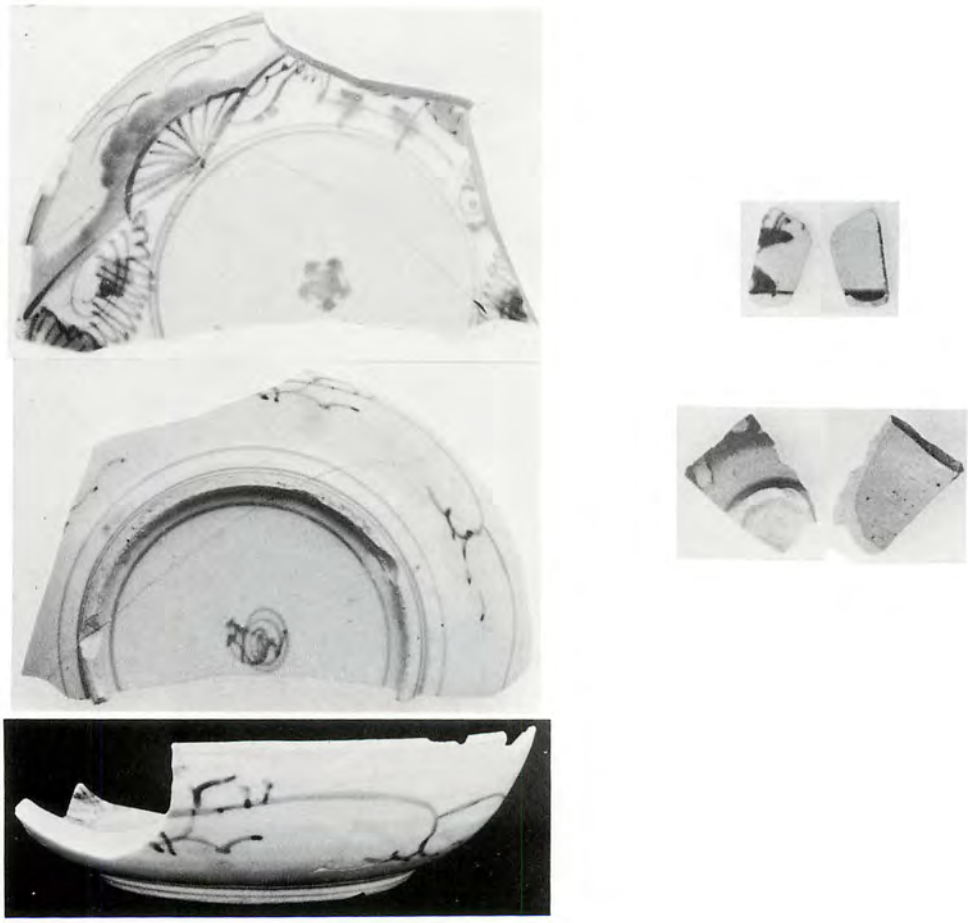
1．Ⅱ—①建物ピット出土陶磁器



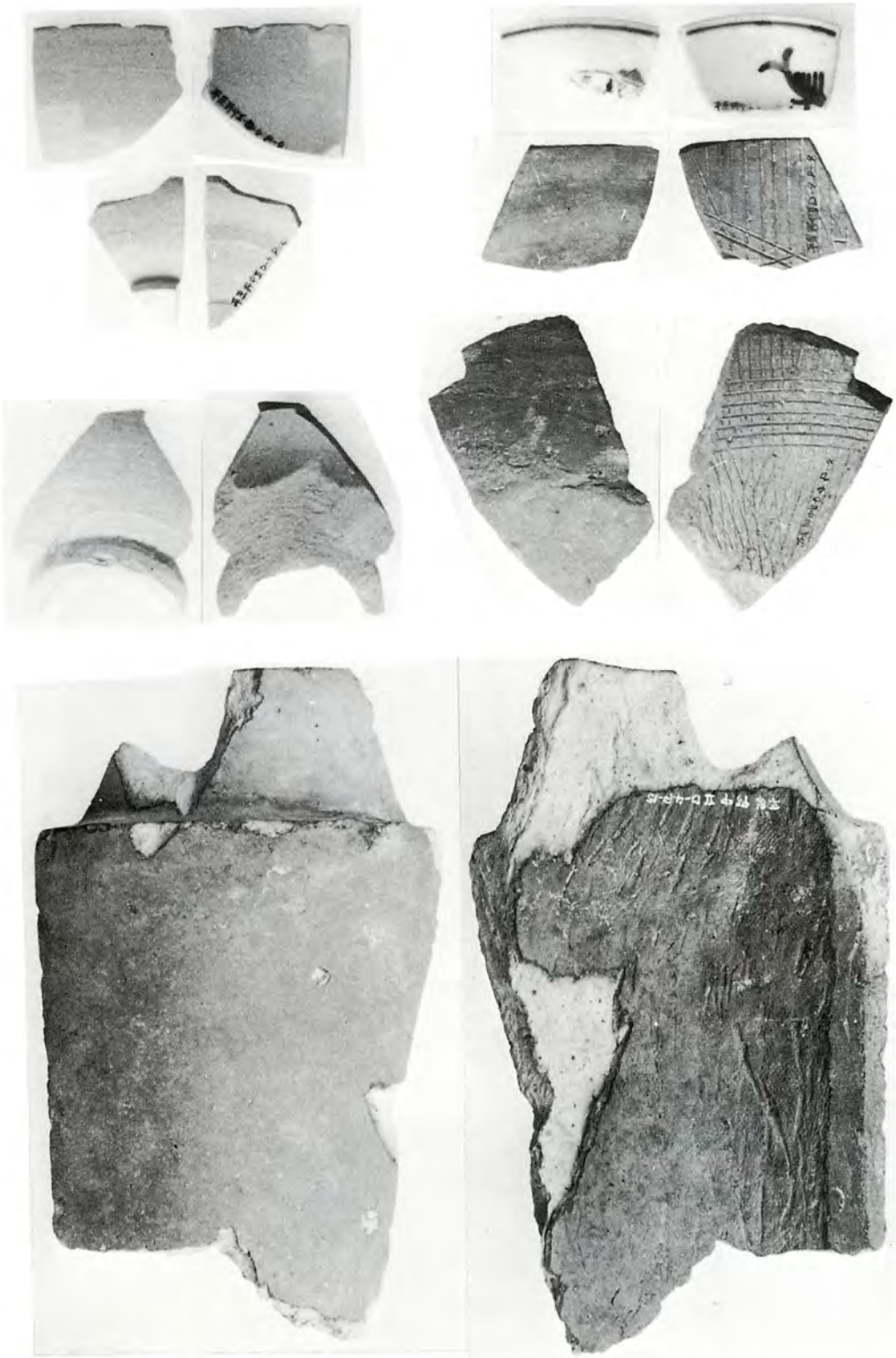
2．Ⅱ—②建物ピット出土陶磁器



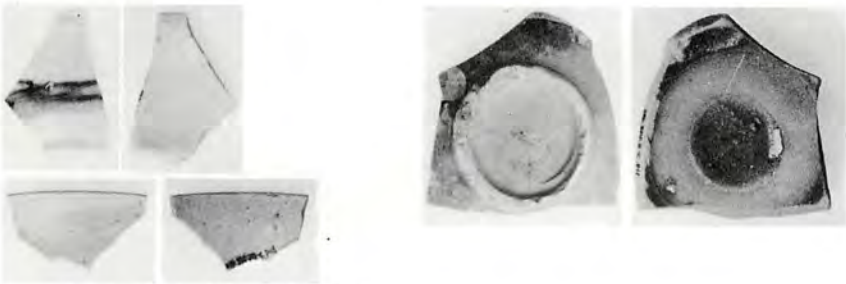
1．Ⅱ—③建物ピット出土陶磁器



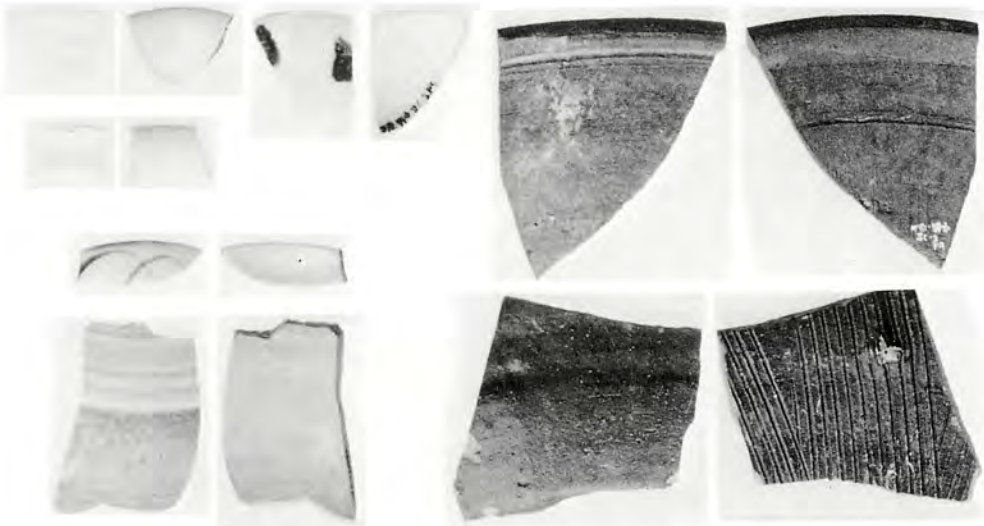
2．Ⅱ—④建物ピット出土陶磁器



Ⅱ—⑤建物ピット出土陶磁器と瓦



1．Ⅱ－⑥建物ピット出土陶磁器



2．Ⅱ－⑦建物ピット出土陶磁器

3．開通前の縦貫道(境遺跡からみた平原・野中遺跡、昭和55年1月24日撮影)

熊本県文化財調査報告　第43集

平原・野中遺跡

昭和55年3月31日

発行　熊本県教育委員会
〒861　熊本市水前寺6丁目18番1号

印刷　凸版印刷株式会社
〒810　福岡市中央区渡辺通2—1—82
電気ビル別館5階
☎(092) 771—2161

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 43 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：平原野中遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 3 月 31 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/